

喪失少年はこのセカイのキャラとの絆を結ぶ

エム3

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼は、失ったものが多い。新たな世界で、彼らと関わることで、彼の失ったものを取り戻せるのか

追記、主人公の誕生日を変更しました。25日から23日へ変えま
した！

変えないと、青柳くと被ってしまつて・・・

目次

笑顔溢れるショーへ向かって

青年と新たなセカイ | 1

ワンダホィ少女との出会い | 8

セカイの始まり | 16

ワンダーランドのセカイ | 23

奇妙な演出家 | 33

新たなメンバー、その名はネネロボ | 41

結成！俺達の劇団 | 48

演出家の本領 | 53

夢への一歩 | 57

カイトのヒント | 65

最悪の結末。 | 75

心機一転 | 89

想いが形になる | 99

彼女を救いたいが為に

新たなセカイ | 110

転生者の再来 覚醒する力 | 117

セカイの破壊者 | 125

無意識の我慢 突然の出来事 | 135

彼女の傷 過去の傷 | 144

仲直り | 149

破壊者 vs 創造者 | 159

彼女の闇 | 171

俺達の前にある壁 | 180

悔やむと書いてミライ	189
昔の記憶	200
聖夜の夜に、奇跡のプレゼントを	207
しし座流星群の輝きに	
星に集いし、少女達	215
一瞬の闇	225
迷う少女への助言	235
狂乱の転生者	243
敵か？味方か？	252
彼女の悩みを晴らすために	262
フェニランだからこそそのショーに向けて	274
笑顔のショー閉幕　そして・・・	282
星空を消す曇天	295
裏で動く者	306
常闇の記憶	318
幼馴染との再会	328
彼の崩壊の兆し、そして波乱	336
小動物少女との○○○○	346
加速する凶行	355

笑顔溢れるショーへ向かって 青年と新たなセカイ

俺、鬼灯霊斗は転生者である。いきなり何を言ってるんだと言われるかもしれないが、俺もあまり実感はない。

元々、ただの高校生。普通に友達と遊んだりして学校生活を謳歌したりして、家族（父親、母親）と幸せに生活していたけど、ある日その全てが崩壊していった。

ある日、家に帰ると家族が全員、殺されていた。俺が学校に行っている間、家に強盗が入り、母さんと父さんが撃退しようとしたらしいけど、犯人はナイフで二人を突き刺したらしい。即死だった

恐らくその日からだろう。俺は変わってしまった。料理は喉を通らず、通ったとしても味がしない。そして、俺は何をやっても、楽しくない事をその時俺は初めて知った。

更に、自覚はないが、俺は自傷行為を行う様にやっていたらしい。俺の腕には切り傷があり、近くに血だらけのナイフが転がっていることもあった。左目にも俺は突き刺してしまっただけ。失明していた。

その後は簡単だ。生きる気力を失って、首を吊って命を絶った。そして神様に会って、転生した。ありきたりな話だ。転生の際、転生先の世界の事は色々教えてもらった。どうやらこの世界は「プロジェクトセカイ」と呼ばれている世界で、VOCALOIDの初音ミクなどが人気らしい。まあ、俺自身ボカロは好きだから別にいいけど。あ、ちなみに、転生前と姿は変わってない。左目に眼帯をつけている以外何も変わっていない。

そして、みんなは多分知ってると思うが、転生にはチート能力みたいな物がテンプレだが、俺もチートをもっている

けど、俺にも能力はある。それは、「最高の身体能力、歌唱力」らしい。それ以外には、変なピンク色のベルトと複数枚のカードを貰ったぞ。神様が言うには他にも転生者がいて、そいつらがどうしようもな

い奴らだから、自衛と、キャラ達を守る為の力だって言ってた。

名前は確か・・・【「デイケイド」】って言ってたか？

まあ、俺の能力は後々わかんたろ。ここからは俺の物語だ。楽しんでくれ。

霊斗「・・・ふあゝ・・・朝か。」

俺は窓から射す朝日によって目を覚ます。

霊斗「そーいや、俺、これから高校に通わないといけないのか。えつと、俺が通う学校はくつと・・・神山高校ね」

俺はこれから通う高校を確認して、朝食の準備をする。目玉焼き焼いてゝ、ソーセージ焼いてゝ

霊斗「まあ、味なんてしないし、うまく作る必要もねえよな」

後は適当にサラダを作り、サクツと食べて、制服に着替えて、家を出る。もちろん玄関には鍵をかけて。

霊斗「前世の世界みたいに、友達できりゃあいいけどな。まあ、無理に作る必要もねえけど」

俺は神山高校への道のりを携帯マップを見ながら、進む。すると。霊斗「・・・あ？」

俺は目撃してしまった。同じ神山高校の制服を着た女子に絡んでいる男子生徒・・・いや、害虫を。今時こんな奴らもいるんだな。つか、女の方、嫌がってるの目に見えてわかるわ。

その時、その男が、女の腕を掴んだ。女は振り払おうとしているが、男の方が力が強い為、振り解ける訳がねえ。・・・まあ、もう黙ってみてるわけにもいかねえよな。俺は男に近づき、腕を壊さないぐらいの力で掴む。男の腕がミシミシってなってるが気にする必要もねえだろ。

「っ!?イデデデデデ!?お、折れる折れる!!」
「・・・えっ?」

霊斗「・・・それ以上はやめろ。こいつが迷惑してるの目に見えてわかんたろ?」

俺は少し力を緩めてやる。もちろん、男と話をする為だ。すると、

男は俺の腕を振り払い、少し距離を取って、俺を睨みつける。

「誰だテメエ!! 邪魔すんなよ!! こいつも喜んでたんだからよ!」

霊斗「は? お前の目は節穴か? どう見てもこいつは嫌がってたろ?

ああ。朝っぱらから口説いてんだから、節穴以前に、頭がヤベエのか。悪かったな」

「っ!! テメエ!! 殺してやる!! オリ主の俺の邪魔すんなよ!!」

男は、ナイフを取り出し、俺に目掛けて振るう。避けたらやべえよな。俺、女の前に立ってるから、下手すれば女にナイフが当たるし、折角だし試してみるか。上がった身体能力。俺は、ナイフを掴み取る。刃が当たって、手からは血が出てるけど、些細な問題じゃないだろ。そのまま、俺は相手の腹に蹴りを入れる。男は腹を押さえて、数歩、後ろに下がる。

「おっ・・・ふっ・・・」

霊斗「女の気持ちもわかんねえ奴が絡んでんじやねえよ。寝とけ。」

俺は更に踵落としを入れて、相手の意識を奪った。

霊斗「はあ・・・常識が欠如してんのかよ・・・こんな奴らばつかなのか?」

先が思いやられるな・・・っと、そうだった。女の方。

霊斗「おい、平気か?」

俺は女の方を向く。よく見ると、女は薄い緑の髪色をして、紫色の瞳を持った女。身長はちっせえ。俺が大体175ぐらいだから、こいつの見た目からして・・・156か?

「・・・平気・・・あ、ありがと・・・」

霊斗「そうかよ。なら俺はもう行くぜ? 同じ学校だし、またどっかで会うだろ。んじや」

俺はその場を後にする。あれが・・・転生者か。ありやあ、ただの馬鹿だろ。神も苦勞してんだな。初めて会った時、俺以外のクソどもからは能力は奪ってるって言ってたけど・・・なら、あのベルトとカードとかいらなかったんじやねえのか?

???
side

私は、今、必死に胸を押さえている。別に病気なわけじゃない。けど、胸の動悸が早くなってる。多分だけど、さつき迫られてた恐怖。けど、それだけじゃない。さつき助けてくれたあいつ。あいつに助けられてから、頬が熱い。

「まさか・・・一目惚れ?」

確かに、助けてくれたあいつは美形な方だ。それは当然、あの豚みたいなやつよりも全然。強いし。けど、私ってこんなチョロいの?

「あいつ・・・先輩かな?」

名前とか聞くの忘れた。・・・けど、神山高校の制服だし、また会えるだろう。そう思い、私は歩を進めた。今日は少し、高校へ行くのが楽しくなった。

??? side out

霊斗 side

あれから進んで、神山高校に到着。俺は教室前で待機中だ。俺はこの高校に転入生として、入ることになっている。学年は【2ーA】だ。先生に呼ばれたら入ってね?と言われてたから、待機している。まあ、すぐに呼ばれたから中に入り、教壇の隣に立ち、自己紹介をするか。

霊斗「鬼灯霊斗。今日からこのクラスに転入します。こんな見た目ですが、仲良くしてください。趣味は・・・歌・・・かな?まあ、よろしく。」

クラスの奴らがパチパチと拍手をして、歓迎されているのがわかる。だけど、俺は嬉しいか分からん。あ、ちなみに俺の席は窓側だ。席順は名前とか関係なくバラバラ。俺の隣は、天馬司ってやつだった。

司「はっはっは!!俺は、天馬司だ!よろしくな!」

霊斗「お、おう。さつきも言ってたけど、鬼灯霊斗だ。よろしくな」
司はテンションは高いが、話してみると面白いやつだった。劇団のスターを目指してるって言ってたけど、あいつならなると思う。だから、俺は司に、お前ならすげえスターになれるよって言ったたら、何か

司は俺に親友と言ってきた。そんな簡単に親友ってなるもんか？

まあ、その後は、普通の授業を受けて、お昼、俺は司と一緒に昼食を取っていた。

司「霊斗、お前は何か部活に入ったりはしないのか？」

霊斗「おん？まあ、俺、一人暮らしだしな。部活出来ねえよ。バイトもあるし」

司「むっ、そうか・・・霊斗なら、俺と一緒に劇団のスターになれると思っただが・・・」

どうやら、司は、俺を舞台にあげたいらしい。まあ、俺はあんまり目立った事はしたくない。けど、司の気持ちをバツサリ捨てるわけにもいかない。なら。

霊斗「・・・なあ、司。舞台に立つ事は出来ないけどよ。裏方とか力仕事とかなら手伝うぞ？」

司「ほ、本当か!？」

霊斗「お、おう。お前の舞台、見てみたいし」

これは正直な理由だ。周りからは明るい奴。変人。なんて言われてるらしいが、こいつは本気でスターを目指してる。そんな奴が努力して、輝いている姿・・・何もない俺でもみてみたいと思った。

司「あ、ありがとう！霊斗！これで、俺達の劇を！フェニックスワンダーランドでできるぞ!!」

霊斗「お、大袈裟だな・・・って、フェニックスワンダーランド？それって、確か、少し遠いところにある、遊園地だよな？」

司「ああ！そこで俺はそこで、キャストのオーディションに応募したんだ」

霊斗「マジか？つうことは受かったのか？」

司「いや、まだ、分からん。合否発表はまだなんだ。」

霊斗「まあ、司なら余裕で合格できんだろ。」

司「そ、そうか？／＼少し照れるな。だが、その後にもらった紙が変なんだ。」

霊斗「変?」

司「なんでも劇に興味がある者、俺の友達を、連れてきてもいいと

言うんだ。」

霊斗「・・・ほーん。」

変な話だな。オーディションの合否発表なんて、本人だけに伝えればいいだけなんだろうけど。・・・待てよ？その話を司がしたつつうことは・・・

霊斗「・・・俺を連れて行こうって思ってたのか？」

司「ああ。第一に親友のお前を連れていきたい。どうだ？」

霊斗「まあ、構わねえよ。将来のスターが劇をするステージ、俺も見ておきたいし。」

俺は了承すると、司は大いに喜んでいた。いや、リアクション大きすぎんだろ。まあ、司が面白いのはそこなんだろうけどな。あ、そういえば。

霊斗「司、お前に聞きたいことあんだけど」

司「？何だ？」

霊斗「この学校によ？緑の髪色の紫色の目のした女ってしらねえか？」

司「？いや、俺の知り合いにはいない。後輩・・・一年にはいたかもしれないが」

一年か・・・まあ、そのうち会えるか。俺は、司と休日にフェニックスワンダーランドに行くことを約束して、俺は家に帰った。

霊斗「ただいまあ〜って誰もいないよな。」

誰もいない家に帰宅して、俺は制服を脱ぎ、ある部屋に入る。その部屋には、パソコンが置かれており、マイクが立っていた。もちろん部屋の音漏れの心配はなし。

霊斗「・・・少し練習しとくか」

マイクを握り、曲を流しながら、俺は歌を歌う。

日向電工く「ブリキノダンス」

霊斗「・・・ふう・・・こんなところだろ」

一曲歌い、俺は部屋を出る。その後は、俺は風呂に入り、そのまま

眠りについたら。新たな人生の始まりの日、鬼灯霊斗はその1日を終えた。

ワンダホイ少女との出会い

霊斗「ふあ〜・・・寝むい。」

翌日、いつも通り、朝飯作って食って、今日は休日のため、リビングのソファに座る。

霊斗「そういや、明日だっけか？司と一緒にフェニックスワンダーランドに行くの。」

司との約束の日の1日前。

転校したのが金曜日だったため、土日って休みなんだがやる事がねえ。趣味らしい趣味もねえし。けどな、一人の時ほど暇な時はねえ。だから。

霊斗「あんまこの街の事、知らねえし、ぶらぶらしてみるか。色々見て回れば面白いことあるだろ」

俺は私服に着替えてから、首にヘッドフォンを付ける。まあ、暇な時に音楽を聞けるから、いつも休日は付けている。

霊斗「んじや、家の鍵閉めてつと・・・行ってみますか」

俺は街を歩き始める。休日だからか、人の行き来は多い。

霊斗「え〜と？カフェにショップピングモールもあんだよな？お、CDショップあるじゃねえか。見てみるか」

俺はマップを見ながら、歩き回ると、CDショップがあるのを知り、訪れる。中に入ると、結構な種類のCDが置いてある。バーチャルシンガーのやつから、アニメやゲームのオーディオCDもある。

霊斗「ほーん。色々置いてあんのな。この店。って・・・お？」

そこに、俺の好きなゲームのCDがあった。色々なBGMが入ってるアルバムみたいなやつだ。前から欲しかったから、是非買おうと思いい、CDに手を伸ばすと、別のやつの手に当たってしまう。

霊斗「あ、悪い。」

俺は手のぶつかった奴に謝る。その相手は、白髪のロングヘア、そしてジャージを着た女だった。

「別にいいよ。気にしてないから」

霊斗「そうかよ・・・お前も、そのゲームやったことあんのか？」

「ううん。私はゲームはやらない。やっても音楽に集中して上手くできないから。動画とか見て、聞く」

霊斗「ほーん。まあ、楽しみ方は人それぞれだしな。ゲーム好きなやつも音楽が好きとか色々な。あ、ぶつかった詫びだ。その金、俺が払ってやるよ」

「え？別にいいよ。私もぶつかったから」

女は遠慮しているが、俺は女からCDを奪い取りカウンターに持っていく。代金を払って、お釣りを受け取り、買ったCDを女に渡す。

霊斗「受け取れよ。詫びなんだから。」

「気にしなくていいのに。けど・・・ありがとう」

霊斗「おうよ。んじやな。また会えんだろよ。俺は鬼灯霊斗な。」

「うん。またね。私は宵崎奏。」

霊斗「奏な。OK」

俺は女・・・いや、奏と別れる。CDショップを出て、飯の材料を買って家に帰る。

霊斗「宵崎奏・・・ね。俺と似たような感じがするな・・・」

何か失ったというか、縛られてるというか・・・この世界にもそんな奴、いるんだな。まあ、俺以外に、しかも俺以上に苦しんでる奴なんていっぱいいるんだろうが、そんなの知らねえし、興味もねえ。

霊斗「まあ、あいつとも関わらなきゃいけないよな。あいつも【この世界の重要人物】何だろうし、転生者が関わってくんだろ。」

初めて会ったあの女みたいにならなきゃいいけどな・・・まあ、そんな時は、俺が潰せば問題ねえだろ。再起不能にしても・・・問題ないよな？なあ？神様？。あ、ちなみにその後は、普通に家で過ごして寝たぞ？

奏 SIDE

私は、CDショップで、ある人にあつた。その人とは買うCDが同じで手が当たり、そのCDの音楽が使われてるゲームの話をした。

あんまり人と話す事がない私でも、不思議と話せた。初対面なのに。鬼灯霊斗。それが彼の名前だった。私も自然と自分の名前を教

えていた。彼が自分の名前を呼んでくれた時、胸が暖かくなった。

奏「……どうしてだろう？」

あの後家に帰っても、彼の事が頭から離れなかった。曲作り以外、興味なんてなかったけど、彼の事は気になった。眼帯をしたから？腕に包帯が巻かれてたから？多分……違う。それだけじゃないと思う。

『ねえ〜K〜？聞こえてる〜？』

考え事に集中していたからか、ボイスチャットのメンバーの声が聞こえて、私は我に帰る。

奏『ごめん、聞いてなかった。なに？A m i a？』

A m i a『いや、いつも曲作りの指揮してるKが静かだったからさ。

何かあったの？』

奏『少し、考え事。気になる事があったから』

『何よそれ？Kって曲作り以外に興味が湧くのが意外なんだけど？』

奏『……そんなに意外？えななん？』

えななん『意外も何も、Kってこのボイチャの時って、殆ど……いや、全部、音楽の話でしょ？それ以外の話とか、考え事とか……あんまりイメージできない』

『うん。確かにそうかも』

メンバーの一人、えななんの言葉には否定できない。たしかにこのボイスチャットの時は、新曲の話しかしてないような気もする。まさか、もう一人のメンバーの雪も肯定するとは思ってなかった。

A m i a『えななん、流石に言い過ぎ……でもないかな？まあ、Kにだって気になることぐらいあると思うよ？ちなみに教えてくれたりしない？K？』

奏『CDシヨップで会った人の事。』

A m i a『え？』

えななん『どういう事？』

雪「……」

奏『今日、欲しいCDがあったから買いに行った時、会った人と話してから、気になってるってだけ』

A m i a 『・・・ちなみに、それって男性？女性？』

奏 『男の人・・・鬼灯霊斗って人』

A m i a 『鬼灯霊斗？あれ？それって僕の高校に転校してきた人だ。』

A m i a の言葉に、少し、私は驚いた。まさか、身近に彼を知ってる人がいるとは思わなかった。

えななん 『A m i a、その人の事知ってるの？』

A m i a 『僕もあんまり知らないけど、眼帯と腕に包帯巻いてるから、みんな不思議がってたんだよ。けど、運動神経抜群とか、勉強ができるとか、顔がいいとかって話題で持ちきり。』

えななん 『へえ、そんな人いるんだ』

A m i a 『よし！今度、僕も話してみよつと！Kの事も教えてもいい？』

奏 『何で？』

A m i a 『え？だって・・・ねえ？』

えななん 『ねえ？』

雪 奏

『・・・？』

二人の意味深な言葉を、私は理解できなかった。多分だけど、雪もわからないのではないだろうか。この、彼に対する興味はなんなのか。何故、彼なのか。それはこれから先知る事になる。

奏 s i d e o u t

霊斗 s i d e

翌日、俺は司との約束がある為、フェニックスワンダーランドへ向かう。いつも通りの私服で、お気に入りのヘッドホンを首にかけ、家を出る。バスに乗り、揺られて数分後、俺はフェニックスワンダーランドに到着する。

霊斗 「休日だからか？人、多いなあ・・・」

人気なテーマパークだろうし、休日だから、人は多いとは思ってた

が、こんだけいるとは思わねえだろ……

霊斗「これで司を探せって無理だろ……あ？いや、簡単だったわ。こんなかでも目立つなあいつ。」

人が多いが、約束の場所で、司が待っていた。彼は俺に気づくと、いい笑顔で俺に向かって手を振る。俺は手をあげて返すと、人混みをかき分けて、司と合流した。

司「霊斗！早かったな！約束の時間より早いぞ！」

霊斗「いや、それ司が言う事か？お前の方が早いだろ？」

司「当然だ！ついにこのフェニックスワンダーランドで！俺のスターへの第一歩を踏み出すんだからな!!」

霊斗「お、おう。まあ、楽しみなのも仕方ないか。」

やっぱ、こいつのテンション高すぎるだろ。まあ、夢への第一歩つてのは司にとつては重要なんだろうな。俺はもう、どうでもいいけど。

「天馬司様ですか？」

すると、司に向かって声が掛かる。俺たちは声のした方を見ると、一匹……？一人……？まあ、どっちでもいい。マスコットキャラクターがいた。てか、声渋すぎるだろ。重低音ボイスだったぞ。マスコットキャラクターの声じゃねえよ。

司「わっ!?び、びっくりした……つて、は、はい！僕が天馬司です。よろしくお願いします！」

「それと……そちらの方は？」

司「彼は僕の親友です。資料には、友人や劇団に興味のある人は連れてきていいと書いてあったので……」

霊斗「鬼灯霊斗です。俺もついてって構いませんか？」

「そうでしたか。構いませんよ。歓迎します。」

司「ありがとうございます！それで、僕が配属されるステージはどこにあるんでしょうか？」

「あちらです。少し離れた場所にありますので、ついてきてください。先を歩き出すマスコットキャラクターについていく俺と司。」

司「霊斗！あれが新しくできたネオフェニックスコースターだぞ！」

あつちは改築されたネオフェニックス城だ!!」

霊斗「おー、さつすが国内有数のテーマパーク。どれもこれも最新鋭だな。アトラクションの整備も問題なさそうだし」

司「フフフ、だが、一番楽しみなのはやはりショーステージ!! 改築されたばかりなら、素晴らしく楽しいショーが開催されているに違いない!!」

司の細かい説明を受けながら、歩く。周囲を見渡しても客の笑顔が絶えない。それに、アトラクションやお土産ショップなどの整備も整ってる。確かにこれならショーも期待できる。

霊斗「・・・にしても、ずいぶん歩くな。結構な距離、歩いてきたと思うんだが」

正門から歩いて結構歩いたぞ? 司も少し疲れが見えてるぐらいだしな。

司「あの・・・まだ歩くんですか? 随分と離れた場所に来ていますか・・・」

「もうすぐです」

司「もうすぐって・・・このあたりは客もまばらだし、ボサボサ木が生えてるだけで何も・・・」

霊斗「・・・いや、見ろよ、司。ここ、道が奥に繋がってる。」

一見わかりづらいが、小さな道が奥に繋がってる。

司「あの・・・この道、通っても大丈夫なんですか?」

霊斗「ついてこいって言われてんだし、入っても大丈夫なんだろう。つてか、よく見てみろよ。この先、ひらける場所だぞ?」

道の奥へと進み、俺達は開けてる場所に到着する。そこには小さなステージがあった。長い事使われてないのか、外装はボロボロだった。

司「これは・・・ステージなのか? ボロボロだぞ・・・」

霊斗「こんな良いテーマパークなのに、ここまでボロボロのステージもあるんだな。つて、おい、司。看板があるぞ」

俺は、司を呼び、一緒に看板を見た。そこにはこのステージの名前が書かれていた。

司 霊斗

「ワンダーステージ・・・？」

と、その時だった。

「どーーーーーっ!!」

突然声が聞こえた後、ステージの上から、何かが降ってきた。

司「どわーーーーっ!?!な、何だ!?何か降ってきたぞ!」

霊斗「おー。すげーな。あのステージの上から降りてきたのか。」

ステージに降りてきたのは、小さな少女。ピンクの髪色の元気いっぱいな女の子だった。

「ようこそ！笑顔いっぱいなのワンダーステージへ!!」

「じゃあみんなでいくよー!!せーの！わんだほーいっ☆」

司 霊斗

「・・・は？」

あのマスコットとその少女は両手を広げて、俺達に呼びかけてる・・・のか？俺達は、突然の出来事と、意味不明な彼女達に、呆けてしまった。

「わんだほーいっ☆」

司「いや、おい」

霊斗「司、多分これ、返さないとずっと続く奴だぞ」

なんとなく、そんな気がするぞ。これ。多分。

「わんだほーいっ・・・」

司「あー！わかったわかった！わんだほいわんだほいやっほっほーい!!」

霊斗「わんだほーい（棒）」

司「で!!なんなんだお前!!どっから降ってきた!!」

「上だよ！あの辺ー！」

彼女が指を差した所。その場所はステージの真上。大体、今、彼女がいる所から見ると、およそ2階くらいの高さがあった。

司「あの辺って・・・正気か!」

霊斗「身体能力高すぎるだろ。お前」

「うん！運動は好きだから！それに・・・司くん達が来るからびっくり

させようと思っただの!!」

司「いや、確かにびっくりはしたが・・・というか、何で俺の名前を知ってるんだ!？」

霊斗「それに、司以外に俺が来る事も知ってたのな。お前、マジでなにもんなんだ?」

「そりゃあ知ってるよー!だつて!司君をここに呼んだの!私だもん!」

司「は?」

霊斗「司をここへ呼んだ?」

つてなると、こいつは俺より前に司と知り合った・・・いや、どっかで知ったって事か。多分、オーディションの時だろうけど。

「あたし鳳えむ!キラキラ笑顔がいくっぱいのワンダーステージへようこそ!!」

えむ「一緒にすばらしいショーをつくらうねっ!司君と・・・えつと?」

霊斗「鬼灯霊斗だ。えむって呼んでもいいか?」

えむ「うん!あたしも霊斗君って呼ぶね!!」

霊斗「おう。」

司「・・・ん?ん?ん?ん?ん?ん?」

司「ど、どう言う事だー!?!?!?!?!」

司が困惑したように叫んだ。まあ、仕方ねえよな。キャストオーディションの合否を聞きに来て、突然、案内されて、変なテンションの女の子に会って、こいつといると、退屈しねえな。それに、一つ言える事がある。

こいつらの物語はこれから始まる。それが確定している事だ

セカイの始まり

司「あー・・・今聞いた話を整理すると・・・お前はこのステージのキャストなんだな？」

えむ「うん♪」

霊斗「んで、司はキャストオーディションには不合格になったが、えむが特別にこのステージに呼んだと」

えむ「うんっ☆」

霊斗「って事は・・・司はこのステージで働くのか？」

司「なにつ!?このボロスステージでか!？」

まあ、司が驚くのも無理はない。あちこちに最新鋭のアトラクションができてんの、このステージだけ、ボロボロだもんな。

えむ「ボロくないよ!ここなんて色が変わってオシヤレでしょ？」

司「いや、どう見てもサビだな!？」

霊斗「・・・つか、ここに来てから思ってたけどよ。何でここだけ、こんなに古いんだ?他のアトラクションとかは変わってんだろ?ステージだけ変わんねえのは変だろ？」

司「確か、他のアトラクションと同時に新しいステージができると聞いていたが・・・」

どうやら、司もこの違和感を感じてるみたいだな。新しいステージができてる様子も、ここに来るまで周りを見ていたが、ステージのよくな物は見えなかったし・・・すると、あのマスコットが説明を受けた。

「本来なら、ランドの全面改修にともなって、ステージを取り壊し、新しくする予定でしたが・・・現在、ステージだけ工事が延期になっています。」

司「工事が延期・・・?何故だ？」

霊斗「それにこのステージは改修前なんだろ?て事は、今はショーはやってないって事か？」

折角なら、一回見たかったんだが・・・

えむ「ううん。してるよ♪今日はお魚の世界のショー!あたしマ

ンボウ役だったんだ！」

えむ「お客さんはいなかったけど！」

司「いないのかよ!!」

霊斗「・・・けどまあ、意識は高くていいんじゃないか? えむのやりたいって気持ちわかる」

何か、微妙なフォローしてるな。俺。客が一人もいないってのは、予想外すぎる。

えむ「でもでも! 司さんと霊斗くんが一緒なら昔みたいにお客さんでいっぱいにはできるはずっ!!」

・・・えむの奴。やけに信頼してるんだな。司はどうかは知らないが、俺に信頼するだけ無駄なのに・・・

司「はあ・・・いいか? よく聞け! 俺には野望がある!」

えむ「やばー?」

司とえむの会話を聞きつつ、俺は少し思考を開始する。ステージに近づき、軽く壁を触りつつ、サビなどがある部分を確認する。

霊斗(サビを落とすのは無理だな・・・流石に多すぎる。人員も足りない。必要な道具は作ればいいだけだ。となると、必要なのは人手と・・・脚本を作る奴と、演出を作る奴・・・色々あるな)

司「お前!!! 人の話を聞け!!!」

どうやら、二人も話がひと段落しそうだ。俺は思考をやめ、二人の元に向かう。

えむ「司くんの話ならオーディションの時に聞いたよ? 司くん、『すばらしいショーを届ける』って言ってたよね?」

えむ「あたし、その時ビビーン!! ってきたの!! 司くんとなら、きつとステキなステージを作れるって!!」

霊斗「要するに、司の事を注目してたってわけか。」

司「フフ・・・なるほど。そう言う事か。合点がいったぞ・・・」

司はどこから出したのか、紙とペンを持っていた・・・いや、マジでどっから出したんだよ。バックも何も持ってねえだろ?

えむ「・・・? 何で紙とペン?」

司「特別だからな? 天馬、つ、か、さ・・・つと。良し。中々

の出来だ」

司はペンを走らせ、紙に何かを書いている。描き終えた後、えむに手渡した。そこには、司のフルネームが書かれていた。普通の字とはちがう。まるでサインだな。

えむ「わあ〜！なんだかカッコいい字だね!!くれるの？ありがとう！」

司「ハハハ、いずれプレミアのつくサインだ。一生大事にするんだぞ？それじゃあ達者でな？おかしなファンよ。行くぞ霊斗。」

霊斗「え？お、おい、司？」

いや、帰んのかよ？俺にはわからんが、司にとっての夢への一歩つてやつなんだろう？こんなにあつきり帰んのか？あ、えむが司の服の襟引つ張つてやがる。あれ、息できなくなつてねえか？

えむ「行つちやだめー!!一緒にシヨーやろうっ!!絶対楽しいよー!!」

司「襟を引つ張るのはやめろ!!息が……!!」

あ、やつぱり。司の顔がどんどん青くなつていつてやがる。これ、止めないとやばいよな？

霊斗「お、落ち着け。えむ、襟から手を離せ。それじゃあ、答えるにも答えられねえだろ。シヨーの幕を上げる前に、司の人生の幕を下ろす気か」

えむ「おーねーがーいー!!司くんも霊斗くんも！一緒にやろうっ!!やるつて言つてよー!!」

司「うぐう……お前のせいだ……喋れん……!」

霊斗「いや、だから手離せつて。」

ようやく、えむに手を離してもらい、司は必死に息を整えている。マジでやばかつたんだな。

えむ「うう〜、一緒にやろうよ〜」

司「どうかお前、そんなにシヨーがしたいなら、どこかの劇団に入るなり、なんなりすればいいだろう!」

確かに、司の言う通りだ。シヨーがしたいなら、このステージにこだわる必要はない。シヨーがしたいという理由だけならの話だが。

司「別にこのボロステージじゃなくてもショーはできるわけだし……」

えむ「ここじゃなきや駄目なの！」

えむ「約束したんだもん!!ここをお客さんでいっぱいにするって!!」

司 霊斗 「約束……?」

えむ「あたし、ここでどうしてもここでみんなを笑顔にしたいの!だから司くん、霊斗くん、ここで一緒にショー……を?」
すると、えむが、ある方向に目を向けて固まっている。

司「なんだ?急に固まって」

えむ「プロジェクターが、勝手についてちゃってる?何でだろう?」

えむの見ている方向には起動しているプロジェクターがあった。もちろんな事だが、俺や司、えむはそのプロジェクターには一度も触れてはいない。それに、勝手につくような物でもない。すると、突然『ハロ、えぶりわんっ♪』

謎の女性の声が聞こえてくる。そして、プロジェクターがある人物を映し出した。水色の髪、ツインテールで、カラフルな衣装を着た女性。この世界にとっての重要人物。「初音ミク」だ。

司「初音ミクの映像……?ここでは初音ミクをマスコットキャラクタークターにしてるのか?」

えむ「ううん。このマスコットキャラは、フェニックスペンギンのフェニーちゃんだよ?」

霊斗「いや、ペンギンなのかフェニックスなのかどっちだよ……けど、それなら何で初音ミクがここにいんだよ?」

なんかのイベント……ってわけじゃなきさそうだしな。

ミク『うんうん♪みんな準備バッチリだねえ☆それじゃ、ワックワクドキドキ♪のステキなセカイに出発っ♪』

そう言いつつ、初音ミクの姿は消えていった。

えむ「あ!消えちゃった!今の、何?」

司「俺に聞くか……?」

霊斗「キャストのえむに分からないことが俺達にわかるわけねえだ

ろ・・・」

司「はあ・・・今の初音ミクといいお前といい・・・訳がわからん事が多すぎる。さすがの俺も疲れたぞ」

確かに。えむのはちやめちやさには、流石に疲れも出てくる。それに付き合ってた司はより疲れてんだろうな。

司「悪いがオレは、ここの人事担当者に電話するぞ。人事を通して、正式に辞退させてもらう」

えむ「ええーっ!? 司くん! もうちよつとだけ話を聞いてよおっ!!」

司「もう十分聞いた!! えーと、人事の電話番号は・・・ん?」

司はスマホを操作し、電話をかけようとするが、なぜか操作をやめて携帯を見つめている。

霊斗「どうした? 電話するんじゃないやなかったのか?」

司「いや、見覚えのない表示があつてな・・・」

司がスマホを俺に向け、俺とえむも画面を見ると、そこにはuntitledと書かれた表示が映し出されていた。

霊斗「untitled? 無題・・・つてか? 何だこりや?」

司「わからん・・・知らない間に入ってたんだが・・・」

えむ「なにになに? それって・・・曲?」

司「あ、おい! やめろ!」

えむ「聴いてみよーつと♪ぽちー」

えむは横から手を伸ばし、画面を操作、映し出されている表示をタップする。

司「ぬわーっ! 人のスマホを勝手に触るんじゃない! 高額決済するところだったらどうする気だ!」

霊斗「・・・? お、おい司、お前のスマホ光ってるぞ?」

俺が目にしたのは、司を持つスマホが光っている光景。その光はどんどん強くなっていく。

司「な、なんだ! スマホが光り出したぞ! まさか、本当に高額決済が・・・!!」

霊斗「いや、そういうサイトならまず光らないだろ・・・まず電話とかくるだろ・・・? つてか、マジでどんどん強くなつてくなく!」

えむ「わっ……！眩しい……っ！」

俺達は一斉に目を瞑る。その後、光が小さくなっていき、俺達が目を開いたとき、見た光景は、フェニックスワンダーランドではなく、見知らぬアトラクションパークだった。

司「……何が起きた？何だ、ここは？どこだ!?っ！霊斗！いるか!?!」

霊斗「お、おう。ここにいます。けど、えむがいない。」

司「そうか……後でえむは探すとして……明らかにさつきまでとは違う場所だよな……」

霊斗「おう……それに、明らかにありえねえだろ？スマホが光つて、目を開いたら見知らぬ場所……けど、夢じゃねえよな……」
どうなつてやがる……？まさか、転生者の仕業か……？いや、あの場には、俺達以外には誰もいなかったよな……なら……一体？
???「……」

司「っ!?そこにいるのは誰だ!?!」

霊斗「え?」

司が大きな声を上げ、一点を見つめている。俺もその先に目を向けるとそこにいたのは、大きな初音ミクの着ぐるみだった。

『ミクダヨー♪』

司「おわああああ!!なななんだー!?!」

霊斗「初音ミクの……着ぐるみ?よくできてるなあ」

俺は着ぐるみに近づき、軽く触ったり、じっくり見て観察してみる。

『アンマリミチャダメーツ／＼』

霊斗「あ、悪いな。すげー上手く作られてるからどうなってんのかなと思つて」

司「とうるか、霊斗！お前は驚かないのか!?!」

霊斗「いや、これでも驚いてんだぜ?あんまり顔に出ないだけでな」
司も変わった奴だと思つたけども……どうやら俺もそこそこの変人のようだな。

司「んんっ……それより、着ぐるみの人、少し教えてくれないか。ここは一体どこなんだ?」

『ようこそー…ここは、君の想いのセカイダヨー』

司「は？キミの想いのセカイ？何言ってるんだ？」

キミの想いのセカイ…恐らく司は理解してないだろうが…要するに、こいつ…司の想いのセカイって事だよな。

霊斗「ってか、着ぐるみの人。それ脱いで話さないか？正直、話しづらいし…」

『イイヨー♪ちよつと待ってよー♪』

着ぐるみは何とか脱ごうと頑張っているが、手が短いため、頭を外せず、四苦八苦していた。

『…うまく脱げないよー』

司「まあ、その手なら仕方ないよな…」

霊斗「…なら、ちよつと止まってるよ。頭脱がしてやるから…よつと！」

俺は着ぐるみの頭を持ち、スポツと上に外す。すると中から出てきたのは…

『ふう〜♪スツキリしたー♪』

霊斗「…は？」

司「…へ？は、初音、ミク…？」

先程、プロジェクターによって映し出された初音ミク本人であった。

ワンダーランドのセカイ

司「は、初音・・・ミク・・・？」

ミク「うん♪ミクだよー？」

霊斗「どうなつてやがる・・・？今度はバーチャル・シンガーが現れて・・・わけわかんねえ」

知らねえ場所に来たと思つたら、ミクの着ぐるみが現れて、中のやつ確認したら、本物の初音ミクで・・・？

司「は!?!そ、そうか。これはトリック映像か？」

霊斗「いや、映像にしちゃ出来すぎてるだろ・・・そもそも、どうやってこんなリアルに映し出すんだよ？」

プロジェクターがあるわけでもねえし・・・すると、突然、ぱっぱっぱーん♪とリズムミカルな音が周囲に響く。

司「な、なんだ？今の音は？」

霊斗「何か始まんのか？」

ミク「あー！ショーの準備をしなくっちゃっ！いそごういそごうレッツゴ〜♪」

ミクは俺達の手を引き、走り出す。そして、必然的に俺達は引っぱられるような形で走り出す。

司「お、おい！急に走り出すな！一体どこへ連れていくつもりだ!?!」
霊斗「今はついてくしかねえだろうな。というより、諦めてついてくしかねえ」

司「いや、霊斗!!お前はやっぱり慣れるのが早すぎるだろ!・・・つて、あそこに見えるのは・・・」

司の視線の先には、遊園地の中にあるテントのような建物。いや、テントというより・・・ステージ？

霊斗「こんなところにステージがあんのかよ？」

ミクに連れられ、俺達は中に入ると、ステージ上にえむと一人の男性がいた。その人物は、ミクと同じように有名な男性のバーチャル・シンガーの一人。青色の髪と瞳が特徴のKAITOだった。

KAITO「よし、小道具は揃つてるね。照明もバッチリだ。これ

で今日も、いいショーができそうだね」

えむ「うんうんっ♪楽しみだね！カイトお兄さん！」

ミク「お待たせっ♪連れてきたよっ♪」

K A I T O「ミク、わざわざ連れてきてくれたんだね？ありがとう。」

えむ「あ！司くん！霊斗くん！二人も来てたんだね！」

霊斗「えむに・・・ミクの次はカイトかよ・・・マジでどうなってるんだ？ここは・・・？」

司「どうか！霊斗もそうだったが、お前は馴染みすぎだろ！もう少し驚け!!霊斗の方が驚いてたぞ!」

いやまあ、そうだよな・・・見知らぬ場所に来て、普通ならありえない出会いをした・・・驚くのが普通だよな。

えむ「なんで？こくんなに楽しいところに来たんだよ！ミクちゃんやカイトお兄さんにも会えたし！」

司「そういう話じゃ・・・！はあ・・・こいつに何か話しても無駄か・・・」

霊斗「・・・えむらしいな。」

司「それにしても・・・このステージ・・・どこかで見たことがあるような・・・？」

K A I T O「やあ、初めまして、司くん。それと・・・霊斗くんでもいいんだよね？」

霊斗「え？お、おう。鬼灯霊斗だ。苗字は呼びづらだろうし、名前がいい。そのかわり、俺もカイトって呼んでもいいか？」

K A I T O「うん。別に構わないよ？それと、二人も突然知らない場所に来て、びっくりしたよね。開演時間まで少し話をしようか？」

それから、カイトからの話を聞いた。ミクが先程言っていたが、やはりここは司の思いからできたセカイらしい。後のことはよくわからない。

司「オレの思いから生まれたセカイ？」

K A I T O「そう。ここは君の思いから生まれた場所なんだ」

霊斗「そういや、さつきもミクが言ってたな。思いから世界が生ま

れる・・・俄かに信じがたいが、こうやって今、現在進行形で目の当たりにしてんだし・・・否定する気にも起きねえわな。」

えむ「司くん・・・！！こんなすごいところまで作っちゃうなんて、スターってすごいね!!」

司「ぐえっ！い、痛みがある・・・ということは、夢ではないみたいだな・・・」

KAITO「キミ達がいた世界とこのセカイはuntitledという曲で繋がってるんだ。ここに来る時、untitledを再生しなかったかい？」

霊斗「それって・・・司のスマホに入ってた曲じゃねえか？」

司「確かに、あの曲を再生したら、ここに来たな」

んじゃあ、あの曲は、元の世界とここをつなぐ扉みたいなものってことか・・・

司「理解できなくはない・・・だが、聞きたいことがいくつもある・・・そもそもなぜ、ミクやカイト、バーチャル・シンガーがここにいるんだ？」

KAITO「僕達はね？司君。君の本当の想いに気づいてほしくてここにいるんだよ？」

霊斗「司の本当の想い？」

KAITO「うん。歌はね？人の想いでできてるんだ。だから司君が自分の想いに気づいた時、その想いは曲になる。歌になる。そして僕達も、その歌を歌うことができるんだよ？」

司「うーん・・・よくわからんが、歌えばいいのか？その歌とやらを？それならいくらでも歌うぞ？」

霊斗「・・・いや、多分今はまだ歌えない。」

司「？どういう意味だ？」

霊斗「歌うだけならミクやカイトがここにいる訳がない。本当の想いに気づいていないから、二人はここにいるって言ってたよな？つまり、司の想いってやつは、まだ分かってないってことだよな？つまり・・・そもそも、その歌が出来てないってことだろ？」

ミク「そこまで分かっちゃうんだく♪すごいね！霊斗くん！」

KAITO「霊斗くんの言う通りだよ。司くんは本当の自分の想いに気づいていない。だから、その歌自体が存在しないんだよ」

司「俺の本当の想い？忘れている？そんなはずはない！オレの想いはただ一つ！『世界一のスターになる！』だ！」

「……いや、多分違うんだろ。その想いも間違いではないのはわかる。けど、司がスターを目指した理由は多分別にある。

ミク「でもでもそれだけじゃないんじゃない？例えば、そう！みんなを笑顔にしたいとか？」

司「笑顔に？」

笑顔「……か。」

ミク「そうっ♪だから、ここでミク達とショーをやらない？そしてら、本当の想いを思い出せるはずだよ？」

司「ショー？ここで？」

えむ「ミクちゃん達と!?楽しそう♪」

KAITO「ああ。ここでショーをやったらきつと楽しいよ？思いがけない事がたくさん起きるからね」

KAITO「例えば、ほら」

KAITOの指さした場所に視線を向ける俺達。そこには、くたびれたぬいぐるみが、風船によって浮かばせられていた。

霊斗「ん？何だこれ？」

司「くたびれた……ぬいぐるみ？どうして風船で浮かばせてるんだ？」

「ツカサクン！コンニチハ！」

と、突然ぬいぐるみから声が出た。

司「わっ！……お、驚いたな。中にスピーカーでも入ってるのか？本当にしゃべってるみたいだぞ？」

霊斗「だな。」

『ホントウニシャベツネルンダヨ！』

霊斗「……は？返答した？」

『ネエ？ツカサクン！ワタシノコト、オボエテル？モシカシテ……ワスレチャッタの？』

・・・なんか、ヤンデレの女みたいだな。このぬいぐるみ。

司「こ、これは一体どう言う事だ・・・!?ちよつと・・・いや、結構怖いな!?こいつ!?お、おい!?やめろ!こっちに来るな!・・・うおおっ!」

霊斗「っ!?司!」

司は詰め寄られたぬいぐるみから逃げていると足を滑らせて、地面に頭をぶつけてしまった。そのショックからか気絶してしまっていた。

えむ「司くん!?つかさくーん!!」

霊斗「・・・はあ、頭打って気絶してるだけだ。数分すれば起きてくるだろうよ。」

息はしてるしな。

えむ「そ、そっかあ。よかつたあ〜」

えむは安堵したのかホツと息をつき、座り込む。俺は、えむに近づき、右手をえむの頭に寄せ、ゆつくりと動かす。突然の行動に驚いたえむは俺に驚愕の表情を向ける。

えむ「んっ・・・霊斗くん?」

霊斗「心配すんな。俺の親友で、お前が注目してるスターである司がこんなでくたばるわけねえだろ?な?」

えむ「・・・うんっ!!」

霊斗「おう。その感じの方がいいんじゃない?えむは笑顔が一番似合ってるしな。」

えむ「そ、そうかな?／＼え、えへへ／＼」

霊斗「・・・よし、なら司を外に運ぶか。ここじゃ寝かせられねえし、外にあるベンチの方が休ませられるしな。」

俺は司を背負い、ステージの外にあるベンチに向かって歩き出す。えむも後についてきてくれていて、外のベンチにたどり着くと、俺たちでゆつくりと司を下ろす。それから数分後、司はガバツと体を起こした。

司「はっ!」

えむ「あ、起きた!」

霊斗「よう、司。大丈夫か？」

司「ゆ、夢か：：！それそうだな。まさかあんな、変な場所や、変なミクや、変なぬいぐるみがいるわけ：：。」

ミク「司くん、大丈夫？」

『アタマ、イタクナイ？』

司「夢じゃないのかよ!!どうなってるんだ！一体!!どうして俺がこんな目に!!」

KAITO「うーん．．．これは困ったね。本当の想いを思い出してもらいどころじゃなさそうだ」

司「帰る！俺は帰るぞ！そうだ！あの『untitled』って曲を止めれば．．．！」

司はポケットに手を入れ、スマホを探し始める。だが。

司「ない！スマホがない．．．！そんな．．．！ああああ！何でもするから早く俺をここから出してくれ！頭がおかしくなりそうだ！」
．．．．少し面倒だな。しょうがねえか。

俺は司の前に立ち、右手を上にあげ、手刀を司の頭に叩き込む。

司「ぐえっ！」

霊斗「一旦落ち着けての。深呼吸して冷静になれ。ミク、カイト。司もこんなんだし、そのショーに付き合ったら、一旦元の世界に帰らせてくれないか？その後なら話せると思うからよ」

えむ「え!?!司くんも霊斗くんも！一緒にショーやってくれるの!?!」

霊斗「俺は別に構わねえよ？」

えむ「やつたく!!約束だからね?!それじゃあ！司くんのスマホを探そう！えーっと、司くんのスマホは．．．あ！あった！あその木の上にあるよ！」

えむの指さした場所はなかなか高い木の上に、スマホが引っかかっていた。

司「本当か!?!よく分かったな」

えむ「私、目はいいんだ♪」

霊斗「なら、ちよっと待ってるよ．．．よっ．．．ほっと．．．」

俺は木を登り、司のスマホを手を取った後、飛び降りて、着地する。

霊斗「ほれ、司」

司「おお！ありがとう！霊斗！これで u n t i t l e d を止めれば！このこともおさらばだ！」

霊斗「そか。なら、二人は先に戻っててくれ。」

えむ「え？霊斗君はどうするの？」

霊斗「ちよつと、二人に話があるからな。終わったらすぐ行く。」

司とえむは、そのままセカイを去っていく。残ったのは俺と、ミク、カイトの3人だけだった。

K A I T O 「それで、僕達に話って何だい？」

霊斗「いや、簡単なことを聞きたいだけだ。二人は転生者って知ってるか？」

そう。気になったのはただ一つ。重要人物の中でもバーチャル・シィンガー。元の世界の方で有名な彼女達が転生者のことを知っているかである。

ミク「転生者？」

霊斗「おう。」

K A I T O 「いや、僕は知らないかな。ミクはどうだい？」

ミク「私も知らないかなあ〜」

霊斗「そうか。悪いな。変な事聞いて。んじやな。」

俺のスマホを開き、u n t i t l e d を止めて、セカイをさっつけていく。もう一度、目を開けた時、そこは、俺達が元々いたワンダーステージだった。

霊斗「おお。戻ってきたな。」

えむ「あ！霊斗くん！」

司「霊斗！話は終わったのか？と言ってもあれは悪夢のはずだが・・・」

霊斗「まあ、話は終わったな。」

えむ「あの場所、すっごい楽しいところだったね！司くん！霊斗くん！あれくらい楽しいショーを私たちも作ろうね！」

霊斗「だな。やれるだけやるか」

司「・・・ん？待て待て！何でオレがお前とショーをやらなければ

ならないんだ！それと、何で霊斗は参加する気満々なんだ！」

霊斗「何でって・・・俺は別にやりたくないわけじゃねえし。バイトもやろうと思ってたから、ここでバイトするならちようどいいかかって思ってたよ。それに、司も言ってただろ？「なんでもするからここから出してくれ」ってよ。なら、えむのショーの手伝いくらいしたらどうだ？」

司「うっ・・・！確かに言ったような、言わなかったような・・・」
えむ「司くん・・・約束、してくれたよね・・・？ウルウル」

あれ？泣きそうになってる・・・？えむが泣きそうになってんの初めて見たな・・・

司「ううっ・・・！」

その時、あの場所にいた着ぐるみがえむを庇うように前に立つ。

『貴様達！えむお嬢様を誘拐するなどどう言うつもりだ!!』

司「は!?!誘拐!?!」

霊斗「てか、お嬢様？」

『証拠はこの着ぐるみの中の内蔵されたカメラに残っている！まさかスマートフォンで目をくらませ逃走するとは・・・!』

・・・なんか、すげえ誤解されてねえか？俺達？

霊斗「いや、ハイテクだな・・・カメラ仕込まれてるとか・・・」

司「いや、それより！俺たちは誘拐なんてしていません！」

『とぼけるな！命が惜しくなって戻ってきたんだろうが、許さんぞ!』
すると、着ぐるみは凄まじいスピードで司を、捕まえようとするが。まあ、特典だかのお陰で俺からしたら、スピードが遅すぎんだよな。俺は着ぐるみの腕を掴み、未然にそれを防ぐ。

『貴様!』

霊斗「・・・」

司「すまん！霊斗！助かった！」

一色触発の空気の中、そこは乱入してくる人物がいた。それはえむ本人だった。

えむ「喧嘩しちやダメーっ！司くんと霊斗くんは、一緒にショーをしてくれる大切な友達だよ！このステージを笑顔でいくつぱいにし

てくれるんだ！だから！仲良くしないとダメだよ！」

えむの一声で、着ぐるみの動きが止まる。俺も少しだけ警戒を緩める。にしても・・・早かったな。まじで着ぐるみのスピードかよ？

『貴様達・・・本当にえむお嬢様とシヨーをやるのか？』

司「い、いや・・・それはその・・・」

霊斗「やりますよ？俺自身、えむのステージを、見たいと思いましたがここちの司も一緒にやらせてください。それと、さっきの事は謝ります。すみませんでした。

司「っ!?! 霊斗!?!」

『本当か？本当にえむお嬢様とシヨーをするんだな!?!』

霊斗「はい。あいつの・・・えむの想いは本当だつて分かりましたから。あいつの支えになりたい・・・そう思ってます」

・・・我ながら、何、思ってもない言葉がこんなに出てくんだろくな。

『・・・なるほどな。お前の気持ちはわかった。なら、そっちの金髪はどうだ？やるのか？』

司「え!?! (ここで断ったら殺される・・・!) せ、誠心誠意頑張らせていただきます!」

えむ「やったー!! やったやった! やったー!!!!」

えむ「司くん! 霊斗くん! ありがとう! 私とっても嬉しい! えへへ、何のシヨーにしようかなあ! あ! お星様のシヨーなんてどうかなあ! ね!?! 司くん!」

司「はあ・・・何でこんな事に・・・いや、しかし、逆境の中でスターダムを築き上げるのも、ストーリー性があるかもしれん。何事も前向きに、だ!」

司「よし、やるからにはとことんやるぞ! そして、スターであるこの俺に! 相応しいシヨーにしてみせる!」

意外と似たもの同士なのかもなああの二人。ん? 誰かが肩を叩いてるな・・・って、さっきの着ぐるみ?

霊斗「あの・・・何か?」

『・・・さっきの言葉に嘘はないか?』

霊斗「嘘ついてどうするんですか？えむの気持ちは分かりましたし、このステージで、笑顔いっぱいになるショーをする・・・すごい夢じゃないですか？

『・・・そうか・・・えむお嬢様の事・・・よろしく頼む』

霊斗「こちらこそ、よろしく願います。先輩」

なんか・・・認められた？まあ、あの着ぐるみともいい関係を築き上げていきたいな。これからも問題は山積みだしな。ここからが、こいつらの一歩だな。

奇妙な演出家

司「それならまずはメンバー集めからだな」

えむ「めんばー?」

霊斗「確かにメンバー集めは必要だな。今の人手だと、俺、司、えむ、そしてこの着ぐるみの先輩の4人だけ。ショーをやるなら……一人、いや二人ぐらい欲しいところだよな」

えむ「そうだね! それじゃあ! 早速、探しにレッツゴー!!」

そう言い、駆け出すえむ。慌てて俺達も後を追いつ、フェニックスワンドーランド内を探すが、当然の事ながらそう簡単に見つかるわけではない。色々な人に声をかけたりするも、断られた。

司「……やはり、そう簡単には見つかりはしないんだが……」

霊斗「まあ、当たり前だよなあ……つて、ん? おい司、あれ見てみるよ」

司「どうしたんだ? 霊斗……? あれは……?」

えむ「うわあく♪すごい! すごい! 小さなロボット達がいつぱいいるよ!」

司「ロボット? また意味のわからない事を……. ん? なんだ、あれは……?」

俺たちが見たのは、たくさんのロボットに囲まれる一人の青年。髪は紫色、服装はまるで、ショーをやるような服装だった。

「フフ、今日の彼らは上機嫌だね。何故つて? もちろん、ここでショーができるからさ。さあ、機械仕掛けの名優達! ショーの始まりだ!」

司「あれは、なんだ!」

その青年は、周囲のロボットや、空中に浮かぶドローン进行操作して、ショーを開幕し始めた。巧みにロボット達を操作して、ショーを続けている。だが、それ以上にその青年の演出だった。

霊斗「あのロボットや、ドローンをショーの役に見立ててんのか。それに、あいつの口上や、動きも良い。何より演出がすげえな。」

司「ああ……. あいつを、演出家として、引き入れたいな……

!!」

そして、彼のショーがクライマックスに突入する。その時だった。警備員がやってくる・・・いや、まさか。あいつを追っかけてきているのか？このキャストじゃねえのかよ？

「おや、どうやら今日はここまでのようだね。この続きはまた今度にしようか。それじゃあみんな、次のショーまで想像して待っていてくれたまえ！」

そして、その青年は駆け出して、警備員から余裕で逃げ切ってしまった。

「待てー！ハア・・・まったく、毎度逃げ足が早い・・・！」

霊斗「えーと、すみません。あいつって、このキャストじゃ・・・？」

「いや、彼は、この辺りで勝手にショーを始めるんだよ。注意すればすぐいなくなるんだけど、度々ここにきてね・・・」

えむ「さっきの人のショー！続き、どうなったのかな？街の人にショーを見せたら、どうなったのかな？」

司「・・・霊斗」

霊斗「言わなくてもわかる。多分、司と同じだからな」

えむ「？司くんも霊斗くんも、どうしたの？」

司 霊斗

「えむ、あいつをメンバーに加えるぞ!!」

そして、俺たちは、さっきの奴を探し出す。だが、あれから園内では見つからず、そのまま解散となった。そして、翌日、俺達は、学校に登校して、変わらず授業を受けた。ちなみに今は、放課後である。ちなみに、えむは女学院だかに登校してららしい。

司「はあ・・・あれだけ探しても見つからないとは・・・」

霊斗「警備員さんの言ってた通り、逃げ足は速いよな・・・せめて、なんか情報が有れば良いんだけどな・・・」

フェニックスワンダーランドでたまにショーをしに来るって事くらいしかわかんねえし。すると、同じクラスの一人の女子生徒が話しかけてくる。

「何？霊斗くん、誰か探してるの？」

靈斗「ん？ああ。紫色の髪で、ロボットとかドローンとか連れられてる奴を探してるんだけどよ……」

「ロボットとドローン？……それって、隣のクラスの神代類くんのこと？」

靈斗「知ってるのか？」

「うん。名門校から転校してきた男の子で、頭はいいけど、変なロボット触ってたり、時々、道端でパフォーマンスしてるみたいだから」

まさか、こんな身近に情報があったとはな……灯台下暗しとはまさにこの事だな。

靈斗「悪い！恩にきる！司、行くぞ！」

司「ああ！感謝する!!」

俺達は、急いで、隣のクラスの教室に向かい、ノックした後、扉を開ける。

靈斗「急に押しかけて悪い。A組の鬼灯靈斗だ。神代類って奴、探してんだけど、いるか？」

「神代？さあ？あいつ、この時間はふらつといなくなるからな……」
どうやら、教室にはいないらしい。

司「入れ違ったか？すまないが、神代が行きそうな場所を知らないか？もしくは、伝言を頼んでも……？」

「え……？悪いけど、俺達もあんまりあいつとは関わりたくないんだよな……授業中もボソボソ喋ってるしよ……」

司「話を聞く限り、そいつも中々の変人だな……」

……いや、俺達が言えた義理ではないと思うが……って言いながら、心の中に閉まっておこう。

靈斗「しょうがねえ。少し、探してみるか。悪いな。急に来て。」

その後、俺達は、神代を探し始めた。学校内を見て周り、中庭や購買も限なく探したが、見つからず、最後に屋上を探そうとしていた。

司「中庭にも購買にもいないとは……」

靈斗「後はこの屋上だけだな。ここにいなかったら……お手上げだな」

司「しかし、放課後に屋上にいるやつなんか、カップルか変人ぐら

いしか・・・おや？あれは・・・！」

司の視線を追うと、そこには・・・探していた本人が、神代類がそこにはいた。

類「やあ！やつと来たんだね？天馬くん、霊斗くん。待っていたよ。僕に何か用があるんだろう？」

司「何？俺達を探していた事、なんで知ってるんだ？」

霊斗「・・・ああ。そういや、神代はドローン持ってたよな？大方、俺達がお前を探してる時、ドローンで観察してたんだろ？」

類「正解だよ。霊斗くん。僕を探して、動き回る君達を見ているのはとても面白かったよ」

霊斗「あのショーに使ってたロボットと言い、ドローンと言い・・・お前本当、すごい奴だな？」

類「おや？僕のショーを見ていたのかい？君達もどうやら、僕のファンみたいだね？」

まあ、確かに、神代のショーは凄かったと思う。感情が乏しい・・・いや、ほとんど無いような俺でもすごいと思えたから。

司「いや、俺はお前を勧誘しに来た！」

類「勧誘？」

司「単刀直入に言おう。神代類！俺とともにショーをやるぞ！」

類「君と・・・ショーを？それは、なかなか面白そうな提案だね」

司「そうだろう！そうだろう！よし！そうと決まれば・・・！」

霊斗「ていつ」

俺は司の頭を軽く叩く。

司「いたっ！おい！霊斗！何をする!？」

霊斗「まだ、類の返事を聞いてないのに、勝手に決めんなって。神代どうだ？司と一緒にショー、やってくれないか？」

類「・・・とても興味深い提案だけど、君とのショーの上演はないだろうねえ。僕は自由気ままにショーを、するのが好きなんだ。僕は僕なりに、見てくれる人が心から笑ってくれるショーを作っていければそれで良いんだよ」

司「心から楽しめるショーを・・・？それならば、なおさら俺とやるべきだろう！」

るい「・・・へえ。それは何故だい？」

司「決まっている！俺が、世界一のスターになる男だからだ!!」

類「・・・うん？」

神代の奴、困惑してるよな・・・まあ、当たり前だろうな。司の言ってる事は、理由になってねえし・・・

司「俺は、スターになり、必ず客を楽しませてみせる！お前のショーを見たが、お前の演出家としての腕は最高だ！」

霊斗「それは同感だな。神代のショー、見てて楽しんだ奴。多かつたし、それも神代の演出がいいからだろうな」

類「おや、どうもありがとう」

司「そして、オレなら神代のどんな演出にも、12000%の結果で答えてみせる！」

類「これはまた、なかなかすごい数字を持ち出してきたね。その数字にはどんな根拠があるんだい？」

司「根拠？そんなものはない！あるのは、俺自身に対する自信！そして、俺の親友！鬼灯霊斗への信頼だけだ!!」

霊斗「・・・っ」

司「お前の考えた演出で、俺と霊斗が最高のショーを見せる！どうだ？楽しくなると思わないか？いや！断言しよう！オレ達とやるショーは絶対に楽しいぞ!!」

類「・・・フフ、君は面白い人だね。一緒にショーをやるのはとても楽しそうだ。でも・・・」

やっぱり、断られるよな・・・そう考えていたが、途中で言葉を止めた類。視線を俺たちから外し、下を見ている。

司「なんだ？下に誰がいるのか？」

類「これも、いい機会かもしれないな・・・」

霊斗「ん？なんだって？」

類「天馬くん、霊斗くん。二人が探しているのは演出家だけかい？」
霊斗「え？いや、役者も探す。できれば、神代にも演出家と役者の

両立してもらいたいって思ってるが・・・？」

類「それなら、僕の推薦するメンバーを加えてもらえるなら、協力するよ。」

司「おお！・・・だが、そのメンバーは実力はあるのか？」

類「ああ。実力は保証する。僕と一緒に、子供の頃からショーに触れているからね」

司「素晴らしい！一気にメンバーが二人も増えたぞ！」

類「一緒にみんなが笑顔になるショーを作ろう、天馬くん、霊斗くん」

司「司でいい！よろしく頼むぞ！類！」

霊斗「よろしくな。類・・・って、そういや、さつきから気になってただけだよ。」

司「？どうした？」

霊斗「類、なんで司は苗字呼びで、俺だけ最初から名前呼びだったんだ？」

類「さあ、どうしてだろうね？霊斗くんと呼びたくなつたのさ。初めからね？」

霊斗「・・・そうか。」

類「ああ。そうだ。霊斗くん、少しお願いがあるんだけど、聞いてくれるかい？」

霊斗「うん？おう。いいぞ？」

類「君の写真を撮ってもいいかい？」

霊斗「・・・は？俺の写真？別に構わないけどよ・・・？」

類「ありがとう。それじゃあ早速・・・」

類はスマホを手に取り、俺にカメラを向けて写真を撮る。

類「うん。ありがとう。それじゃあ、僕は帰るよ。今日、フェニックスワンダーランドで会おう。」

司「ああ！また後でな！」

霊斗「んじゃあ、俺達は先に行くか。類、後でな」

俺と司は、一度帰宅し、フェニックスワンダーランドへ向かったのであった。

場所は変わり、フェニックスワンダーランド。俺達は衣装に着替え、ワンダーステージに集まっていた。

司「というわけで、演出家を連れてきたぞ！」

えむ「わあ☆昨日のショーの人だ！ようこそわんだほーい！」
類「へえ。こんなステージがあるなんて知らなかったな。古いけど、しっかり手入れされている。君が司くんの言ってた子だね？神代類だよ。よろしく」

えむ「よろしくねっ!!ねえねえ類くん!あのショーの続きはいつやってくれるの!?!」

類「おや、君も見てくれていたんだね?いつか必ず、やる事を約束しよう」

えむ「本当?約束だよ?」

類「ああ。もちろんさ」

えむ「えへへっ!わたし、鳳えむ!よろしくねっ!」

類「・・・鳳?」

えむ「そうだ類くん!あのビューンって飛ぶ奴!私達のショーにも使ってみたいな!」

・・・ビューンって飛ぶ奴・・・ああ。ドローンの事か。

霊斗「確かに、あれを使うのは面白いかもな。あれで星・・・あのスピードなら流れ星とかも再現できるんじゃないやねえか?」

類「っ!・・・それはなかなか面白そうだね。秒速40キロメートルで起きるプラズマ現象をドローンで再現しようとする・・・うん。面白そうだよ。本当に」

えむ「あ、でもフアラフアラって飛ばすのも面白そうかも?」

霊斗「フアラフアラ・・・蝶みたいな感じか?」

類「ああ。ルリタテハの動きだね?確かにあの蝶の動きは芸術的だね

霊斗「それなら、他の虫の動きとかも再現できるか?トンボとか?」
司「・・・あの二人の間に、霊斗が入ってくれるだけで、ここまでわかりやすくなるものなんだな・・・」

司、意外と大変なんだぞ?まあ、感覚でわかるようになってきたけ

どな。

司「そういえば、類、推薦したいもうひとりのメンバーはどうしたんだ？」

類「ああ。そこまで一緒に来てたんだけど、彼女は人と話すのが苦手だね。呼んでくるから、少し待っていてほしいな。」

類はその人物を連れてくるため、行ってしまった。

えむ「どんな子なのかなー？とつても楽しみ！」

霊斗「まあ、とりあえずショーができるくらいの人揃ったよな？」

司「ああ。これでショーはできるのも同然だ！」

類「3人とも、おまたせ。連れてきたよ。」

戻ってきた類が連れてきたのは・・・大きな一人・・・いや、一体のロボットだった。

司 えむ

「ロボット!!??」

霊斗「・・・本当、退屈しないな。ここ。」

新たなメンバー、その名はネネロボ

俺達は、類の連れてきた新たなメンバー候補……のロボットを観察していた。

えむ「このロボット大きいねえ〜！私の腰くらいまであるよ〜！」
霊斗「そうだな。それに細かい所まで作られてるし……類、これもお前が作ったのか？こいつがメンバーか？」

類「ああ、そうさ。僕がショーに使っていた自立型とは違ってこれは遠隔操作型だね。1日の充電で3日はフルの稼働に耐えられるし、ショーに適した複雑な動きにも耐えられるように設計されているんだよ」

司「ええい！自画自賛などどうでもいい！それより、操作している人間はどこにいるんだ!？」

「……」

類「ああ。少し離れた所にいるよ。大丈夫。彼女のコントロールドキには、僕が太鼓判を押すよ。」

霊斗「だろうな。類が放課後、保証するって言ってたし、心配はしてねえよ。……にしても、このロボットの姿、どっかで見覚えがあるんだよな……どこだ……？」
「……？」

えむ「霊斗くん、このロボットの事、知ってるの？」

霊斗「いや、このロボットには初めてあつたけどな。けど、なんか見覚えがあるんだよな……どこだ……？」

『……久しぶり』

すると、俺達が観察していたロボットが喋り出した。

えむ「わっ！喋ったあ〜!!」

類「うん。会話もできるし、コントローラーにはディスプレイがついているからこつちの様子もわかるよ」

霊斗「マジでハイテクノロジーだな。他の機械が霞んで見えやがる……ってか、久しぶり？」

『……あの時、助けてくれて……ありがとう』

霊斗「あの時……って、まさかお前、あの時、変な奴に絡

まれてた女か？」

ロボットは首を縦に振る。まさか、操縦してる奴が、あの時の女とは・・・世間は狭いというかなんというか・・・

霊斗「そうか。あれから、絡まれたりされてないか？」

『大丈夫・・・あいつも来てない・・・から・・・』

霊斗「そうか。なら、安心だな。なんかあつたらいつでも頼っていいからな？俺は、鬼灯霊斗。よろしくな」

えむ「私、鳳えむ！よろしくねロボちゃん♪」

『霊斗に、鳳・・・鳳？それって、もしかして・・・』

えむ「ロボちゃん、名前はあるの？教えてっ♪」

『名前？え、ええつと・・・』

霊斗「・・・？なんも無いのか？類、このロボットに名前とか無いのか？」

類「そういえば、ロボット自体には名前をつけていなかったね。この際、君の名前を教えてあげたらどうだい？」

『・・・草薙寧々』

えむ「寧々ちゃん！よろしくね！」

霊斗「草薙寧々・・・か・・・なら、安直だけだよ。ネネロボなんてどうだ？呼びやすいし。」

・・・我ながら、ネーミングセンスのなさよ。

えむ「ネネロボちゃん！いいと思うよ！どうかな!？」

類「そうだね。ネネロボ・・・いい名前じゃないか。寧々はどうだい？」

寧々『ネネロボ・・・れ、霊斗がつけてくれたならその名前でもいいけど・・・』

・・・なんか、会話が苦手な割には意外と話せてるな・・・まあ、別にいいか。

司「会話ができるなら、その草薙寧々とやらに一言言わせてもらおう！いいか！俺達は歌もダンスもやる！オレというスターにふさわしい、ハイクオリティでな！そんなロボットじゃ、ダンスもままならないだろう。残念ながら、メンバーには・・・」

寧々『へえー。自称スターのくせに、見る目ないんじゃないの?』
司「な、なんだと!？」

霊斗「俺もそう思うぞ?司。見た目で判断したら駄目だろ?ロボットだからって解釈はやめろ。それは、草薙にも、それこそ連れてきた類にも失礼だ。ロボットだから踊れないなんて言った奴なんていないだろ?」

司「……うつ!……す、すまなかった。」

霊斗「……そうだ。草薙、何か今ここで踊ったりできるか?」

寧々『できる。こいつにも踊れる所見せたいし』

霊斗「なら、一回、やってみるか。類、いいか?」

類「ああ。見せるのはいいと思うよ。技能と技を見てもらおう!えむくん、音楽をかけてもらえるかい?」

霊斗「なら、提案したのも俺だし、少し付き合うか。代役として出るかもしれないし、えむ、いいぞ!」

えむ「はあーいっ!ネネロボちゃんと霊斗くんのショー!スタートつ☆」

司「ふん、やれるもんならやってみろ!霊斗は未知数だが、いくら類が作ったロボットとはいえ……」

えむが音楽を再生すると、リズムカルな音楽が流れてくる。直後、ネネロボは巧みに足を動かして……つて。

司「た、タップダンスだどー!?あの短い足で!？」

霊斗「予想外のダンスだな……それなら、こっちも合わせるか。」

俺は、ネネロボの音に合わせてるように、足を動かし、音を奏でる。
類「いいねえ。二人とも、とてもいいダンスだ」

えむ「うわあ〜♪二人ともすごいスピードで足がバタバタしてるよ☆」

すると、タップダンス特有の音が止み、ネネロボの動きが変わった。
司「からの……滑らかなジャズダンスだど!?ウソだろ……」

!!あんな頭身でできるはずがない……!

霊斗「やっぱ、類が保証するだけはあるよな……」

司「いや、それよりも霊斗！お前は何故そんなに踊れるんだ!？」

霊斗「いや、だって、いざ本番つて時に代役頼まれるかと思つて……」

……つて言つてるが、全部、特典のお蔭なんだけどな……

えむ「すごいすごい!!ネネロボちゃんも霊斗くんもダンスじょうずだねえ〜♪」

寧々『……どう?』

司「い、いやまだだ!ミュージカルショーは歌こそが最も重要!口々に与えない奴は、ステージにあげられん!」

寧々『ふーん。歌えばいいの?』

司「へ?」

寧々『……霊斗。い、一緒に歌つてくれない?』

霊斗「は……?まあ、ダンスも付き合つたし、別にいいけどよ……」

寧々『それなら……〜♪』

霊斗「〜♪〜♪」

寧々が歌い出し、俺もそれに合わせて歌う。寧々がメロディを歌い、ハモリを俺が歌う感じだ。知つてる曲で助かつた……

えむ「わ、わわわ〜♪すつごく綺麗な歌!声もキレイ〜!」

類「霊斗くんも、凄くキレイな歌声だね。」

司「そんなバカな……はっ!録音したプロの声を流してるんじゃないだろうな!？」

えむ「さっきのネネロボちゃんの声と同じだし、もしそうなら、霊斗くんと一緒に歌つてなんて言わないんじゃないかな?」

司「うっ!」

霊斗（まあ、ただ歌うだけなら、こんなもんでいいよな……）
寧々（なんでだろ……霊斗と歌うのが……自然みたい……楽しいって思ってるのかな……）

歌い終えた俺達は、ステージを降りる。その後ネネロボは司を見つめていた。

寧々『……それで、次は何をすればいいわけ?』

司「ううっ……!」

霊斗「司、草薙を入れてもいいんじゃないか?」

司「霊斗!？」

霊斗「草薙と踊ったり、歌ってみたが、こいつのパフォーマンスは一人前だ。これほどの逸材はいない。条件は満たしてるし、ロボットの見た目だから、子供からの人気が出るかもしれない。こんな人材をお前はロボットだからっていう、くだらない理由で捨てるのか？」

司「うう、確かに・・・俺のステージに立つレベルには到達しているが・・・」

霊斗「・・・まさかとは思うけどよ。自分より目立つかもしれないから入れないなんて理由じゃねえよな？」

司「!?お、オレは世界一のスターになる男だぞ!!そんな理由があるわけがない!」

霊斗 寧々

『ふくん?』

司「なんだ!?二人のその顔は!？」

寧々『気づいた?流石未来のスター』

司「おい、何故こいつはこんなにも好戦的なんだ?オレの才能に嫉妬しているからか?」

類「あはは、3人とも仲がいいみたいだね。特に・・・寧々くんと霊斗くん。二人の相性はバツチリみたいだね」

えむ「司くん!私、ネネロボちゃんとシヨーがやりたい!」

えむ「こんなにダンスも歌も上手なんだよ?きつと、シヨーが大好きで、たくさん練習したんだよね?すごいよっ!」

寧々『・・・』

「こんだけな物、見せられたら、流石の司も納得するだろ・・・」

司「くっ・・・確かに、歌と踊りの出来は認めるしかない・・・」

えむ「ええっ!?!じゃあ?じゃあ?」

司「わかったわかった!あいつが4人目のメンバーだ!」

霊斗「決まりだな。よろしくな。ネネロボと草薙」

寧々『・・・』

霊斗「え?」

寧々『・・・』

・・・司の時とのギャップが激しいな。

霊斗「わかった。よろしくな。寧々」

えむ「よろしくね！ネネロボちゃんも寧々ちゃん！」

寧々『ま、よろしくね』

司「寛大な俺に感謝するんだな。」

寧々『アンタこそ、足引つ張ったら、ビームの的にするから』

司「ビーム!?そいつ、ビームがついてるのか!？」

霊斗「・・・やっぱ、類の作るロボットってオーバーテクノロジーだよな。お前の凄いとこなんだけどよ」

類「フフ、褒められるのは悪い気がしないね。」

・・・やつと、フルメンバー・・・か?これから騒がしくなりそうだな・・・

霊斗「と、いけね。大事なこと忘れてた。司」

司「ん?なんだ?」

霊斗「類と俺で演出とか必要な材料とか出すからよ。シヨの脚本、司が作ってくれないか?」

司「・・・へ?」

えむ「え?司くんが考えてくれるの!？」

霊斗「リーダーはお前なんだし。プロとかを雇う金もなし。時間もなし。なら、俺達でどうにかするしかないだろ?」

司「た、確かにそうだが・・・いや・・・しかし・・・」

・・・後一息だな・・・よし、なら・・・

霊斗「寧々・・・ゴニヨゴニヨ・・・」

寧々『・・・うん。わかった・・・やっぱり、アンタは自称スターね。頭のレベルを露見したくないだけじゃないの?それだけ低いの?』

司「なっ!?!くっ・・・!そこまで言うなら、このスターである俺に任せろ!!スターである俺にふさわしい脚本を描いてくるからな!!」

寧々『はいはい。期待しないで待ってる』

霊斗「頼むぜ?司。」

その後は、現地解散をして、俺は帰路についた。この後に待ち受け

る、突然の出来事を知らぬまま。

結成！俺達の劇団

司「それで、ここで俺がドーン！と登場する、と。うむ！なかなかいい展開だな！」

俺、天馬司は、昨日、霊斗に言われた通り、初舞台の脚本を書いていた。だが、やはり、俺は天才だな！ここまでの脚本を書けてしまうのだから！

「お兄ちゃん、新しいお芝居書いてるの？」

そんな俺に話しかけてきたのは、我が最愛の妹、咲希だ。俺の書いている脚本を覗き込んでいる。

司「ああ。今度ショーをやる事になってな。俺が直々に、脚本を書き下ろしているんだ」

咲希「そうなんだ！いつやるの？私も見にいきたい！」

司「連休初日の昼頃にやる予定だ」

咲希「あ！その日バイト入れちゃってたんだく残念……」

司「ああ。そういえばカフェでバイトを始めたんだつたな。部活も始めたと言っていたが……。体調は大丈夫なのか？」

咲希は昔から、体が弱く、つい最近まで、入院していたのだ。兄として……妹の事は心配なんだが……

咲希「うん！もう体は大丈夫だよ！でも、あんまり張り切りすぎないようにしないとね！またみんなに迷惑がかかっちゃうから」

司「咲希……『我は王子ペガサス！』」

咲希「ちよ!?!お兄ちゃん!?!」

司「魔王を倒す旅はまだ始まったばかり！きつと困難があるだろう。だが、その先には……希望がある！そう信じているから私は、恐れず進んでいくのだ！」

咲希「っ！……ふふ、ありがとう！お兄ちゃん。昔もこんな風に見えるなショーを見せてくれたよね。私のぬいぐるみも使ってくれたんだよ？うさぎのぬいぐるみ。覚えてる？」

司「うさぎのぬいぐるみ？そういえば、そんなこともあったよう……?」

咲希「いっぱい、遊んだからくたくたになっちゃったけどね。お兄ちゃん！今度のショー、頑張つてね！お兄ちゃんの頑張つてる姿を私も見たら、頑張れるから！」

司「ああ！任せろ！」

妹のためにも・・・そして、俺の夢の為にも、絶対このショーは成功させるぞ!!

司 side end

霊斗 Side

霊斗「ふあく・・・やつぱ、眠い・・・司のやつまだ来ねえか・・・何してんだ？」

翌日、俺、類、えむ、寧々はワンダーステージで衣装に着替えて待機していた。もちろん寧々はネネロボで。だが、肝心のリーダーである司が来ていない為、打ち合わせはもちろん、会議もできず、待機を余儀なくされていた。

寧々『大方、脚本が書けてなくて遅刻してるんでしょ・・・？』

霊斗「どうだろうな・・・類、脚本に合わせて演出も若干変えるけどよ。大まかな所は類の提案通りに行くか。」

類「ああ。その方が司君も目立つし、ショーも盛り上がるからね」

えむ「あ！司くん！おーい！」

えむが指を指す方向へ目を向けると、衣装に着替えて、走っている司の姿があった。

霊斗「少し遅刻だな？司？」

司「ぜえ・・・！ぜえ・・・！す、すまない！脚本を書いてたら寝てしまって、遅れてしまった！」

霊斗「お、できたのか。どれどれ・・・？」

類「司くんが書いてきたのかい？」

司「ああ！スターたる俺にふさわしい、作品になっている！」

寧々『へー、じゃあ、この脚本で、あんたの頭のレベルがわかるの？』

司「くっ……！いちいちつかかってくるロボットめ……！この脚本が高尚すぎて、理解できなくても解説してやらんからな！」

寧々『あんたに解説なんて聞いたら、余計理解できなくなりそう……』

えむ「二人とも、すっかり仲良しだね〜」

寧々 司

「どこが(だ)!?!」

二人とも息ぴったりだな。やっぱ、仲良いだろ。

司「そうだ！もう一つ、大事な事を発表しよう！」

霊斗「あ？もう一つ？なんかあったか？」

司「劇団名だ！公演をするなら、劇団名が必要だろう？」

類「たしかに、必要なものだね。それで、なんて名前にしたんだい？」

司「その名も……劇団！ペガサス☆インザスカイ！」キラ〜ン

ドヤ顔で決める司。……いや、それは……

寧々『……ダサ』

司「だ、ダサいだと!?!この名前の何処がダサい！むしろこの名前以上にかっこいい名前などないだろう！」

寧々、あんまし直球でいうな。確かに俺もそう思ったけど。あの類ですら、困ったような顔してるぞ。

類「どうしてダサいのか……分析は難しいね。ただ、一言で言うとしたら……」

寧々『シンプルにダサい』

類「それだね」

霊斗「まあ、司らしくはあるけどな・・・」

司「お前ら、人が考えてきたものをく！なら、お前達にはいいアイディアがあるんだろうな!？」

類「そうだね・・・えむくんはどんな名前がいいと思う?」

えむ「うくん、おひさまの世界のサニサニパワーとか、お花畑の世界のハナポンサクサク☆とか?」

寧々 霊斗

「・・・教育テレビ番組(か)?」

司もそうだが、えむも少し独特な表現だな・・・いや、ネネロボつて安直な名前をつけたおれもどうかと思うけど・・・な。

司「どうか、その”世界”ってなんなんだ?」

えむ「ワンダーステージはね? ショーでいろくんな世界になるの! ジャングルの世界になったり、雲の上の世界になったり、原始人の世界になったり、宇宙人の世界になったり!」

霊斗「メルヘンだな・・・現実的などころもあるけど」

えむ「どんな世界にもなっちゃう、ワンダーランドなの! だからショーの時間になると、みんなが笑顔になるんだよ!」

ワンダーランドね・・・意外としっくりくるな。

霊斗「なら、それでいいんじゃないか?」

司「? 霊斗、それはどう言う意味だ?」

霊斗「要するに、このステージが生み出すワンダーランドで、みんなが笑顔になる時間を過ごしてほしいって事だろ? なら、その思いを名前にすれば良い。」

えむ「むむむ? ワンダーランドで・・・素晴らしい時間を?」

寧々 霊斗

「ワンダーランドズ、ショータイム!」

類「うん?」

霊斗「このステージの名前はワンダーステージ。そして、この場所では複数の世界がある。」

寧々「それと、時間を別の呼び方にすれば、ショータイム。」

霊斗「んで、複数の姿を持つこのステージの名前と、ショータイム

をくっ付ければ、ワンダーランズショータイムって名前になるだろう？」

えむ「わくっ！かつこいいく！じゃあ台本の表紙に書くつと！」

司「あーおい待て！どう考えても劇団ペガサス☆インザスカイの方が……」

えむ「できたー！ワンダーランズ??ショウタイム！」

えむの持つ台本には、たしかに『ワンダーランズ??ショウタイムと書かれていた。

司「この??はなんだ？あと、なぜ『ショウ』なんだ？伸ばし棒だろう！そこは！」

えむ「??は掛け算だよ♪ショーをやった分だけ、ワンダーランドが増えてくから！」

えむ「で、『ショウ』なのは……なんだかカッコいいから！」
司「あ、あのなあ……」

霊斗「ワンダーランズ??ショウタイム……か。悪くねえな。えむの言ってる事にもあつてるし、俺達の方針にも合ってる。なあ？類？」

類「そうだね。僕も嫌いじゃないよ？直感も大切なものだ。寧々もそう思うだろう？」

寧々「……まあ、悪くないんじゃない？あの、ダサイ名前よりは」

司「うぐぐ……はあ、まあいいだろう。大事なのはショーの内容だからな。名前も決まった事だし、これから気合を入れていくぞ！」

えむ「うん！頑張ろう！おーっ!!」

寧々「……え？お、おーっ」

寧々、無理になる必要はないと思うぞ……

演出家の本領

俺達は、司の書いてきた初公演の脚本を全員で確認していた。

類「なるほど・・・この台本の筋は把握したよ。『ツカサリオン』はオーソドックスな英雄譚だね。主人公のペガサスは人々を苦しめる魔王を倒す旅に出る」

霊斗「んで、旅の途中に仲間を見つけて、まずは村を苦しめるドラゴンを退治して・・・最後は魔王と一騎討ち。最後は英雄として街に戻っていく・・・と。確かにオーソドックスだな。」

えむ「うん！面白いお話だよー！こんな台本を書けるなんて、司君すごいねー！」

寧々「あんたみたいな変人から、何でこんな普通の台本ができるかわからないんだけど・・・」

司「はっはっはっ！俺はスターになる男だからな！これくらい当然・・・って！誰が変人だ！誰が!!」

霊斗「なら、これになるべく近い演出をしないと。類、このツカサリオンに感情移入できる様に出来ねえか？例えば・・・過酷な旅の風景とかよ。何とかなるか？」

類「そうだね・・・それなら雷を落としたりするのはどうかな？旅の中で1番過酷な表現をしやすいのは荒れた天気だからね。実は、ここにプラズマを発生させる装置が・・・」

司「いや物騒な装置だな!?というか、どうしてそんな物があるんだ!?!」

類「こんなこともあろうかと、用意しておいたんだよ♪」
いや、そんな事普通はねえよ・・・

司「そんないい顔をしているな！大体、そんな物があつたら危険だろう!!」

類「舞台に固定しておけば、お客さんには危険はないよ。触れたら死ぬけどね」

司「俺へのリスクが高い！」

寧々『あーあ、また始まった・・・』

えむ「また？」

寧々『類はショーでやったら面白そうな事を片っ端から試しちゃうの。それでよくクラスメイトを体育館で宙吊りにしたり、プールで水責めしたり・・・そんなんだから、最初はショーをやるって言ってくれた人も最後にはいなくなっちゃって・・・』

客に喜んで貰うために、楽しそうな事を全てを試す・・・それも類の魅力の一つだな。

えむ「ええ〜？すつごく楽しそうなのに・・・」

霊斗「まあ、みんな自分の命が大切なんだよ。それか、類の客を楽ませたいって想いをたかがショーって決めつけてるか。どちらにせよやって見なくちやわからないけどな。」

寧々『みんながえむや霊斗みたいなのばかりだったらよかったのね・・・』

司「そんな危険な演出は絶対ダメだ!!」

類「そんな・・・!どんな演出にも1200%で応えて見せると言うてくれたのに・・・!!」

類「そういう事なら僕は演出家を辞退しよう。寧々、後は頑張つて・・・」

あ、やば。このままだと類がせつかく入ってくれたのに勿体無いよな・・・仕方ない。

霊斗「えむ、少しいいか？」

えむ「?なにになに？」

霊斗「あのな・・・ゴニヨゴニヨ」

えむ「うん・・・うん!わかったよ!ねえ!司君!雷が落ちる演出やめちやうの!?!ステージで雷がピカッ!って光つたらすつごく目立つよ!」

司「・・・っ?!目立つ・・・!?!」

えむ「すーつごくお客さんが集まるかも知れないよ!」

霊斗「たしかに、ステージに雷が落ちるってのは前代未聞の演出だよな。他の劇団では絶対できないだろうし。話題に絶対的に上がる。」

目立つことは間違いないよな」

これでどうだ・・・？

司「た、確かに目立つな・・・そこに俺が立ち、勇者として演じる・・・」

司「・・・類、ちよつとくらいならやってもいいぞ」

類「え？」

司「べ、別に目立ちたいからとかじゃないぞ！斬新さは、スターのショーに必要不可欠だからな！」

寧々『誰に需要があるの・・・そのツンデレ・・・』

類「・・・へえ・・・それじゃあ・・・ドラゴンと戦うシーンで改造した火炎放射器を使ってもいいかい？」

司「な、何!？」

類「後は魔王と戦うシーンで10メートルほど飛んでみるのはどうだい？以前、足元に強風を当てて浮かせる装置を作ったんだ。それを使ったらとてもあのシーンはとても面白い物になると思うんだ。」

司「ど、どっちも危険では・・・」

確かに、類の演出はめちやくちや面白そうだが、それなりに危険性がある。司が危惧しているのはそこだろう・・・仕方ねえか。

霊斗「それなら、類の演出、俺で試せば良くないか？」

司「な、何!？」

えむ「ええ!？」

寧々『!？』

類「霊斗君が？」

霊斗「司は、類の演出が盛り上がるのは理解してると思う。けどめちやくちや危険なのが気になってんだろ？」

司「た、確かにそうだが・・・」

霊斗「なら、俺が試してやるよ。類、使いたい演出に必要な物、明日とかに集まれるか？そのあと、俺が大丈夫か試すからよ。それなら

「駄目く!!」えむ？寧々？」

えむ「霊斗君がやるのは絶対駄目だよ!!」

寧々『そう・・・!!霊斗がやるのは絶対駄目・・・!』

・・・何でこの2人こんな必死なんだ？

霊斗「けどよ、そうしねえと司も納得しないだろ？」

司「わ、わかった！類！全てやつてもいいぞ！だから霊斗！お前はそんな事をするな！」

霊斗「は？いや、お前さつき……」

司「わ・か・つ・た・な!？」

霊斗「……お、おう。わかった……」

何だったんだ？……あの3人の気迫……？

夢への一歩

司「む？相当時間がたったみたいだな。周りも暗いぞ？」

あれからもショーの演出や小物類の確認をしているとすでに夕方になっていた。

霊斗「なら、今回はお開きか？」

司「そうだな。明日は朝7時にここに集合！入園用のスタッフカードは各自で持ってくる様に！」

えむ 寧々 類

『はい』

それから俺達は各自で分かれて帰路に着く。俺はもちろん司と一緒に。といつても帰る方向が同じだからな。

霊斗「ようやく夢への一歩目だな？司？」

司「ああ！これから始まるんだ！俺のスターへの第一歩が!!」

霊斗「まあ、個性的なメンバーの劇団だけだな。つと、悪い。司、ここで別れるわ」

司「ん？何か用事か？」

霊斗「おう。少しな。家に食材なかったからよ。買い出し、してるわ。司は早く帰ってやれよ。咲希ちゃん・・・だっけか？妹さん、待ってんだろ？」

司「そ、そうか？なら、ここで別れるぞ？霊斗も気をつけて帰るんだぞ!!」

霊斗「お前は俺の母親かよ・・・んじやな。」

俺は、司と別れ、行きつけのショッピングモールへと向かう。

霊斗「今日は何にするかねえ。カレー・・・いや、パスタもありだな。色々買つときますかね。」

俺は足を早めて、ショッピングモールへと急ぐ。数分後、到着し、多くの食材をカゴに入れ、会計を済まし、改めて帰路に着く。その時、甘い匂いが漂って来る。匂いのする方へ視線を向けると、一つの店があった。

霊斗「おん？アップルパイ・・・？この店のお勧めの一品・・・か。

何かの縁かもな。買ってくか」

俺は、店に寄り、アップルパイを買う。どうやら、さつき買ったアップルパイが最後のやつだったらしく、売り切れになっていた。俺は、店を出ると、1人の女性が佇んでいる。その女は、ショートヘアの女にしては少し高い身長が特徴だった。私服ではない。確か近くの女子校がこんな制服だった気がする。

その女は俺の持っている袋を凝視している。どうやら彼女の目当ての物もアップルパイだったらしく、俺が最後のアップルパイを買ってしまった為、買えなかった様だ。

「………」ジーツ

霊斗「……」

「……仕方ねえか。買っては見ただけど、俺より彼女の方が美味しそうに食うと……なんでかそう思ったしな。俺は自分の持っている袋を彼女の前に持っていく。」

霊斗「ん」

「え？」

霊斗「食いたいんだろ？俺は、母さんと父さんの分あればいいからよ。俺の分でいいなら食えよ。」

「い、いえーそんな……！」

霊斗「遠慮すんなよ。さつきから見てるの知ってたしよ。好物……なんだろ？好きな物くれるっていつてんだから受け取れって。」

「……本当にいいんですか？」

霊斗「良いって。さつきと受け取れよ」

俺は無理矢理渡す様に、彼女に軽く押し付ける。袋は彼女の手に収まった。

「あ、ありがとうございます……甘い物、好きなんですか？」

霊斗「んお？まあ、嫌いではねえかな。買い物帰りにいい匂いがしたからよ。匂いの来る方見たら、その店のアップルパイだったからよ。父さんと母さんに……な」

「お父さんと……お母さんに？」

霊斗「まあ……な。つと、自己紹介してなかったよな？俺は、鬼

灯霊斗。神山高校2年、よろしくな」

「えいっ、ごめんなさい！年上だったなんて！え、えっと、宮益坂女子学園1年生の、望月穂波です！」

霊斗「望月さんな。OK。んじゃあ、俺そろそろ行くからよ。機会あつたらまた会おうぜ。」

穂波「あ、ちよつと待つてください、それなら連絡先を交換しませんか？霊斗さんと、またお話とかしたいですし」

霊斗「おう。いいぜ。」

そして、司、類、えむ、寧々以外に、新たな連絡先が加わりました。交換後、俺は望月さんに別れた。数分、歩き、家に着いた俺は、すぐに夕食の準備に取り掛かろうとするが。

霊斗「あ、やべ、忘れるところだった。」

俺は、アップルパイを皿に乗せ、運びある場所へと置く。そこは亡くなった父さんと母さんの仏壇だった。

霊斗「母さん、父さん、これ帰る途中に見つけた店のアップルパイ。さつき知り合った人からのお墨付きだからよ。きつと美味しいはずだ。それと・・・司以外に、3人、連絡先交換したよ。友達もできた。だから・・・うまくやってけるよ。これからも見守ってくれよな」俺は、その場を離れて、夕食を作っていく。ちなみに今日はパスタになりました。旨さは相変わらず、わかりはしないが、自分ではうまくできたと思う。手早く食べて、風呂に入り、髪を乾かしている時、ピロントゥとスマホが鳴った。確認してみると、望月さんからのLuinだった。(Luinはこの作品内の、SNSアプリである)『霊斗さん、アップルパイ、美味しくいただきました。ありがとうございました。』

霊斗「別に気にしなくていい。うまかったならよかったな・・・つと。」

俺は手早く返信をして、自室へと戻る。ちなみに自室には、PCとテレビや、ゲーム機などが一応置いてある。PCとテレビしか基本は使いはしないが、たまにゲームもしたりする。奏と初めて会った時、取ろうとしたCDはここにあるゲームのOSTのCDでもある。だ

が、今日はやる気が起きず、ベッドにそのままダイブする。

霊斗「疲れた・・・まあ、類と司のお陰で、シヨ一の演出は決まってきたし・・・えむと寧々も、色々意見出してくれたし、順調ではあるよな。けど

あの時の司達の反応・・・何だったんだ？」

俺が類の演出の実験に付き合う話をした時、司達は『絶対にダメだ！』と強く言っていた。特にえむと寧々が。

霊斗「何であんな反応したんだ？俺、3人に何か言ったか？司はともかく、えむと寧々は最近、会ったばつかだしな・・・マジで分からん・・・」

あいつらには俺の事、あんま話してねえし・・・類に至ってはあんま関心もしてねえ感じだったし・・・まあ、あの感じがいいんだけどなあ・・・

霊斗「まさか・・・包帯見て危険だと判断された・・・？いや、確かにこれ見たら、なんか怪我してんだと思われても仕方ねえか・・・外しても問題ねえけど・・・」

俺は、鏡の前に立ち、左目と腕に巻いた包帯を解いていく。解き終わった後、鏡に映るのは、左目に大きな傷と、腕には自傷行為によって付いた、無数の傷跡が映し出される。

霊斗「これ見られたら・・・何言われるかわかんねえしな・・・けどまあ・・・司達には話しておいた方がいいか・・・？」

司達にはあんま隠し事したくねえんだよなあ・・・

霊斗「その内話すか・・・ふあ・・・眠い・・・今日はもう・・・寝るか。」

眠さに負けて、俺はもう一度、ベッドに倒れ込んだ後、すぐに眠りについた。

そして、翌日、早めに起き、朝食を済ませた後、えむから渡された衣装に着替えた後、俺はワンドーステージで待機していた。

霊斗「えむから貰った衣装・・・俺にピッタリだったな・・・てか、

あんま目立たない色がいいって言ったはずだが・・・赤は目立つよなあ・・・」

えむから貰った衣装は、主な色は赤、細部の色が黒の服なのだが：いや、確かに、シヨ一の衣装だから、目立つ色になるのはわかってた。その中でも、なるべく目立たない色がいいって言ったはずなんだけどなあ。

いやまあ、かつこいいし、別にいいけどな・・・

(霊斗の衣装は青柳君の衣装である、クラシックコーディネートの黒が赤、黄色が黒になったような衣装だと思ってください。)

その後、軽くダンスの練習と、発声練習をしていると、衣装に着替えたえむが、来た。

えむ「おっはよく☆霊斗君！はやいね〜！」

霊斗「おう。おはよさん、えむ。まあ、軽く運動する為だしな。えむも、軽く準備運動と喉、慣らしとけ。急にやって、怪我とか喉痛めたりするかもだしな。」

えむ「うん！」

霊斗「せっかくだし、一緒に喉慣らししとくか？えむの、好きな歌、一緒に歌ってやる。」

えむ「ほんと!?!じゃあ！ぼうけんのしよがきえました！にしよ〜！
☆」

霊斗「うっし、ならやるか。」

俺達は、司達が来るまで、えむのリクエストした曲を歌う。まあ、合わせるのは、得意だし、なんとかなる。

霊斗「・・・ふい、まあ、こんなもんか。どうだ？えむ、喉、あつたまつたか？」

一曲、歌い終わった後、俺はえむに問い掛けるが、何も返答がない。気になり、視線を向けると、目をキラキラさせながら、何やら興奮したようにしていた。

霊斗「ど、どした？」

えむ「すごいすごい！すごいよ！霊斗君！なんかね！霊斗君と歌っ

たら、心がぽかぽかして、お客さん達の席がね！キラキラしてたんだよ！」

霊斗「お、おう？なんかよくわかんねえけど、よかった・・・なのか？」

えむ「うん！司君達もそう思うよね!？」

霊斗「・・・あ？司達？」

観客席の方を見ると、司、寧々、類達が、俺たちのほうを見ていた。どうやら、俺とえむが歌ってる最中にきていたらしい。

霊斗「おお、司達来てたのかよ。」

司「あ、ああ。来ていたぞ！類と寧々の二人と合流した後、来たんだが・・・霊斗とえむの声が聞こえてな。見に来たら二人で歌っていたということだ。」

類「それにしても、寧々と歌っていた時もそうだったけど、霊斗君は歌が上手だね。寧々とも相性はいいし、えむ君と歌っている時は、落ち着いた声の霊斗君がいるおかげで、聞きやすいし、えむ君との相性もいいみたいだね？」

寧々『二人とも、いい声だったよ・・・？』

3人からもいい評価を貰えたらしい。

えむ「いい声だつて！やったね！」

霊斗「まあ、喉慣らすならこんなもんだろ。んじや、全員揃ったし始めるか。俺達の最初の練習」

司「そうだな！よし！これから、俺達、ワンダーランズ?? ショウタイムの練習を始めるぞ！」

「はーい」 「おう」

そして、俺達の最初の練習が始まった。やる事は、まず主役を務める司のダンスと演技がどのくらいできているのかという実力の把握からスタートするのであった。スターを目指しているだけあって、司の演技とダンスは中々の物で、類や寧々も評価するほどである。そして、今は、一度、小休憩を取っているのだが。

司「ぜえ・・・ぜえ・・・ぜえ・・・」

霊斗「平気か、司？ほれ、水分補給、ちゃんとしとけよ？」

ぶつ通しで演技をしたからか、司がスタミナ切れを起こしている。俺は、スポドリを司に渡した。

司「あ、ああ。ありがとう、霊斗。」

寧々『口先だけかと思っただけど、ダンスも演技もわりと出来るじゃん』

類「うーん、とはいえ、その動きはペガサス王子の戦い方として適切かな？司君は格段にいい動きならなっているけど、だからこそ、物足りなさを感じてしまうよ」

司「むむ・・・類、お前、思っただけ以上にスパルタだな・・・だが、確かに俺も納得がいかんのは事実・・・うーん、何かヒントが欲しいな・・・」

ヒント・・・ね。そんな簡単に見つかったら苦労はしねえわな。

えむ「あつ☆だったたらあそこに行ってみようよーっ！」

類「あそこ？どこかい場所があるのかい？」

えむ「うん！ね？霊斗君！あそこなら、ヒント見つけられるよね！☆」

霊斗「あそこって・・・なるほどな。確かに、あの場所なら、ヒントをくれるかもしれない奴もいるしな。」

司「おい！わかるように説明してくれ！」

霊斗「セカイに行くぞ。untitledを起動させてヒント、聞きに行こうぜ。」

そう。カイトとミクのいた『セカイ』と呼ばれている場所。あそこにいる二人ならいいヒントをもらえるかもしれない。

類「セカイ？霊斗君、そこはどんな場所なんだい？」

霊斗「信じられないと思うが、俺とえむ、そして司のスマホに『untitled』って曲が入っててな？その曲を流すと、初音ミクがいるセカイって場所に行けるんだよ。」

寧々『・・・は？』

司「えむと霊斗のスマホにもあの曲が入ってるのか？ってまさか！？あの変な世界にまた行くつもりなのか!？」

霊斗「ちようどいいだろ？寧々と類の事、二人にも紹介できるし、司

もショーのヒントを貰える。一石二鳥じゃねえか。何が不満なんだ？」

司「た、確かにそうだが・・・！」

霊斗「えむ、いいぞ」

えむ「はい☆えいつ！」ポチッ！

司「あ！おい！やめろーっ！」

えむがスマホを操作し、untitledが流れ始める。その瞬間、またあの時の様な光に飲まれ、俺達はセカイに到着していた。

カイトのヒント

司「あああ……！またここに来てしまったあ………っ！」
寧々『え……!?ここ、何……!?!』

類「いつの間にも移動したんだ？」

……いや、寧々や類はともかく、司……頭を抱えるほど、来るの嫌だったのかよ？

司「おい！えむ！さつさと元の場所に戻るぞ！」

司はえむに帰る様に諭すが、その時だった。

ミク『あれれれ？今日はいつぱい来てる☆わっいっ♪』

えむ「あつ！ミクちゃんだあ！ミクちゃん！遊びに来たよ！」

霊斗「邪魔するぜ？ミク」

類 寧々

『ミク………?』

俺達が会った初音ミクが俺達を出迎えてくれたのだ。

ミク『みんな！セカイによろしくっ☆』

カイト「やあ、また来てくれたんだね司くん、えむちゃん、霊斗くん。今日は新しい友達も連れてきてくれて嬉しいよ」

霊斗「カイト、また来たぜ。新しく入ったメンバーも一緒にな。こつちのロボットはネネロボ。こいつを動かしてるのは草薙寧々って名前だ。んで、こつちは神代類。俺達の劇団の最高の演出家だぜ？」

寧々『よ、よろしく……』

類「霊斗君……そう言ってくれれば僕も嬉しいよ。それよりも、ここはどういう場所なんだい？バーチャルシンガーである彼女達が実現しているという事は、ここはバーチャル空間の中なのかい？」

霊斗「んや、実際の所、俺達もよくわかってねえんだよな。けど、演技のヒントを貰えるとしたら、この2人しかいなくてよ。」

カイト「演技のヒント？」

霊斗「実は、俺達5人でショーをやることになったんだけどな。主役の動きを俺達、全員がいまいちわかんなくてよ。カイト達に演技の

コツとか：何かヒントになりそうなこと教えてくれるかなって思ってたよ。」

カイト「そうだね・・・霊斗くん。ショーの台本とかあるかい？」

霊斗「おう。えーつと・・・これだ。」

俺は自分の台本をカイトに渡す。

カイト「みんな、少し時間をくれるかい？この台本、しつかり読んでおきたいからね」

霊斗「わかった。」

カイトは台本を読み進めていく。俺達は邪魔をしない様に少し離れた場所で、待機している。

類「それにしても、ここは不思議な空間だね。色々と調べがいがありそうだ！演出のヒントが山ほどありそうな場所だからねっ!!」

類は演出のヒントを探す為だといい、離れた場所で、このセカイについて調べている。全て演出のヒントにする為だそう。ネネロボは俺達といるが、待機状態になっているのか、ピクリともしない。ミクも何処かに行ってしまうと俺とえむと司が残っている感じだ。

司「むむむ・・・まさかまたここに来てしまうとは・・・！」

霊斗「まだ言ってるのか？別にいいだろ？あの二人以外に当てはねえし。カイトとミクは俺達より多くのショーをやって経験の差もある。アドバイスもらうなら適任以外の何者でもねえだろ？」

司「いや、確かにそうだが・・・」

司はまだ納得できない表情だ。内心ではわかっているはずなんだろう。どこ、どこか腑に落ちない様だ。

えむ「そういえば、霊斗くん。霊斗くんにもこの曲が入ってたんだよね？いつ入ってたの？」

霊斗「おん？ああ。最初にセカイに来た時、帰ってスマホ見たら入ってたんだよ。んで、一回流してみたら、ここだったわけ。」

まさか、俺の携帯にも入ってるとは思わなかったけどな。すると、台本を読み終わったのか、カイトが台本を閉じ、俺に返してくる。

霊斗「カイト、どうだ？」

カイト「そうだね。台本を見たけどいいショーの内容だよ。それ

で、司くんの役はこの王子なんだよね？」

司「あ、ああ！勇敢で知的！まさに王子の中の王子だ！」

カイト「なるほどね。これを僕ならどう演じるかな・・・そうだ。試しに僕がこの演技を試してみるかい？」

えむ「いいの？やった♪」

霊斗「悪いな。カイト。それなら、俺は類の方に行くわ。戻って来れなくなる事はねえだろうけど一応ついといた方がいいだろ。」

司「そうだな！霊斗！類の方は任せたぞ！」

霊斗「おうよ。そっちこそちゃんとか掴めよ？」

俺は司達から離れて、類を探すために、あたりを見渡す。そんな離れてはいないと思うんだが・・・って、お？あそこにいるのは・・・？類だな。

霊斗「おーい！類！」

類「やあ、霊斗くん。どうしたんだい？」

霊斗「司達が今、カイトからヒントもらってるからよ。一応逸れるとまずいから類のところに来た・・・って、何やってんだ？」

類「いやあ、霊斗くん！実はさつき不思議な生物を捕まえてね！身体は綿でできているんだけど、言語を理解しているんだよ！」

類がそう言っ、捕まえた生物を見せてくる。そこにいたのは。

「ウウ・・・タスケテ・・・」

霊斗「この間見た、ぬいぐるみ？」

類「持ち帰って研究してみようと思うんだ・・・！中身は一体どうなってるのかな？」

類がいつにも増して興奮している。すげえ楽しそうだな。

「ゴ、コワイヨ・・・」

霊斗「いや、置いてけよ。得体の知れないもん持って帰ろうとすんな。」

類「えっ？折角捕まえたのに・・・」

霊斗「類の作ってる物はどれもすげえやつばっかだ。それだけでも充分だよ。もし、何か困ってたり、実験とかしたいなら俺が付き合ってやるからよ。それでいいだろ？」

類「本当かい!？」

類が顔を近づけてくる。いや、近い近い!そんなに嬉しいのかよ?

霊斗「お、おう。友達だしな。」

類「ありがとう!霊斗くん!さあ!今から司くん達の所へ戻ろう!」

そう言つて軽い足取りで走つていく類。機嫌良くなり過ぎじゃね?」

霊斗「・・・意外とわかりやすい性格なのな。あいつ」

そう思いつつ、俺は類の後を追う様に、司達の元に戻ると、カイトが司達に演技の見本を見せていた。しかも、演じてるのは俺達のショーの台本の王子役。司にはこれ以上ない、ヒントになるだろう。ネネロボも動き出していて、司達と一緒にショーを見ていた。

カイト「『そう!魔王を倒す為に!』こんな感じはどうかかな?」

司 えむ

「おおく!」

霊斗「お?ちようど終わったみたいだな?」

寧々「あ、お帰り」

霊斗「おう。司、類を連れて戻ってきたぜ。そっちは如何だ?」

司「ああ!カイトのおかげで、ヒントは掴めた!これで、俺はさらにパワーアップした王子を演じれるぞ!」

霊斗「なら、よかったわ。カイトもありがとな?」

カイト「役に立てたならよかったよ。」

司「よし!帰つて練習の続きをするぞ!」

ミク「えく!もう帰つちやうのく?一緒にショーをやろうよく!」
司は今すぐ帰ろうと *untitled* を止めようとするが、ミクは不満があるのか、俺たちが帰るのを止めようとしている。

司「断る!スターになる為には、これ以上の寄り道はできないんだ!」

ミク「んく?つかさくんは、スターになつてどうするの?」

司「え・・・?ど、どうつて・・・ショーをするんだ!そしたら、たくさんのお客が集まる!」

ミク「でも、ここでショーをしたら、もつと素敵なモノが見つかるよ?。」

えむ 寧々

「もつと素敵なもの・・・?。」

霊斗「なんだそれ?。」

ミク「ひーみつーだよー!。」

どうやら、ミクは教える気はないらしい。

司「む!そう言つて、ショーに無理矢理出すつもりだろう!オレは騙されないからな!。」

カイト「・・・残念だけど、仕方がないね。また困った時はいつでも来て欲しいな。司くん。気が向いたら一緒にショーをやろう。そうすれば、キミはきつと・・・。」

司「え?。」

意味深な言葉を残したカイト。司は聞き返そうとしたが、その瞬間、俺達を光が包み込む。そして、俺達は、ワンダーステージに戻ってきていた。

司「きつと・・・?なんなんだ?・・・まあいいか。」

霊斗「カイトには感謝しないとな。演技のヒントをくれたし、この期待には応えないとな?司?。」

司「あ、ああ!任せろ!スターである俺の進化した演技を見せてやるぞ!。」

霊斗「その調子でな?類も演出と演劇と大変だと思うが、俺も協力するから頼ってくれよ?えむと寧々も一緒に頑張ろうぜ?。」

類「もちろんだよ。演出には他の人の意見も欲しいと思つていたところだからね。」

えむ「うん!みんなで笑顔がいつぱいのショーをするよ♪ね!ネロボちゃん!。」

寧々『え?う、うん・・・』

司「よーし!練習再開だ!。」

司の言葉の後、俺達は改めて練習を再開した。司と類は、演出に合わせた演劇の練習、えむと寧々は歌のレベルを上げる為に練習し、俺

はと言うと。

霊斗「くく♪」

軽く鼻歌を歌いながら、ワンダーステージの客席を修理していた。最初訪れた時から思っていたが、ワンダーステージは昔からあるステージなだけあり、ボロボロだった。これでは折角客が来ても、楽しめるものも楽しめないという、司の指示のもと、俺が客席の修理を任されたのだ。

類に一度、見本を見せてもらった後、それを元にして、次々と修理している。

類「さあ！司くん！このシーンで重要なのは躍動感だよ！肉体を解放するんだ！限界まで足を上げて！」

司「だーっ！体が裂けるーっ！オレの肉体よ！持ち堪えろーっ！！」

寧々『くく♪こんな感じだけど・・・』

えむ「やっぱりネネロボちゃん、歌うの上手だよねく♪」

霊斗「うし、こんなもんか。これで最後・・・っと。意外と大変なもんだな。」

俺は、最後の客席の修理が終わり、体を伸ばす。

司「お！霊斗！客席の修理が終わったのか！」

霊斗「おう。とりあえずな？俺もこういうの一応出来るからよ。自信はねえけどな。けど、類の手本を見て出来たって思ってる。サンキューな。類」

類「これくらいどうって事ないさ。それより、霊斗くん、その客席をショーに連動させて動く様にしたんだけどどうかな？」

霊斗「そうだな・・・雨の演出の時に、軽く水を客席に・・・とかは出来るかも知れねえけどな」

寧々『いや、お客さんがびしょ濡れになるでしょ・・・無理だと思う』

えむ「えく？面白そうなのに・・・」

霊斗「まあ、今回はやめればいいだろ？もっと人気が出た時に、そういう派手な演出をすればいいさ。だろ？」

そんなこんなで、練習をし続けて、日が沈みかけるまでに至った。

司「本日はありがとうございましたー!!」

類「うん。完璧だね。素晴らしい最終リハーサルだったよ。」

司「さすが俺!はーっはっはっは!!」

えむ「リハーサルでもすつごく楽しかったし!本番もすつごくすつごく楽しみだねーっ!」

寧々『・・・うん。』

霊斗「宣伝は着ぐるみの先輩達に頼んで充分に出来たし、お客さんもきつと来てくれるだろ。それに、演出は全部、類の案を採用したんだ。盛り上がらないわけねえだろ?」

そう。司は類の提案した演出を全て採用したのだ。危険は伴うが、このショーを派手にする為に採用したらしい。

類「司くん、改めてありがとう。」

司「類、もう終わった様な言い方は早いぞ!本番はこのメンバーで、練習の1000000000倍のショーを見せるぞ!」

類「ふふ、また根拠のない数字が出たね。だけど・・・そうだね。いいショーにしよう」

司「そうとも!このステージを、俺のスターへの第一歩にするんだ!」

寧々『またそれ?スタースターって、飽きないわけ?』

司「なんともも言え!俺はこの舞台に手応えを感じているんだ!きつとスターに近づけるぞ!な!霊斗!」

霊斗「まあ、このメンバーなら問題ないだろ。最高のショーになるだろうぜ?」

司「そうだろう!そうだろう!はーっはっはっは!!」

えむ「はーっはっはっは!!」

寧々『なんでえむまで笑ってるの?』

霊斗「それに司と同じ笑い方だよ・・・真似してるんだらうけどな。」
高笑いをする司。何故か一緒に笑ってるえむ。その光景を微笑みながら見てる類、ため息をこぼす寧々。なんだかんだでいいメンバーが揃っていると俺は思う。

司「類！寧々！えむ！そして俺の親友！霊斗！みんなよく俺についてきてくれた！明日のショーは必ず素晴らしショーにするぞ！」

寧々『別にあんたについてきたわけじゃないけど……ま、明日はみんなが喜んでくれるといいな。』

えむ「……司くん！霊斗くん！」

司「ん？」 霊斗「あ？」

えむ「私の方こそ！ありがとう！」

司「なんだ？急に真面目な顔して？」

霊斗「司はともかく、俺、なんかしたか？」

えむ「私、このステージにショーを見にきてくれる人が、みーんなニコニコ笑顔になってくれることが夢だったの！」

霊斗「そういや、えむは最初からこのステージにこだわってたよな？」

えむ「司ちゃんと霊斗くんのおかげで、明日きつと、あたしの夢が叶うから……だから！ありがとう！」

司「……そうか。」

霊斗「けどな？えむ、一つ間違ってることがあるぜ？なあ？司？」

司「ああ！そうだな！」

えむ「？」

霊斗「えむ、俺と司だけじゃない。寧々と類、そしてえむ自身。ここにいる5人とワンダーステージに関連してる全員で。」

えむ、お前の願いを叶えるのさ。な？二人とも？
えむ「……っ！」
寧々『……まあ、みんな喜んでくれるなら、自然と笑顔になるだろうし、えむのお願いも叶うんじゃない？』

類「そうだね。僕も僕の演出が出るショーでお客さんが全員喜んでくれる事が、好きだからね。笑顔になってもらうのは当たり前のことなのさ」

霊斗「な？」

えむ「・・・うんっ!!」ポロポロ

・・・心にも思つてない言葉で何言つてんだらうな。俺。まあ、えむが喜んでくれてるならそれでいいか。

類「それじゃあ、今日はこれで解散かな？明日は早いからね？」

司「ああ。そうだな！それでは明日、この場所だな！」

えむ「うんっ！ばいばーいっ！」

そう言つて、別れる俺達。今日は司は少し用事があるらしく、類と一緒に帰ろうと思つたが。

霊斗「類、一緒にかえらねえか？」

類「霊斗くん：嬉しいお誘いだけど、僕は少しここに残るよ。ネロボの充電をしないといけないからね。」

霊斗「そうなのか・・・まあ、ステージの途中で動かなくなりましてつてのはやべえからな。わかつた。あ、それとよ・・・」

類「？どうしたんだい？」

霊斗「寧々から聞いてるかも知れないけどよ。寧々のやつ。神山高校のやつに絡まれてたことがあつてよ。そいつ、また寧々に絡みに来ないとは限らないからよ。気にかけてやってくれねえか？」

類「寧々が・・・？わかつたよ。僕の方でも気にかけておくよ」

霊斗「頼むわ。んじゃ、明日な？類」

類「ああ。明日、頑張ろう。霊斗くん」

霊斗「おうよ。」

俺は類と別れ、一人で帰路につく。

霊斗「いよいよ、明日か・・・まあ、変な失敗とかなければ成功は当たり前・・・なんだろうが寧々に絡んでたあのゴミ・・・気になるんだよな・・・」

あれで諦めるとも思えねえし・・・下手すれば、あんな奴がまだいるつて考えると・・・ヤベエな。

霊斗「一応、頭の片隅に入れておくか・・・今は、明日の事を考えるか。成功すればいいが・・・」

多少の不安を抱えながらも、俺は明日の演劇の事に集中することを決めて、家に帰り、眠りについた。

そして、それぞれの決意と思いが交わる運命の演劇当日を迎えたのだった。

最悪の結末。

運命の演劇当日を迎えた。いつも通りの食事を終えて、ワンダーステージに向かう。特に天気曇る訳もなく、むしろ快晴だった。

霊斗「今日は快晴か・・・演劇やるにはちょうど良いよな」

ワンダーステージに到着し、衣装に着替え、みんなを待つ。すると、やはりとすべきか、最初に現れたのはえむと・・・司？はやくね？

霊斗「おはようさん、2人とも。やけに早いな？」

司「霊斗、お前には言われたくないぞ！今日に限らず、練習の日にも必ず俺達より前に来ているだろう！」

霊斗「そりやそうだろ？機材の調整とか任されてるしな。まあ、類の奴は流石に扱えないけどな。スピーカーとかマイクとか、照明とか、着ぐるみの人と一緒にやってたんだよ。」

最初にあつたあの着ぐるみの人には、色々と世話になってるんだよな。こつそりと。照明の位置とか、どれがどのスイッチだとか。

霊斗「それより、司、えむ、ステージ前の客席、見ろよ」

司 えむ「??」

司とえむは、ステージの幕を少し捲る。そこで目にしたのは、客席が全て埋まり、立ちながらもこのステージを見ようと集まったお客さんの姿だった。

霊斗「宣伝のおかげなのか、満員御礼だな。」

司「おお！俺達のショーを見にこれだけのお客さんが・・・!!」

えむ「わあく♪お客さんいくつぱい！」

司とえむが感動していると、類と寧々も合流する。

霊斗「おはようさん、類、寧々。」

類「おはよう、霊斗くん」

寧々『お、おはよう・・・』

霊斗「類、さっそくだけだよ。俺の方で機材チェックは終わらした。類が作った方のやつの子エック、頼めるか？」

類「わかったよ。」

類は俺がしなかった分の機材チェックをしだす。どう頑張っても

類が作った奴はどうにも出来ないんだよな。

司「おお！類達も来ていたのか！」

霊斗「いや、気づくの遅いだろ。どんだけ感動してんだよ。こっちの機材チェックは類の分で終わりだ。他に以上は無し。オールOKだ。」

司「流石霊斗だな！・・・それはそれとして、ロボが大人しいな？」

司の指摘に俺とえむは視線を寧々：いや、ネネロボに向ける。たしかに今日は司に対しての毒舌も無かった。

霊斗「寧々、もしかして緊張してるか？」

寧々『そ、そんなこと・・・無い・・・と思う』

司「大丈夫だ！客は全員、最高に目立つ俺を見る！妙なロボットなぞ誰も注目しないだろう！緊張するだけ損だぞ!!ハッハッハッ！」

高笑いしながら、俺たちから離れていく司。ほんとはあいつには緊張の2文字は無いのかねえ。

類「司くんなりの激励・・・かな？霊斗くん？」

霊斗「まあ、言い方はあれだけどな・・・」

寧々『あんなの、どう見ても天然で言ってるでしょ・・・』

霊斗「けど、司の言い分も一理ある。緊張をするなっつのは無理あるけど、楽しむ事も大事だと思う。だから・・・まあ、適度に緊張して、適度に楽しむ。これに限る・・・司とえむは例外として」

類「二人には緊張の2文字はないみたいだからね」

霊斗「まあ、俺達がサポートするからな？寧々も楽しんでな」

寧々『・・・うん』

えむ「じゃあみんな、今日もやろう！」

霊斗「やるのか？あれ。」

寧々『・・・みたい』

類「そうだね。」

司を除く俺達は、えむの周りに集まる。そして。

えむ「せーの・・・みんながんばろ、わんだほ〜いっ☆」

霊斗 寧々 類

『わんだほ〜い！』

練習の時からそうだったが、えむがこの掛け声をあげ、俺達がそれに応える。これを見ると、気合いが入る・・・らしい。

司「だーっ！逆に気が抜けるわ！」

霊斗「まあ、良いんじゃないやね？これもワンダーランズ??ショウタイムの特徴だろ？」

司「・・・はあ、仕方ないか。」

霊斗「んじゃ、最後は司に締めてもらいますか。頼むぜ？」

司「え!?あ、ああ!!ワンダーランズ??ショウタイム、公演スタートだっ!!」

そして、俺達の初演劇がスタートした。練習の成果が発揮されたのか、順調に事が進んでいく。カイトのヒントのおかげで、司の演技は格段にうまくなっている。寧々やえむの歌声、類の演出などもあり、演劇は盛り上がっていく。

司『悪の魔王を倒すため♪私は旅立つのだから♪』

司『おや?あれはロビット族のネ・ネーではないか!もしや力を貸してくれるのか?』

寧々『オウジ、アナタがモンスターをタオシテクレタので、ムラがハイワにナリマシタ。コレはオレイの、ゲンキにナル、ハイパードリンクデス』

司『ほほう、ドロっとしていてなかなか体に効きそうだ。んぐ、んぐ・・・ぐええく!なんだこの味は!あ、そうか。ロビット族は油しか飲まないんだった・・・』

その瞬間、客席から笑い声が出る。この一連の流れは好評で、笑顔が溢れる客席がその場にはあった。

えむ「類くん!霊斗くん!みんな笑ってるよ!」

類「いいね。順調な滑り出しだよ」

霊斗「んだな。お、えむ、そろそろ出番だぞ。ドラゴン役の先輩も準備お願いしまーす」

次の場面では、えむと着ぐるみの人達が、勇者役の司を魔王の配下役と、ドラゴンの着ぐるみを着て、動いてだけなのだが、ドラゴンは着ぐるみの人達の連携が取れているため、本当の生き物のように動いている。

類「獅子舞の要領で作った簡単なものだったけど、連携が取れている彼らがやると、生き物みたいだね」

霊斗「流石だよな。こういう事は、あの人たちに任せるに限る。」

類「よしよし。良い調子だね。この後は……」

霊斗「俺と寧々のデュオパート……か。」

この後は、本来は寧々のソロのはずだったが、急遽変更して、ロビツト族の友人として俺も出る事になってしまった。裏方だけのはずだったが……まあ、しようがねえか。

類「霊斗くん、寧々との二人のパート……楽しみにしてるよ」

霊斗「ま、頼まれたからには全力だな。行ってくるさ。寧々、頑張ろうな」

寧々『う、うん』

そして、物語の中盤。勇者ペガサスがドラゴンの弱点である歌で眠りにつくという弱点を見抜き、ネ・ネーと俺の役が眠りにつかせるというものだが。

司『そうか！あのドラゴンは、歌で眠りにつくのか！何か、歌を歌つて……』

寧々『ココは、ワタシにマカセテクダサイ。ウタを、ウタイマシヨウ』

司『ネ・ネー！だが、君一人だけでは……！』

寧々『ダイジョウブデス。ココロゾヨイ味方がイマス』

司『味方……？』

『たあああーっ!!』

俺は、ドラゴンに当たらないように、アクロバットを駆使し、蹴りを入れる振りをする。その動きに合わせて、先輩方も、攻撃にあたり怯む振りをしてくれる。

司『き、君は……？』

霊斗『俺はロビット族の戦士型、リ・ユー。勇者様、ネ・ネーから話は聞いております。ここは、俺達に任せて魔王を倒してください。』ちなみに、演劇に合うように、顔はロボットで体に、パーツをつけたスーツで俺は、演劇に出ている。類には感謝しないとな。

霊斗『ネ・ネー。護衛します。あなたは歌に集中を』

寧々『ハイ。くくく♪』

「わあー綺麗な歌ー!!」「戦ってる人も頑張れー!」

どうやら好評らしい。

司『良いぞ!ドラゴンがうとうとしている!』

霊斗『このまま行けば……!』

だが、その瞬間だった。

寧々『くくく♪……!』

突如として、ネネロボから発せられていた歌声が消えた。その出来事に、俺は少し驚いたが。

霊斗(なんだ?ネネロボが止まった……?電池切れか?)

司「な……!」

やはりと言うべきか、司は驚愕の表情をしている。チラツと見たが、類やえむも驚いているようだ。という事は、この状況は想定外だったらしい。

「あれー?」「どうしたのかしら?」

突然止まってしまった寧々の歌。進まない演劇。時間だけが過ぎていき、観客達も異変に気付いたのかざわついている。

霊斗(まずいな……観客もこの事に感づいてるな。とりあえず……)

霊斗『ネ・ネー!あなたが眠ってしまったてどうするのですか!』

司「!?!」

霊斗『見てください!もう少してドラゴンが眠りそうではないですか!』

司(霊斗……!?!そんなセリフは脚本には……!?!つ!!そうか!)

司『そうだぞー!ネ・ネー!もう少しだぞー!よし!みんな!勇者とり。』

ユーと一緒にネ・ネーを応援しようじゃないか!!』

俺達ができる事はステージ上での時間稼ぎ。それしか今俺達には

出来ることがない。

司（時間を稼ぐ・・・！俺と霊斗の二人で・・・寧々、類、頼む・・・！なんとかステージを続けられるように・・・！）

「ネ・ネー！頑張れー！」

観客も乗ってくれて必死に声援を送ってくれている。だがそれも、ただの時間稼ぎだ。どれだけ持つかわかったものじゃない。

さて、どうするか・・・

類 side

類「ネネロボが動かなくなった・・・!?充電切れ？いや、そんなはずは・・・！」

僕は今この状況に困惑している。昨日、確かにネネロボは充電をしていたはず。こんな事起こるはずがなかった。

類「いや、それよりもどうやってネネロボを動かせばいいんだ・・・!?」

『ネ・ネー！あなたが眠ってしまったてどうするのですか！』

今、ステージ上では霊斗くん達が、必死に場を繋いでくれている。ネネロボが動かなくなった事を悟られないようにしてくれているんだ。

類「ここから充電・・・いや、あまりにも不自然だ・・・どうすれば・・・！」

僕は必死に思考する。どうすれば最善なのかを・・・！

類 side off

霊斗 side

「がんばれー！がんばれー！」

俺達は観客と応援する事で、時間を稼いでいると、

えむ『うわあ〜！お、応援がすごくてドラゴンさんがびっくりしちゃってるよ〜！』

えむの突然のアドリブが出た。だが、それはナイスアドリブだ。こ

うする事で、歌が無くても、ドラゴンを倒すことができる。という流れができたのだ。

司 霊斗

(ナイスだ……！えむ……！)

司『よーし！みんなの応援のおかげで、ドラゴンが怯んでいるぞ！これなら倒す事ができる！リ・ユー！一緒にドラゴンを倒すぞ！』

霊斗『わかりました！勇者様！俺達の力を合わせましょう！』

俺達はその流れで、ドラゴンを倒す演技をしようとするが、動かなくなつたネネロボに司がぶつかつてしまう。

司「なっ……！ぐええ……！」

霊斗『……っ！』

その弾みにネネロボの下敷きになつてしまう司。その出来事に俺は立ち止まつてしまう。

えむ「わわわーっ!? た、助けなくちゃ！みんなー！司くんを助けて！」

司「ま、まだだ……っ！俺はまだ……戦えるぞ……！まだ……！ドラゴンを倒していない……っ！子供達の応援を受けた今のオレは……ドラゴンにも負けない……っ！」

類「司くん……残念だけど、ここまでだ……」

俺は類の方を見ると、首を横に振る類の姿が……仕方ない。こうなつちまつたら、もうどうしようもない……俺は類に頷き返す。

類『こうして、ロビット族との共闘と子供達の応援を受けた勇者は魔法のペットであるドラゴンと仲良くなつたのでした。しかし、王子の旅はまだ始まつたばかり。新たな仲間にも、果てしない旅路。王子が魔王を倒すまで、旅は続いていくのでした……おしまい』

類のセリフによつて、俺達のステージは終了した。

「えーっ？もう終わつちやつたのー？つまんなーい!!」

「最初は良かったけど、急につまらなくなつたよなあ」

次々に発せられるのは厳しい評価。急なアクセシビリティではあつたが、俺ではこの評価も仕方ないだろう。だが、司だけは、拳を強く握りしめ、下唇を噛んでいた。そして、観客が終わった後、俺達はステー

ジ上に乗った。そこにはネネロボの姿はなく、あの時の少女……草薙寧々がそこに立っていた。

司「お前が……あのロボットを操作していた寧々か。」

寧々「……」

えむ「寧々ちゃん、あんまりしょぼりしないで……ね?」

重苦しい雰囲気の中、俺と類はネネロボを整備している。

霊斗「……やっぱり、ネネロボが動かなくなった原因は……」

類「……うん。充電切れだね。今、確認したよ。これで問題なく動くはずだ。」

司「……っ!充電を忘れただなんて……、そんな単純な事で、俺達のシヨールは……っ!!」

司は悔しそうに言葉を紡ぐ……当たり前のことだろう。司はこのシヨールを人一倍、意気込んでいた。それがこんな結果で終わる。納得がいくはずもない。

寧々「ごめん、なさい……」

司「謝つてもどうにもならん!」

霊斗「司、寧々も悪気があったわけじゃねえ。多分だが、俺達がいなくなつた後も練習してたんだ。充電が切れる寸前まで。それに、これは俺達の原因でもある」

司「何?」

霊斗「ネネロボの管理は確かに寧々と類の担当のはずだ。だが、俺達だって任せつきりだった場面もある。悪いのは寧々だけじゃない。だから、次は必ず成功させる。それで良いだろ?」

司「……次?次だ?!じゃあ今日のシヨールを楽しみにしてくれていた客はどうなる!?!」

司は俺の胸ぐらを掴んで、壁に叩きつける……ぶつちやけすごく痛い。だが、今の司の気持ちに比べたら、なんて事はない。

えむ「っ、司くん!喧嘩は駄目だよっ!」

司「シヨールは毎日毎日変わる!その時の一回一回が勝負だ!だからオレ達はいっだって成功し続けなきゃならない!……ここにいる全員が、今日、このシヨールを成功させたかつたんだらう!?!なあ!そうじゃない

のか!？」

類「……」

寧々「全部……私のせいだ……!わたしが……私がロボットなんて使わなくても……人前に立ててれば……!」

類「……寧々」

えむ「寧々ちゃん……」

……全部の責任が自分にある……寧々はそう思ったんだろうな。
司「……ああ。そうだな!その通りだ!」

そして、司の怒りの矛先が寧々に向けられた。

司「そもそも、ずっとこここそ隠れて、ロボットなんかで話している時点でおかしかったんだ!人見知り?人前に出られない!?ふざけるな!!客と向き合わないで、最高のショーができるわけないだろうが!!」

靈斗「おい、やめろ。司。寧々だって、頑張ったんだよ。それ以上、責めんな」

寧々「……なさい……!ごめんなさい……!!」

寧々は涙をこぼしながら、駆け出していった。この場から逃げるように。

類「寧々!」 えむ「寧々ちゃん!」 司「……」

靈斗「……言い過ぎだろ。司。お前の言う事は尤もだ。けどな、司、お前は肝心な事を忘れてるぞ」

司「……?」

靈斗「お前は……一人で、最高のショーを作るつもりかよ?」

司「……っ!」

靈斗「同じ気持ちのやつが集まってやれば、ショーはどこまでも面白くなるはずなんだ。けどな、それを司、お前自身がそれを捨てようとして、なんかあるのか?がっかりだぜ。司。お前のショーに対する想いはそんなもんだったわけか?」

……追い詰めてんのは俺も同じだよな。だけど、こればかりな言っ
といた方がいい。司のためにも。

司「っ!違う!オレはずっと、このショーを最高のショーにするた

めに、本気で頑張ってきた！今回だけじゃない！いつか、スターになるために、オレはずっと……！」

霊斗「……ああ。そうか。そう言う事か。カイトやミクが言っていた意味が、わかったような気がする。」

司「何……？霊斗、それはどう言う意味だ……？」

霊斗「司、お前……自分がスターになりさえすればそれでいいのか？」

司「何だと……？」

類「そう言う事……か。司くん、君はショーをスターになるための手段としか考えていないんだね。それならもう、僕はここには来ないよ。」

司「なっ……!？」

類「それと、君は絶対スターにはなれない。」

司「っ！ど、どう言う意味だ！俺がスターになれないだど!？」

そう言った後、類は立ち去って行った。

えむ「類くん……！」

霊斗「……どうする？司、お前も今日は帰るのか？」

司「……っ」

俺は司に聞くが、司は何も答えず、ワンダーステージから立ち去って行った。

えむ「司くん！」

霊斗「……最悪のスタートだな。1回目からボロボロ……って、類のやつ、ネネロボを置いてったのかよ……」

えむ「……ねえ、霊斗くん。」

霊斗「なんだ？」

えむ「みんなの笑顔……なくなっちゃった……どうすればいいのかな……？」

霊斗「俺にもわかんねえよ……けど、俺は自分にできる事をやる。なあ、えむ、少し頼みがあるんだが……」

えむ「……？」

司 side

「クソツ……！なんでこんな……！俺はただショーを……っ！」
たった一人の夜道。いつもは俺の親友が隣にいてくれた。俺の夢を笑わずに、肯定してくれた一人の親友。霊斗は隣にはいない。今の俺では、霊斗の隣には立てない。そう思ってしまったんだ。

と、その時、ポケットが微かに光った。

司「……？今、何かが光って……スマホか？『untitled』……？どうして今……」

俺はすぐさま閉じようとしたが……あの時カイトが言っていた言葉が脳裏に浮かぶ。

「また困った時が有れば、いつでもきて欲しいな」

そして俺は、閉じようとしていた手を動かし、untitledを再生していた。

セカイに来たのはいいが今はやけに静かだった。ミクやカイトの姿もない。

司「……静かだな……誰もいないのか？」

『……グス……』

司「……泣き声……？こっちか……？」

俺は泣き声の聞こえた方へ足を運ぶ。すると、そこにいたのは。

「ウエーン……」

司「あの時のぬいぐるみ……？お、おい、どうした？何かあったのか？」

って、ぬいぐるみ相手に俺は一体何を聞いて……」

「ウ、ウウ……ビエー！」

司「あー、泣き止め泣き止め……そうだ！見るがいい！俺の華麗なダンスを！」

俺は、軽くステップを取り、踊る。どうだ！このダンスを見れば、こいつも泣き止んで……

「ビエー！！」

司「こ、こいつ……！余計に泣くとは……！もうこんなもの放つて……!!いや、もしかするとあれならいけるか……？」

「ウエーン!!」

司「ええい！やるしかないか！わわ・・・わんだほくい！ここはみんな笑顔のわんだーすてーじだぞっ♪」

「ビエ・・・？」

司「こ、今度は一緒にやるぞ？みんなで・・・わんだほくい☆」

「パンダホーイ？」

司「惜しいぞ！ば、じゃなくて、わ！両手をこう、わわーっと広げるんだ！」

「ワンダホーイ！」

司「ハツハツハツ！いいぞいいぞ！わんだほいできたから、王子の仲間にしてやろう！」

「オウジ？」

司「そうとも！そしてお前は王子である俺の仲間だ！」

「・・・！ナカマ！ソレジャア、オウジサマ！イツシヨに、ボウケンシヨウ！」

司「冒険・・・？わっ！引つ張るな引つ張るな！」

その後、俺はぬいぐるみに引つ張られながらも冒険を体験した。船に乗り、荒波を越え、強いモンスターが現れ、それを倒し、さまざまな冒険をした。どこか懐かしい冒険だ。

司「なんだか懐かしい気分だな・・・」

「ワタシモダヨ！ツカサクン！」

司「・・・？お前、足に何か書いてあるぞ？さ・・・き・・・さき？そういえば、昔、咲希はうさぎのぬいぐるみを持ってたような・・・まさか、お前は咲希のぬいぐるみ・・・なのか？いや、それだけじゃない・・・！ここにあるもの全ては・・・俺の知っているものばかりだ・・・」

「うん♪ここは司くんの想いで出来たセカイだからね！」

声の聞こえた方へ顔を向けると、そこにはミクとカイトがいた。

司「ミク、カイト！もしかしてずっと見ていたのか？」

カイト「うん。とてもキラキラしていたよ。あれこそまさにスターだよね」

司「スター？あんな、ただの遊びが？」

ミク「そうだよ？だって、泣いてた子が、あくんなに笑ってくれたんだよ？」

司「・・・笑って・・・あ・・・」

その時、俺は思い出したんだ。咲希が病院に入院してた時、咲希は幼馴染の子達と遊びたいと曇った表情をしていた時、俺があの時みたシヨ一の真似事をしたんだ。ただ咲希を笑わせたかったから。

司「そうだ：オレはただ、咲希のことを笑わせたかったんだ：あの日先と一緒に見た見たシヨ一の、スターのように。スターになりたいと思っただのも・・・俺も、咲希も、最高の笑顔をもらったからだ：！」

司「それなのに俺は：スターになる事をこだわって：俺は：」

『みんな、喜んでくれるといいな』

『一緒にみんなが笑顔になれるシヨ一を作ろう、天馬くん』

『あたし、このステージにシヨ一を見に来てくれる人が、みーんなニコニコ笑顔になってくれる事が夢だったの』

『ここにいる5人とワンダーステージに関連してる全員で、えむの願いを叶えるのさ』

司「俺よりも：あいつらの方が、よっぽどスターじゃないか：！」

カイト「司くん、そんな事はないよ」

司「・・・え？」

ミク「うん！きつきの司くん、とつてもキラキラしてた☆きつと、大切な事を思い出したからだね☆だからきつとみんなの事を笑顔にできるよ☆」

司「あいつらを・・・笑顔に・・・」

カイト「きつとできるよ。だって君は、みんなに笑顔をあげる未来のスターなんだろう？」

司「・・・ははっ！ああ、そうさ。その通りさ！ありがとう！二人とも！」

俺は、二人には感謝しないといけない。俺がスターを目指す理由を

思い出したさせてくれた二人には。よし！そうと決まれば、明日、もう一度、ワンダーステージに行こう！そして・・・みんなに謝らなければ！！

心機一転

司 side

翌日、俺はもう一度、ワンダーステージを訪れた。いつもはえむ達がいたから騒がしかったが、今はとても静かだ。当たり前のことだろうが。

司「やっぱり、誰も居ないか。当然だよな・・・」

俺が悪い。それはもうわかっている。全員に会ったら誠心誠意謝罪しよう。そう思ってた時だった。

「おっ・ようやく来たか？待ち侘びてたぜ？未来のスター」

いつもと同じ、あいつがステージの準備をしていた。その時、俺は驚愕の表情を浮かべていたはずだった。だが、俺の頬に流れる水。俺は涙を流していた。俺の親友がステージ上にいたのだから。

司「霊斗・・・っ！」

霊斗「やっぱ、司は来るよな。お前がスターになるの、諦めるわけないもんな。誰も来ないかと思っただぜ・・・その様子なら、大丈夫そうだな？気づいたんだろ？自分がなんでスターを目指してたとか」

司「・・・っ・・・ああ！俺は・・・お客さん全員と、一緒にショーをしてくれるお前達を！全員を笑顔にするスターになる！それを目指したい！だから、霊斗・・・すまなかった!!そして、もう一度・・・俺とショーをしてくれないか！」

俺は、頭を下げ、霊斗に謝罪し、もう一度、頼み込む。正直、断られるだろうと思っている。だが、俺には謝罪をすることしかできない。誠心誠意謝るしか方法はなかった。すると、霊斗は俺に向かって。

霊斗「ていつ」ビシッ！ 手刀を頭に向かって放った。

司「いたっ！」

霊斗「それは俺じゃなくて、寧々や類、えむにやれっの。つか、俺がここにいる時点で答えなんて出てるに決まってるんだろ？全員でもう一回、最高のショーをやるからここにいるんだろ。その為に、機材チェックとかしてんだからよ」

司「靈斗・・・っ!!ありがとう・・・!!ありがとう・・・!!」

靈斗「気にすんなよ。親友だろうが。俺がお前を信じないでどうすんだよ?」

・・・本当に俺は・・・最高の親友を持ったみたいだな。

靈斗「それならとっと探そうぜ。類はその辺にいるかもしれない。寧々は流石にわかんないけどな。類が見つかれば、わかるかもな。ほら!行くぞ、司」

司「ああ!!」

靈斗は許してくれたが・・・寧々や類はそう簡単にはいかないだろう。そんな事は当たり前だ。だが、俺はもう一度、ワンダーランズ?? ショウタイムのメンバーでショーをしたい。だから、俺は何度でも謝る!諦めるものか!

司 side end

靈斗 side

俺と司は、フエニックスワンダーランド内を駆け回った。えむ達を探しながらアトラクションがある場所、売店、全てを駆け巡り、夕方になった時だった。

靈斗「ん?おい、司。観覧車の前にいるの、えむじゃないか?」

司「何!?本当か!あ、ああ。確かにえむだ!間違いない!!」

靈斗「だったら、ほら。サクツと謝ってこいよ。俺がいてもなんもないからな。」

司「ああ。わかっている!じゃあ、待っていてくれ!」

司は駆け出し、えむに話し掛けている。すると、司はえむに連れられて、観覧車に乗ってしまった。

靈斗「こりや、時間かかるな。仕方ねえ。俺の方で、寧々と類を探すか。あと探してない場所は・・・っと。意外と灯台下暗しかもれないな。ワンダーステージに戻ってみるか。」

俺はその場から離れて、ワンダーステージに戻ってきた。また太陽が沈んでいき、ワンダーステージは暗く見づらい。

霊斗「つつても、これだけ暗いと探すのも大変だしな・・・探索は中止だな。それなら・・・司達が戻ってくるまで時間がある。ステージの手入れ、再開しますか。くくく♪」

俺は、ワンダーステージの手入れを始める。客席の具合や、ステージ上を掃除したり、照明や、機材の点検を始め、やはりと言うべきか、あるものに目がいってしまふ。

霊斗「そういえば・・・類が来なくなってから、お前も手入れされてないんだよな・・・」

ネネロボ。類がない為、こいつの手入れの仕方が分からずに、手をつけられなかった。そのせいか、少し埃がついてしまっている。

霊斗「・・・よし。思い切ってやってみるか。お前の手入れ。つつても、軽く拭いて綺麗にするだけなんだけどな・・・お前の整備の仕方、類に教わっておけばよかったなあ」

ネネロボを軽くタオルで拭いていく。

霊斗「お前は頑張ってくれたよな。ショーはあんな結果になっちゃったけど・・・寧々の頑張りも司達はわかってくれたさ。だから、今、司は必死に駆け回ってるんだ。全員に謝りたいって。」

霊斗「だから、もう一度、お前の出番がある。寧々も類も絶対にもう一度、ここに戻ってくるはずだ。だから、それまで待っていてくれ。ネネロボ。それまでは・・・役不足だろうけどよ。俺が手入れしておくからな」

ネネロボの細部まで綺麗に拭いていく。意外とこういうところに埃も溜まるし、どうせならピカピカにしたいなつと・・・

霊斗「うっし、こんなもんか。綺麗になったな。ネネロボ」

キラキラと光るネネロボ。うん。心なしか表情も良くなった気がする・・・多分。その時だった。

ガタンツ！と大きな音が鳴った。

霊斗「・・・？何だ？誰かいるのか？」

司達はまだ、観覧車のはず・・・他に人なんて・・・そう思い、視線を向けた先には、ここにはいないはずの彼女がいた。

「・・・・・・・・」

霊斗「・・・は？寧々？」

なんで寧々がここににいる？いや、今はそんな事どうでもいい。会話を繋げなければ・・・！

霊斗「どうした？ネネロボ、取りに来たのか？」

寧々「う、うん・・・」

霊斗「そうか。それはわかるが・・・忍び込んでくるとは思わなかったぞ。まあ、えむや司達に会いたくないってのはわかるけどな。あ、それは俺も同じ事か。」

寧々「そ、そんな事、ない・・・その・・・霊斗は庇ってくれたから・・・」

霊斗「だってよ？実際、寧々は悪くねえだろ？夜遅くまで練習するって事は、それだけあの時のショーを成功させようとしてくれてたって事だろ？それなら俺は文句ねえよ。」

寧々「・・・ありがとう、霊斗」

・・・こんな事で感謝されるとは・・・

霊斗「それより、どうだ？」

寧々「え？」

霊斗「初めてだろ？ネネロボじゃなくて、寧々としてワンダーステージに立つの。」

寧々「あ・・・」

霊斗「広いだろ？ネネロボのモニターからでもわかるだろうけど、こっだけ広いステージで、ネネロボは・・・いや、草薙寧々って女の子は、ここに来てた、沢山のお客さんを笑顔にしてたんだぜ？」

寧々「・・・っ・・・」

霊斗「お客さんだけじゃない。一緒にやってたえむや類、司だって笑顔にしてたんだ。それだけ楽しいショーをあの時、全員がしてたんだ。それはすごい事だと思う。だから、寧々。多分だけどな。俺も・・・寧々や類とショーをやっけて、楽しかったんだ。」

・・・本当は、何も思っていないし、感じることもできないやつだけどな。

霊斗「だから、寧々。無理強いするつもりはないし、嫌なら嫌だつて言ってくれていい・・・もう一回、俺達とショーを・・・やってくれないか？もう一回だけ、ここに来てくれたお客さんと、俺達全員が、笑っていられる最高のショーを・・・やってくれないか？」

俺は寧々に向かって頭を下げた。俺はこういう時どうすればいいかなんて分からない。だから、真正面から行くしか、俺は知らない。

寧々「わ、わたし・・・わたし・・・！わたしも、ショーを、やりたいっ」

霊斗「寧々・・・」

寧々「わたし、昔からショーに憧れてて・・・中学の時に、大きな劇団の、ジュニアクラスに入ってたの・・・そこで練習して・・・主役になれて、けど、その公演で・・・セリフが頭から飛んじゃって・・・みんな必死に練習してきたのに、わたしのせいで、台無しにしちゃって・・・それから、人の前に立つと、震えて、声が出せなくなってる」

霊斗「そうだったのか・・・けど、ショーをやりたい気持ちがあつて、その時に類がネネロボを持ってきてくれた・・・って感じか。」

寧々「うん・・・ロボット越しでも、ショーは、やっぱり楽しくて・・・司に言われた事もわかってる・・・！お客さんと向き合わないで、最高のショーは出来ないって・・・でも・・・わたし・・・っ！」

涙を流しながらでも語ってくれた寧々。必死に悩んでネネロボを介してショーに出た寧々。

霊斗「失敗が怖い・・・か？」

寧々「・・・うん。怖い・・・！また、わたしのせいで台無しにするんじゃないかって・・・！」

・・・こんな時はどうすればいいんだよ。隣で悩んでる奴がいて、苦しんでる奴がいて・・・昔の俺みたいな、苦しみ方は違うが似たような奴がいて・・・それなら、俺みたいにならなければいい。頼れる奴がいなかった俺より・・・寧々は頼れる奴らがいるしな。

俺は、寧々の頭に手を置き、優しく撫でる。

寧々「え・・・？」

靈斗「そりや怖いよな。挑戦して、自分のせいで失敗する。怖くないわけない。けどな、挑戦に失敗なんてつきものだ。失敗を繰り返して、ゆっくりでもいいから進んで、それで成功するまでやり続ける。そんな勇気を持つてる奴はなかないない。」

靈斗「寧々は自分をどう思ってるか分からん。だけどな。俺は挑戦する勇気を持つ寧々の事、すげえと思ってるんだぜ？」

寧々「・・・靈斗・・・」

靈斗「それでも挫けそうになったら、怖くて立ち止まりそうになったら・・・少しでもいいから頼ってくれよ。一人で悩む事ないだろ？お前は一人じゃないんだから」

寧々「・・・靈斗・・・っ！」

靈斗「だからよ、寧々。何回失敗してもいい。怖くてもいい。その時は・・・」

俺が支えてやるよ。お前の事。な？」

その言葉を聞いたあと、彼女の目から涙が溢れ出た。俺の胸に飛び込み、嗚咽をこぼしながら、彼女は泣いた。俺は、彼女が泣き止むまで、優しく抱きしめ、彼女の頭を撫で続けた。

寧々が泣き止んだ後、俺と寧々は司達の元へ向かった。どうやら二人とも話は終わったらしく、観覧車の前で合流した。

靈斗「話終わったみたいだな。二人とも」

司「ああ。えむには許してもらった！もう一度ショーをやることも言ってくれた！」

えむ「靈斗くんもきてたんだ！」

司「それで、靈斗、俺達が観覧車で話してる間、何をしてたんだ？」

靈斗「ワンダーステージの整備と・・・ほら。話すって決めたんだろ？」

司 えむ

「??」

俺は、すつと、横に移動すると、俺の後ろに隠れていた寧々が現れる。

司「寧々!？」 えむ「寧々ちゃん!!」

靈斗「整備してたら、ネネロボを取りに来てたんだよ。んで、寧々と話してたってわけだ。ほれ、二人に伝えたい事、あるんだろ？」

寧々「う、うん．．．ふ、二人とも、あ、あの時は、逃げちゃってごめんなさい．．．!」

司「いや、あれは俺が悪かったんだ。あの時、俺はシヨーがうまくできず、悔しかった。だけど、一番悔しかったのは、寧々だよな」

寧々「そ、それともう一つ．．．わ、わたしも、シヨーが、やりた．．．っ!だから．．．も、もう一回．．．シヨーを、一緒にやっても．．．いい、かな？」

司「．．．!ああ．．．!ああ!もちろんだ!よろしくな!寧々!」

えむ「わくいつ!またよろしくね!寧々ちゃん!ネネロボちゃん!」

寧々「うん．．．っ!!」

靈斗「これで後は、類だけ．．．か。正直なところ、類が一番、可能性が低いというか．．．そもそもどこにいるかもわからん」

司「ああ。フエニツクスワンダーランドの中にもいなかった。そうなるど街の方になるが．．．」

えむ「広すぎるよお」

靈斗「流石に街全部を探す訳にはいかないし．．．せめて場所を絞ればいいんだけどな．．．」

そもそも手がかりも何もねえし．．．こりやあ、お手上げもな。

寧々「それなら．．．類の家に行こう」

靈斗「類の家?寧々、類の家の場所わかるのか？」

寧々「うん。小学生の頃から、家が隣同士だから」

司「小学生の頃から?ってことは．．．」

えむ「二人は、おさななじみなんだね!」

靈斗「えむ、なが一個多いな。」

寧々「年齢は一つ違うけど、わたしも類も兄弟がいないから、親同士で良く遊んでいたの。子供の頃、良く二人でいろんなお芝居をしたな。類は昔、クラスメイトと一緒にシヨーをやろうとしたことがあつ

ただけど・・・」

寧々「類は、ショーの事になると周りが見えなくなるから、いつも、うまくいかなかった。だから、自分でロボットを作って・・・一人でショーをやるようになったの。けど、本当は・・・類も」

靈斗「ん？おい、あれ類じゃないか？」

えむ「あ、本当だ！類くんだよ！」

司「なに!？」

俺達が見たのは、あの時みた、ロボット達を使って、一人でショーをしている類の姿。だが、お客さんはいない様子。俺達は、類のショーが終わった後、類に話しかけた。

靈斗「類。ここにいたか」

類「おや？靈斗くんにえむくんに寧々・・・それに君か。一体何のようかな？といつても、なんとなくわかるけどね。昨日のことだろうか？それなら、別に話すことはないだろう。それより・・・」

類の視線は、俺達ではなく、寧々に向けられていた。それはそうだろう。なぜあんなことがあったのに、司と寧々が一緒にいるのか、類にとつてはそれが不思議でしかないだろう。

寧々「類・・・わたしは・・・わたしは、またステージに立つって

決めた。靈斗に教えてもらったから」

類「・・・！そうか。それは良かった。寧々を励ましてくれたみたいだね？ありがとう。靈斗くん」

靈斗「別に大したこととしてねえよ。」

寧々「ねえ、類。類も、本当はまた誰かとショーをやりたいんじゃない？」

類「・・・。」司「類、昨日は・・・悪かった」

司「俺は、ショーが失敗したことで、頭がいつぱいで一番大事なものを、見落としていた。類の言う通り、最高のショーは一人ではできない！仲間が必要だ！俺がしたことは間違っていた！簡単に許されることではないだろう。だが、俺はまた類と・・・！」

類「反省したつてところかな？悪いけど、そんなことはどうでもいいんだよ。それは君と寧々の問題だからね。寧々が許すなら僕は気

にしない。だけど、きつと・・・僕は君と相容れない。」

司「どう言うことだ・・・？」

霊斗「・・・ああ。そう言うことか。類と司の想いが違うって言い
たいわけか。」

確かに、前の司だったら、この二人の想いは違う。だけど、今は違
う。

霊斗「類は、最高のショーができればそれでいい。けど、司は最高
のショーをして、スターになればそれでいい。その想いの違いが、
類は司と相容れない。そう言いたいんだろ？」

類「・・・その通りだよ。霊斗くん。司くん、君と僕は、根本的に
価値観がちがうのさ」

司「・・・確かに類の言う通りだ。でも、思い出したんだ！本当は
ら俺は・・・！」

類「寧々にもう一度、ステージに立つ気持ちを取り戻す機会を与え
てくれた事には感謝するよ。けど、僕は、君とショーをしたいと思わ
ない。」

司「・・・っ！」

類「少しの間だったけど、楽しかったよ・・・ありがとう」
そう言って、類は俺達の前から立ち去った。

えむ「司くん！類くん、追いかけていいの!？」

司「・・・良くない・・・！良いわけがあるか・・・!!だが、追
かけて・・・俺は何を言えば良いんだ・・・？」

霊斗「・・・何悩んでるんだよつと」ドカツ！

俺は司の尻に蹴りを入れる。

司「つうっ！れ、霊斗！何をする!!」

霊斗「なーにウジウジ悩んでんだよ？司は類と最高のショー、やり
たいんだろ？なら、諦めないで、自分の気持ち、伝えれば良いだろ？
お前は未来のスターなんだろ？だったら、類の事も、笑顔にしてやろ
うぜ。だろ？」

司「霊斗・・・！ああ。そうだな。なら、全員で作戦会議だ！」

霊斗「それなら、あの二人にも助言してもらおうぜ？」

司「ああ!!ミクやカイトにも、相談に乗ってもらおう!えむ!untitledを!」

えむ「はくい☆」ポチッ!

そうして、俺達はセカイにいる、ミクとカイトを含めた6人で、類が戻ってきてもらうための作戦会議を行うのだった。

そして、その日の夜、俺達は、神山通りで、類と向き合っていた。

類「全員で待ち伏せかい?悪いけど、僕の思いは変わらないよ。」

司「・・・類、お前に見て欲しいものがある」

類「何を見せられても一緒だ。言っただろう。僕はもう君とシヨールをする気は・・・」

霊斗「えむ、寧々らたのむ」

えむ「えくいつ!類くん、つかまえたっ!」寧々「え、えいつ!」

類「えむくん?寧々まで・・・?」

霊斗「悪いな。類。無理矢理にでも見てもらおうぜ。」

類「霊斗くん・・・一体、僕に何を見せるつもりなんだい?」

霊斗「んじや、司、やっちまおうぜ」

司「ああ!見てもらうぞ類!これが俺の・・・本当の想いだ!!!」

類「・・・!?!」

そして、俺達は、もう一度、セカイに入るのだった。

想いが形になる

セカイへと入った俺達。類の目の前に広がっていたのは、一つの大きなステージだ。

類「ここは・・・？以前行ったあの・・・？」

ミク「ハロー、えぶりわくん☆今夜のシヨールは、みんなが笑顔になるスペシャルシヨールだよ☆」

突然の出来事に困惑の表情の類。だが、そんなことはお構いなしに、シヨールは進んでいく。

カイト「さあみんな、お客さんを笑顔にする準備はいいかい？」

司「ああ！もちろんだ!!」

そして、開演のブザーがなったのだった。

ミク「あるところに、ヘンテコな旅の一座がいました♪一座にいるのは、目立ちたがり屋の座長に、話を聞かない道家役者、人前で歌が歌えない歌姫！」

ミク「そんなメンバーなので一座がシヨールをしても、なかなかお客さんが集まりません！けれど、そんなある日、一座は偶然、森の中でひとり、シヨールをする錬金術師に出会いました♪」

司『君のシヨールは素晴らしい！君と一緒にシヨールをすれば、きっとたくさんのお客が集まって、大人気の一面になれるぞ！』

霊斗『・・・誰だい？』

司『錬金術師よ、俺はシヨールを作りたい！力を貸してくれないか？必ず楽しいシヨールに見せる!!』

霊斗『シヨールを・・・そうかい。それなら少しだけ力を貸すよ』

えむ『わくわく！一緒に頑張ろうね!』

寧々『・・・わ、わたしも、歌えるかしら・・・!』

類「寧々・・・」

類は驚いた表情をしている。当たり前だろう。今まではネネロボを使ってシヨールに参加していた寧々が、今は、自分でシヨールをしている。驚愕するのも無理はない。

ミク「錬金術師は、人前で歌えない歌姫のために、代わりに歌声を

届けてくれる人形を作りました。そして、シヨールのために、雷の光、風吹く舞台、大きなドラゴンのカラクリまで用意してくれたのです！けれど、シヨールの途中で人形が壊れてしまい、シヨールは大失敗！」

司『ああ、こんな酷い失敗をするなんて！みんなお前達のせいだ！』
ミク「座長は、頭に血がのぼるあまり、みんなから笑顔を奪ってしまい……一座はバラバラになってしまいました。けれど、ひとりぼっちになった座長は、突然とても寂しくなっていました。シヨールを作っている時は、あんなにも楽しかったのに……するとそこに、可愛い妖精がやってきました♪」

ミク『キミは、どうしてシヨールをやるの？本当は、みんなのニコニコした顔が見たかったんじゃないのかな？』

類「……！」

司『……そうだ、オレは……』

ミク「座長はシヨールを始めた頃を思い出し、仲間を責めたことを反省しました。」

司『オレはあの日見た、シヨールのスターのようになりたかったんだ。妹と、オレに、笑顔をくれた……あんなスターに』

司『それなのに、いつしかそれを忘れてしまっていた。でも、ようやく思い出せた！オレは……オレは、みんなに笑顔になって欲しい！だから、もう一度、みんなとシヨールをしたい！』

類「……」

ミク「座長は深く謝って、再び仲間を集めました。しかし錬金術師ら、座長を信じられません。座長は本当にシヨールをやりたいのではないかと。ただ、人気者のスターになりたいだけではないかと」

類「……」

ミク「それでも座長はどうにか錬金術師に戻ってきてもらおうと考え……そして、錬金術師のためにシヨールをしました。精一杯のシヨールの後、座長は呼びかけます。」

司『ああ。そうだ。オレの夢は、スターになることだ。でもそれは、みんなに笑顔をあげるスターだ！観客が笑顔になって、そして、仲間も笑顔になれる！そんな最高のシヨールをやるのが、オレにとってのス

ターだ!』

司『信じて欲しい!今度こそ、みんなをショーで笑顔にする!』

司「だからもう一度、俺と一緒にショーをやってくれないか?」

類「……………」

そして、そこで俺達の演技は止まる。

霊斗「さて、類。この後、錬金術師はどう返答すると思う?」

類「え?けど、錬金術師は霊斗くんの役じゃ……………」

霊斗「俺はあくまで代役。それに、この先の展開は、脚本も展開も

ない。類…………お前がこの先の展開を決める。」

類「……………」

俺達は真剣な眼差しで類を見つめる。

類「…………ショーでなら、気持ち伝わるとでも思ったのかい?」

司「ああ!そうだ!俺はいつだって、ショーからたくさんのものを

受け取った。ショー見て感動して、興奮して…………!『スターになっ

てみんなを笑顔にする』と言う夢も貰った!!」

司「だから、俺の本当の想いを伝えるなら、ショーしかないと思っ

たんだ!!」

類「……………」

司「類!!俺と一緒にショーをやってくれ!!頼む!!」

類「…………フフ、観客も、仲間も、笑顔になる…………最高

のショー、か。悪くないね。でも、まだまだだ。勢いだけじゃ、人の

心は動かせない」

司「……………」

類「さてーそれじゃあ、どんな演出をつけようか?司くん?」

司「え?」 寧々「それって…………」 えむ「も、もしかして…………ツ

!?

霊斗「戻ってくる…………って事でいいんだよな?類?」

司「類…………!!」

類「おやおや、間違えないでくれたまえ。僕は類じゃない。

錬金術師さ。」

こうして、類は戻ってきてくれた。そして、俺達は再集結したんだ。霊斗「はあく……ようやく戻ってきたな。これからが本当のスタートだな？司？」

司「そうだな！よーし！早速、戻ってもう一度ショーを……！」

すると、司のポケットがピカツと光っているのが目に入る。

えむ「あれ？司くん、ポケット光ってるよ〜？」

司「ん？untitledが、光ってる……？」

カイト「司くんの想いが歌になるうとしてるんだよ。歌は、人の強い想いで出来てるんだ。だから、本当の想いを見つけると、歌が生まれるんだよ。」

ミク「うんっ♪これは司くんの中にある、『ショーでみんなを笑顔にしたい』って言う想いの歌だよ☆よーし、一緒に歌っちゃあ〜っ！」

司「いや、歌うって……どうやって歌うんだ？」

カイト「この歌は、最初から司くんの中にあつた想いで出来てるんだ。だから、思うままに歌えばいいんだよ」

司「……」

だが、司は歌おうとしない。すると、司はえむから順番に俺達の顔を見る。そして。

司「でも、これは、俺一人じゃできなかった歌だ。いや、あいつらの歌でもある。だから、その……あいつらとも、一緒に歌ってもいいか？」

ミク「うんっ♪もちろんだよ☆」

えむ「私達も歌っていいの？わーい！とっても楽しそうっ♪」

寧々「うん。歌いたい、私も」

類「司くんの想いの歌か。それはとても興味深いねえ。」

霊斗「しゃーねえな。いいぜ？親友の頼みだしな。」

司「よーし！みんな歌うぞっ!!」

そして、俺達は、歌を歌った。司の想いで出来た曲を。全ての人を笑顔にすると言う、司らしい想いが込められた歌を。

司「……これが……俺達の……」

霊斗「司らしい歌だな。いい歌じゃねえか。」

えむ「うん!!とつてもとーつても楽しかった〜!!あたし、もう一回歌いたい!!」

ミク「えへへ♪ミクもミクも☆」

カイト「あ・・・見てごらん。untitledが歌になつていくよ」

カイトに言われ、画面を見ると、untitledと書かれていた曲名が、変わっていつている。

寧々「曲のタイトルが変わって・・・!?」

類「ほう・・・これはまた不思議な現象だね?」

司「タイトルが変わって・・・『セカイはまだ始まってすらいらない?』?」

えむ「『セカイはまだ始まってすらいらない?』・・・あつ!」

霊斗「なるほどな。俺達がこれからワンダーステージで、沢山のショーをやる。それがセカイだとしたら、まだ始まってすらいらないな。」

全員が笑顔を浮かべる世界はな?」

寧々「ふふ、そうなのかもね」

類「なら、ここからが僕達の本当のショータイムって事かな?」

霊斗「だな。それなら、俺達のステージに戻らないとな?司?」

司「ああ・・・つと、忘れるところだった。ミク、カイト。一緒にショーをやってくれて・・・その、何だ・・・本当にありがとう。」

カイト「どういたしまして。またいつでもきて欲しいな。その時は、もつとたくさんショーをやろう」

ミク「絶対、また来てね!待ってるよーっ☆」

そして、俺達は、ミク達に別れを告げて、ワンダーステージに戻ってきた。

司「よーし!なら、早速!次のショーの準備をしないとな!」

霊斗「切り替えが早いな。おい。まあ、確かにそうだな。脚本も演出も考えないといけないし」

えむ「・・・ねえ！みんな！」

類「？どうしたんだい？えむくん？」

えむ「あのね？みんなにお話ししなきゃいけない事があるの」

「「「??」」」

えむの言葉に疑問の表情の俺達。一体何事だろうか？

えむの話の内容は、前回の演劇の失敗の影響で、ワンダーステージの取り壊しが決定した事、取り壊しをやめてほしいなら、連休までに演劇をして、お客さんを集める事・・・だそうだ。

寧々「え？ワンダーステージが壊されちゃう・・・？」

えむ「・・・うん。みんな、黙っててごめんなさい」

霊斗「けどまあ、それは、連休までにお客さんが集まらなかった場合・・・だろ？」

司「ああ！今の俺達なら・・・このステージを守れる!!」

司「今日から、連休の最終日まで、毎日ショーをやって客を集めよう！」

霊斗「そうと決まれば、早速やってかないとな。演出なり脚本なり決めないと、間に合わなくなるぞ。」

司「そうだな！このステージで、最高のショーをお客さんに届けるぞ！みんな！」

そして、急ピッチでのショーの準備を終えて、連休初日。俺達は演劇開始前の最終チェックを行っていた。

司「よし、最終チェック！衣装、小道具、オーケー！霊斗！類！そっちはどうだ？」

霊斗「音響と照明は問題ない。類の方はどうだ？」

類「演習に使う装置や、ネネロボは問題ないよ。完璧さ。」

ネネロボ『観客は前の半分くらいだけど・・・それでも結構いるし・・・』

寧々「・・・が、頑張る」

今回のショーはネネロボだけでなく、寧々本人も初参加のショーだ。

霊斗「寧々、心配すんな。何かあったら、俺達がいる。思いっきり

楽しんでやろうぜ?」

寧々「・・・うん!」

司「よし!なら、えむ、いつもの頼むぞ」

えむ「いつもの?」

司「あれだあれ!いつもやってるだろうが!」

えむ「あつれアレだね♪じゃあ行くよ♪」

みんなかんばろ!わんだほ〜い!!」

司・類・寧々・霊斗

『わんだほ〜い!』

司「ワンダーランズ??シヨウタイム、公演スタートだ!!」

そして、俺達の再公演のスタートが幕を切った。シヨーの内容は前回と同じだ。そして、今の場面は、以前、ネネロボが止まってしまった場面である。だが、変わっているところもある。それは。

えむ『ふっふっふ!あたしは魔王様のドラゴンのお世話係・エムム!王子なんて、ぺっちゃんこにしちゃうぞく!!』

寧々『ここは私に任せなさい。ちらちらく♪』

ネネロボではなく、寧々が歌っている。という点だ。

えむ『わー!とつても綺麗な歌〜!なんだかあたしも眠くなってきたやつたー・・・むにやむにやつ』

順調にシヨーは進み、いよいよ、魔王と王子、二人の対決シーンへと進みでいく。

類『よくここまでたどり着いたな?王子?そんなボロボロになつてまで、なぜ剣を振るう?』

司『なぜだと?そんなの決まってるだろう!世界中の人達を・・・笑顔にするためだ!!』

そして、ラストシーンを終えて、今回の公演は終了する。湧き上がる観客の声と拍手。手応えは充分にあった。

司「本日は、ご来場ありがとうございました!!」

寧々 類 えむ 霊斗

『ありがとうございました!』

感謝の言葉を終え、俺達は一礼する。目の前に広がる光景は、俺たちのショーを見て、笑顔になっているお客さんの姿。

えむ「お客さん、みーんな笑ってる……!ありがとうみんな……!」

司「ふん!このくらい当然だ!何故なら俺は……」

霊斗「未来のスターだから……. だろ?」

司「ああ……!!って霊斗!!俺のセリフをとるな!」

そんなやり取りをしながら、連休最終日まで、俺達の公演は続いた。そして、時は流れて、連休最終日、最後の公演を終え。

司「も……もうダメだ!動けん!オレは、一步も動けんぞ〜!」

寧々「っ、疲れた……」

霊斗「さ、流石に1日5ステージは大変だろ……」

類「そうだね。出番の少なかった僕でも体が鉛のようだよ。特に霊斗さんと司くんは疲れたんじゃないかい?司くんはずっと出続けているし、霊斗くんは少なくなつたとはいえ、戦闘シーンが多かつたじゃないか?」

霊斗「ま、まあな……. 司ほどじゃねえが、流石にな……. けど、後半は立ち見が出るほど観客が集まつたし上出来だろ。」

一番最初の公演よりも最後のの方は観客の数は多かつたと思う。

司「はーっはっは!!これぞ!オレのスターパワーだな!」

霊斗「急に元気になりやがって……. けどよ、お客さん達、着ぐるみさん達とネネロボの宣伝が面白いからって言つてなかつたか?」

司「うっ……. ま、まあ、それもあつたかもしれない」

霊斗「それより……. 結果はどうなつてんのかね」

今、えむが今回のお客さんの数を報告しに行っている。その結果で、ワンダーステージが壊されずに済むのか決まるのだ。

寧々「えむだけお父さんに呼び出されるなんて……. 」

司「……. 」

霊斗「今は待とうぜ。信じてな」

「みんな〜!!」

声が出た方を見ると、駆け足で俺達の方へ向かってくるえむの姿が。

司「えむ!どうなった!?このステージは……どうなるんだ!」

えむ「わ……!!」

霊斗「……わ?」

えむ「わんだほいつ!!」

えむの突然のわんだほいに少し理解が遅れてしまう俺達。だが、言葉を理解した時、司はガッツポーズをしていた。

司「よつしやく!!やつたぞく!!」

霊斗「ふいく、なんとかなったか。」

寧々「よかった!これで、壊されなくてすむ……!」

類「ふふ、頑張った甲斐があつたね。」

えむ「みんな……ありがとう……!!」

司「よかつたな!えむ!はあ……安心したら力が抜けたぞ……ますます一步も動けん……」

霊斗「みんなは少し休んどけ。片付けは俺がしとく。」

寧々「霊斗も少し休んだら?司の次に疲れてるでしょ?」

……いやまあ、確かに体中痛いけどな。

霊斗「平気だ。みんなよりは体力あるつもりだしな……つて、そういうばえむ、これからどうするんだ?」

えむ「え?」

司「霊斗の言うとおりで。このステージが壊されないって事は、えむの父親もここで新しいショーをするんだろ?」

えむ「うん。そうだと思う。あたしも、もつともつとここでお客さんを笑顔にしたいな!」

司「類と寧々はどうするんだ?」

寧々「わ……わたしは、もつとステージに立って……いつか、プロの役者になりたいな。」

類「僕は変わらず演出を続けたいから、またショーをやりたいねえ。

君達になら今までにない演出がつけられそうだ」

司「霊斗は?」

霊斗「そうだな。ショーはやりたいと思うぜ。折角こんな衣装貰ったのに勿体無いもんな」

司「よし！お前達の気持ちはよくわかった！ならば、ワンダーランズ??シヨウタイム、続投だ！」

寧々「続投？」

司「俺は、大舞台で経験を積む事がスターになるために必要な事だと思っていた！だが、今回の件で思い出せた。オレは、スターになって、みんなを笑顔にする最高のショーがしたい」

司「そして・・・最高のショーには、仲間・・・いや、お前達が必要だ！だから、また、お前達とショーをしたい！ここで一緒に、もつとシヨウをやらないか？」

俺達に問いかける司。そんなもん、決まってるだろ。

えむ「や・・・や・・・や・・・！やりたくっつい!!!」ドンッ!!

司「おわあ!?急に突進してくるな!!」

えむ「あたしもやりたい！もつともつと！みんなとショーやりたいつ！」

寧々「・・・うん！今度もネネロボと一緒にステージに立てたらしいな。」

類「それなら、試していない演出もだんだんやりたいねえ。フ・・・腕がなるよ」

霊斗「親友の頼みなら断るわけねえだろ？いいぜ。お前の夢への道、一緒に歩いてやるよ。」

えむ「みんなを笑顔にできるナイスアイディアだね！さすが司くんっ♪」

司「そうだろう！そうだろうとも！ハッハッハッ！もつと褒め称えろ！」

えむ「さすが未来のスター！キラキラお星さま☆」

司 えむ

『ハハッハッハッハッハ!!!』

司とえむの高笑いがワンダーステージに響き渡る。ここから、俺

達の劇団・・・ワンダーランズ?? ショウタイムの本当のスタート地点
だった。

彼女を救いたいが為に
新たなセカイ

霊斗「くあく・・・流石に疲れ残ってんな・・・けど、流石に学校は行かねえと・・・」

連休明けの学校初日。俺は、疲れが残っている体を動かしながらも登校を開始する。筋肉痛にはなっていないが、少し体が重い。

霊斗「結局、寧々を襲った奴は来なかったし・・・まじでこれ、必要なかねえ？」

俺は、鞆に隠してあるベルトとケースを手取る。マゼンタ色のベルトはキラリと輝き、自身の存在を目立たせる。

霊斗「いや、神様がくれた物だし、使う機会はあるんだろうが・・・ないならいいいいし」

俺はもう一度、鞆にしまう。その後、神山高校に着き、少し気怠そうにしながら、着席すると、変わらない調子で司が話しかけてきた。

司「はーつはつは！おはよう！霊斗！今日もいい日だな!!」

霊斗「朝っぱらから元気だな。司？まあ、確かにいい日なのは確かだけだな。天気も良いし。」

相変わらず、元気だよな・・・司のやつ。まあ、こうじゃなきゃ司じゃねえけど。そんなこんなで、司とこれからのショーの話をしていくと。

「ねえ、霊斗くん？ちよつと良い？」

霊斗「んお？どした？」

「なんか、霊斗くんに用事がある生徒さんがきてるの。しかも一年生」

霊斗「あ？一年？」

寧々か？いや、寧々なら携帯から呼び出されるし・・・他に知り合いいもないし・・・誰だ？

霊斗「わかった。行ってみる。サンキューな。悪い、司。ちよつと行ってくる。」

司「ああ。」

俺は、教室の扉を開けて、訪ねてきた人物を見る。薄ピンクの髪の毛のサイドテール。大きなリボンをつけている制服を着た女。

「えーと・・・君が鬼灯霊斗先輩？」

霊斗「そうだが？俺の名前を知ってるって事は、どっかで会ったか？悪いが、俺の記憶にはない。」

「あ、あはは・・・口調が冷たいぞー？つて、こんな事言っても意味ないか。初めまして。僕は暁山瑞希。よろしくね。」

霊斗「そんで？俺に用事でもあったか？」

瑞希「ううん。僕のサークル仲間が、君と会った事があるから、気になって見にきただけ。」

霊斗「サークル仲間・・・？俺と会った事のある・・・？」

そんな奴・・・いたか？俺が会ったのは・・・司とえむ、寧々と類・・・後は・・・あ、望月さんと・・・奏だけだし・・・となると、望月さんと、奏のどっちかな。

瑞希「いや、音楽の話しかしないKが、男の人の話をするなんて思っただけでね？そりゃあ、気になってもしょうがないでしょ？あ、Kって言うのは、サークルの中での名前だから」

霊斗「K・・・ね。」

瑞希「あ、それで、霊斗先輩ってナイトコードってやってる？」

霊斗「あ？ナイトコード・・・？やってねえな。そんなの。たまに動画配信のサイトで歌ってみたとか流してるだけだ。」

俺の部屋にある、ゲーム機以外の機械は殆ど、動画配信用の機材だ。ゲームや名曲のカバーをした時用の撮影機材が多い。

瑞希「あちやう、そつかく。折角、先輩を私達のサークルに勧誘しようとしたのに・・・」

霊斗「勧誘されても無理だぞ。俺、バイトあるし、そもそも、そう言うのに興味もない。」

瑞希「あははは。これじゃあ駄目だね。わかった。先輩を勧誘するのは辞めるよ。」

霊斗「そうかよ。んじゃ、用事、それだけか？なら、俺戻るわ。もうすぐ授業、始まるしな。」

そう言い、俺は扉を閉めようもしたが。言い忘れた事があつた事を思い出し、途中で止める。

霊斗「あ、忘れてた。暁山、一ついいか？」

瑞希「？」

触れたら、いけない事だとは思ってる。だけど、一応言っておこう。だって最初から気づいてたし、こいつはそう言う奴だと思っていたから。

霊斗「お前、可愛い物、好きだろ？周りから何言われてもそれ、変えんなよ？好きなものは好き。趣味だから、可愛いものが好き。それが女物でも。な？」

瑞希「・・・っ!？」

霊斗「んじやな。」

そして、俺は今度こそ扉を閉め、席に戻り着席する。

司「霊斗、話は終わったのか？」

霊斗「まあな。大した用事でもなかったし、司は気にしなくていいぞ？」

司「そうなのか。それより、放課後、もう一度、セカイに集合だぞ！次の公演の練習をするからな！」

霊斗「わーってるよ。」

それにしても・・・暁山のやつ、俺をナイトコードに、勧誘して何やらせようとしてたんだ？そこら辺聞いておけばよかったな。

暁山 side

瑞希「・・・見破られてた・・・って事だね。最初から・・・」
僕は、Kの言っていた男の人に会いに来た。鬼灯霊斗先輩。転校し

てきた人で、その異質な姿で目立っていた。何故かはわからないけど、左目に包帯が巻かれていて、何か怪我をしたんじゃないかって話題になってたのを覚えてる。

最初会った時、僕もそう思った。けど、先輩からは、何か独特な感じがした。何を考えているのかわからない。そして、数分しか話してないのに、僕の秘密を見破った。心の闇を。そして、励ましてくれた。否定しなかった。むしろ肯定してくれた。僕の趣味を。初めてだった。

瑞希「趣味だから、それで良い……か。初めて言われたなあ。なんでだろ……今すぐく、心が軽いや♪」

僕は軽い足取りで、自分の教室を目指す。今日はいい事があったし、いつもより、学校を楽しめそう♪いや……多分これからも♪

瑞希 side off

霊斗 side

暁山と出会い、学校で授業を終えた放課後、俺はいつも通り、司達と一緒にシヨ一の練習をした後、俺は帰宅する。風呂に入り、軽く歌った後、俺は眠りについた……

はずだったんだけどな……

霊斗「どこだよ……ここ……?」

目が覚めたらあら不思議。見渡す限り、真っ白な場所にいましたとさ。じゃねえよ。マジでどこだよ。見渡しても、何もなし。

霊斗「俺、部屋で寝てたはず……だよな?けど、実際、変な場所にいるわけだし……ってか、本当に何も無い場所だな。誰もいないみたいだし……」

まるで、ひとりだけの世界だな……そんな事を考えていると。

「……誰?」

霊斗「うお!?!」

突然、話しかけられて、ビビったわ！俺が振り返ると、そこにいたのは、一人の女。無表情で髪色が濃い紫色の様な感じだ。

霊斗「す、すまねえ。俺も人がいるもんだとは思ってなくてな。」
「・・・なんでここに人がいるの？」

霊斗「俺もなんでか知らんがここにいたんだよ。もしかして、お前だけしか入れない場所だったりするか？だとしたら、悪い。他人にズカズカ入られるのは嫌だよな？」

「それは別に良い。それより・・・誰？」

霊斗「え？あ、名前を知らないって事だよな。俺は鬼灯霊斗。よろしくな」

「鬼灯霊斗・・・KやAmiaが言ってた人？」

霊斗「K・・・？」

暁山もそいつの名前言ってたよな・・・確か、サークルにいるメンバーの名前だって・・・

霊斗「そのKとAmiaって奴はわからんが・・・って、それよりそっちの名前も教えてくれよ。お前とか言うのも俺が嫌だしな」

「・・・朝比奈まふゆ。」

霊斗「なるほど。朝比奈さんな」

朝比奈まふゆ：・・・さっきから感じていたが、彼女はなんというか・・・俺と同じような気がする。心に傷・・・というか、心が壊されてる感じが。

・・・それと、彼女の名前・・・どつかで聞いたことあるような・・・まあ、今は気にしなくて良いか。それより、今は一番聞きたい事を聞こう。

霊斗「朝比奈さん、ここって、『セカイ』何だよな？」

まふゆ「・・・何で知ってるの？セカイの事？」

霊斗「いや、実は、他にもこんな場所を知ってたな？そこがセカイって言われてたからよ。此処も似たような感じがしたからな。だから、もしかしたら、此処は朝比奈さんのセカイか？って思ってたよ。」

まふゆ「そうだよ。此処は私のセカイ。『誰もいないセカイ』
誰もいないセカイ・・・ね。」

まふゆ「そのはずだったんだけど・・・あなたがいる。」

霊斗「あ、それは悪い。すぐ出ていくからよ。」

セカイなら、俺の携帯に・・・あ、やっぱりありやがる。untitled。俺はすぐにそれを止めようとするが。

まふゆ「別に良い」

霊斗「は？」

まふゆ「あなたなら・・・別に良い。そう思ってる・・・わからないけど。」

霊斗「わからない・・・？」

意味がわからねえ。初対面の男に対して、いう言葉じゃねえ・・・。まあ、けど、彼女がそう言うなら良い・・・のか？

まふゆ「今度はこっちから質問してもいい？」

霊斗「え？お、おう。」

まふゆ「霊斗は、どうして、眼帯と左腕に包帯を巻いてるの？怪我？」

霊斗「は？つて、しまった・・・部屋にいたから、半袖じゃねえか・・・はあ、まあ気になるよな。気にならない方が可笑的い」

まふゆ「・・・聞いて欲しくない事だった？」

霊斗「ああ、いや、そんな訳じゃねえ。でもまあ、こっちの質問には答えてくれたのに、こっちが答えないのは流石に無いよな。」

俺は包帯を解いていく。この世界に転生してから、この傷を見せるのは、朝比奈さんが初めてだ。さて、どんな反応をするのか。包帯を解き終わり、眼帯を外し、傷が露わになる。だが、この傷を見ても彼女は顔色ひとつ変えない。

霊斗「まあ、これを隠すために巻いてただけだ。」

まふゆ「・・・怪我してたの？」

霊斗「いや違う。少し長くなるけどよ。聞くか？俺の話」

彼女がコクンと頷く。俺と朝比奈さんは座った後、俺の昔話をする。親が死んだ事。その後に取りった俺の行動。自殺しようとした事。転生前の俺の事を全て話した。少し、嘘を交えて。

霊斗「そんなわけで、自傷に走った時の傷ってわけだ。」

まふゆ「・・・辛かった？」

霊斗「そりゃ辛くなかったらそんな事してねえよ。けど、俺は出来なかった。どうでも良くなっちゃったんだよ。死んでも、生きてても。けど、親に子供の頃、言われてた事があってよ。『俺達よりも長く生きろ』って言われてな。今、生きてる」

これも嘘だ。俺はそんな事、言われていない。適当な理由を言うてるだけだ。

まふゆ「・・・そう。」

霊斗「つまらない話だろ？」

まふゆ「そんな事・・・ない。」

霊斗「そうか。長話しちゃったな。俺、そろそろ戻るわ。」

俺は立ち上がり、untitledを止めようとすると、朝比奈さんが俺の服の裾を掴む。

霊斗「朝比奈さん？どした？」

まふゆ「・・・また来る？」

・・・無表情の割には、意外と寂しがり屋・・・？いや、んなわけないか。

霊斗「来ても良いなら来る・・・とは思うけどよ。」

まふゆ「・・・そう。」

彼女は裾を掴んでいた手を離す。

霊斗「またな。朝比奈さん」

俺はuntitledを止めた。眩い光が俺を包み、俺は自室へと戻る。

霊斗「また、新しいセカイ・・・それもまたとびきり面倒な・・・今度は何が起こるか・・・めんどくさ」

俺は、考えるのをやめて、ベットに倒れ込む。その後は、余程疲れていたのか、眠るのに、数分もかからなかった。

転生者の再来 覚醒する力

朝比奈さんと新たなセカイで出会った翌日。今日はワンダーステージではなく、セカイの中で、ショーの練習をしている。といっても、今は一通り、ショーの練習を終えて、休憩中な訳だが。

ミク「今日のショーもとくつても楽しかったよ♪」

司「はーっはっはっは!!そうだろう!そうだろうとも!俺達がやっているショーだからな!」

カイト「特に、最後のライトを使った演出がとても良かったよ。照明をあんな風にするなんて思ってたな」

類「フフ、それは嬉しいね」

ミク「あ!司くんがビューン!って勢いよく飛び上がる時も面白かったよ♪」

えむ「あ!私もあそこ大好き☆司くん、ロケットみたいでかっこよかったよ♪」

霊斗「まあ、飛び上がりすぎて、屋根突き破るかと思ったけどな。」

寧々「天井スレスレまで、飛び上がったんじゃない?」

司「ワイヤーの時のあれか・・・実際、生きた心地はしなかったが・・・」

マジで勢いよく吹っ飛んでたからな。某ゴム人間かよってくらいで。

司「だが、俺は最高のショーを作る為なら危険が伴うショーであっても!必ず!観客を笑顔にして見せるぞ!」

類「いやあ、司くんは頼もしいねえ。そんなスターである司くんの為に新しい演出を追加したいんだけど・・・どうかな。」

司「あ、新しい演出だと・・・!」

えむ「えっ?なにになに?その演出って面白い?」

寧々「なんかまた嫌な予感しかないんだけど・・・」

類「いやいや、ちゃんと安全は考慮しているよ?霊斗くんに協力してもらって検証もしているからね?」

類の言葉に驚愕の表情をして、俺を見る3人。いや、なんで驚くん

だよ。

司「な、なに?! 霊斗! そうなのか!」

霊斗「ん? おお。類との約束だしな。演出の実験に付き合うつて話してたし。問題ねえだろ?」

寧々「け、けど、もし霊斗が怪我でもしたら...!」

霊斗「平気だ。司も言つてたろ? 全員が笑顔になる為に必要な事だろ? これ」

俺の言葉にどこか納得のいつていない表情の3人。そんな時だった。

「おーい! みんなー!」

俺達やミックやカイトとも違う声が聞こえて来る。声のした方へ俺達が視線を向けると。そこにいたのは黄色の髪に、オレンジの華やかには衣装を着た一人の少年。いや、あれって。

霊斗「鏡音レン?」

レン「うん! 僕はレンだよ! みんなよろしくね♪」

ミック、カイトときて、今度はレン...か。

レン「みんなのショーを見に行こうと思つてただけど、途中でぬいぐるみ達がケンカしててさ...止めてたら、こんなに遅くなっちゃつたよ。みんなのショー、見たかつたのになあ...」

類「ふむ、それなら、折角新しいお客さんが来てくれた事だし、もう一回、やるのはどうか?」

えむ「やりたくい! あたし、何十回でも出来ちゃうよ!!」

寧々「な、何十回はちよつと...けど、ショーの練習にもなるし、もう一回ならいいかな。」

霊斗「だな。レンも見たいつて言つてるしな。司、満場一致でもう一回だ。」

司「よし! 決まりだな! 俺達のショーをしつかりと目に焼きつけておくと良い!」

レン「ほんと!? やつたー! ありがとう、みんな!」

そして俺たちは、レンのためにもう一度、ショーを上演して見せた。レンは目をキラキラ光らせながら、見ていたのを覚えている。その

後、俺たちは練習を終えて、フェニックスワンダーランドに戻ってき
ていた。

えむ「レンくん、喜んでくれて良かったね♪」

寧々「うん、それに、色々アドバイスも、もらえたし」

司「これで、明日のショーは成功間違いなしだな！」

霊斗「それなら、次のショーの事も考えないとな。類、今度時間空
いてるか？」

類「そうだね：うん。明日の会議の時に話そう。色々とアイディ
アが浮かんできているからね。色々持ってこようと思うよ。」

寧々「二人とも、もう次のショーの事？」

霊斗「何事も早め早めの方がいいだろ？」

類「それに今度は司くんだけじゃなくて、霊斗くんにも色々、やつ
てもらいたいと思ってるんだよ」

霊斗「俺も？」

類「そうだよ！霊斗くんは基本、バトルシーンが多い役になるから
ね！色々、戦闘シーンでの演出のアイデアも浮かんできているんだ
！だけど、この演出は僕も初めての経験だからね！色々手探りなのさ
！」

霊斗「お、おう。俺で良かったら、いくらでも付き合うからな」

寧々「類、霊斗が怪我しない演出でお願い。」

類「わかってるよ。寧々。あ、そうだ霊斗くん。こんな場面ではこ
んな演出がいいと思うんだけど・・・」

霊斗「ん？どれだ・・・？あ・・・こういうシーンなら・・・」

明日に話すと言っていたが、ほとんどの確率ですぐに俺は類との演
出の話をしてしまう。まあ、類がそれだけ演出に集中できてるって事
なんだけだな。

そんなこんなで、更に翌日。今日も予定通り、ワンダーステージで
俺たちは練習をするはず・・・だった。

『お嬢様ー!!』

霊斗「ん？」

練習を始めようと思った直後、突然、先輩のぬいぐるみが駆け足で来た。

えむ「ん？そんなに急いでどうしたのー？」

『今日、園内でイベントの告知がありました．．．！』

霊斗「イベントの告知？えむ、そんな話があったのか？」

えむ「ううん。お父さんからそんな事聞いてないけど．．．どんな内容なのー？」

『こちらが案内になります』

着ぐるみの人から、案内を受け取るえむ。

えむ「えっと．．．え！？れ、霊斗くん！！これ見て！」

えむが驚きながら、俺に案内を見せてくる。

霊斗「んあ？何々．．．？『第一回、フェニックス☆ショーコンテスト』．．．コンテスト．．．!?!』

司「ショーコンテスト．．．だと!?!」

類「ショーコンテスト？へえ、そんなイベントがあつたんだね。初耳だよ」

えむ「．．．．．コンテスト．．．やっちゃうんだ」

寧々「やっちゃうってどういう事？えむはこういうイベント、好きそうだと思うってたんだけど」

そうだよな。俺も実際思ってたし。けど、今のえむはなんとというか、いつもの元気がない。

えむ「あ、昔もショーのコンテストの話が出てきた事があって．．．でも、おじいちゃんやんが『ショーが一番なんて決めなくていい。みんな違ってみんな良い』って言ってる、やらなかったんだ。だから、やるってやるってなっちゃよつとびっくりしちやっつたんだ」

類「ふむ。方針が変わった．．．って事かな？」

方針．．．ね。なんだろうな。また、嫌な感じだ。

司「なるほど。コンテスト．．．コンテスト．．．大いに結構!!!」

えむ「うわわっ!?!」

寧々「うるさ．．．」

司「コンテストが開かれるということはこのことで、最も素晴らしい

ショーを作るユニットが明らかになるということ！さすれば、オレの役者としてのスター性、座長としてのリーダーシップが世に広まる絶好のチャンス！」

霊斗「たしかに司の言ってることも一理ある。寧々のミュージカル俳優って夢にも近づける。それに人気が出るようになれば、ここに回ってくる予算も多少増えんだろ。」

予算はもらえるだけでもありがたいが、ちよつと心許ないんだよな……

類「確かに霊斗くんという通りだね。演出に必要なものはそのあたりのもので作ってしまうけど……予算が増えることは悪いことじゃないからね」

えむ「……うん！せつかくのイベントだもん！みんなで楽しくがんばろー！」

寧々「まあ、みんながいいなら、私も文句はないかな。」

霊斗「なら、決まりだな。俺達も出るってことで。」

司「それで、霊斗、そのコンテストの内容は？」

霊斗「おう。えーつと？『フェニックスワンダーランドで最も優れたショーユニットを決めるコンテストで、決められた期間の中で3回ショーを行い、ショーの一回ごとに来場者に投票してもらい総合得点を競い合う』だよ」

類「なるほど、一回だと、内容の好みに分かれるから、3回に分けて投票してもらうってとこかな。」

寧々「そういえば、ここって他にいくつステージがあるの？」

霊斗「確か、着ぐるみの先輩の話だと、10はあるとか言ってたな。小さいのも含めたらだけどな。えむ、マジなのか？」

えむ「うん！ショーユニットもステージごとにあるよ！」

司「そんなにあつたのか!?!」
寧々「なんで霊斗は知ってて、面接を受けたあんたは知らない訳……？」

寧々「……まあ、そんな反応はするのはわかる……って。」

霊斗「ん？まだ続きがあんぞ？『なお、優勝したユニットは、フェ

ニックスワンダーランドの宣伝大使となり、テレビCMに起用される』・・・マジか」

司「て、テレビCMだと!?では、やはり、優勝すればスターへの道が一気に開かれるという訳だな!!」

霊斗「スターへの道はともかく、参加してうまくいけば観客も増えるだろうし、成長にはつながるんじゃないやねえか?」

えむ「うん!そうだねー!」

類「決まりだね。これから、このコンテストに向けてショーを作っていく。」

『おーっ!!』

俺達の今後の方針はコンテストでの優勝へと決まった。今日の活動はこれで終了し、俺は一人、帰路へと付いている。

霊斗「コンテスト:ね。こういうのは何かしらあるもんだよな:例えば、順位が下のユニットは解散とかな:まあ、深く考えすぎか:」

今とはとにかく、コンテストに向けての脚本とか、演出とかいろいろ考えていかないとな:」

霊斗「つて、ん?あいつ:」

帰る途中、俺はある光景を目にした。なんだ?男が女に絡んでいる:・・・つて前にもこんな光景見たよな。寧々の時と似たような感じか:・・・つて、絡まれる奴、奏じゃねえか?

霊斗「つて事は、男の方、もしかして転生者か?」

そんな考え事をしていたら、男が奏の腕を掴んでいる:・・・おいおい、またこのパターンかよ。目障りだし、止めとくか。

霊斗「おい、俺の知り合いに何してんだ?」

俺が声をかけると、男の方は睨みつけながら、俺の方を見ている。奏は少し、驚いている様子だ。

奏「霊斗:」

「おい!誰だテメエ!」

霊斗「そりや、こつちの台詞だ。テメエこそ、道の真ん中で何やってんだよ?しかも、女の腕無理やり掴んで何しようとしてたんだ?」

「はあ？なんだお前？モブは引っ込んでろよ。俺は今から、奏といいことするだからさ」

霊斗「・・・キモすぎるだろ。お前。何で奏と知り合いな感じ出してんだよ。奏、そいつお前の知り合い？」

奏「知らない・・・知り合いなんて、ニーゴのみんなと・・・家事の人と、霊斗しか知らないから」

その言葉にシヨックを受けたのか、一瞬、奏の腕を掴んでいた手の力が緩む。その瞬間に、俺は奏を軽く引っ張り、俺の方へ引き寄せせる。

霊斗「奏自身がこう言ってた。お前、ストーカーなのか？警察呼んでもいいんだぞ？」

すると、男はプルプルと震え出し、顔を上げて、怒りの視線を俺に向ける。

「クソガア!!邪魔すんなよ!!もういい!!テメエを消して!奏を俺のものにする!!」

奴は手に何かを持つ・・・って、ベルト？俺のと似てるな・・・と思っただその時、奴は自身の腰にベルトをつける。そして、ベルトとは違う何かを手持っている。奴がボタンを押すと。

『MIGHTY Action X!!』
というボイスが流れる。そして。

『変身!!』

奴が叫び、手に持っている物をベルトに突き刺した。そして、ベルトのレバーを引く。

『MIGHTY JUMP!!MIGHTY KICK!マーンティアクション X!』

奴の姿が変化した。俺の元いた世界で、元々は敵だったが、共通の敵を倒すために、主人公と共闘した1人の戦士。

霊斗「・・・は？」

奏「仮面ライダー、ゲーム・・・？」

『はははは!!!コンティニューをしても!奏は俺が貰う!!』

ゲームと呼ばれる戦士に変わった男は、オレに襲いかかる。拳や蹴りの猛襲を俺は、危なげなく俺は回避しています。いや、本当に危な

いんよ。

霊斗「つぶね！つと！」

『ちよこまか避けんなよ!!モブの分際で!!』

霊斗（攻撃は簡単に避けれる・・・けど、逆に言うと、俺の方にこいつを退ける力はない・・・面倒くせえ・・・どうすりやいいかねえ・・・）と、そんな時、俺の持つカバンから、あるものが飛び出してきた。俺は咄嗟にキャッチして、掴んだものを見ると。

霊斗「神様からもらったベルトに・・・カード入ってた奴だよな・・・？」

神様からもらったベルト達。いや、何で今・・・？って待てよ？まさか・・・

いや、まさか・・・だよな？

霊斗「つ！めんどくせえ！やってみるしかねえだろ!!」

俺は自身の腰にベルトを巻きつける。そして、一枚のカードが俺の目の前に飛び出してきた。カードを手に取り、ベルトを開き、一枚のカードを相手に見せる。そこに描かれているのは1人の仮面の戦士。そして戦士の名前が書かれていた。そこに書かれていた文字はこうだ。

『DECADE』と。

霊斗「変身っ!!」

『KAMEN RIDE DECADE!』

俺は、ベルトから流れるボイスの聞いた時俺は理解した。俺の特典で貰った力は、奴と似たような能力であり、奴らを倒すために与えられた能力であり、この力で、司達や奏を守る為の力だと。

セカイの破壊者

「なっ!?か、仮面ライダーディケイドだと!？」

霊斗「おお・・・あいつの反応から見るに、俺も変身したわけか・・・しかも、なんかヤバ目の」

自分じゃ見た目なんかわからねえからな・・・って、今はそんな事考えてる場合じゃねえよな。奏をここから離さないよ。

霊斗「奏、少し下がってろ。あいつ黙らせるからよ」

奏「わ、わかった。」

奏は俺達から離れた場所へ移動する。うし、あそこなら巻き添えもくわないだろ。

霊斗「さて?これで周りを巻き込む心配もないし、俺も変身して対等だよな?」

「っ!舐めんじゃねえぞ!!いくらディケイドだとしてもテメエは変身するの初めてだな!?!だったら、経験のあるこっちの方が一枚上手なんだよ!!」

『ガシャコンブレイカー!』

奴は、剣を手に取り、突っ込んでくる。俺は最小限の動きで回避し、たまに反撃で拳を繰り出し奴にダメージを与えていく。

「がつ!くそっ!!なんであたんねえ!？」

霊斗「動きが単調なんだよ。なんだ?威張ってた割には大した事ないな?どうせ、力もらって浮かれてトレーニングとかしなかった口だろ?」

「っ・・・!」

霊斗「その反応からして凶星だな?俺は軽くでも司達とトレーニングしてたんだよ。お前みたいな鈍い奴の攻撃なんて当たる訳ねえだろ?」

「何・・・!?!司達・・・だと!?!お前まさか、ワンダシヨのメンツと知り合いか!?!」

ワンダシヨ?ああ。ワンダーランズ??シヨウタイムの略称かなんかなのか?まあ、どうでもいいか。

霊斗「そんなのどうでもいいだろ？そろそろ飽きてきたしな。

これで終わらせてやるよ。」

俺は変身した時に使ったカードとは違う、黄色のカードを手に取り、ベルトに入れる。

『FINAL ATTACK RIDE D I D I D I DEC ADE!!』

音声と共に、俺の目の前には複数のデイケイドのマークが描かれたカードが現れる。そして俺は跳躍し、必殺技・・・よし、次元の蹴りという意味で

デイメンションキックと名付けよう。デイメンションキックを、繰り出した。

霊斗「おらああああ!!」

カードを通るたびに右足にエネルギーが溜まっていくのがわかる。そして最後のカードをくぐり、奴に向けて突貫し、俺の蹴りは奴に直撃した。

『ぎゃああああああ!!!』

蹴りを受けた奴は、吹き飛び壁に激突して気絶した。すると気絶したのが原因なのか、奴の変身が解けた。そして俺は奴が変身した時に使っていた物を手に取る。

霊斗「これで変身するんだよな・・・？これ、どうする・・・？俺が持つてもいいのか？まあ、持つておくか。」

俺は奪った物をカバンにしまう。俺も変身を解いて、自身の使ったベルトを見る。

霊斗「神様からもらった力・・・結構いいな。守る為に使えるかな。ありがたく使わせてもらいます」

つて、やべ。奏の事、忘れてた。俺は奏のいる方向を見ると、近づいてくる奏の姿。

霊斗「お、奏、無事だったか？」

奏「私は平気。それより、男の人、どうなったの・・・？」

霊斗「ん？気絶してるだけだ。その内起きんだろ。今のうちに帰っ

とけ。その様子からして、家に帰る途中だったんだろ？」

助けてる時から思っていたが、奏は手にレジ袋を持っていた。チラツと見た時、袋の中に大量のカップ麺が見えた時は目を疑った。偏食ずぎんだろ。栄養をちゃんと取れ。

奏「うん。今日のご飯、無くなつてたから買いに行つてた。」

霊斗「そうかよ。んじや、俺はもう行くぜ。じゃあな」

奏「うん。また」

そして俺は奏と別れた。にしても、寧々と奏・・・まさかとは思うが、この世界のキャラ達つてすげえ人気だったりするのか？司達と一緒にシヨールをやってるのもかなり幸運だったりするのか？あいつの発言からして。

そんな事を考えていた俺は気づくことはなかった。奏が何故か胸に手を当てて、俺の事をじつと見ていた事。そして、それを見ていた3人の女の子の事を。

そしてさらに翌日。俺達はコンテストに向けてのシヨールの会議を始めていた。

司「よし！これからコンテストに向けての作戦会議を始めるぞ！！まず決めるべきことは、どんなシヨールをするか？だ！！観客に選んでもらうとなると、やはり、派手で心に残る、楽しいものがあるだろう！」

霊斗「派手にできて、かつ、俺達もお客さんも楽しめるシヨール…：つてなると、あれだな。なあ？類？えむ？」

えむ「うん！あれのシヨールなら、みんなワンダホーイ！つてなると思う！ねえ！類くん！」

類「そうだね。僕も霊斗くんに賛成かな。あれのシヨールなら絶対と言つていいほど盛り上がるからね」

寧々「え？あれつて何？」

霊斗「ハロウインだ。ちょうど近いだろ？明るくて見栄えもいい。姑息な手かも知れねえが、子供のお客さん達とかにお菓子とかもあげれるだろ？人気は出るんじやねえか？」

近々だしな。ハロウイン。

えむ「霊斗くんの言うとおりだよ！それにこわーいのがいっぱい
たら面白いよ！かぼちやのオバケとか、ゾンビとか、おつきなクモと
か・・・」

司「く、クモ!?く、クモはやめろ！クモは！」

寧々「いいんじゃない？いつもと違う雰囲気だし、面白そう」

司「く、クモは駄目だが・・・たしかにハロウインのショーなら面
白そうだな。よし！それならハロウインのショーで行こう！」

えむ「わーい！やったー！」

霊斗「まあ、そこまでは問題ねえ。問題なのはその次だ。ハロウイ
ンを題材にするとしてどんなショーをするんだ？ハロウインに関係
する話なんていくらでもあるだろ？」

類「それなら、『ポテトゴースト』をアレンジするのはどうだろう？」

司「ポテトゴースト？」

聞いたこともない名前だな。日本のものじゃねえのか？

類「うん。元々は海外の劇なんだけどね」

類の話によると、ポテトゴーストの話は、ハロウインの夜、遊園地
で過ごす人々を羨ましく思った死者たちが遊園地に押しかけて、人々
を恐怖を陥れる。だが、遊園地の園長が死者たちを受け入れ、最後は
どんちゃん騒ぎでハロウインを楽しむ話らしい。

えむ「わく！面白そう！」

司「ふむ、ハロウインとこの場所にふさわしいにぎやかなショーに
なりそうだな！」

寧々「うん。いいと思う。霊斗もそう思うよね？」

霊斗「おう。ワンダーステージと俺達にバッチリ合ってる話じゃ
ねえか。俺も異論ねえよ。」

司「よし、配役を決めて、早速準備に取り掛かるぞ！コンテストの
優勝は俺達がいただきだ！」

類「そうだね。そうと決まれば霊斗くん。少し手伝ってくれないか
い?。」

霊斗「ん？俺か？何だ？」

類「ここを開けるのを手伝って欲しいんだ」

類が示した場所はワンダーステージのちょうど真ん中の床。

霊斗「あ、そう言うことな。それなら・・・いくぞ?セーの!」

俺と類はステージの床を取る。取った場所には、埃が凄いが、床下にスペースがあるのがわかる。

司「げほっ!凄いい埃だな・・・しかし、舞台下にこんな空間があったとは・・・」

霊斗「元々は道具をしまう場所だったんだろ?けどよ、類、ここを使つてなんかやるのか?」

類「そうだよ。折角だしね。ここを奈落として使おうかなって」

えむ「ならく?」

寧々「舞台の下にあるスペースの事。役者が出たり、入ったりするのに使うこともあるの。」

類「まず・・・この空間に、僕が作ったゾンビロボットを待機させるんだ。そして、最初の山場、死者が蘇るシーンで、この奈落からゾンビロボットを出現させようと思う。地中から死者が蘇った様に。そして、主人公の園長である、司くんは死者から逃げ回る。けど、客席からもゾンビロボットが現れて絶体絶命になり・・・」

類「そして、この奈落に引き摺り込まれてしまう。そんな風にしようと思うんだ。どうだい?」

えむ「わーっ♪すごく面白そう!」

司「ふむ。悪くない。危機の演出は大きい方がいい。その後がより劇的になる。だが、そのゾンビロボットは類が作るのか?ショーまでに間に合えばいいが・・・」

類「ああ。それならもうここにあるよ」

司「何!?!」

類「いやあ、先日アイディアを思いついた時に、もう作り始めていてね」

霊斗「そういや、今朝やたらデケエ荷物持ってたよな・・・もしかしなくてもこれかよ・・・」

ネネロボ並みのデカさだったぞ。持ってきた荷物のデカさ。

えむ「じゃあ、すぐ練習できちゃうね！やろうやろうーっ!!」

類「それじゃあ、ゾンビロボットの動作確認も兼ねて、一回流れを確認しようか。」

司「よし、オレが奈落から出てきたゾンビロボットに引き摺り込まれればいいんだな？」

類「ああ。下にはマットが敷いてあるし、安全装置もゾンビロボットについてあるから、安心して欲しいな」

えむ「司くん！頑張れっ!!」

『あう……あう……』

ゾンビロボットから音声が流れている。声までリアルだな。

司「うう……ロボットだと分かっていても、不気味だな……よし！いいぞ！」

類「それじゃあ始めようか！」

司『い、嫌だ！俺はこの園長だぞ！どうしてこんな目にあわなきゃならないんだ!!』

『あう……あう……』

司「や、やめろっ!!」

司は台詞を言った後、奈落に落ちる。ポフツと、音が鳴ったところを見るに、ちゃんとマットに落ちた様だ。

寧々「ふふ、いい感じ」

類「うん。動作も問題ないみたいだね。ありがとう司くん！バッチリだよ！」

司「そうかそうか！さすがの名演技だっただろう！それじゃあここから出るぞ。よいしょつと……」

奈落から上がってくる司。これでゾンビロボットの動作確認は終わったはずだった。だが。

『あう……あう……』

霊斗「……？おい、類、ゾンビロボットがまだ動いてんぞ？」

類「え？おかしいな。動作は止まる様にしてるはずなのに……」

類が操作して停止しているはずのゾンビロボットがまだ動いている。更に奈落から上がった司の服を掴んでいるのだ。

司「うわっ！服を掴むな！バランスが崩れて・・・！」

霊斗「・・・っ！司！」

俺は司の元へ駆け寄る。その瞬間、バランスが崩れた司はもう一度奈落へと落ちていく。だが間一髪で、俺は司の手を取ること成功する。そして、俺はそのまま勢いをつけて司を引き上げた。だが、勢いをつけたせいで、俺と司の位置が逆転する。つまりどうなるか。

霊斗「マジか・・・っ！」

俺が落ちるのだ。奈落へと。マットが敷いてあるとはいえ、司を助けたことよって、俺もバランスが崩れている為、俺は頭からマットへと落ちた。俺が覚えている記憶はここまでだった。

霊斗 s i d e o f f

司 s i d e

類のゾンビロボットに引つ張られ、奈落へと落ちるはずだった俺はステージの上にいる。それは何故か、霊斗が俺を助けてくれたからだ。だが、その拍子で、霊斗が奈落へと落ちてしまった。

司「っ！！霊斗！！」

俺はすぐさま奈落の下を確認する。そこにはマットの上で気絶している霊斗の姿。俺はすぐさま奈落の下へと降りて、霊斗に駆け寄る。

司「霊斗！しっかりしろ！」

マットに落ちた為、幸いにも外傷は見当たらない。俺は少し安堵した。

えむ「司くーん！霊斗くんは大丈夫!?」

ステージからえむの声が聞こえる。顔を上にあげると、えむだけではなく寧々や類が心配している表情をしている。

司「ああ！怪我はしていないみたいだ！今から霊斗を上にあげるから、手伝ってくれ！」

類「分かった!!」

類が奈落の下へと降りて、2人で霊斗をステージ上へとあげる。もちろん寧々やえむも手伝ってくれたぞ。そして、霊斗が目を覚ました

のは、日が沈みかけている夕暮れの時間だった。

霊斗 side

霊斗「・・・はっ!？」

目を覚ました俺の目の前に広がったのは夕日の光。どうやら奈落から落ちてから大分時間が経っていたらしい。周りを見ると、司達が俺を囲んでいた。

寧々「あ！霊斗！怪我はない!?大丈夫!？」

霊斗「お？お、おう。少し頭は痛いが平気だぞ?」

えむ「よ、よかったく心配したよ」

霊斗「・・・何があつたし？司を助けて、俺が奈落に落ちた後の記憶がねえんだが?」

司「気絶していたんだ。幸いにもマットの上に落ちたから怪我はないぞ。」

類「本当にすまない。2人とも。ゾンビロボットに誤作動が起きたみたいだ」

霊斗「いや、まあ頭打つただけだし、平気だぜ?こんな怪我すぐ治る。それに誤作動があつたとはいええ、演出としては完璧だろ?今度は俺達も気をつけておくからよ。この調子で色々演出考えていこうぜ?類。」

類「霊斗くん・・・ああ・・・」

司「よし。今日はこの辺にしておこう。霊斗が無理をしたら大変だからな。明日から本格的に練習していくぞ!」

えむ「う、うん!」

霊斗「悪いな。みんな。」

今日の俺たちの練習はいつもより早く終了した。多分、気に掛けてくれたんだろう。そして、俺は家に戻った後、携帯を開く。画面に映し出されているのは、untitled。昨日行ったセカイへと繋がる曲であった。

霊斗「行ってみるか・・・またなって言ったし。」

俺はuntitledを再生して、セカイへと入る。目を開くと、

目の前に朝比奈さんがいた。

霊斗「お？朝比奈さん。」

まふゆ「霊斗・・・また来たんだ。」

霊斗「また来るって言っただろ？」

まふゆ「そう。」

霊斗「それにしても、ここって、朝比奈さんと俺しか来れないのか？」

前来た時も、朝比奈さんだけだったし・・・

まふゆ「ううん。他にも人はいるよ？今は来てないだけ。」

「・・・まふゆ」

朝比奈さんと話していると、彼女の声ではない声がした。朝比奈さんの後ろに誰かいたのだ。そこにいたのは。

霊斗「やつぱりここにもいるのな。初音ミク」

初音ミクの姿。だが、司のセカイにいた初音ミクとは全然違う。左右で違う色の光の無い瞳。ミクの特徴である髪は、白色だ。

ミク「・・・誰？」

霊斗「俺は鬼灯霊斗。よろしくな。」

ミク「・・・まふゆが、呼んだの？」

まふゆ「違う。霊斗の携帯に、untitledが入ってたらしいの。」

霊斗「んで、再生してみたたらここにいたわけ。まあ、たまに入ってくると思うからよろしくな」

ミク「・・・うん。」

・・・普段の初音ミクを見慣れているからなのか、司のセカイの初音ミクを見慣れているからなのか、すげえ違和感を感じるな。

すると、

「ああ！ここにいた〜！」

「ちよつと！まふゆ！」

「・・・疲れた」

朝比奈さん呼びかける新たな声。どうやらミクの後ろから聞こえてきている。視線を向けると、3人の女の姿・・・って。おい。あ

の2人・・・

霊斗「暁山？奏？」

3人中2人は見覚えがある。何せ、片方は今日助けた宵崎奏であり、もう片方は一昨日出会った暁山瑞希だったのだから。

無意識の我慢 突然の出来事

奏「……？何で霊斗がここにいるの？」

瑞希「あれ？霊斗先輩じゃん！どうしてセカイにいるの？」

俺が朝比奈さんのセカイにいる事に驚いている2人。まあ、当たり前だろうな。

霊斗「あく……俺の携帯にもuntitledがあつてな。再生したらここに來たつてわけ。ちなみに何日か前にも一回來たぞ。その時は、朝比奈さんだけにしか会ってないしな。」

瑞希「えく？まふゆ、何で言ってくれなかったのく？」

まふゆ「……？聞かれなかったから？」

「だとしても報告ぐらいしなさいよ……それより、あんたがKが言つてた鬼灯霊斗……って奴？」

霊斗「おう。そうだ。そっちは？」

「東雲絵名よ。よろしく。」

霊斗「東雲さんな。にしても、奏や暁山がいるつてことは……暁山が言つてたサークルつて奴なのか？ここ」

瑞希「そうだよー！ここは僕達、ニーゴの大切な場所でもあるんだよ♪」

霊斗「ほーん……大切な場所ね。」

大切な場所……俺にもそんな場所があつた。司達と一緒にいるワンドーステージもそんな場所であると言えるか。だが、あの場所は……

「……斗？……霊斗？」

霊斗「……っ……何だ？」

奏「何かあつたの？黙り込んでたけど……？」

霊斗「……いや、何でもねえよ。悪い。俺はもう戻るわ。またな」俺は逃げるようにセカイから出て行く。奏達には悪い事をしちまつたかな。

霊斗「今度、謝るか……何か、お詫びとか持つてくか」

俺は、彼女達に次会つた時に謝罪を決意し、眠りについたのであった。

奏 S i d e

瑞希「・・・僕、何か悪い事言っちゃったかな？」

霊斗がセカイから抜けた後、瑞希が苦笑いしながら呟いた。

絵名「別に瑞希は変な事言っていないでしょ。あれは多分、あいつ自身の問題よ。」

奏「・・・霊斗も、私達みたいに、何か抱えてるのかな・・・？」
彼と会った時から違和感があった。眼帯と包帯、普通の人なら絶対つけてない物を彼は付けてる。私も、初めて会った時から気になっていた。

ミク（ニーゴ）「・・・奏達とは違うと思う」

今まで、一言も話さなかったミクが突然口を開いた。

まふゆ「・・・？どうして？」

ミク（ニーゴ）「彼の目・・・何も見えなかったから。それに、彼の苦しみはここにいるみんなとは全然違う。」

奏「それって・・・？」

ミク（ニーゴ）「今のみんなには・・・絶対、彼は救えない」

ミクが言ったその言葉が、私の胸に突き刺さった。

霊斗 s i d e

奏達と再会した後の翌日、俺達はワンダーステージでの打ち合わせを終え、練習が開始されようとしていた。

司「よーし！それじゃあ今日から本格的に練習開始だ！」

えむ「おーっ・・・でも、霊斗くんは怪我大丈夫？もう痛くないの？」

寧々「おもいつきり頭打ったんだから、無理しないでね？司みたいに、頭がアレになったら困るし」

司「おい！さりげなく俺をデイスるな！」

司を軽くデイスりながらも、心配してくれる寧々とえむ。・・・ありがてえな。

霊斗「問題ねえよ。こんなところで怪我したら、みんなに迷惑かける

しな。今は、コンテストに向けて練習あるのみ。だろ？」

えむ「霊斗くんがそういうなら……りょうかい！」

寧々「じゃあ、台本の読み合わせから始めよつか。類、台本コピーしたって言ってたけど」

寧々が類に呼びかけるが何も反応がない。俺達は類に視線を向けると、考え込むように集中する類の姿。

寧々「類？聞いてる？」

類「ん？ああ。台本はここにあるとも。早速始めようか！」

寧々「……うん」

類から台本を受けとり、俺達は最初に公演するショーの台本の読み合わせをして行く。

えむ「園長！今日はなんだかいつもより、たくさんのお客さんが来てくれてますよ！」

司『何？それは喜ばしいな。どれどれ、どんなお客さんが来ているか見てみよう……ん？』

司『な、なんだあれはー!?墓の中から出てるじゃないか！もしかして……いや、もしかしなくても死者の群れだ！こっちへ向かってきてるぞー！』

えむ『うわ！本当だ！ちよつと臭そうですねー！』

司『そういう問題じゃない！早く、お客さんたちを逃さなければ！死者の群れに襲われる前に！』

司とえむの演劇の最中、死者の群れが現れるシーン。この後司は、観客に向かって避難を呼びかける。

類「ここで司くんが客席の中央へ。観客へ呼びかける。」

司『みんな！早くここから逃げるんだ！死者達がやってくるぞー！』

類「そして、このまま死者の群れに向かって……」

そこで類の言葉が途切れる。すると。

類「いや、司くんにはここで舞台に戻ってもらおう。そのまま次のセリフに……」

霊斗「ん？そんな地味でいいのか？最初の死者の群れが出るシーンだ。観客に臨場感を与えるなら、もう少し盛り上げたほうがいいん

じゃねえの？」

類「ああ。そうだね……」

司「霊斗の言うとおりで！なんだったら、俺が死者の群れと戦うでもいいぞ！」

えむ「カツコいく！私もそれやりたい！」

霊斗「それだったら、ロボットのの中に俺も混ざって、司に襲い掛かれればいいか？それなりには動けるから、苦戦しているシーンっぽくないじゃね？」

寧々「うん。いいかもね。一体に苦戦したら、死者が大変な相手つてこともよくわかるし」

類「……うん。そうだね。一体に苦戦してる間に、反対方向から死者の群れが迫ってくる。じりじりとステージの端まで追い詰められて、背中側から近づく死者……臨場感があるね」

話を聞くと、相当怖そうだな。この話。

司「ふむ、全員の目が俺に釘付けになるわけだな！」

えむ「それでそれでっ？」

類「死者が一齐に迫ってきたところで、司くんを霊斗くんが助けるんだ！」

霊斗「ん？俺？つてことは、俺がロボットの一体になるってわけにはいかないか。んで？どうやって助けた？ワイヤーアクションか？」

類「司くんには一回跳躍してもらおうんだよ！空中で回転した後、死者達の上空を超えて……！司くんの腕を、ワイヤーアクションで霊斗くんが掴み……」

えむ「すっごくおもしろそうだねー！」

司「ああ！派手で、俺と霊斗にぴったり演出だ！類！次は？」

類「いや……この後のテンポを考えると、今の流れはあまり良くないかな。」

司「……え？」

……類のやつ、なんかあったのか？さつきから、言ってることをやめてってるし……

類「ここの展開は、僕の方で考えておくよ。先に、この後の演出を考えよう」

寧々「・・・類？」

所々、気になることはあったが、着々と演出を決めていき、ここで問題のシーン。

司「よし、次は俺が奈落に引き摺り込まれるシーンだな！前回は、霊斗が足を引つ張られて、それどころじゃなかったが、今度は見事に決めてやるぞ！」

類「・・・それなんだけどね。司くん。演出を変えてみようと思うんだ。」

司「何？」

霊斗「・・・」

類「前は司くんがゾンビロボットに引き摺り込まれる流れにしたけれど、観客からは奈落の中が見えづらいだろう？だから、舞台の奥からゾンビロボットが現れるようにしたいんだ。死者が迫ってくる様子がわかるようにね。」

類「司くんには、マイムで引き摺り込まれる演技をしてもらおう。そっちの方が、全体的に見ると派手だろう？」

司「まあ、それもわるくはないが・・・本当にそれでいいのか？」

類「？どういう意味だい？」

司「せっかくのハロウィンショーなんだ！もつと斬新なことをやるべきだ！いつも以上にやる気だぞ、オレは！それに、引き摺り込まれるマイムだけでは、臨場感が足りないだろう？やはり、前のように奈落から死者が出てきた方が、観客も一緒に恐怖を味わえるんじゃないか？いっそ、10体のロボットが俺を引き摺り込むのはどうだ！そっちの方が、派手で目立つだろう！」

寧々「10体でって・・・霊斗がこの前ケガしそうになってたのに、10体は危なくない？」

司「問題ない！前はうっかりしていて、霊斗に庇ってもらったが、本番では必ずやりきる！多少危険に見える方が、ハラハラ感が増すはずだ！」

司の言ってる事は俺も正しいと思う。俺たちの良さは良くも悪くも、観客と一体になるショーだという事。臨場感を一緒に感じてもらえるからこそ、楽しんでもらえるものだ。

司「どうだ？類」

類「いや……実際に引きずり込むのは、あまり舞台映えしない。このシーンなら、もつと舞台全体を使った方がいいよ。やっぱり、さっきの舞台奥から現れるプランに……」

霊斗「……類、お前いい加減にしろよ？」

類「……？どういう意味かな？霊斗くん。」

こいつ……気づいてないのか？

霊斗「さつきから聞いてたら、演出を変える？いつものお前なら、多少危険でも、お客さんを楽しませる演出をするはずだ。だが、今日のお前は、いつもと違う。」

類「いつもの僕と違う？そうかな。僕はいつも通りなんだけど。どこがいつもの僕と違うんだい？」

霊斗「単刀直入に言わせてもらおう。」

類「お前は、俺が怪我をするかもしれないから、自分のやりたい演出を我慢してるだろ？」

類「……何を言ってるんだい？霊斗くん。僕はただ、一番いいと思っただけ……」

霊斗「嘘つくなよ。俺や司にはわかってんだよ。だろ？」

俺は、視線を司に向けると、俺の方を向いて、あいつは強く頷いた。霊斗「お前がやりたい演出を言ってるときは、いい笑顔してんだよ。けど、今、お前が言った演出を話してる時、お前は笑顔になってない。」

類「……っ！」

霊斗「お前が我慢してどうすんだよ。司は言ってたよな？『観客もショーを演じている俺達も笑顔にするスターになる』って。お前が笑顔になってなくてどうすんだよ？」

類「僕は我慢なんてしてない！見当違いなことを言わないでくれ。」

えむ「す……すと〜つぶ！霊斗くんも、類くんも落ち着いて！ね？」

寧々「う、うん。ちょっと冷静になろうよ」

霊斗 類「……」

俺達は無言の中でも、睨み合っている。だが。

霊斗「……悪かったな。好き勝手なこと言ってよ。だが、俺は自分の言った事が間違いだとは思わない。類……今のお前はショーや演出を楽しんでない。あの時の類じゃない……今日は俺、帰るわ。」

寧々「あつ……！」

俺は振り向く事なく、ワンダーステージを去っていく。以前、ショーの失敗をした時の、司と類を思い出しちまう。あの時の二人も……こんな感じだったんだな。まあ……

この虚しさ……慣れてるけどな。

寧々 side

霊斗が去った今、私達の空気は沈んでいる。ショーを失敗した時ほどじゃないけど。

司「正直なことを言えば、俺も霊斗の言っている事は間違っていないと思う。」

えむ「司くん？」

司「今日の類は変だぞ？いつもなら多少の危険はありつつも、お客さんに楽しんでもらえる為の演出を組んでるはずだ！類、霊斗の勘違いかもしれない。だが、類は俺や霊斗の為に、安全で安心な演出を提案していないか？」

類「……え？」

司「類、我慢しなくていいんだ。俺や霊斗はお前の演出に応える！だから、お前は自分のやりたい演出を提案してくれ！えむ！寧々！すまない！俺も帰るぞ！」

えむ「へっ？わっ！つ、司くん！待ってよ〜！」

司とえむも帰っちゃって、残ったのは私と類の二人だけ。

類「・・・寧々から見ても、今日の僕はどこか変なのかい？」

寧々「え・・・？うん。なんだか、いつもの類じゃないって思う。この間までは、楽しくてしょうがないって。目をキラキラさせてたのに。今は・・・もう、そうじゃないって思う。」

類「そうかい・・・ショーで手を抜くってことはしてないつもりだけど・・・霊斗さんと寧々がそういうなら・・・そうなってしまったるんだらうね。」

寧々（類、自分が無意識に遠慮しちやつてることに気づいてないみたい・・・私が・・・伝えなきゃ・・・でも・・・あの時も、何もできなかつた・・・そんな私に・・・助けられるのかな・・・けど、私がどうにかしないと・・・）

私が決意した時、二人の顔が思い浮かんだ。困った時に助けてくれたあの二人の事を。頼ってみよう。類の事も。

寧々「ねえ、類。」

セカイに行ってみようよ。」

霊斗 side

霊斗「・・・何やってんだらうな・・・俺」

ワンダーステージを去って、俺は街の中をぶらぶらと歩いている。ただ真っ直ぐ帰ればよかったのかもしれない。けど、何故か、俺はそうしなかつた。

霊斗「・・・こういう時は・・・」

俺は首にかけているヘッドフォンとスマホを繋ぎ、周辺の音が聞こえるぐらいの音量でスマホで曲を流す。最近聞いているボカロを聴きながら、歩き、ついた場所は、近くの公園。ベンチに座り、周りを見る。

すっかり暗くなり、公園には人がいるはずもない。ヘッドフォンか

ら流れる音楽だけが鳴り響く。瞳を閉じ、音楽に集中する。楽器の音や、歌っているボーカロイドの声。

霊斗（やっぱ、この時間がいい・・・）

そして、曲を終えて、ヘッドフォンを外す。すると、その直後だった。

「・・・霊斗？」

俺の名前を呼ぶ声がした。俺は声のした方へ視線を向けると、そこにいたのは、ついこの間会ったばかりの宵崎奏がそこにいた。

霊斗「・・・奏？何してんだよ？」

奏「買い物。カップ麺切らしたから」

霊斗「・・・前も思ったけどよ、お前。カップ麺しか食わないの？」

奏「ううん。たまに家事代行の人が来てくれたりするから、その人が作ったご飯とか食べたりにしてる」

霊斗「そっか・・・」

奏「・・・？何かあったの？」

霊斗「あ、いや、なんでもねえよ。気にすんな。」

・・・とは言ったものの、あからさまに俺が落ち込んでるのバレバレなんだよな。そういうふうに見せてるみたいなものだけど。心の中じゃどうとも思ってたねえし。すると。

奏「・・・霊斗、明日って予定、ある？」

霊斗「・・・は？」

何を言ってるんですかね、こいつは？

霊斗「いや、特にはねえけどよ・・・」

奏「・・・だったら、家、来て？」

霊斗「・・・は？」

・・・は？

彼女の傷 過去の傷

奏「……入って」

靈斗「……お邪魔します」

「……いや、何でこんな事なつてんだよ？公園で音楽聴いてたら、買い物帰りの奏に会って、何で家にお邪魔してんだよ？普通おかしいだろ？しかも夜だろ？友達でもない男をあげんなよ。」

靈斗「つてか、何気に女子の家に上がるのつて……初めてだよな……と、思いつつ、リビングに連れて行かれ、奏に言われてソファに座る。奏は俺の隣に座る。」

靈斗「んで？俺を家にあげてなんかあるのか？家に来いって言つてたからついてきたけどよ」

奏「うん。靈斗と話がしてみたかったから。前にセカイであった時、すぐ帰ったから。」

靈斗「あー……それは悪かった。」

奏「別に気にしてないからいいよ。けど、何ですぐ帰つたの？」

靈斗「……昔の事、思い出して、ちよつとな。今度、セカイに行つた時、他の奴らにも謝るつもりだから。」

奏「そつか……」

「……朝比奈さんといい、こいつもあんま表情変わんねえな。読みづらい……」

靈斗「……そういや、さつきから気になつてたけどよ。この家、お前しかいないのか？両親は？」

普通なら、両親が『お帰り』っていうもんだろ……

奏「……お母さんは昔、死んじゃつて……お父さんは病院……」

靈斗「……悪い。」

「……奏も、俺みたいなの奴だったんだな。俺以外にも……」

奏「別にいいよ……こつちからも質問、いい？」

靈斗「お、おう。何だよ？」

奏「靈斗は……何か抱えてたりする……？昔、何かあつた……とか。その……前、セカイで会つた時も、CDショップで会つた時

も気になったから。眼帯とか・・・」

・・・まあ、気になるわな。前、朝比奈さんと話してた時も質問されたし・・・今更、話さないってわけにもいかないよな。

霊斗「・・・俺も同じなんだよ。お前と。」

奏「え・・・？」

霊斗「昔、俺は両親が死んでる姿を目の前で見てる」

奏「・・・・・・っ」

・・・俺の言葉に、流石の奏も若干だが、驚いた表情をしている。まあ、そうだろうな。

霊斗「家に強盗が入ってきてな。俺はその時、学校行ってて、助かったんだよ。けど、帰ってきたら親父もお袋も死んでた。その後、犯人は捕まって、俺は一人暮らしを始めた。だけど、想像以上に俺は両親が死んだことにショックを受けてたみたいでな。飯の味がしなくなって、その時の事、まったく覚えてないんだけどな？俺のこの左目と両腕にナイフを突き刺して、左目の失明と、両腕に傷痕が残ってる。それを隠す為に、包帯と眼帯をつけてんだよ。後は・・・まあ、感情がほとんどない・・・そんなところか？」

・・・改めて説明したが、俺、転生前の人生ってやばいか？これ？
奏「・・・そっか。」

・・・こんな話、聞きたくもなかったよな。奏の表情が・・・そういう物語ってる。

霊斗「まあ、こんな話もういいだろ？つか、俺の昔の話、聞きたいが為に呼んだのかよ？」

奏「・・・ん。そうだけど・・・？」

霊斗「マジで・・・？けどよ、よく知りもしない男、家にあげるなよ。俺が襲いでもしたらどうするよ？」

奏「・・・襲うの？」

霊斗「・・・いや、するわけねえだろ？言葉の綾だ。そんな事でもあったらどうすんだ？って話だ話」

何でこいつは純粹というか・・・何というか・・・

奏「なら、別にいいでしょ・・・？」

霊斗「いいわけねえだろ・・・はあ・・・」

なんつうか・・・俺が特別普通じゃねえと思つてたけど・・・奏も普通・・・ではないよな・・・

霊斗「とにかく、俺じゃなかったら、何が起きるか分からねえんだよ。お前、自分の事、大事にしるよ？お前、何つうか・・・周りの奴らに目、行き過ぎなんだよ。たまには、自分の事、労つてやれ。」

奏「・・・わかった。なるべくそうする。」

霊斗「それ、やらない奴の言葉な？まあ、信じてはみるけどよ。んじやあ、俺、明日やる事もあるし、帰るな？」

類の件もあるし、色々まだ考える事もあるからな・・・。そう思いつつ、俺は立ち上がり、玄関へ向かう。が、袖を引かれて俺は立ち止まる。後ろを振り返ると、奏が俺の袖を軽く引っ張っていた。

霊斗「・・・どした？」

奏「・・・霊斗、連絡先・・・交換してくれない？」

霊斗「・・・まあ、別にいいけどよ」

俺はスマホを取り出し、連絡先を奏と交換する。こんなにも早く、新しい連絡先を交換するとは思ひもしなかった。

奏「ん。ありがとう。」

霊斗「おう。んじや、また。またその内、セカイに来るからよ」

奏「うん。また。」

奏の家を出て、俺は自分の家へと戻る。これで、俺の話をしたのは・・・朝比奈さんと奏の2人。俺の前世の話をすることは・・・まあ、無いとは思つたなかったが、こんな早く言うことになるとは思つていかなかった。

霊斗「・・・この話・・・司達に話したら・・・どんな反応をするんだらうな・・・？」

いつもみたいに、笑顔で話しかけてくれるだろうか？今現在、類とも口論になって、雰囲気が悪くなっているというのに・・・

また・・・俺は大切な存在を失うのだろうか・・・？

霊斗「・・・考えるの、やめるか。明日考えればいいだろ」

俺は足早に、自分の家へと帰つていく。少しだが、奏と話して心が

軽くなったと思いがら。

奏 side

奏「・・・あ、ナイトコード・・・」

霊斗が帰った後、私はナイトコードを開き、作曲の準備をする。すると、Amia・・・瑞希が入ってきた。

瑞希『あ！Kがいるく♪やつほー♪』

奏『・・・Amia』

瑞希『えななんと雪は？』

奏『わからない。雪は学校だと思うけど・・・』

瑞希『そっかく。まあ、多分えなさんは、写真を撮ってるだろうし・・・最初は僕達2人で作業する感じかな？』

奏『そうだね・・・』

瑞希『・・・K、なにかあった？いつもより、元気ないような感じがするけど・・・？』

奏『・・・？そんな事ないと・・・思うけど・・・？』

何かあった・・・つて言われても、変わった事は・・・霊斗が家に来て、話したくらいだから・・・

瑞希『えく？そうかなあ？例えば・・・うーん、あ！霊斗先輩とまた会ったとか！』

Amiaの言葉に私はドキツとした。Amiaはたまに鋭い時がある。今の言葉は例えで言ったんだろうけど。

奏『・・・会ったけど・・・？』

瑞希『え!?!当たってた!?!僕って鋭い♪それでそれで？Kが霊斗先輩と会って何してたの？教えてよ♪』

Amiaの声が少し明るくなりながら私に聞いてくる・・・だけど、Amiaに話しているのかな・・・？霊斗と話していたときのこと・・・ううん。話さないほうがいいよね・・・

奏『・・・音楽が好きなのか聞いたただだよ？会った時、公園でヘッドフォンつけてたから、何聞いてたのか聞いてみただけ。』

Amia『え？そうなの？それならもしかして、僕達が作った曲も聞いてくれたりするかもね？』

奏『うん。そうかもね。』

もしそうだとしたら・・・霊斗も救えてると信じたい。まふゆみたいに彼の壊れている心が少しでも救えていると。私達の曲で。

奏（だけど・・・もし、霊斗を救えなかつたら・・・？あの時・・・霊斗が昔の事を話してくれてた時・・・霊斗は無表情だった。だけど・・・）

私は見た。霊斗の目が・・・真っ暗だった事を。まふゆとは違う・・・ミクはそう言ってたけど。ミクの言う通りなのかもしれない。彼の目・・・私を見据えているのに、何も見ていない様な、真っ暗な瞳。一体、どれくらい辛い過去を経験していれば、あんな瞳をするんだろう。

ミク『今のみんなに・・・絶対、彼は救えない』

霊斗とセカイで会った後の、ミクの言葉が胸に突き刺さる。私は・・・うん。私達は今の霊斗を救う曲を作れるのかな・・・？両親を失い、心が壊れ、自身を傷つけ続けている彼を。

奏（ううん・・・救えるかじゃない・・・絶対に私達で救うんだ・・・！絶対に・・・！）

私は心にそう決めた。私を助けてくれた彼を。今度は私が救う番なんだ・・・！

1人の少女は誓う。1人の少年を救う決意を。

これから、ワンダシヨとニーゴ・・・この二つのグループを巻き込む・・・事件が起こるとも知らずに。

仲直り

靈斗が奏と話していた時、私と類ははセカイへと来ていた。靈斗と類が少し言い合いになってしまった事をカイト達に話し、相談する為に。

カイト「そうか・・・そんな事があつたんだね」

類「ああ・・・どうすればいいか、見当もつかないんだ。自分では、遠慮も手加減もしてるつもりはないんだけどね」

カイト「手加減や遠慮か・・・それじゃあ、今まではした事がないんだね？」

類「うん。まったくね。むしろ、手加減ができないあまり、遠巻きにされているぐらいだったよ。」

カイト「遠巻き・・・？どういう事だい？」

寧々「類は昔から、色んな人とシヨウをしてただけど・・・類の考える演出についていけないって人が多くて・・・」

類「僕から離れてく人が多かつたのさ。もちろん、僕のアイデアを見て、『できたら面白い』って言うってくれる人も少しはいたんだ。けど、そんな人達も、僕が次のアイデアを持つてくると、段々煙たがる様になつてしまつてね」

類「そんな事を繰り返すうちに・・・気づいたら1人になつていたんだ。」

寧々「・・・」

あの時の類の顔・・・今でも覚えてる。無理に笑つた様な顔をしてて・・・1人でやつてるって言うてすごく辛い表情をしてた。けど・・・

寧々「・・・でも、類がちゃんと、仲間のことを考えてたつて事、私はわかつてるよ。類はいつも、とんでもないこと言い出すけど、いつもちやんと、やってくれる人が怪我をしない様につて考えてた。危険に見える演出も、類のこと信じてれば怖くない。小さい頃はよく一緒にやつてたから・・・わかるよ」

類「ふふつ、ありがとう。寧々。いずれにせよ・・・僕にとつては、

何よりショーが一番なんだ。僕の演出を楽しく演じてくれる司くん達と一緒にやるショーが、何より好きだ。だから・・・遠慮なんてするはずがない。」

カイト「ああ・・・なるほど。そういう事か。類くん、君は・・・今の場所が気に入ってるんじゃないかな？」

類「え？」

カイトが納得した表情して話した言葉に、呆気に取られてる類。

カイト「司くん達とやるショーが、自分のやりたい事が思い切りできるショーだって、そう思っただけかい？」

類「それは・・・」

言い淀む類。たしかに、類の演出に司や霊斗は応えてくれている。ワイヤーアクションの時も、今回やるショーで奈落を使った演出だつて、司は了承してやろうとしていた。観客や私たちが笑顔になるスタートになるって。どんなに危険でも。

類「・・・」

カイト「思い当たる節があるかい？」

類「ああ・・・あの時、司くんを助けて、霊斗くんが奈落へ落ちた時・・・昔の仲間の様に、司くんや霊斗くんが・・・離れていくんじゃないかと、無意識に思ってしまったのかもしれない。僕はどこかで・・・全力でショーをやるあの場所を・・・失いたく無いと思っってしまったんだね。」

類「驚いたな・・・自分がこんな風を感じてしまうなんて・・・居場所を失うことを恐れて、本気で応えてくれる役者に向き合えなくなるなんて、演出家失格だね」

苦笑し、少し落ち込んでいる類。そんな類にカイトはある言葉を告げる。

カイト「・・・これは、ここにいるみんなに聞いて欲しいんだけど・・・」

カイト「ショーが大好きだからこそ、全力でできる場所と、受け止めてくれる仲間がいて欲しい。その仲間な傷ついてほしく無いと思う。それは当たり前のことだと思うよ。でも、君達の1番の目標はみ

んなを笑顔にするショーを作ること。だから・・・その想いを持ったまま、一緒に乗り越えてみたらいいと思うよ。きつと、司くん達は、その想いも受け止めてくれると思うよ。」

寧々「私もそう思う。司は・・・なんて言えばいいのかな・・・？ ショーバカ？ だし、類もショーバカでしょ？ だから、司は類を一人にしないよ。私もえむもそう。霊斗だって・・・きつと。」

類「寧々・・・ふふ。本当に、頼もしい役者ばかりだよ。それなら、期待に応える演出を考えないと、ダメだね？」

いつもの類に戻った・・・かな？ カイトに相談しに来てよかった。

寧々「それなら・・・霊斗に謝らないとね？」

類「そうだね。霊斗くんだけじゃなくて、みんなにも」

カイト「どうやら解決したみたいだね？」

寧々「うん・・・ありがとう。カイト」

カイト「ううん。逆に、頼ってくれて嬉しかったよ。また困った時はいつでも相談に来てくれていいからね？」

カイトの言葉に頷き、私達はセカイから帰る為に、私たちの曲を止める。眩い光が私たちを包み込んだ。

一方その頃、帰る途中の司を私はは追いかけている。

えむ「司くーん！ 待ってよー！ ぷきゅっ!!」

突然止まった司くんに私はぶつかってしまう。ううう、結構痛い・・・

えむ「きゅ、急に止まったらあぶないよー！」

司「・・・なあ、えむ、何で霊斗があんな風に類に言ったか、わかるか？」

えむ「・・・え？ うーんと・・・類くんの演出が変わっちゃったから？」

司「そうだな。大元は恐らくそれで間違いない。だが、それだけじゃないと俺は思う。多分・・・あれは自分に対しての言葉でもあったと思うんだ。」

自分に対して・・・？ 司くんの言ってる事、ちよつと難しい・・・

えむ「霊斗くんが自分に対して・・・？」

司「ああ。霊斗が怪我をしたから、類がやりたい演出をしなくなった事は間違いない。怪我をさせない為に、類は演出を安全なものに変えようとしてたんだろう。だが、それでは類が笑顔にはならない。霊斗はそれがわかっていたはずだ。だから、あんな風に言っただ。あいつは、仲間や友を大切に思う奴だからな。俺みたいなやつを親友だつて言ってくれたやつだ。」

えむ「・・・司くんは霊斗くんの事、信じてるんだね。」

司「当然だろう！俺の親友だぞ！！もう一度、俺とショーをすると、最初から待ってたやつだ！信じるに決まっている！」

司「それに！類も寧々も、もちろん、えむ！お前も俺の大切な仲間で友達だ！必ず仲直りをして！最高のショーをすると俺は信じている！」

えむ「・・・うん！！私も信じてるよ！」

やつぱり、司くんはすごいなあ！2人の事も考えて・・・仲直りするって信じてる・・・そんな司くんを、私は信じてるよ！

霊斗 side

翌日、目が覚めた俺は、顔を洗って、ワンダーステージに向かう。あんな事があつた手前、乗り気ではなかったが・・・謝る為にもいくしかないだろ。俺が着いた時、その場にはもうすでに全員が揃っていた。

えむ「あ！霊斗くん！おはようー！」

司「遅いぞ！霊斗！」

霊斗「・・・おう。おはよう。昨日は悪かったな。急に帰って・・・」

えむ「ううん！私はぜんっぜん大丈夫！！けど・・・」

類「・・・」

寧々「類・・・」

類が無言のまま俺を見つめている。俺も類の前に立ち、類の目を見据える。

霊斗「類・・・昨日は・・・」

類「靈斗くん。実は今日、靈斗くんにお願いがあるんだ。」

靈斗「・・・は？お願い？」

急に何言ってるんだ・・・？類のやつ・・・？

類「僕が昨日思いついた演出を、靈斗くんを試してみたいんだ。もちろん、事故がない様に、マットを敷いたり、できる限りの配慮をする。」

靈斗「演出・・・ね。」

類「それでも、何が起きてもおかしくない。僕は役者に限界を超えて欲しいと思ってしまうからね。・・・それでも、僕の考えた演出でショーを・・・やってくれるかい？」

少し不安そうな表情の類・・・昨日、あんなだけ俺が好き放題言ったのに、何か言うわけでもなく、新しい演出の提案をしてくるあたり・・・昨日何かあったわけか。吹っ切れるわけが。

・・・だったら、俺の返答は決まってる。

靈斗「当然。お前がお前のやりたい演出を提案してくるなら、俺はそれに応える。お前が・・・ワンダーランズ?? ショウタイムの演出家なんだからな」

類「ふふっ、靈斗くんらしい言葉だね。」

俺の言葉に笑みをこぼす類。どうやら・・・本当に元の類に戻ったな。

類「といっても、この演出は靈斗くんじゃなくて、司くんの時なんだけどね」

靈斗「いや、俺じゃないのかよ！」

類「もちろん、靈斗くん用の演出もあるよ？まずは司くんからなさ。実は、前々からやってみたいと思って準備をしてたんだよ。これなんだけど」

類が手に持っているのは一つのボタン。

司「ボタン？」

類「これを押すと・・・」

カチツと類によってボタンが押される。すると、ステージの奥に、

ステージの屋根を越えるのではないかと思えるほどの、壁が出来上がる。

司「な、なんだ!? ステージの奥に、壁ができたぞ!」

寧々「い、いつの間にこんなもの・・・」

霊斗「ステージの天井越えるんじゃないか?」

えむ「・・・む? あそこにハシゴがかかっている! 上まで行けちゃいそうだね!」

えむが指を指す所にはたしかに、一番上まで登れそうなハシゴがある。

霊斗「マジだな・・・っておい、ちよつと待て。まさかとは思うけどよ・・・司にこのハシゴ登らせる気か?」

類「ふふつ、さすが霊斗くん。ご明察だよ。これを使うのは、ハロウィンショーのクライマックスシーン。死者たちによって穴の底に落ちた園長は、死者たちから逃げながら、死に物狂いで、穴を這い上がる。」

類「このショーの山場の一つだ。劇的に見せたい。けれど、ただ奈落に落ちて出てくるだけじゃ面白くない。そこでだ。観客に見える穴を作る事にしたんだ。」

えむ「観客に見える穴?」

観客に見える穴・・・ステージの奥に作られた壁・・・ハシゴ・・・霊斗「・・・ステージ全体を穴の底に見立てる・・・か?」

類「その通り! 司くんがゾンビロボットに捕まり、奈落に落ちた後、ステージ上は暗転! その間に、司くんにはこの壁の一番上にまで登ってもらおう。あまり時間はないから急いでね。そして、明転と共にジャンプ! 穴の底・・・ステージの上に着地して欲しい。落下した後は、また這い上がる為に、またハシゴを登ってもらおうけど、もたもたしてたら、ゾンビロボットに引き摺り込まれるから急いでね。」

寧々「類・・・流石に危なくない・・・? あの高さからジャンプするなんて・・・」

えむ「とーっても楽しそう!!」

寧々「あのね・・・」

寧々が心配するのも無理はない。これは今までのものよりも危険な演出だ。だが、これができればショーが盛り上がる事は間違い無いだろう。

司「・・・まったく、簡単にいってくれるな。暗転中に登るのも一苦労だぞ。しかもロボットに妨害されながら、だと?」

類「でも司くんなら・・・できるだろう?」

司「ああ!当然だろう!俺はスターになる男だぞ!早速やるぞ!ゾンビロボットも準備しろ!!」

寧々「ほ、本当にやるの・・・?」

えむ「司くん!頑張ってく!!」

意気揚々と練習する為に準備をする司そして類。応援するえむ。心配そうにしながらも、どこか嬉しそうな寧々。

・・・この光景だよな・・・この場所は。

その後は、類の提案した演出を試し、時間は夕方へと進む。練習をしていた時の類の表情は、昨日とは違い、心からの笑顔だった。

えむ「類くん、すごく楽しそうだったね。」

寧々「うん。そうだね」

司「はあ・・・はあ・・・はあ・・・も、もう一步も動けん・・・!」

類「お疲れ様。司くん。どうだったかな?新しい演出は?」

司「な、何度も死ぬかと思ったぞ・・・!だが・・・未来のスターに相応しい演出だったな!これなら、観客もスタンディングオベーションをしてくれるだろう!」

靈斗「いや、そこまでするか・・・?けどまあ、類の本当にやりたい演出を見れた気がすんのは事実だな。やり甲斐もあったし。」

俺にも何個か新たな演出が追加されていたが、やり甲斐もあったから問題なしと判断したし。

靈斗「類、お前、今度からは遠慮すんなよ?お前はお前のやりたい演出を提案してくれればいい。」

類「靈斗くん・・・それなら、もう一個新しい演出を付け加えてもいいかな?今度、人1人入るくらいの水槽を持つてくるよ」

霊斗「いや、ちよつと待て。やるっていつても限度があんだろ？その水槽で俺に何やらせるつもりだ？」

類「え？いやー、大した事じゃないよ？水槽からの脱出をしてもらおうかなと思ってるだけさ。」

霊斗「どこのマジシャンなんだ？俺は？」

えむ「えへへっ♪霊斗くんと類くん、2人とも仲直りできてよかったね！」

寧々「うん。2人とも楽しそうだし・・・ちゃんと、受け止めてもらえてよかったね。類・・・」

その後、俺達は打ち合わせを終えて、解散となった。

その日の夜。俺は *untitled* を起動して、セカイにいる。あの物を持って。

セカイに入ると、その場所の近くには、朝比奈さんと一緒にいた白いミクがいた。

ミク（ニーゴ）「・・・霊斗」

霊斗「おう。えーつと・・・朝比奈さん達は？」

ミク（ニーゴ）「みんなは・・・まだ来てない。」

霊斗「そか・・・なら、待たせてもらっていいか？ちよつと、渡したい物があるんだよ。」

ミク（ニーゴ）「・・・うん。」

ミクの了承を得て、俺は適当に座ると、ミクも何故か俺の隣に座る。

霊斗「何で俺の隣に？」

ミク（ニーゴ）「・・・」

問いかけても反応なし。何なんだ・・・？そんな状態で、待っているよ、

「あれ？霊斗先輩！今日もきてたんだ？」

霊斗「ん？おー、皆さんぐー一緒に。」

声のする方へ顔を向けると、奏、東雲、暁山、朝比奈さんの全員が集まってきた。

奏「霊斗、今日はどうしたの？」

霊斗「あー、いや、別に大したもんじゃないんだけどよ……ほい。」
俺は一人一人に今日、俺が持ってきた物を渡す。

まふゆ「何……これ？」

霊斗「俺がバイトしてるフェニックスワンダーランドの入園チケット。その日、俺がやってる劇団でショーをやるから、奏達にみにきてくれないかなって思ったから。」

瑞希「え!?!僕達が行っていいの!?!」

霊斗「いや、逆に何で来たらダメだと思ってるの?つか、仲間に渡されたんだよ。『みんなにこれを配る!自分の友達に配るんだ!』って言われたからよ。俺、あんま友達まだできてないからよ。奏達に来てもらえればと思ったんだが」

マジで、俺、司達を除いたら、奏達しかいないし……ちなみに俺がもらったのは4枚。だから、ここに来たつてもあるけど。

瑞希「せっかくだし、僕は行こうかなあ?霊斗先輩が、ショーをやってる所見てみたいし♪」

絵名「……まあ、もらったから見に行くわ。あんたが、ショーなんて、想像できないし」

奏「……私は、曲作り続けたいかな……」

瑞希「ええ?折角、霊斗先輩がくれたんだよお?見に行かないの?」

まふゆ「……私も行こうかな。霊斗がくれたし。」

瑞希「ほらー、まふゆも行くって言ってるし、奏も行こうよ♪」

奏「……わかった。(霊斗の事……少しは知っておけば、霊斗を救える曲を作れるかもしれないし)」

どうやら、全員来てくれるらしい。何っーか……こういう感じのは来ない感じがしたけどな。

霊斗「助かる。サンキューな。それと……これ、この前の詫びも兼ねてんだ。」

まふゆ「詫び……?」

霊斗「この間はすぐ帰って悪かった。昔の事、思い出しちゃってな……思い出したくもない事を。」

絵名「まあ、あんたにも色々あったって事でしょ？そんなのいちいち気にしてないわよ。」

瑞希「うんうん♪僕も気にしてないからさ。あ、けど、今度、シヨツピングに付き合ってもらうからね？埋め合わせに♪」

：：：暁山、気にしてないって言ってるが、買い物に付き合えて：：：意外と気にしてるよな。：：：まあ、それぐらいならいいか。

霊斗「わかった。買い物ぐらいなら付き合ってるさ。奏も朝比奈さんも、何かあったら、俺に言ってくれ。出来る限りのことするからよ。」

奏「うん。ありがとう」 まふゆ「……………」

：：：何だ？朝比奈さんがずっと俺をみてる…………無言で。気になつてしようがねえ…………

霊斗「ど、どうしたんだ？朝比奈さん？」

まふゆ「…………何で、奏だけ名前呼びなの…………？」

霊斗「…………は？」

絵名「そういえばそうね。何で私達は名前呼びじゃないのよ？」

霊斗「いや、奏は初めて会った時から奏呼びだったし…………気にした事なかったな」

奏「私も気にした事なかった。」

奏の言う通り、全然気にした事なかったな。普通に呼んでたし。

瑞希「それなら、僕達も名前で呼んでよ！みんな、先輩と仲良くしたいんだよ♪」

霊斗「…………わかった。絵名、瑞希、まふゆ。これでいいか？」

瑞希「うん。それでよし！」

絵名「まあ、知らない仲じゃないし、別にいいわよ？よろしく、霊斗」

まふゆ「うん…………よろしく、霊斗」

奏達と少し交流した後、俺はみんなに別れを言って、セカイから俺は帰還した。シヨが行われる日、ある事件が起こることを知らずに。

破壊者 V S 創造者

類と仲直りして、ハロウィンショーへ向けての練習をし続け、数週間後、ハロウィンショー本番の日。今、ショーの開始する時間まで、俺と類は機材チェックをしている。司達には、軽く喉を慣らしてもらっている。

霊斗「・・・っと、これでよし。こっちの機材は特に問題はないな。類、そっちは？」

類「こつちも問題ないよ。ネネロボの充電も終わってるし、演出用の機材にも問題なく動いてるからね。」

霊斗「そうか。・・・にしても。」

俺は幕を少し開くと、そこには最初にショーをした時以上のお客さんが入っていた。

霊斗「・・・ネネロボ達の効果があるとはいえ、来すぎじゃね？こんなに来ると思っただけだったんだが？」

類「そんな事ないんじゃないかな？前のショーでもお客さんはすごく喜んでいてくれたし、これだけ来ても、不思議じゃないよ。」

霊斗「そんなもんか・・・？って、あれは・・・。」

お客さんの方を見ると、見知った人物達がいた。奏達だ。人が多い場所が苦手なのか、表情は少し悪い。そんな奏を連れている絵名と瑞希。そしてまふゆの姿。ちゃんと来てくれたんだな。

霊斗「こりや、失敗できないな。コンテストの一番最初のショーだし。」

類「そうだね。スタートは大事だし、後々のショーでお客様の増減にも関わってくるからね。」

霊斗「けど、俺達ならできるだろ？最高のショーってやつ・・・だよな？類？」

類「ふふっ、当然だよ。霊斗くん」

あの出来事があったから、類との仲はより深くなったような気がする。・・・司とおんなじ位の仲には俺はなっただと思ってる。っと、そろそろだな。

霊斗「おーい！司！えむ！寧々！こっちの準備終わったぞ！そっちはどうなんだ？」

司「こっちも終わったぞ！俺はいつも通り、最高の状態だ！」

えむ「うん！今日もいいショーができる気がするよっ！」

寧々「私も大丈夫。」

霊斗「うし、なら公演の準備OKだな。そろそろ時間だし．．．いつものあれ、やっとか。えむ。頼むな」

えむ「うん！みんな、今日もお客さんを笑顔にして楽しいショーにしようね！」

ワンダホーイ！」

司 寧々 類 霊斗

「「わんだほーい！！」」

俺達専用の、掛け声をしたあと、ハロウィンショーの幕が上がる。

奏Side

私達は霊斗からもらったチケットで、フェニックスワンダーランドに来てる。霊斗からショーをする場所の事は教えてもらったから、色んな場所を回ってから、来ている。

瑞希「ここじゃない？霊斗先輩が言ってたステージって？」

絵名「初めて来たけど、たしかに楽しいけど、無駄に広いから歩くの疲れるのよね。それに、霊斗がショーをするステージって更に離れた場所にあるから余計に疲れる」

まふゆ「そうかな．．．？私は大丈夫だけど．．．？」

瑞希「あ、あはは．．．まふゆは大丈夫かもしれないけど、奏が大変そう．．．大丈夫？奏？」

奏「だ、大丈夫じゃない．．．人が多いところは苦手．．．．．」
こんなに人がいるなんて．．．人気な場所なのは知ってはいたけど、ここまでとは思ってなかった．．．すると、ブーっ！と言う音が鳴り、ステージの幕が上がると、お客さんは拍手や歓声を上げる。

瑞希「あ！始まるよ！」

私達は、幸運にも、見やすい場所の席を確保できたので、座りながら、ショーを見始める。演目はどうやら、ハロウインを題材にしたショーみたい。遊園地の園長が、墓地から蘇ったゾンビから逃げている。

まふゆ「・・・ショーってこう言う物なの・・・？」

絵名「さあ？私もみた事ないからわからないわよ。けど、破茶滅茶な感じがするわね。」

奏「けど、周りの人たちは、笑ってるよ・・・？臨場感があるからなのかもしれないけど・・・」

そう。このショーは臨場感がすごい。ショーの物語を体験してる・・・って言うのかな？そんな感じがする。すると。

『おーい！園長！』

聞き慣れた声が聞こえてきたのは。ステージに目を向けても、いるのは園長役の人だけ。すると。

『ワアアアアア！』

という歓声が上がリ、歓声の上がつた方へ視線を向けると。そこには・・・園長に襲い掛かろうとしていたゾンビを退けながら、向かってくる、霊斗の姿があった。

瑞希「あ！霊斗先輩だ！」

絵名「あいつ、本当にショーの手伝いしてたのね・・・」

まふゆ「意外・・・」

奏「・・・」

霊斗が出てきてから、周りの人の歓声がより大きくなった。多分、霊斗はお客さん達に人気なんだと思う。そうじゃなかったら、こんなに大きな歓声上がるはずがない。

絵名「なんていうか・・・セカイであった時とはまるで別人みたいよね。どっかの誰かさんみたいに」

まふゆ「・・・？誰の事・・・？」

絵名「あんたの事に決まってるでしょ!!何よその、そんな人もいるんだあ。みたいな顔！」

奏「絵名、静かにしてた方がいいよ。」

絵名「あつ……ごめん……」

絵名を指摘した後、私はもう一度、霊斗に目を向ける。

『園長……ここはもう危険です！逃げましょう！お客さま達も全員の避難が終わりましたので！』

『そうか、よし！私達も逃げよう！』

金髪の髪の人と霊斗がゾンビから逃げている。四方八方からゾンビが溢れていて、とてもストーリーに、入り込める感じがする。けど、その時だった。

バンツバンツ!!と音が鳴り、周りから悲鳴が上がる。

奏「な、何……!?!」

私達は音が鳴った方を見ると、男の人が拳銃を持って、発砲している。

絵名「あ、あいつ何!?!拳銃、持ってるけど!?!」

瑞希「言ってる場合じゃないよ！これ絶対、ショーの内容じゃない!!」

『おい……ここにいる奴ら！動くなよ!!動いたら、撃つ!!』

男が脅迫をすると、お客さん達は一斉に黙り動きが止まる。ここから恐怖は始まった。

霊斗 side

何だよあいつ？拳銃……さつき撃つてたから本物だよな……下手に刺激して撃たれたらやばいし……

霊斗「司、下手に動くなよ……?なんかあつたら、お客さんに銃が撃たれるからな。」

司「あ、ああ……くそ。何でこんな事に……!」

ほんとだよな。最初のショーの時みたいになってるし……つか、あいつの目的何……?すると、奴は近くにいる奴らを人質にするらしい……1人か……?それとも……いや、複数人だな選んでる感じ……って。

霊斗（よりにもよって奏達かよ……!!）

何でよりにもよって奏達選んだよ……!いや、ちよつと待て……

あいつ、笑顔になってるよな……最初、驚いてたけど今は笑顔……嬉しい誤算ってか……？つーことは……

霊斗（なるほどな……あいつ、転生者か……しかも、他の奴らと同じ……いや、それ以上のイカれ具合か……）

すると、奏達を連れて、ワンダーステージに上がってくる男。

『おい！お前！』

霊斗「……ん？俺？」

『そうだ！お前だ！お前は何で司達と一緒にいるんだよ!!』

霊斗「はあ……？何でって……俺、ワンダーランズ??シヨウタ イムの一員だし。」

『はあ!?嘘言ってるじゃねえよ!!テメエが勝手に入ったんだろ!!』

霊斗「いや、嘘言ってるじゃないけど……つか、人質離せよ。それとも、人質いないと話すことすらできない奴か？弱い奴だな……」

その瞬間、バンツ！と音が鳴り、俺の頬に痛みが走る。ツーつと何かが流れる感覚がする。どうやら、頬を掠めて、血が流れているみたいだ。その瞬間、悲鳴が軽く上がる。奏達は、少しだが目を見開き驚いている表情だ。

『黙れよ！お前！俺の指、一つで誰か死ぬこと忘れんなよ!!』

司「霊斗!!」

霊斗「……あつそ。んで？お前の要求は？」

『……簡単だ。ここにいる草薙寧々と鳳えむを俺によこせ』

寧々「……っ!?」 えむ「ええっ!?」

霊斗「寧々とえむを……？」

『お前が気安く呼んでんじゃねえよ！この世界の女性キャラ達は全部俺のもんだ！俺はこの世界でハーレムを築くんだよ!!』

……欲望だらけの転生者だな。他の奴らの方がまだマシに見えるやがる。

全員って事は、寧々達だけじゃなく、奏達も連れてくわけだな。めんどくさい奴。

『なのに……!!テメエみたいなしらねえ奴がワンダシヨの仲に紛れて、しかも、寧々達と仲良くしてやがる……!!俺の計画にテメエは

邪魔なんだよ……!!だから、テメエだけは殺してやる……!!」

類「……その為だけに、君はこのショーを楽しみにしていたお客さん達を悲しませているのかい？」

霊斗「……類？」

類の奴、どうしたんだ……？

『……それがどうした？神代類？』

類「僕たちが必死に準備をしてお客さんを笑顔にするためのショーを台無しにされ、あまつさえ、親友の霊斗くんを殺す？ふざけないでほしいな？」

『そんなのどうでもいい！俺がハーレムを築ければそれでいいんだよ！他の奴らの笑顔なんか知ったことか!!』

類の奴、マジで怒ってやがる……類だけじゃなく、司もな。表情に出てやがるし。まあ、これ以上、奴のヘイトが類達に任せるわけにもいかないし……本題に入るか。

霊斗「つまり、お前はお前の目的の為にここにいます。んで、その目的に俺は邪魔だと。そういうことでいいんだよな？」

『……ああ！そういうことだ！もうこいつらも必要ねえ！』ドンツ！
男は奏達を突き飛ばし、俺を見据える。俺は寧々達にアイコンタクトを送る。それに気づいた寧々達は、奏達に駆け寄る。

『テメエだけは俺が殺す……!!俺が殺すんだよ!!』カチャ！

すると、男は俺の知らないベルトを腰につける。どうやら奴も俺と同じような特典をもらっているらしい。

『さあ……テメエを殺す実験の開始だあ!!!』

男は両手に、赤と青のボトルを持ち、軽く振って、何かを回し、ベルトに装着させる。

『rabbit!!』『thank!』

独特な音声が鳴り、奴はベルトについているハンドルを回し始める。すると、奴の周りに現れる謎の機械。なんだあれ？実験器具かなかだよな？

すると、奴はポーズを取り。

『変身っ!!』

『are you ready? 鋼のムーンサルト!!ラビットタンク!!YEAH!!』

奴は、俺のように変身した。初めて会ったやつとは違い、赤と青のカラーリングをした・・・確か、仮面ライダー・・・になった。

『ははは!!この力で・・・ビルドの力で!!俺は夢を叶えるんだよ!!』

・・・自分の夢を叶える・・・ねえ。

霊斗「・・・お前は夢を叶えられねえよ。」

『・・・はあ?』

霊斗「夢っていうものは、力が有れば叶うんじゃない。夢を諦めず、必死に努力して、自分の力で何かをしてそれを達成した時、夢っていうのは叶うんだ。司やえむがそうだ。」

司「・・・霊斗?」

霊斗「司は全員を笑顔にするスターになるって夢を叶えようとしてる。突拍子もない夢だと言われても、こいつは諦めずに努力してる。こういう奴が夢を叶えるんだ。えむも、このステージを笑顔いっぱいにするって夢を持ってる。寧々や類も。お前が人質に取った奏達にも、ここにいるお前以外の全員が夢を叶える為に努力してる。その努力が大事なんだ。お前はその努力をしてないだけだろ。テメエが夢を叶えるなんて言葉を言う資格はねえ。」

えむ「霊斗くん・・・!」

こんなふうには言えないか・・・?まあ、反論がないんだし、別にいいんだろ。すると、男は怒りの表情をしていて、俺に向かって怒声を上げる。

『ウルセエ!!知った風な口、しやがって!!何なんだよ!!テメエは何なんだよ!!』

霊斗「俺か?俺は・・・」

なんて言えればいい・・・?普通に名前言うのもいいが・・・

そういや、あいつ言ってたな・・・俺が変身した時の姿、仮面ライダーデイケイドだって・・・しかも、これは特典でもらった力だから、このセカイには存在しない者・・・なら。こういうのがいいよな。

霊斗「鬼灯霊斗・・・そして。」

俺は、腰にベルトを装着、開き、カードを一枚を手にとる。そして。

霊斗「通りすがりの・・・仮面ライダーだ・・・！変身!!」

『KAMEN RIDE DECADE!!』

俺はもう一度、変身する。奴と対峙する為に。仮面ライダーへと。

『ディケイドだ！仮面ライダーディケイド!!』

俺の姿を見た子供達は、なぜかキャツ！キャツ！と騒いでいるが、正直、心配だ。こんなに騒いでると、そっちにヘイトが向くかわからん。

寧々「え・・・!?か、仮面ライダー、ディケイド・・・!?」

えむ「わあく♪ディケイドなあ！」

類「霊斗くんがディケイドに・・・これには、僕も流石にびっくりしたよ」

寧々と類は驚きの表情、えむは目をキラキラさせながら、俺を見る。司は言葉が出ないのか口を開けて固まってる。

奏「やつぱり・・・この間の事、見間違いと夢じゃない・・・霊斗がディケイド・・・」

絵名「そ、それもおかしいでしょ？仮面ライダーなんて、空想上の存在じゃないの!？」

まふゆ「けど・・・現に霊斗が変身してるわけだし・・・」

瑞希「そうだよ？絵名？霊斗先輩が変身して、この男の人を止めようとしてくれる・・・それだけわかれば充分じゃない？」

・・・意外と、冷静なのな。奏達。人質にされてたのに。すると、奴がなぜがプルプルと震えている。・・・なんぞ？

『そうかよ・・・!!テメエ、俺と同じか・・・!!おもしれえ!!やつぱり、テメエは俺が殺す!!オラア!』ブンッ!

すると、突然、奴は俺に目掛けて拳を振るう。俺は最小限の動きで回避して、軽く反撃。なるべく、周りの奴らに攻撃が飛んで行かない

ようにしながら、奴と戦っている。

霊斗（奏を襲ってたやつよりかはやるな・・・けど、勝てないわけでもねえ）

シツ・・・!!ラア!!」ドゴツ!!

『・・・っ・・・かつ・・・!おえっ・・・!!』

隙を見て奴に渾身の力を込めた拳を奴の腹部に叩き込む。腹を押さえながら怯む男。・・・意外といいの入ったのか。ラッキー。

霊斗「まだ・・・やるか?威張ってた割には、弱えし、これ以上変な事すんな。お前、マジで取り返しがつかなくなるぞ?」

俺は奴を諭す様に話しかける。正直、クズが変わるとは思っていないが、一応、言っとく。

『ふ、ふざけんなよ!テメエを殺せば万事解決なんだよ!!そんなんでやめるわけねえだろうが!!』

霊斗「・・・わかった。なら。次で決める。」

俺は・・・確か、ライドブッカー・・・だったか?そこから・・・多分、ここに入ってるカードに写ってる奴らも仮面ライダーだよな?一枚のカードを取り出す。

霊斗「折角のハロウィンなんだ・・・ハロウィンらしいライダーで行こうか。」

変身」

『KAMEN RIDE GHOST!!

Let's go! 覚悟!!ゴ、ゴ、ゴ、ゴースト!!』

俺は新たな姿へと変身する。多分、声的に・・・仮面ライダーゴースト・・・って名前なんだよな?

『ゴースト・・・!てことはやっぱり、テメエのそのベルト、ネオデイクイッドライバーか!!』

霊斗「そんなもん知るかよ。このベルトの名前なんてどうでもいい。お前を倒して、ここにいる全員が楽しめるショーを再開する。それだけでいいんだよ。だから・・・とつとと、くたばれ」

ライドブツカーから、黄色のカードを取り出し、ベルトに差し込む。
『FINAL ATTACK RIDE Ghost Ghost Ghost!!』

音が鳴り、俺の右足にエネルギーが溜まっていく。空中へと浮かび、奴に向けて、技を放つ。

霊斗「せやあああああ!!」

エネルギーが溜まった右足を前に突き出し、飛び蹴りを繰り出す。

『っ……!!そんなもんには負けるわけねえだろ!!』グルグル!!

『Ready GO!!』ボルテックファイニッシュ!!』

奴も右脚にエネルギーが溜まり、奴も飛び蹴りを繰り出してくる。俺のわざと奴の技、二つの技がぶつかり合う。

霊斗「……っ!負けるか……!せやあああ!!」

『……テメエに負けるわけねえだろうが!!』

……ちっ……!しぶとい……!すると、その時だった。

『がんばれ!!デイケイドー!!』

霊斗「……?」

なんだ……?視線を声が聞こえた方へ向けると、そこには、えむがいた。

霊斗(何やってるんだ……?えむのやつ……?)

えむ「みんなあー!私達と一緒に、霊斗くんを……ううん!!デイケイドを応援しようよー!!」

司「えむ……ああ!そうだな!!お客様!俺たちと一緒に、みんなを守ってくれているデイケイドを応援してくれ!」

寧々「みんなの力が必要な……!だから、お願い……!」

類「ここにいるみんなの応援が、デイケイドの応援になるんだ。また、シヨールをみんなで楽しむ為に、僕達と一緒に応援しよう!」

霊斗(あいつら……)

『頑張れー!!デイケイドー!!』

奏「……すごい。みんなが霊斗を……デイケイドを応援してる」

まふゆ「……これって、私達も応援した方がいい……?」

瑞希「この流れなら、僕達も応援しようよ♪みんなだって、勝って

ほしいでしょ？」

絵名「当たり前でしょ？あいつが勝つたら、私達、好き勝手にされるんでしょ？絶対に霊斗に勝ってほしいわよ！頑張りなさい！」

瑞希「頑張れー♪霊斗先輩♪」

まふゆ「・・・頑張れ」

奏「頑張って、霊斗・・・！」

今ここにいる全員が、俺を応援してくれている・・・何も無い俺を。全てが壊れてる俺を。そんな俺を応援してくれる・・・なら。

霊斗（負けられるかよ・・・こんな奴に・・・！）

霊斗「おおおお!!」

俺の技が奴の技を徐々に押ししていく。

『な・・・!?!』

霊斗「こいつらの夢の・・・邪魔すんなあ!!」ドッガン!!

奴の技を押しつけて、奴に蹴りを叩き込む。奴は吹っ飛び、地面を転がり、数秒後、止まる。俺は地面へ着地し奴の方を見ると、どうやら気絶しているらしい。ピクリとも動かない。

霊斗「・・・終わったな。」

俺は変身を解こうとしたが・・・今ここで解くのは流石にまずいよな・・・?多分。けど、このままショーを続けるわけにはハロウィン関係ないし・・・なら。司達には悪いとは思うが、こうするか。

霊斗「みんな、応援ありがとう。みんなの声が俺に届いた。だから、勝てたんだ。」

この襲撃を、ショーの内容にしちまうか・・・結構、無理矢理感あるけどな。

その時、お客さん達がわあー！歓声を上げる。

『ありがとうー！ディケイドー!』

『かっこいいよ!!ディケイド!!』

子供達も、大人達も、笑顔で拍手してくれている。あんな危険な出来事の後なのに、みんな笑顔になってる・・・

いや、いいのかそれで・・・？司達に、顔を向けると、全員が笑いながら、頷く。おまえらもかい。仕方ねえな。

霊斗「さて・・・俺はもう行く。・・・このステージで行われる別のショーを見たい奴は、明後日の休みにここにくるといい。また、ショーをやつてる。それじゃあな」

俺はゆつくりと歩き、ステージから退出する。変身を解除した後、司達が感謝の言葉をお客さんに向けて話し、退出し、幕が下ろされる。その後、お客さんの1人が警察に通報して、襲撃した転生者は警察に連れて行かれた。そして、俺はと言うと。

霊斗「・・・なあ、こんなの平気だから、お前も行けよ。ナイトコード、今日もやつてるんだろ？」

まふゆ「駄目。怪我の治療しないと。」

何でか知らんが、まふゆが俺の頬にできた傷の治療をしてくれている。

いや、なんでや・・・？と思っていると、何やら視線を感じて、そちらを見ると、えむと寧々が少し羨ましそうな表情をしていて、奏達も俺を見てる。・・・嫌だな。

そんな視線を浴びながら、治療が終わるまで俺はただ、まふゆの治療を受け続けたのだった。

彼女の闇

転生者の襲撃があった、ハロウィンショーから数日後、俺達はワンダーステージに集まっていた。

司「さて！色々大変だったが、ハロウィンショーも終わったな！あとは結果を聞いただけだ！」

霊斗「まあ、まだ何回かショーをやんなきゃだけどな。つっても、あれをハロウィンショーって言つていいもんなのかねえ」

寧々「どっちかっていうと・・・ヒーローショー？」

類「そうだね。デイケイドや、ビルドが出てきてしまったからね。」
マジで、ハロウィン関係ねえな。俺たちがやったショー。まあ、あの後、もう一回やらせてもらっただけだな。

えむ「でもでも！みんなすくつく楽しんでくれてたよ〜！」

寧々「うん。やっぱり、みんな仮面ライダーが好きだからね。」

霊斗「まさか、えむと寧々に頼まれるとは思わなんだ。ゾンビロボットに襲われてる園長役の司を助けるために、変身しろつて。しかも、断然、主役の司よりどう見ても目立ってたしよ。」

司「まあ、俺より目立っていたな・・・その仮面ライダーに霊斗が変身した時は、もつと驚いたが。霊斗、何故隠してたんだ？」

・・・ついにきたか。この質問、つか、隠してたつて。

霊斗「いや、話す内容でもないだろ？俺がその・・・仮面ライダーだつて事。なんかあるわけでもないし。」

寧々「そんな事、ないと思うけど・・・？」

司「そうだぞ！霊斗が仮面ライダーだと知っていれば、それを生かしたショーをする事もできるだろうが！」

霊斗「それは一理あるけど。」

類「なるほど、変身を生かしたショーか・・・ふふ、演出を考えるのも楽しみなだねえ。」

・・・あれ？これ次のショーの内容、決まりかけてねえか？と、その時だった。

『お嬢様!!』

着ぐるみの先輩がものすごいスピードで、現れた。

司「うおっ!? 毎度のことながら・・・どこから出てきてるんだ?」

類「ああ。彼なら大抵、あそこの茂みに待機しているよ」

霊斗「マジか? 伝説の傭兵並の潜伏率だな。全く気づかなかつたわ。」

・・・ん? よく見たら、着ぐるみ先輩、少し落ち込んでるか? え? 類に気づかれた事、そんなシヨックなのか?

『・・・いや、そんな事より、お嬢様、今日はコンテストの第一回中間発表の日です!』

えむ「あ、うん・・・」

寧々「もう結果が出たんだ・・・早くない?」

司「いや、それはいい! それより、結果はどうなったんだ!」

『こちらになります。霊斗様、どうぞ』

・・・なんつーか、認められてから、霊斗様って呼ばれてるんだよな。俺。普通でいいって言うてんのに。そんな事を考えながら、俺は着ぐるみの先輩から結果を受け取る。

霊斗「えつと・・・俺達は・・・お? 3位か?」

寧々「3位つて・・・もしかして、結構すごいんじゃない?」

類「そうだね。結果を見れば、1位2位は、大きなステージがやっているシヨーだし・・・出だしてこの結果はまずまずじゃないかな?」

えむ「うん! それに、2位ともそんなに差が開いてないよ!」

司「だが、やはり1位のステージはすごいな。結構、差が開いているぞ。よし! 次はこのステージのシヨーを越えるぞ! そして! 狙うはもちろん優勝! 俺たちがCMに出るぞ! 次も頼むぞ! 俺たちの演出家!」

類「ああ。任せてくれたまえ。お客さんの笑顔のために、最高のシヨーを作るよ。」

この2人も随分、仲良くなったよな。この調子ならマジで1位も夢じゃないと俺は思ってる。

類「というわけで、色々試したい演出があるから、道具を持ってきたんだけど、早速試してみてもいいかい?」

えむ「あ、やっぱり、ステージの裏に色々あるなって思ってたけど、あれ類くんのだったんだね！見たことないものばかりだったよ！宇宙服見たいのとか、ロケットみたいなのとか！」

霊斗「おいちよつと待て。どこまで吹っ飛ばす気だ。」

司「俺を宇宙まで吹き飛ばすつもりなのか!!というか、そんな物ばかり作って、お前の家はどうなってるんだ!!」

類「え？気になるかい？なら一度、僕の家に来てみるかい？」

司「絶対に行かんわ！」

類「類の家・・・か。」

霊斗「・・・行ってみたいな。」　えむ「あ！私も行きたい〜！」

司「何!?!えむはともかく、霊斗、お前もなのか!?!俺は行かないぞ！」

寧々「・・・はあ、うるさい、でも、ようやくいつも通りかな・・・

あ、そういえば、霊斗。一個、聞いてもいい？」

霊斗「ん？どした？」

寧々「・・・あの時、あの男が人質にした人って・・・霊斗の知り合いなの？」

・・・なんつーか、心なしか寧々の視線が冷たくなったような気がする。

霊斗「まあ、知り合いつて言えばいいのか・・・なんて言えばいいのか・・・まあ、俺が誘ったやつってのは間違いない。」

寧々「そうなんだ・・・（あんなに綺麗な人達が・・・はあ・・・）

・・・なんか、今度は寧々が落ち込んでねえか？どうなってんだ？

司「よし！それなら、今日は疲れを取ることも考えて休みにするぞ！」

類「おや？司くん、それでいいのかい？」

司「ああ！最高のショーをするためには、疲れを残しては駄目だからな！いざという時、お前達の誰かが倒れでもしたら、全員が笑顔ではなくなってしまうんだ！だからだめだ！」

・・・ほんと、色々考えてんだな。こいつはこいつで。

えむ「ええ〜？折角集まったのに〜！」

霊斗「えむ、司は俺たちのために思っていてくれてんだよ。それ

なら、次のシヨ一の期間まで時間あるし、練習と脚本作りも考えたかなきやだな。類、今度頼むわ」

類「そうだね。任せてくれ。霊斗くん」

そのあとはいつも通りだ。練習して、軽く掃除して、今日1日の練習は終了。家に帰り、そして、俺は *untitled* を起動させる。誰もいないセカイへと到着すると、そこにいたのは、ミクだけ。

霊斗「よっ、ミク。」

ミク「・・・！霊斗・・・！」

とてとてと小走り気味にこつちに来るミク。・・・最初会った時より、なんというか・・・懐かれた感じがしなくもない。

ミク「霊斗、奏達から聞いた。怪我したって。大丈夫？ほっぺ」

霊斗「大丈夫だよ。かすり傷だしな変に心配させた・・・のか？つて、ミクは知らなかったみたいだし、心配するのも無理ねえか。」

奏達に頼んで、ミクにも見せてやればよかったな。ハロウィンシヨ一。

ミク「・・・本当に、大丈夫？」

霊斗「だから、大丈夫だって。弾丸が掠っただけだった『ほっぺの傷の事じゃない』ん？じゃあなんだ？」

ミク「それh「あー！霊斗先輩だ！」・・・瑞希」

今、ミクが何か言いかけたよな・・・タイミングよく瑞希が来た事で、遮られたけどな。

霊斗「瑞希、どうした？」

瑞希「え？先輩が見えたから声かけたただだよ？」

霊斗「そうか・・・んで？ミク、何言いかけたんだ？」

ミク「・・・ううん。なんでもない」

・・・？何だ？なんか言いたかったんじゃないのか・・・？まあ、本人が何でもないって言ってるんなら、まあいいだろう。

霊斗「・・・そういや、瑞希1人か？まふゆや絵名は？」

瑞希「絵名は多分、SNS用の写真を撮ってるんじゃないかな？まふゆは・・・えっと、霊斗先輩、少しだけ相談していいかな？」

霊斗「ん？相談？俺に？」

瑞希「うん。なるべくなら、奏と絵名にも言うつもりだけど、最初は霊斗先輩がいいかなって。」

霊斗「んー・・・なんかいいこと言ってやれるわけじゃねえか、そんなんでもいいなら」

実際、なんか言えるわけないと思うし。

瑞希「それでもいいよ。僕だけじゃどうしようもないからさ。誰かに相談したかったんだよ。」

霊斗「そうか。んで？相談ってのは？」

瑞希「うん。相談したいことって、まふゆの事なんだよね。」

霊斗「は？お前の事じゃねえの？しかも、まふゆの事？」

瑞希「うん。実はさ、この間、ナイトコードで作業してたんだ。それで、奏と絵名が来てなくてさ。まふゆと2人で作業してたんだけど・・・そのとき、まふゆとまふゆの両親の話が聞こえてきてさ。」

霊斗「・・・それ、普通の事だろ？誰かしら、家族はいるだろうよ。・・・いない奴もいるけどな。俺とか奏とか。」

瑞希「それがさ、まふゆの両親って、毒親みたいなんだよね。会話を聞く限り」

霊斗「毒親・・・？」

瑞希「うん。なんて言えばいいのかな・・・ほら、よくあるよね？親の仕事を、子供に引き継いでほしいから、勉強を強要する、みたいな？そんな感じかな。まふゆって、私たちの前じゃなかったら、基本は優等生みたいな感じなんだから。」

霊斗「・・・ああ。猫被ってんのか。普段はあんな冷たい感じだが、誰かの前では、誰にも優しい、優等生ってか？んで、それを親の前でもやってるから、娘はできる奴・・・って思われて期待されて、時間が経てば、その期待は

積み重なって、必然に。それが更に、彼女を縛る呪いになったわけだ。それで、自分を見失って・・・最終的には誰もいない場所で、消えたいって？」

瑞希「・・・霊斗先輩ってさ、今の僕の言葉で、そこまで考えれちゃうんだ。やつぱり、相談して正解かも。」

霊斗「まあ、なんとなくだけだな。それで？お前はもうどうしたいんだ？まふゆに消えて欲しくないんだろ？」

瑞希「それはそうだよ！もうニーゴには、まふゆは絶対に必要な存在だよ。救いたいよ。けどさ……どうすればいいんだろ？」

……結局、答えが出ないから相談してるってわけだ。けど、相手が間違ってる。俺に聞いても、意味がない。多分俺もまふゆと同じ……いや、下手すれば、それ以上にぶっ壊れてるからな。けど……なんも言えないってのはなあ……あ。

霊斗「……自分達のやり方で伝えた方が楽じゃねえか？」

瑞希「……え？」

霊斗「多分だけだよ。絵名も奏も、わかってるんじゃないやねえか？多少しか関わってない俺でも、ここまで考えれるんだ。あの2人の方がもつと速く気づいてんだろ？けど、結局、言葉だけじゃ伝わらねえ事がある。そう言う時は、行動で示すしかないわけだ。なら、瑞希達の得意分野でやればいいだろ？」

瑞希「……えつと、得意分野……って？」

霊斗「曲。」

瑞希「え？」

霊斗「だから、曲。ニーゴは曲を作ってるサークルの集まりなんだろ？だったら、メンバーであるまふゆに伝えたい感じの曲、作ればいいんじゃないやねえか？」

まあ、それでも効果あるかわからないけどな。けど、前世だと誰かの曲を聴いて、勇気をもらったとか、元気をもらったとか言ってた友人もいたし、試してみる価値はあると思う。

瑞希「曲で想いを伝える……か。」

霊斗「まあ、事情を知らない俺がとやかく言うつもりはねえよ。後悔してからじゃ、遅いと思うぞ？まあ、後は奏と絵名と相談しろよ。これ、あくまで俺の提案だしな。俺は帰る……」

……そういや、相談してきたんなら、俺が何か言っても、問題はないよな？

霊斗「瑞希、俺もまふゆに言いたい事あるからよ。お前に伝えるか

ら言っておいてくれねえか？」

瑞希「え？うん、いいけど？」

霊斗「助かる。それなら……」

お前と同類だから言っておく。自分を見失ってるだけなら、お前は
まだ戻れる。お前を救いたって思ってる奴がいる。良かった
な。つてな。」

瑞希「……え？」

霊斗「んじやな。また、会えるかわらんけど」

瑞希「ちよつと!?霊斗先輩?!待ってよ!」

霊斗「……まあ……あいつがどうなるうが、俺には関係な
いし、どうでもいいけどな。何もかも失った俺にとつちや」

瑞希「……っ!」

そして、俺は彼女のセカイから出て行く。……俺の言葉を聞いて、
瑞希はどんな顔をしていたのだろう。驚いていたのか？怒っていた
のだろうか？

霊斗「……最低な奴だっと思われてるかもな。けど、実際そう思っ
てるからな。それに……俺がいなくても、何とかなるだろ。俺はそ
もそも、イレギュラーだしな」

この世界に存在しない者。それが関与しようとしなかつと、何も
変わらない。神様が言っていたが、俺は転生者を潰すだけでいい。ま
あ……司達とは……今のままの関係でいたいとは思っけどな。

瑞希 Side

瑞希「……今の先輩……凄く怖かったな。ミクの言う通りだ。ま
ふゆ以上の……」

凄く暗い目をしてた。まふゆもあんな目をしてるけど……それ以
上の暗さ。先輩の目は私を見ていたんだろうけど……

「……何してるのよ？瑞希？」

瑞希「っ!」

声をかけられ、私はバツ！と後ろを振り向く。そこには、驚いてる絵名と奏の姿。

絵名「な、なによ？そんなに驚くことないでしょ？」

瑞希「絵名と奏・・・はあ。もう、驚かさないとよー♪」

絵名「はあ？一人でボーツとしてる瑞希が悪いでしょ？・・・ところで、あんた今、何してたのよ？まふゆでもいたの？」

瑞希「え？ち、違うよ？」

奏「・・・？瑞樹、何でそんな・・・慌てるの？」

瑞希「そ、そんな事ないよー？」

絵名「いや、あんた、嘘つくの下手でしょ。いいから、何があったか、話しなさい。」

絵名に詰め寄られて、僕は諦めて、全部話したんだ。さっきの霊斗先輩との話を全部。

瑞希「・・・って言うことがあったんだ。」

絵名「・・・何それ？霊斗がそんな事言ったの？」

瑞希「流石にこれで嘘はつかないよ。それでさ、ミク、言ってたでしよ？僕達に、霊斗先輩は救えないってさ。もしかして、この事なのかな？」

ミク「うん・・・霊斗の想いはわからない・・・まふゆみたいに、消えたいって思ってるわけじゃない。けど、わからないから・・・救えない。」

奏「けど、霊斗は、まふゆを救う方法を教えてくれたんだよね？」

瑞希「そうだよ、僕達にまふゆに伝える曲を作ればいいんじゃないかって。」

絵名「曲で・・・？」

瑞希「うん。言葉で伝えるよりも、曲で自分達の想いを伝えたらどうだって。霊斗先輩が・・・どうでもいいって言ってるけど。」

適当に言っただけなのかもしれないけど・・・

絵名「・・・まあ、言葉で言っただけじゃなし・・・曲・・・ね。」

奏「まふゆを救う曲・・・うん。私は・・・まふゆを救いたいから・・・

作るよ。」

瑞希「おっ？奏はやる気だね。ちなみに、僕もやるよ？後は・・・えななん？」

絵名「・・・あーっ！もう！わかったわよ！やる！あいつを見返してやろうじゃない！私達でまふゆに伝えればいいんでしょ！」

瑞希「よーっし！それなら、早速作業始めよう！忙しくなるぞー！」

霊斗先輩、僕達はやるよ。まふゆを救う曲を作る。先輩はどうでもいいって言ってたけど・・・それでも僕達はやるよ。

絶対、まふゆを救う!!僕達の曲で！

俺達の前にある壁

軽く瑞希に助言・・・なのか？まあ、そうした事にしよう。その後、俺はそのまま眠りにつき翌日。いつもの通り、ワンダーステージに集まり、次のショーの話をしている、

司「と、言うわけでだ！現在、我々ワンダーランズ??ショウタイムさフェニックス☆ショーコンテストにおいて、第3位についている。ステージの規模、メンバーの数からしたら、まずまずな結果だ。だが！ここで満足する我々ではない！1位2位を軽々と超える素晴らしいショーを作り、テレビCM出演・・・そして世界へと羽ばたこうではないか！」

霊斗「世界は流石に言い過ぎだろ・・・まあ、やるからには目指したいよな。1位」

寧々「うん・・・それなら、次のショーの話、早く進めよう」

えむ「・・・」

類「おや？えむくんまでどうしたんだい？何か考え事かな？」

えむ「えっ？あ、うん！今度のショー、どんなのがいいかなって考えてたんだ。次はどんなショーにするの？」

司「それなんだが、俺達と1位のステージ・・・フェニックスステージとの票差は約倍・・・前回のショーで評判は上々。だが、いる1位を狙うならば、ここからの巻き返しが重要だ！つまり、確実に！かつどのショーよりも観客を喜ばせる事のできる、素晴らしいアイデアを考えねばならんのだ！」

司の言う通りだ。この日差を埋めるには、ここから先が重要だと。向こうがどんなショーをするか分からないが、前回のショーを超える物ができなければ、1位の座など、到底無理な話だろう。まあ、あてはあるが。

霊斗「・・・なあ、それなら、いいアイデアがあるんだが・・・」

司「うん？なんだ？霊斗？」

霊斗「ハロウィンショーをしたんだ。それにコンテストの2回目は当分先。それなら・・・当日の時期を考えたら、クリスマスならどう

だ？」

司「えむ「クリスマスショー？」」

霊斗「おう・・・まあ、どうせ、俺が言わなくても、類が提案するつもりだったんだろうが。」

視線を類に向けると、ふふつとあいつは笑っていた。

類「流石霊斗くんだね。その通りだよ。僕も同じ事を考えていたんだ。」

霊斗「だろうな。クリスマスショーは有名な部類だしな。ミュージカルみたいにしたやつとかな。」

えむ「それなら、サンタさんの格好して、プレゼントをお客さんに配るのはどうかな？」

司「プレゼント・・・そうか！プレゼントと一緒に『清き一票を』とコメントを入れれば・・・！」

寧々「それ、ただの買収だから・・・」

霊斗「スターにあるまじき発言だな。おい。」

司「た、たしかに！」

寧々「はあ・・・けど、2回目の時期なら、クリスマスショーなら人も集まるだろうし・・・いいと思う」

霊斗「と、なると問題は内容なんだが・・・そこは、俺達の演出家に聞いてみようぜ。だろ？類、お前の事だ。何か案があるんだろう？」

類「あるよ？歌がメインになるミュージカルで行こうと思う。華やかでクリスマスらしいだろう？」

ミュージカル・・・王道といえば王道だ。

類「具体的には・・・スマイリングクリスマスなんてどうかな？」

司「スマイリング・・・笑顔のクリスマス・・・か？」

類「うん。内容はこうだよ」

類が言った内容は、両親のいない孤独な少女がいて、孤児院で暮らしている。そんな少女にはサンタクロースが一度も来たことがない。けど、ある年に、サンタ見習いの少年と出会う。けど、トナカイに逃げられてしまい、プレゼントを配らない少年。その少年を少女が助け、クリスマスに起きた冒険の話だった。

司「……ん？ちよつと待て。このショーの主役は、少女のようだが……？まさか!?俺が少女の役を!？」

霊斗「いや、そんなわけねえだろ。えむか寧々のどっちかにやって貰えばいいだろ？聞いた感じ、少年と少女……所謂、W主演ってやつだろ？」

類「うん。だから……司君と寧々の二人がいいと思う。」

寧々「え……!?わ、私!?何で急に……少女役ならえむもやれるでしょ？」

類「このショーは歌うクライマックスシーンがとても重要になる。それなら、昔から、劇団でミュージカルをやった寧々に頼んだ方がいいと思うんだ」

寧々「私が……主役……」

……多分、寧々は昔の事を気にかけてんだよな。前に話してくれた寧々の過去を。けど、俺達は、昔の寧々の仲間とは違う。

えむ「わくわく！寧々ちゃんの歌がいっぱい聴けちゃうねっ♪」

寧々「ちよ……!まだ、やるって言ってないから……!」

えむ「え？やらないの？私は歌って欲しいな♪寧々ちゃんの歌、私、大好きだもん!」

寧々「あ、ありがとう……」

司「W主演ならば問題ないだろう！俺の方が、断然目立つからな！」

寧々「あんたは目立つっていうか、うるさいだけでしょ……」

司「な、なんだとく？ちよつとばかり歌えるからって、調子に乗るなあ!」

霊斗「落ち着けよ、司……けど、寧々が主役ってのは俺もいいと思うぞ？」

寧々「霊斗まで……」

困ったような表情をして俺を見つめる寧々。

霊斗「だってよ。結成した時に成功したショーの時の寧々の歌。すげえ良かったし。お客さんの反応も良かった。適任だと思うけどな。」

俺も、寧々の歌。聞いてたいから。」

寧々「・・・っ・・・／＼」

類「ふふっ、どうだい？寧々。司くんもえむくんも、霊斗くんだけどう言ってくれてる。今の寧々ならきつとできると思ったんだ。やってくれるかい？」

寧々「・・・はあ。まあ、いいかな。」

えむ「やった〜♪」

霊斗「なら、主演は司と寧々・・・類、俺とえむは？」

類「そうだね。えむくんには、プレゼントを待つ子供の役をやってもらうよ。僕と霊斗くんでは他の役をやるつもりさ。ネネロボの試運転も終わったから、今回から色々な役をやってもらうよ。もちろん、霊斗くんにもね。もしかしたら、また、霊斗くんには仮面ライダーになってもらうかもしれないから。覚えておいてね」

霊斗「おう。こつちでも、ショーに使えそうなライダー、探しとくわ」

類「うん。二人とも一緒に頑張ろう」

霊斗「えむ「おう（うん）！」」

司「よし！そうと決まれば早速練習だ！」

その後、俺達は類から脚本を貰い、自分のやる役を確認していた時だった。予想外の出来事が起きた。

『霊斗様！大変です！』

猛スピードで、ワンダーステージに着ぐるみの先輩が来た。めっちゃめっちゃ早かったな。

霊斗「あれ？着ぐるみの人？どうしたんですか？」

『実は、フェニックスステージで、行うショーの内容が分かりました！クリスマスミュージカルショーらしいのです!!』

司「何!?!」

寧々「フェニックスステージって、あの1位の？」

えむ「うん！すごい偶然だよね！わたし、びっくりしちやったあ〜！」

霊斗「いや、笑い事じゃねえぞ。えむ。ショーの内容が被るって事は、どちらが劣っているがわかるって事だし、方向性も一緒。最悪、観

客の奪い合いになる。」

司「むむむ……！今からでもショーの内容を変えるべきか？」

類「まあ、時節柄どこも同じような内容になるだろうとは予想していたし、僕は問題ないと思うよ？」

寧々「他のところを気にしすぎるのもあまり良くないんじゃない？」

司「た、たしかに……だが、何もしていないのも……」

……司の悩んでる事はわかる。なら、それをどうにかするか。

霊斗「類、俺のやる役つてもう決めたよな？」

類「え？うん。霊斗くんがやる役はさつき決めたからね。」

霊斗「なら、俺、行ってみるわ。」

寧々「行くつて……どこに？」

霊斗「フエニックスステージ。」

司「なに!?霊斗、まさかフエニックスステージに偵察しに行くつもりか!？」

霊斗「……?それ以外になんかあるのか?別に観に行くくらいどうつて事ないだろ?」

寧々「けど、偵察つてバレたら……!」

霊斗「バレなきやいいだけだろ?それに、こういうのは、俺の分類だ。主役の二人は練習しとけ。こういう裏方の仕事は俺の仕事。だろ?類、みんなの事、頼むわ。」

類「わかったよ。気を付けてね。霊斗くん」

俺は手をあげる事で答え、俺はフエニックスステージへと向かう。中に入ると、ワンダーステージとは全然違う。ステージの大きさ。客席の多さ。どこを観ても、ワンダーステージとは比べ物にならないくらい、すごいステージだった。

霊斗「でけえ……な。しかも、1位を取るつて事は、腕も一流……ん?役者がどんどん出てる……つて事は、これからショーの練習……か。おっし。悪い事してるのはわかるが……あいつらの為だよな。」

俺は隠れながら、スマホを操作して、録画を開始する。

「準備はいい?冒頭のナンバーから行くわよ!」

一人の女性が全員に声をかけた直後、フェニックスステージの練習が始まった。・・・何といえればいいのか分からないが・・・凄かった。それしかいえない。ミュージカルなんて観たこともないからな・・・類や寧々に見せればどんな反応をするんだろうな。そうになると・・・あの彼女が、歌姫・・・主役なんだろう。

「・そこで、コソコソと隠れてる人、どうだったかしら？このフェニックスステージのしよーは？」

霊斗「っ？」

バレてる？マジか・・・俺は潔く出て、声の方へ視線を向ける。そこにいたのは、さつき歌っていた、女性だった。

霊斗「す、すいません。コソコソと除いてて・・・」

「・・・？あなた、ワンダーランズ??シヨウタイムの鬼灯霊斗であつているかしら？」

霊斗「え？あ、はい。俺は鬼灯霊斗ですけど・・・？えっと、すみません。俺、この業界に入つて、そんな経つてなくて、あなたが何者なのか分からないんですが・・・」

「そう・・・あなたが・・・。まあ、いいわ。私はこのフェニックスステージの歌姫、青龍院櫻子！フェニックスワンダーランドのナンバーワン！同じシヨーをやる人間として、覚えておいて、損はないわ。覚えておくことね」

霊斗「は、はあ・・・」

・・・何というか、司と似たような感じだな。いや、司とはちよつと違うか。

霊斗「というか、えーっと、青龍院さん？」

櫻子「櫻子でいいわ。呼びづらいでしょう？」

霊斗「なら、櫻子さん。何で俺の名前、知ってるんですか？初対面ですよ？俺達」

櫻子「それは、私が園内のシヨーを全て見ているからよ。当然、あなたや他のメンバーの事も知っているわ。」

霊斗「あー、なるほどです」

櫻子「あなた達のシヨーは演出がいいわ。一見突拍子もないけど、

戯曲の意図を丁寧に汲んでいて、ショーらしい華やかさもある。けど、それだけ。」

霊斗「・・・は？」

・・・それだけ？それだけってどういう意味だ？

櫻子「演技の粗は目立つ。勢いだけで完成度は低い。私たちのショーとは比べるまでもないわ！」

・・・何言ってるんだ？こいつは？

櫻子「それに、聞けば今度は、私達と同じようにクリスマスミュージカルをやるんですって？」

霊斗「まあ、はい。」

櫻子「歌は確か・・・草薙さん、だったかしら？あの子もそれなりに歌えるようだけど・・・あなたが録画していたものを見せたら、彼女はわかるんじゃないかしら？実力の差を。」

霊斗「・・・」

櫻子「まあ、そんな事はどうでもいいの。それよりも重要な事があるわ。」

霊斗「重要な事・・・？」

櫻子「あなたのことよ。鬼灯霊斗くん。」

霊斗「は？俺？」

何でそこで俺の事が出てくるんだ？

櫻子「あなたは、他のメンバーよりも一味違うわ。あなたの實力は他のメンバーとは比べものにならないくらい高いものよ。何であるメンバーの中にあなたが入っているのか理解できないほどに。」

霊斗「はあ・・・」

櫻子「そこで、私はあなたに提案があるの。」

あなた、フェニックスステージに来ない？」

霊斗「・・・は？」

櫻子「あなたみたいな、實力のある人は、相応しい舞台でその實力を發揮して欲しいの。私たちのステージに来れば、あなたはきっと、

スターになれるわ。あの金髪の彼・・・天馬くんよりもね。どうかしら？」

霊斗「・・・」

櫻子「まあ、無理に決める必要もないわ。けど、私はあなたには来て欲しいの。あ、ワンダーステージに戻るなら他のメンバーに伝えておいて。」

恥をかかないように自分達のショーを磨くことね。つて。」

言いたいことだけ言って、青龍院さんは立ち去っていく・・・どこに行く？」

霊斗「・・・ちよつと待て。」

言いたいことだけ言って逃げるつもりか？

ニガス訳ないだろ？

櫻子「・・・？まだ何か用があるのかしら？」

霊斗「ああ。言いたい事は山ほどある。だけど、先に言っておく。何様だ？お前は？」

櫻子「っ!?!お、お前ですって!?!」

霊斗「さつきから聞いてれば言いたい事をベラベラと。たしかに、このステージはすごい。設備も、役者の実力も。俺らとは比べものにならないだろう。けど、だからなんだ？」

霊斗「それに、司も寧々も、えむも類も、この役者と同じくらい・・・いや、それ以上に凄い奴らだ。あんた達には負けねえよ。他の奴らを見下す奴が1位のステージ？ふざけてんのか？」

櫻子「なっ!?!」

霊斗「ついでだ。さつきの勧誘の答えも出してやるよ。答えはNO

だ。俺は司が目指してる観客も役者も笑顔になるステージってやつを見たい。そこで輝いてるスターである司の姿を見たい。あいつの夢の手助けをすんのが俺の仕事だ。俺はお前とのショーなんて真っ平御免だ。」

霊斗「覚悟しとけ。俺達のショーで。お前を1位の歌姫の座から、引き摺り下ろしてやるよ。フェニックスワンダーランド1位のステージはワンダーステージで。フェニックスワンダーランドの歌姫は・・・」

ワンダーランズ?? ショウタイムの草薙寧々だって証明してやるよ。」

櫻子「・・・はあ。あなたはとんだ野蛮人ね。他のメンバーとは違うと思っていた私が馬鹿だったわ。」

霊斗「そうかよ。俺も良かったぜ。お前みたいなクソみたいな歌姫とやるなんて、反吐が出そうだからな。それじゃあ・・・」

覚悟しておいてくださいいね?」

俺はフェニックスステージを出て、ワンダステージへと向かう。その間、俺は困惑していたんだ。

霊斗「・・・何で俺・・・感情・・・無いはずなのに・・・あんなにムカついたんだ・・・?」

自分が青龍院櫻子に怒りを覚えたことに。

悔やむと書いてミライ

俺は、フェニックスステージを偵察した時の動画を司達に見せた・・・なんか、動画の時間長かったのが気になるが、気にせず、携帯を司に渡した後、あいつらが動画を見てる間、機材チェックをしている時だった。

司「な、何様なんだー!!この女は!!!」

司の怒りの声が響く。・・・なんかあったのか？

霊斗「なんかあったのか？司？」

司「霊斗!!この女は一体なんなんだ!!何様なんだ!!」

霊斗「この女・・・？あ。」

司が見ている動画には偶然にも櫻子さん姿が映し出されていた。・・・やべえ。録画止めるの忘れてた・・・やっちゃったな。

霊斗「いや、まあ、彼女はこう言える程の実力があるからなあ。他の人達もすげえ演技だったし、1位の実力はすげえって事だよ」

司「むむむ・・・！た、確かに、中々の実力はある・・・！だが、ここまで言われるのは納得いかーん!!!」

類「けど、彼女の実力は本物だよ。いや、彼女だけじゃない。フェニックスステージのメンバー全員の実力が高い。機材も高性能な物だし、一位の実力は伊達じゃないと思うよ」

類の言う通りだ。櫻子さん達の実力は俺たちより何倍も上だ。現状では俺達が勝てないのは当たり前だろう。

司「た、確かにそうだが、人を見下した態度が気に入らないんだ!!それに、霊斗が野蛮人だ?!俺を馬鹿にするのはいいが、仲間を侮辱されるのは納得いかーん!!!」

霊斗「落ち着けての。別に気にすんなって。そんなの言わせとけばいいんだよ。俺達は俺達のショーをやればいいんだって。」

寧々「・・・」

霊斗「・・・？寧々、どした？」

寧々「・・・負けない・・・」

霊斗「は?。」

寧々「あいつにだけは……！負けたくない……！」
なんか……寧々が燃えてる？なんでだ？燃えるような要素あったか？

寧々（霊斗は……野蛮人じゃない……！）『寧々が燃えているのは霊斗が馬鹿にされたからである』

霊斗「だから、落ち着け。俺達の目的はお客さんを笑顔にするショーをすること。フェニックスステージに、対抗する為じゃないし。白黒つける為じゃねえ。頭冷やせよ。寧々も司も。」

司「むう……！！」

……うわあ。納得いってない顔してんなあ。司のやつ。

霊斗「それに、ここにいる全員が思ってる事だろ？次のショーで見返してやればいいんだよ。フェニックスステージを超えるショーを。」

類「そうだね。ショーにはショーで対抗しよう」

司「そ、それもそうだな！よーし！早速練習再開だ！最高のショーを目指して頑張るぞ！」

えむ「みんなで頑張ろワンダホーイ！」

それから、俺達はクリスマスショーへ向けて、今日一日練習を続けた。……だが、練習の最中に気になったが、寧々の表情が暗い。……そーいや、櫻子さんがいつてたな。寧々に練習を見せれば実力の差を理解するって……まさか、気にしているとかじゃないよな？そんな事を思っているながらも、時間は過ぎていき、すっかり夕方になってしまふ。

司「よーし！今日の練習は終わりだ！また明日にするぞ！」

えむ「はーい！お疲れ様でした！」

霊斗「おつかれ……といっても、軽く台本合わせただけだしな。

本格的な練習は明日からだろ？」

寧々「……」

類「おや？寧々、どうしたんだい？浮かない顔をしているけど……」

寧々「……みんなに聞きたい事があるんだけど……」

「「「???」」」

寧々「私ね・・・自分の歌が、あいつの歌に負けてるって思ってる」
司「あいつ・・・？霊斗の撮ってきた動画に出ていた、あの高飛車女か？」

寧々「うん・・・あの人の歌はすごかった・・・ただ上手なだけじゃない・・・うまくいえないけど・・・あの人の歌と、私の歌は全然違う・・・」

類「そんな事無いと思うよ？寧々は櫻子さんにも引けを取らないさ」

司「類の言う通りだぞ！寧々の歌はあの高飛車女には負けておらん！」

寧々「みんなはそう思ってくれてるのかもしれない・・・けど・・・」

類「寧々・・・」

寧々「・・・私、もう少し練習していくから、先帰ってていいよ」

寧々の目に強い意志を感じた俺達は何も言う事が出来ず、ワンダーステージを立ち去った。帰路の道中。

霊斗「実力の差・・・か。」

櫻子の歌と寧々の歌・・・何が違うと言えば・・・

霊斗「気持ちの問題・・・なんだろうな。寧々は過去にミュージカルショーで主役をやって・・・類と同じなんだろうな。無意識に、気にしてんだろな。また、自分の所為で失敗したら・・・って。考えてるのか？過去のトラウマ・・・か。」

こればかりはどうしようもないだろう。彼女自身で答えを見つけて、乗り越えてもらわなければならない。何かしてやりたい気持ちはあるが・・・

霊斗「俺達ができる事は・・・無理をさせないことぐらいか。」

マジでそのくらいしかできないからな。俺がなんか言った所で、寧々の決意は硬いものだ。そんな事で揺らぐ事はないだろう。まあ、類にも気にかけておいて言っておいたし、大丈夫だろう。

霊斗「・・・そういや、まふゆの事はどうなったんだろうな・・・」

あんな事言った手前、気にするのも変な話だが・・・ぶっちゃけると気になる。相談されたしな。あいつらが作った曲であいつの心を

救えるのか・・・

その時だった。俺のスマホが突然と輝きだす。あまりの眩しさに、目を瞑ってしまふ。・・・あれ？これ、なんかデジャヴだぞ？そして、目を開けると、あの真つ白な世界に来ていたのだ。

霊斗「・・・何？俺、再生してないんだけど？何で？」

「霊斗・・・！」

困惑している状況で、畳み掛ける様に、俺を呼ぶ声。振り向くと。

霊斗「・・・ミック？」

このセカイのミック：よし、長つたらしいし、白ミックでいいか。白ミックが俺を呼んでいた。

白ミック「霊斗・・・！まふゆに会って・・・！お願い・・・！」

何か・・・縋るような勢いで、俺の服を掴み、俺に懇願する白ミック。・・・何があつたし？

霊斗「・・・えつと、とりあえず落ち着け。何があつた？まふゆに会えつて・・・どういう事なん？」

俺は白ミックを落ち着かせて、改めて説明してもらつた。あれから、奏達は、まふゆを救う為の曲を作り続けているが、今日、まふゆに異変があつたらしい。何でも、まふゆの母親が、まふゆが大切にしているシンセサイザーを捨てたらしい。それを知つたまふゆは、壊れた。今まで心の支えになつていたものを捨てられて、崩壊した。その異変に気づいた白ミックが、俺を強制的に連れてきたらしい。

霊斗「・・・事情は分かつたけど・・・肝心のまふゆがいなくね？」

ミック「奥にいる・・・」

霊斗「・・・まあ、俺がなんか言つて変わるかわからんが・・・まあ、会うだけ会ってみるか。案内してくれ。」

すると、白ミックは俺の手を引き、まふゆの元へ連れていってくれた。確かに、奥にまふゆはいたが・・・前にあつた時と、違うのは分かつた。けど・・・

これじゃあ、壊れたとはいえない。

まふゆ「霊斗・・・何でここにいるの？ミク？」

ミク「私が連れてきた・・・」

霊斗「一応、ミクから話は聞いてるけど・・・聞いてもいいか？まふゆ、お前、どうなりたい？」

まふゆ「・・・どうでもいい。もう・・・どうでもいいの。」

霊斗「・・・は？どうでもいい？」

まふゆ「私ね・・・見つけられなかったんだ。何も。けど、本当の想いだけは・・・わかった。私は、ただ、消えたいんだ」

霊斗「・・・そんで？自分を見失ったから？見つけられなかったから？どうでもいいって？消えて楽になればそれでいいって？」

・・・やっぱ、俺は少し変わったのかもしれない・・・司達と会って・・・あいつらと過ごして・・・多少なりとも変わったのかもしれない。

まふゆ「うん。だから・・・もう、いいよね。一人で消えたい。だから・・・霊斗もミクも・・・放っておいて。私を」

ミク「まふゆ・・・！」

俺より酷い目に遭ってないのに、ここまで壊れてるからか??こいつにはまだ・・・こいつ自身を救おうとしてくれる奴がいるからなのか？理由はわからないが・・・

霊斗「・・・るな。」

ミク「・・・？霊斗・・・？」

ここまでイラつく事はなかったはずなのだから。

霊斗「ふぎけんなよ？何一人で絶望して、苦しんでる？消えれば楽になれるって本気で思ってたのか？」

まふゆ「……………」

まふゆは俺の言葉に、俺を睨みつけるようにみるが……知ったことか。

霊斗「一人で全部抱え込んで、相談するわけでもなく、ただ親の言いなりになって、自分自身を見失って、あまつさえ消えれば万事解決ってか？」

……何くだらねえ事考えてやがる？」

まふゆ「……あなたに何がわかるの？あなたに私の……何がわかるの!!」

まふゆが大きな声で、俺に問いかける。……こいつ、こんな声も出すんだな。

霊斗「何もわからねえよ。ただ、知ってるだけだ。お前が……二ーゴの全員が何かしらの理由で闇を抱えてるってだけだ。詳しくは知らない。」

まふゆ「……………」

霊斗「けどな……お前らがどんな闇を抱えていようと……消えていい理由にはならない。お前が消えたいって思っている……お前以外の人達は、お前が消えてほしくないって思ってる。少なからず、俺も。知り合いが目の前で消えたいって言うって見捨てるほど薄情じゃねえぞ？俺？」

霊斗「お前が、もし、深い闇の中……いや、消えたいって思いの

中にずっといたとしても、俺が、引っぱり出してやるよ。少なからず、俺は……

今のお前……『朝比奈まふゆ』が消えてほしくないってそう思ってるよ。瑞希から聞いた優等生のお面をかぶってるお前じゃなくて……今、俺の目の前に存在している『朝比奈まふゆが』。」

その瞬間、彼女の心の中に、一筋の光が照らす。

まふゆ「……霊斗は……そう思ってくれてるの？」

霊斗「当たり前だろ？つか、俺は今のまふゆしか知らないし、優等生のまふゆとか知らん。俺は、今、俺が見てる朝比奈まふゆしか、知らん。」

……イラつきが無くなってきた。けど、言いたい事は全部言った。後は知らん。

霊斗「つか、奏も俺の知り合いもそうだが……誰かを頼るって事覚えろよ。一人で抱え込む必要ねえだろ？誰か頼れる奴がいるなら頼ればいいんだよ……あ、まふゆの場合は本当に頼れるやついなかったんだよな。普通は両親に相談するのが普通だし……まあ、無理にやれってわけじゃねえし……急に変わるもんでもないし……」

まふゆ「……霊斗でもいいの？」

霊斗「いや、何でそこで俺が出てくんの？」

まふゆ「霊斗しか……本当の私を見てくれてないよ？」

霊斗「いやいや、奏達だつて、お前の事ちゃんと見てるだろ？そうじゃなきゃ、まふゆを救おうなんて考えないだろ？」

まふゆ「……けど、霊斗が……いい……。よくわからないけど」

・・・おい、さっきの怒りが混じった声はどうした？消えたいって思ってたんじゃねえの？え？もしかして、もう思っていないとかそんな感じ？

霊斗「まあ、ミクにも頼まれてるってのもあるし、お前の事気にしてたのも事実だし・・・特別何かできるわけじゃねえが、俺でいいならいくらでも頼ってくれ。」

まふゆ「・・・わかった。」

ミク「霊斗、ありがとう・・・まふゆが、少し、変わった気がする。」
霊斗「ん？え？マジで？俺から見たら大した変わったようには思えねえけど・・・変わったんなら良かったんじゃねえの？」

変われなかった俺と違って、こいつにはまだ間に合う。こいつの変えられる何か・・・それがあれば、まふゆはまた、自分を取り戻せるはずなんだ。

その時。

「まふゆ・・・!!」

俺やまふゆ、ミクでもない声その場に響く。・・・来たみたいだな。

声の方へ振り向くと、奏、絵名、瑞希が勢揃いしていた。

奏「霊斗・・・？霊斗もいたの？」

霊斗「まあな。ミクに呼ばれたんだよ。俺の話は終わったから、そっちはそっちで話せよ」

俺は、彼女達の話離れた場所で聞こうと思い、動こうとするが・・・何故か動けない。何故なら、まふゆが俺の手を握り、行かせないようにしているからだ。

霊斗「・・・あのー、まふゆさん？手を離してくれないですかね？」

まふゆ「・・・ここにいて。」

霊斗「・・・はい？」

まふゆ「話終わるまで、ここにいて。」

霊斗「いやいや、奏達はまふゆに会いに来たんだろ？それに、これはニーゴの問題だろ？部外者の俺は引っ込んでなきやな。」

と言ってみるが・・・何故か、更に俺の手を握るまふゆ。そして、無表情ながらも俺を見ている・・・

霊斗「はあ、わかったよ。ここにいてやるから。」

よし、諦めよう。これ以上は多分無駄な気がする。そして、彼女達は、朝比奈まふゆという少女に対しての想いを話す。奏は自分の過去の出来事を。そして、まふゆを救いたいと言う決意を。絵名はまふゆに感じていた嫉妬を。瑞希もまふゆに消えてほしくはないと伝えた。そして、彼女を救うための曲を作ってきたらしい

(この場面は、ニーゴの名シーンです。詳しくはうまく書けないので、気になる方は是非、アプリをインストールして、自身の目で見てください。

by 作者)

まふゆ「・・・みんな、自分勝手だね。私に勝手に嫉妬して、私に消えてほしくないって。」

絵名「そうよ。勝手に思ってるわよ。けど、あんただって、勝手に消えようとしてたじゃない。お互い様よ」

瑞希「あはは・・・けど、よかったよ。間に合って。これも、霊斗先輩のおかげかな？」

霊斗「いや、なんで俺？さっきも言ったが、俺はあくまでミクに呼ばれたただけだ。そんで少し、話しただけ。それだけで変わるもんかよ」

実際、俺が話した事は、大したことではない・・・はず。

奏「・・・雪。私、絶対に作るから。いつか、雪を救う曲を。」

まふゆ「・・・うん。期待はしないけど・・・もう少しだけ、待ってみようかな。」

彼女の言葉と共に、スマホが輝く。そして、司の時と同じように、untitledと書かれていた曲の名前が変わっていく。そして、

霊斗「『悔やむと書いてミライ』・・・か。これが・・・ニーゴの想

いの曲……ってわけか」

これで……とりあえずはOK……か？まあ、少なからず、奏達の想いは、まふゆには伝わってるはずだ。それだけでも……収穫はあったはずだ。

霊斗「話はこれで終わりか？それなら、俺、戻ってもいいのか？」

ミク「うん。ありがとう。霊斗」

霊斗「おう。役に立てたならよかったわ。そんじゃ……」

奏「あつ……！待って……！霊斗……！」

俺が悔やむと書いてミライを止めようとする、何故か奏に呼び止められた。

霊斗「ん？」

奏「私……頑張るから……！雪を救える曲を……！作るから……！」

霊斗「お、おう……？」

……え？急に何？なんで俺にそんな宣言するの？

奏「それに……！」

霊斗も救える曲を……作るから……！！待って……！！」

霊斗「……は？」

その言葉を最後に、俺は、セカイから出てしまった。戻ってきた後も、俺はその場に佇んでいる。

霊斗「俺を……救う……曲？」

奏は確かにそう言った。俺を救う曲を作ると。

霊斗「……はは。奏のやつ、何言ってるんだろ？」

俺を救う事なんて……誰もできやしないのに。」

零れたように発した言葉は、誰かに聞かれるわけもなく響き、俺は

再び、自分の家への帰路を、歩き始めるのであった。

昔の記憶

ニーゴとの一件があった翌日。俺達はいつもの様に、ワンダーステージに集まり、クリスマスショーの練習をしていたのだが・・・

寧々「くくく♪」

霊斗「・・・寧々のやつ、さつきから歌の場面、練習してるな」

司「ああ。他の場面も練習をした方がいいと言ってはいるんだが・・・聞く耳を持たなくてな。」

類「やつぱり、昨日見せた、フェニックスステージのショーを意識してるんだろうね。」

霊斗「というより、櫻子さんをだろ。あの人の歌は別格だ。しかも、同じクリスマスショー・・・実力の優劣が確実に解ちまうからな」
えむ「けど、寧々ちゃん、朝からずーっと休憩も取らないですつと歌ってるよ?」

そう。寧々が歌の場面をずっと練習しているんだ。他の場面も練習しなければならんだが、どの場面にも、主人公である、司と寧々が揃わなければ練習できないんだ。

司「やはり、寧々はその高飛車女の歌と自分の歌、何か違うと思ってるんだろうな。俺には違いはあまりわからんが・・・」

えむ「寧々ちゃんの歌も、あの人の歌も上手だよ?」

たしかに寧々のうたも上手なんだ。だけど。

霊斗「・・・なるほどな。櫻子さんが言ってた、寧々が実力の差を感じるだろうって言った言葉、今、なんとなく解った。」

類「?どう言う意味だい?霊斗くん?」

俺は今も歌の練習をしている寧々に近づき声をかける。

霊斗「なあ、寧々。」

寧々「何?まだ、練習してるんだけど・・・」

霊斗「いや、寧々が納得してない理由・・・解ったから。」

寧々「えっ!?そ、それって一体・・・?」

俺が初めて、櫻子さんの歌を聴いた時、そして、いま、寧々の歌を

聴いた時、ようやく違いがわかった気がした。それは。

霊斗「寧々は多分、慎重になりすぎていて、自分の気持ちをうまく出せてない。」

寧々「・・・え？」

司「うん？どういう意味なんだ？」

霊斗「寧々の場合は、技術的には櫻子さんとは大差がない。けど、櫻子さんとの決定的な差は多分これだ。簡単に言えば・・・」

歌に気持ちに乗ってない。あんまり、俺がとやかく言える立場じゃないが、自分が役を演じたときに感じた気持ち、想いを上手く歌に出せてないんだ。」

きつい言い方をしているかもしれないが、これが事実だと俺は思う。以前の類と似たやつな感じなのだろう。

司「つまり・・・もつと肩の力を抜いて歌え・・・という事か？」

霊斗「まあ、簡単な解決策はそれなんだろうが：：けど、そうなってる原因があるはずなんだ。例えば・・・そうだな。過去にショー関連で大きな失敗をした。まあ、簡単に言えば過去のトラウマ。それを意識してるから。多分、寧々には心当たりがあると思う。だろ？」

俺が寧々に聞くと、暗い表情をしながら、首を縦に振る。

霊斗「となると・・・類、こう言う時って、どうするのが一番いいんだ？」

類「そうだね・・・昔の出来事が原因なら・・・失敗する前の歌い方がヒントになるかもしれない。」

寧々「前の・・・歌い方・・・？そんなの・・・覚えてるわけ・・・」
寧々の前の歌い方・・・つまり、以前、主役になる予定だったショーの失敗をする前の歌い方・・・んー、やっぱり、俺達にはどうしようもできないよなあ・・・と思ってた時だった。

『やつほー♪みんなー☆』

はじめて会った時と同じように、プロジェクトから、ミクが映し出される。

えむ「ミクちゃん！こっちに来るの、久しぶりだねー！」

霊斗「そういえば、ここ最近、出て来てなかったな。久しぶり」

ミク『うん♪久しぶりー☆それより、みんな。今から、セカイに来てくれないかな？新しいショーを見てほしいんだ☆』

司「新しいショー？今度はどんな物なんだ？」

ミク『クリスマスショーだよ♪しかも、今回は新しいメンバーも出るのだー☆』

えむ「新しいメンバー？それって誰々？」

ミク『ふふーん♪それは、来てからのお楽しみ。それじゃあ、みんなでセカイにー・・・』

ミクが俺達を、セカイに連れ出そうとした時だった。

寧々「ごめん・・・私、今はそんな気分になれなくて・・・先に帰るね・・・」

寧々だけ、暗い表情をしながら、ワンダーステージを去っていく。

ミク『あつれれー？寧々ちゃん、何かあったのー？』

司「ああ。実は次のショーの事で、行き詰まっいてな・・・」

寧々 side

寧々「・・・昔の歌い方・・・か。」

類に言われた解決方法・・・私が昔、ショーで失敗する前の歌い方がヒントになるって言ってたけど・・・

寧々「そんなこと言われても・・・どうしようもない・・・」

その時だった。

「あら？そこにいるのは、ワンダーランズ?? ショウタイムの草薙寧々さんじゃない。」

声をかけられた。その方向に、私は顔を向ける。そこにいたのは、霊斗が撮ってきたビデオに写っていた青龍院櫻子さんだった。

寧々「あ、フェニックスステージの青龍院・・・さん。」

櫻子「そんなしよぼくれた顔をしてどうしたのかしら？ 私たちのショーには勝てないとやつと気づいたのかしら？」

寧々「そんなこと・・・！」

ない。そう言いたかった。けど、言えなかった。今の私と、櫻子さん・・・どちらがすごいショーをできるか。聞かれなくてもわかっていたから。

櫻子「その様子じゃあ、次のショーは期待できなさそうね。いずれにせよ・・・このフェニックスワンダーランドで満足のいかないショーをするのはやめて頂戴。」

そう言つて、櫻子さんはその場を去っていく。けど、途中で足を止めて。

櫻子「ああ。一つ言い忘れていたわ。」

寧々「・・・？」

櫻子「あのビデオに写っていたかは知らないけれど・・・鬼灯霊斗くんは、あなたがフェニックスワンダーランドの歌姫だって証明すると言つてたわよ？」

寧々「・・・え？」

櫻子「彼の期待を裏切らない為にも、頑張った方がいいのではなくて？ まあ、優しい彼の事ですもの。負けても、励ましてくれると思うわよ？」

そう言つて、今度こそ、櫻子さんは去っていった。それでも、私はその場で立ち尽くす。あの人の言葉が胸に刺さる。満足のいかないショー。そして、霊斗の期待を裏切る事。私は・・・悔しかった。何も言い返せなかった。

寧々「・・・っ」

そして、何より：私をもう一度、ステージに立たせてくれた、みんなに迷惑をかけている事が・・・一番悔しかった。

寧々 s i d e o f f

あれから1週間、寧々の悩みが解決せず、ショーの練習は続いた。他のシーンは何も問題なく、順調に練習が続いている。

類「うん。このシーンもOK。本番までもう時間もないから、通し稽古をやつていこうと思うよ。」

司「おお！やつとここまでできたか・・・だが、寧々の歌は大丈夫なのか？あれからも、ずっと悩んでいる訳だが・・・」

霊斗「これに関してはどうしようもねえな。技術の問題じゃなく心の問題。俺たちにできることは、寧々が歌に集中できるようにすること。それと、見守る事ぐらいだろ？」

えむ「けど、待ってるだけじゃ嫌だよ。私も何かできたらいいのに・・・」

えむの言ってることもわかる。けど、こればかりはな・・・

えむ「あつ。それじゃあ、昔の事を思い出せばいいのかな？」

そう言うと、えむは寧々に向かって駆け出す。

えむ「ねーねちゃん！」

寧々「わっ・・・！な、何？」

えむ「あのね！寧々ちゃんって昔からショーをやってたんだよね？」

どんなショーが一番好きなの？どんなショーをやってたの？」

寧々「・・・今は練習中ですよ。そんな話、また今度で良いですよ？」

類「それなら、少し休憩をしようか。その間、話してあげても良いんじゃないかな？思い出話をするのも、悪くはないと思うよ。」

寧々「はあ・・・休憩の間、ただだからね。」

そして、休憩の間、寧々は少しずつ、昔の出来事を話し始める。どうしてショーを始めたのか。類と会ったのはいつなのか。それに加えて、えむも話し出した。おじいさんのショーを見たから、ショーを

やりたいつと思つたらしい。

霊斗「なるほどな。類や家族の人たちとショーを見て、寧々はショーをやりたいつて思つたわけか。」

司「寧々も家族でショーを見たから、やりたいつと思つたのか。それにえむも……」

寧々「……あんたもそうなの？」

司「ああ。最初に見たショーは家族と見たんだ。そのショーで妹があまりにも良い笑顔をするからな。俺も、こんな風に妹を笑顔にしたい……そう思つたから、俺はショーをやりたいつとそう思つたんだ。」
類「ふふつ、僕も、ショーを見終わった時には、自分達でショーをしていたよ。」

みんなの会話が弾んでいく。自分自身の思い出話に。

えむ「霊斗くんは？ 霊斗くんはどうしてショーをやろうと思つたの？」

霊斗「俺か？ 俺は……司がスターになつた後のステージを見たいから……か？」

類「霊斗くんは、子供の頃に、ショーを見たいわけじゃないんだね？」

霊斗「子供の頃？ ああ……子供の頃は……」

『霊斗。あなたは音楽の天才なの。勉強もしつかりやって、私たちの夢を叶えて。お友達と遊ぶのは良いけど、必要のないものは買つちやダメよ。』

『てめえの歌は金になるんだよ。さつさと歌つて、稼いでこい。』

『うん。わかつたよ。それが命令なんだよね？』

霊斗「……つ？」

……なんだ？ 今の？ 俺はちゃんと友達を作つて……普通の生活をしてたよな？

司「霊斗？」

霊斗「・・・んっ？おお。悪い。子供の頃は歌が、好きでな。子供の頃からずーっと。歌い続けてたよ。」

司「なるほど。幼い頃から歌い続けていたから、あれ程のすごい歌が歌えるのか・・・」

えむ「霊斗さんの歌、とーっても上手だもんね！子供の頃からそうだったんだー♪」

類「ふふっ、こうやって、みんなの思い出話を聞くのも新鮮だね。」
寧々「うん・・・（霊斗の昔の話を聞いて良かった・・・かな。）」

その後も、俺達の会話は弾み、今日1日は、練習をせずに、思い出話で終わってしまった。だが、話している最中も、終わった後も、俺は心ここに在らずだった。

あの時、見たあの光景が頭から、離れなかったのだから。

聖夜の夜に、奇跡のプレゼントを

通し練習の翌日、いつものようにワンダーステージに集まる俺達。練習の為に準備を進めているのだが、その場には寧々の姿がない。

えむ「寧々ちゃん、遅いね。」

司「そうだな。寧々の事だ、昨日は遅くまで、歌の練習をしていたんじゃないか？」

霊斗「つつても、今、俺達にできるのは待つ事だけ。寧々自身が、なんとかしなきゃいけない問題だろ？」

類「霊斗くんの言う通りだよ。今回のショーの鍵は寧々の歌。寧々には自分で立ち上がってもらわないといけない。」

司「まあ、もし出来なくても、俺が主人公2人を演じれば問題ないだろう！スターならばそれくらいは出来なければな！」

霊斗「相変わらずの自信だよな・・・ん？」

すると、俺のスマホの画面が光る。手に取り、スマホを起動させると、突然。

『みんなく!!♪』

霊斗「おっ? ミク?」

司「ど、どうして、霊斗のスマホから出てきたんだ!」

ミク『えっへへ♪実は、この前、霊斗くんに頼んでスマホに入れるようにしてもらったの♪』

そう。以前、セカイに入った時、ミクから俺のスマホから出てみると頼まれてしまった。まあ、迷惑にはならないからOK。と言っただけから、突然現れることが多くなったけどな。

霊斗「そんでミク、今日はどうしたんだ？」

ミク『えつと、私も寧々ちゃんのこと心配で・・・うわわっ!』
すると、画面からミクの姿が消えて、別の人物が映し出された。

『みんなく♪楽しくショーしてるかしら〜?』

司「ぬわっ!こ、今度は誰だ!」

霊斗「おく・・・レンの次は、メイコか。」

そう。そこに現れたのは、バーチャルシンガーのメイコ。
・・・てか、また増えたのか。

メイコ『初めまして！ミクから話は聞いてるわ！今日は、みんなとクリスマスショーをやりようと思つて誘いに来たの！』

霊斗「ん？つて事は、ミクが前言つてた新メンバーつてのは・・・」
ミク『うん！メイコの事だよ！』

霊斗「なるほどなあ・・・んで、クリスマスショーをセカイでやるつて事は、多分、寧々を元氣付けるためつて感じか？」

メイコ『その通りよ！霊斗くん！落ち込んでる時こそ、ショーで元氣付けてあげないとね！それで、その子はどこにいるのかしら？』

司「それがまだ来ていないんだ。そろそろだとは思うが・・・」
すると、タツタツタ！と音が聞こえてくる。振り返ると駆け足で来る寧々の姿。

寧々「お、おはよう・・・遅くなってごめん」

えむ「あ、寧々ちゃん！」

司「遅いぞ！寧々！・・・調子はどうだ？」

寧々「・・・心配かけて、ごめん。でももう大丈夫。朝から練習して、万全にしてきた。」

その時の寧々は以前と違かつた。吹っ切れた感じというか、悩みがなくなつたというか・・・

霊斗「まあ、俺達の劇団の歌姫なら、当然だろうな。だろ？」

司「ああ！霊斗と同じ気持ちだぞ！」

えむ「うん！寧々ちゃんなら、きつと歌えるよー！」

類「ふふっ・・・」

これで、大丈夫だな。

司「さあ！寧々も元氣になつた事だし！練習を始めるぞ!!」

霊斗「だな。そんじやあ、折角だしよ。ミク達にも見てもらおうぜ。ショーを経験してるミク達の助言も欲しいしよ。メイコにも挨拶しとかないとな」

寧々「うん。それに、前に誘つてもらつたショー、わたしも出たいから・・・いい、かな？」

ミク『もつちろんだよ☆』

類「それなら、セカイで見てもらおうか。演出に必要なものも持っていくよ。」

司「よくし！それじゃあ、セカイで俺達のクリスマスショーの練習をするぞ！目指すは・・・1位だ!!」

えむ「お〜♪」

そして、俺達はセカイへと向かい、クリスマスショーの練習をする。その時、聞いた寧々の歌は以前とは違い、役を演じた上で、気持ちの乗ったすげえ歌を披露してくれた。この歌には、ミク達も大絶賛だった。そして、通し練習もこれまで以上に進んだんだ。

そして、月日は流れて・・・クリスマスショー当日。

霊斗「おー・・・こんな寒い中、屋外のステージにこれだけ集まったのか・・・そんだけ期待されてんのかね・・・」

客席はいつものように満員・・・なんてレベルでは収まってなかった。こんだけいるのか？マジ？

類「今までのショーを見てくれた人たちや、新しいお客さん達も集まっているからね。それに、着ぐるみの人達の客寄せの効果もあるだろう」

霊斗「ほんと、全員でワンダーステージを動かしてるって感じだな・・・まあ、それに恥じないように・・・そして、俺達の目標である。みんなを笑顔にするショーで、コンテストの1位を取る・・・最高のショーにしてやろうぜ？類？」

類「ふふつ、当然だよ。霊斗くん。」

司「おーい！類！霊斗！そろそろ始めるぞ!!」

類「それじゃあ、行こう。霊斗くん。」

霊斗「だな。」

そして、俺達のクリスマスショーの幕が上がる。

櫻子 side

(念の為に様子を見にきたけれど・・・以前よりは遥かに良くなってるわね。寧々さんの歌も以前より良くなってる・・・けど、これじゃあ、私達を超えることはできないわよ)

わたしは、以前、私に宣戦布告をした鬼灯霊斗くんが所属しているフェニックスステージのショーを見にきていますわ。けど、今のところは実力は私たちの方が上・・・これでは私達を超えるなんて・・・司『よし、変装完了！これなら、僕がサンタクロースってバレないだろう？』

寧々『サンタ見習い、でしょ？それに、そんな格好で忍び込んだら、逆に捕まっちゃうんじゃない？』

司『大丈夫・・・ってうわあああ!?!』

類『不審な奴がお屋敷に入ろうとしているぞー！全員捕まえろー！』

霊斗『おー!!』

司『な、なんでこうなるんだー!?!』

そして、追いかけられる主人公の少年。それを追いかける警備員二人・・・ドタバタと走るその光景に私は・・・

桜子「・・・ふふっ。」

少し笑ってしまった。

桜子「あっ・・・い、今の場面は・・・少し、お、面白かったわね・・・」
大した場面ではなかったはずなのに・・・それでも、私は楽しく、笑ってしまったのだ。

霊斗 side

そして、ショーはラストシーンへと向かう。少年サンタの手伝いをする少女は一人の少女にプレゼントを渡して、その後も様々な子供の元へプレゼントを配っていく。そして、最後の一つを配り終え、少年との別れの時が来るのだ。

類「よし、そろそろ雪を降らせよう。小型の降雪機の準備をしよう」

霊斗「OKだ。えむ、準備するぞ」

えむ「了解！」

俺達はラストシーンに、類特製の小型降雪機の準備をする。ステージでは、司が退場。そして、寧々が練習をし続けてきた歌を歌う。

えむ「わあく♪寧々ちゃん、凄く楽しそうに歌ってる☆」

霊斗「おゝ．．．確かにそうだな。これが寧々の本当の歌か。マジですげえな。」

類「ふふつ。昔の寧々を見てる気分だよ。あそこまで楽しんでいる寧々は今まで見た事がない。」

悩んでた時とは違い、役になりきり、ショーを楽しんでいる寧々。これは最高の出来だ。そう思ってた時だった。

えむ「あつ！類くん！霊斗くん！空！空を見てよ！」

霊斗「？空．．．？」

えむの言葉に、俺は空を見上げる。するとそこには．．．空から降り注ぐ、白い粒がゆつくりと降ってきている。

えむ「うわあゝ☆雪だよ！雪！」

霊斗「おゝ．．．類、これ以外に何か仕組んでたのか？」

類「いや、これは僕が何かしたわけじゃないよ．．．これは本当の奇跡が起こったのさ。」

って事は、タイミングよく、今この瞬間に雪が降り始めたって事なのか．．．本当に奇跡だな。ホワイトクリスマスショーになるとは．．．その奇跡生んだのは、雪が降り注ぐ中、サンタの衣装を着た寧々が歌う神秘的な光景。

霊斗「聖夜のステージに響く、歌姫の唄．．．印象に残るのは間違い無いだろうな。」

間違いなく、今までのショーの中でも最高の出来だった。そして、俺達のクリスマスショーは幕を閉じていく。

クリスマスショーから数週間後、俺達はワンダーステージにて、中間発表の結果を待つ。えむが、結果が書かれた紙を取りに行っているのだが．．．

えむ「みんなー！中間結果の発表でたよー!!」

お、タイミングよく、えむが紙を持ってきた。中間結果が出たらしい。俺達全員が、その紙を覗き込む。

司「ついに出了か！一位は．．．！つ！ふえ、フェニックスステージか．．．！」

寧々「・・・っ」

霊斗「・・・いや、ちよい待て。類、これって・・・」

類「おや？下にも順位表が出るね・・・上は総合得点の結果で・・・下は今回のショーの結果・・・つまり」

霊斗「一番上にあるってことは・・・これ、今回のショーなら、俺達、一位だったんじゃないか？」

司「な、何!?!」

総合得点の順位では、俺達は2位に位置付けている。だが、下の順位・・・今回のショーの得点では俺達は一番上に名前があった。

えむ「わあー!!一位だよ!寧々ちゃん!」

寧々「えっ!?!ほ、本当に!?!」

司「よおおおし!!」

霊斗「・・・マジか。」

類「ふふっ、嬉しいね。総合得点は負けてるけど・・・優勝は射程圏内だ。これは優勝するのも夢じゃない。」

驚きの結果に、俺も・・・動揺を隠せない。

寧々「あ、あの・・・!みんな、本当にありがとう!みんなのお陰で・・・また、思いつきり歌えるようになったの。だから・・・ちよつと早いクリスマスプレゼントをもらった気分・・・」

類「ふふっ。それはよかった。」

霊斗「けど、それだけじゃねえぞ。俺たちだって、貰ったんだよ。なあ?司?」

司「ああ!そうだぞ!寧々が楽しく歌えてるのが、俺たちに取つての、クリスマスプレゼントになるからな!」

えむ「そうだよ!寧々ちゃんがすくつくく、楽しそうに歌ってたもん♪」

俺たちの言葉に更に笑顔になる寧々。もう心配入らなそうだな。

司「よくっし!それじゃあ、これからミク達への報告も兼ねて、セカイでクリスマスパーティーをやるぞ!!」

えむ「わあ〜!司くん!それ、すくつくく、いいアイディアだね!」
類「それなら、小型降雪機を持って行けるかな!セカイで雪を降ら

せるのはできるのかな？」

寧々「ふふつ、セカイで雪を降らせたならミク達が喜ぶかもね。」

霊斗「なら、飲み物と菓子だけでも持つてくか。ミク達も食べたりするだろうし。ミク達用のプレゼントも用意しないとな」

セカイで、クリスマスパーティー・・・悪くねえ。

・・・まあ、まだ、コンテストは終わってないが、折角1位を取ったんだ。祝勝会をしても、問題はないだろう。

それから、淡々と進み、夕方。俺達はセカイへと集まり、クリスマスパーティーを開催した。ミク達は俺たちと会った時、1位になったことを祝ってくれた。まだ、総合順位にはまだだが、一位を取れるとカイトは言ってくれた。その言葉に、司達は、やる気に満ち溢れている。

俺はその光景を少し離れた場所で、飲み物を手に持ち、眺めている。

霊斗「・・・いい笑顔だよな。司達。」

それだけ、みんなはこの成績が嬉しかったんだろう。実際・・・俺は・・・どう思ったんだろうか。動揺はしたんだと思う・・・けど、嬉しいか・・・と言われると分からない。

壊れてる俺には。分からない事だった。

ミク「あれ？霊斗くん、どうしたの？」

そんなふうに考えてると、近くに来ていたのか、ミクが俺に声を掛ける。

霊斗「・・・おおつ、ミク・・・か。いや、みんな・・・いい笑顔だよなって思ってたよ。」

ミク「うん♪寧々ちゃんも、えむちゃんも、司くんも類くんも、み

くんな、いい笑顔だよ☆
霊斗「・・・だな。」

そうして、今日一日、ミク達とのクリスマスパーティーで、穏やかに楽しい時間を過ごすのであった。

しし座流星群の輝きに 星に集いし、少女達

クリスマスパーティーの数週間後、俺達はセカイで、新しいシヨールの練習をしている。なんだが・・・

司『さあ！みんな！歌おう！そして踊ろう！素晴らしいこの日の為に！』

寧々「うるさ・・・」

いつもより司のテンションが高い・・・いや、いつも高いんだが、いつもの何倍もの元気があるみたいだ。

霊斗「司のやつ、やけに元気だな・・・なんかあったのか？」

類「さあ？僕も分からないな・・・けど、あれだけ司くんの気合いがすごいんだ。何かあるのかもしれないよ。」

まあ、確かにそうだよな・・・おし。聞いてみるか。

霊斗「おい、司。やけに張り切ってるけどなんかあったのか？」

司「ん？ああ。実は今日、咲希・・・あ、俺の妹が幼馴染と一緒にフェニックス??ワンダーランドに遊びに来るんだ。それで、妹達に最高のシヨールを見せたくてな!!」

霊斗「ああ。そういや、バイト休んで、病院行く時とかあったな。ほんと、妹思いのいい兄貴だな。お前。」

司「ふっ！当然だ！そして、俺達のシヨールを見た咲希達は疲れが吹き飛び、新しく練習に励むことが出来るだろう。」

寧々「練習って？」

司「咲希は今、その幼馴染とバンドをやってるんだ。」

バンド・・・って、咲希ちゃんって体が弱かったんじゃないのか？大丈夫なのか？

「へえ、司くんの妹さんはやつぱり、司くんに似てるのかなあ？」

と、会話に入ってくるのは、クリスマスショーの時には居なくて、つい最近来た、鏡音リンだった。

霊斗「どうなんだろうな・・・まあ、会ってみればわかるんじゃないか？」

か？練習が終わったら、迎えに行くつもりなんだろう？」

司「ああ！それまでは全力で練習をするぞ！みんな！」

えむ「おっつ!!」

それから、練習を続けて、俺達はセカイから退出する。そして、フェニックスワンダーランドの入り口前で待機している。なぜかと言うと、俺たちを妹に紹介したいからだそうだ。一応、服は私服だぞ？

すると、正面から手を振りながらこちらへ向かってくる金髪の少女。その後ろから3人の少女が付いてくる。どうやらあの子達が司の妹さん達らしい。って、あれ？あの子は……？望月さんじゃないか？

「お兄ちゃんーん！」

司「お！咲希！」

えむ「ほえ？」

霊斗「ん？」

司「咲希！そしてLeo／needの諸君！ようこそ！我がフェニックスワンダーランドへ!!」

寧々「フェニックスワンダーランドはあんたのじゃないでしょ……」

司「おほん！咲希、紹介しよう。こいつらは俺が率いるワンダーラズ??シヨウタイムのショーキャスト達だ。」

咲希「あっ！」

穂波「あっ……」

……なんだ？咲希ちゃん……だっけか？驚いてねえか？

司「そして、みんな！……ここにいるのが、今日招待した、我が妹の……」

えむ「わあ〜!!咲希ちゃんだあ〜!!」

司「なぬっ!!」

えむが咲希ちゃんに近づき抱きつく。はい？まさかのお二人とも知り合いな訳ですか？いや、それよりも……

霊斗「久しぶり、望月さん。アップルパイの一件以来か？」

穂波「れ、霊斗さん!?霊斗さんも、司さんと一緒にキャストをやつてたんですか!?!」

望月さんも一緒なのが意外だった。あの一件から会ってもなかったからな。まさか、司の妹さんの幼馴染だとは……

類「おや？霊斗くんの知り合いもいたのかい？」

霊斗「ん？まあ……そんなところだな。」

類「これは……世間は広いようで狭いってところかな。」

寧々「折角紹介するぞって張り切ってたのにね」

まあ、出鼻をくじかれたって意味では司には合ってるのかも知れない。あんだだけ意気込んでたからな。

霊斗「……ん？」

「……………」

不意に視線を感じて、顔を向けると、二人の女の子が俺を見つめている。咲希ちゃんの幼馴染の一人で、黒髪でロングの子、そして、銀髪のショートの子をした女の子。……気にはなるが。

霊斗「というか、案内するにしても、軽く自己紹介しとくか？名前もわからずにいんのもなあ」

司「つと、そうだったな！まあ、えむは全員知っているらしいから、省くぞ！さて、この人見知り全開なのが、ワンダーランズ??シヨウタイムの女優、草薙寧々だ！」

寧々「よ、よろしく……！」

司「こつちが、神代類。ワンダーランズ??シヨウタイムの演出家だ！いろいろな発明で貢献してくれてるぞ！」

類「初めまして。神代類です。」

司「そして、こいつが、俺の最高の親友！鬼灯霊斗だ！」

「……………」

霊斗「そんな風に紹介するのか……？まあ、いいか。望月さんは知ってるだろうけど、改めて。鬼灯霊斗。よろしく」

咲希「あ、はい！わたしは、お兄ちゃんの妹の天馬咲希です！霊斗さんの事は、お兄ちゃんから聞いてます！」

霊斗「あ、やっぱりか。俺も咲希ちゃんの事はよく聞いてるよ。司がすげえ自慢してたからな。」

「じゃあ、私も。日野森志歩。よろしく。」

日野森志歩・・・ん？日野森？・・・気のせいか。

霊斗「おう。んじやあ、咲希ちゃんに志歩。よろしく。後は、その黒い髪の子だけだな」

俺が視線を向けるのはLeo/needと呼ばれた彼女達の中で、まだ名前を知らない。黒髪の子だ。だが、彼女は固まって何故か動かない。

咲希「??いつちゃん。大丈夫？」

穂波「一歌ちゃん、大丈夫？具合が悪いの？」

霊斗「おい、その子、大丈夫なのか？風邪とか引いてるんじやねえのか？」

俺は少し、心配するような素振りはしておく。その一歌と呼ばれた少女に対して。

一歌「あ、い、いいえ！だ、大丈夫です！」

霊斗「・・・？なら、いいけどよ・・・体調悪くなったら言え。無理しても楽しめるもんじやねえからな。」

一歌「あ、は、はい・・・」

・・・なんかモジモジしてるな。黒髪の子。どうしたし？

司「よーし！自己紹介は終わったな！それじやあ、早速・・・」

えむ「あ、そうだ!!折角だから、みんなで遊ぼうよ!!」

寧々「え？」

えむ「私達はショーは夕方だし、それまでは暇だから、咲希ちゃん達ともっと仲良くなりたいたいから!どうかな!」

類「僕は構わないよ。リハーサルは今朝済ませたしね」

寧々「まあ、いいんじゃない？」

霊斗「俺も構わねえよ。折角きてくれたわけだし、特別招待なら、案内も兼ねて、遊ぶのもいいんじゃないか？」

司「まあ、そうだな。折角だから、俺が案内をしてやろう!」

俺達は満場一致で、遊ぶことに賛成した。Leo/needの人たちも賛成のようだ。それから、俺達は様々なエリアを回っている。

えむ「次は、夢のようなワクワク感を感じられるドリーミングエリアです」

霊斗「一応、夢の中がテーマのエリアだな。飛んだり、カートに乗りたり、お化け屋敷があつたり・・・色んなアトラクションがあるのがこのエリアの特徴だな。」

咲希「わあ〜！わたし、トランプリンのアトラクションが大好きなの！」

えむ「よーっし！それじゃあ、咲希ちゃん達ともっと仲良くなる為に！ドリーミングエリアにあるアトラクションをあそびたいと思いまーす！」

咲希「やった〜！どれをやるのかな？やっぱりトランプリン？」

志歩「この歳になって、トランプリンは流石に恥ずかしいんだけど・・・」

寧々「同じく」

咲希「え〜？」

・・・まあ、俺達みたいな高校生が、子供達に混じってトランプリンをする光景って考えると・・・

一歌「あ、あの！草薙さんは何か、やりたいアトラクションとかないんですか？」

寧々「わっ!?わ、わたしは・・・その・・・」

司「なら、あのお化け屋敷はどうだ？」

司が指を刺した方向にあるのは一つのお化け屋敷だった。

霊斗「フェニーくん・イン・ザ・ナイトメア？」

えむ「怖い夢がテーマの、ちよつとダークなお化け屋敷なんだよ！」

穂波「こ、怖いのか？」

司「いや、全く怖くないぞ。小さな子供からご老人まで、色んな人たちが入って楽しめるお化け屋敷だな。」

霊斗「いや、お化け屋敷で楽しめるってどういうことなんだよ・・・まあ、色んな人が楽しめるってのはちよつと興味あるな」

・・・こんな俺でも、楽しめるのか気になるしな。

司「よーし！それなら、入るぞ！俺に続けー!!」
えむ「おーっ!!」

司が先導して、俺たちも後に続く。中に入ると、雰囲気がある…とは思う。時々、女性陣が叫んだり、驚いたりしていたが、楽しんでたのだろう。数分後、なんとか脱出できた。

咲希「はあく…思った以上に怖かった…おでこに当たったのが、まさかこんなにやくだったなんて…」

類「古典的だったけど、シンプルで面白い演出があつたね。ショーにも使えそうかな。」

司「そうか！あれくらいなら、いつでも応えられるぞ！」

類「そうかい？それじゃあ熱々こんにやくを用意しておくよ！」

司「何故、熱々に!？」

霊斗「ある意味で、伝統的なりアクションが取れそうな仕掛けだな。まあ、シンプルで面白いとは思うが。」

類「霊斗くんもそう思うかい？」

すげえ、イキイキしてるな。類のやつ。

咲希「お兄ちゃん、楽しそう!!」

一歌「そうだね。お友達も面白い人ばかりだし」

志歩「けど、霊斗さんは比較的…普通な感じだよね。」

それぞれがお化け屋敷のリアクションを取っている。まあ、楽しんでいけば何よりだな。その後は。

ギギギギギギ

霊斗「おおっ…結構高いんだな。」

類「落ちる寸前まで焦らして期待感を煽る。そして」

寧々「…っ!!」

類「落ちる時にはフェニックスワンダーランドの全貌を見ながら、超スピードで落ちる！これぞ緊張からの解放。爽快感があつていい演出だね。」

穂波 一歌

「きゃあああああつ!!!」

ジェットコースターに乗ったり。

グルグルグルグルグル!!!

司「回せ回せ回せ!!!うおおおおおつ!!!」

えむ「わー!!司くん!すごい!世界がぐるぐる回ってるよー!!」

一歌「ちよ、ちよっと司さん!いくらなんでも回しすぎじゃ...!!」

司「いいや、まだまだ行くぞ!俺はこの程度で満足するような男ではない!!」

霊斗「おおーっ...なんだあれ。めちやくちや回ってるなあ。えむのやつなんか、目が漫画みたいにぐるぐるしてんぞ。」

類「司くんが張り切ってるみたいだね。」

志歩「まあ、こっちは張り合わなくていいんじゃない?ゆっくり回していこう。」

咲希「あははっ♪」

コーヒーカップで遊んだり...まあ、司の方は、めちやくちや回転してたけどな。ベイ○レードかよ。

霊斗「おー、さっきのジェットコースターより、高いな。」

一歌「あ、もうすぐ頂上ですよ。」

志歩「ジェットコースターも遅く見える。」

咲希「あれくらいなら、何回でも乗れちゃうよ♪」

穂波「わ、私はもう、いいかな...」

Leo/needメンバーと一緒に観覧車に乗ったり...時間の許す限り遊び尽くした。そして、太陽は沈んでいき、夕方へとなっている。

司「ふう...だいぶ遊んだな。どこかで休むか。」

えむ「じゃあ、フェニペンまんじゅうを買って、みんなで食べようよ。ドリンクセットもあるし。」

そう言い、司とえむは饅頭を買いに行く。後に続くように類と寧々もだ。だが、俺はLeo/needのメンバーの近くにいる。男が一人でもいた方が、変な奴には絡まれないと判断したからだ。

「霊斗「だいぶ、遊んだんだな。こんなに暗くなってるとは。」

一歌「そうですね。もうこんな時間：：けど、こんなに楽しく、時間を気にしないで遊ぶのは、小学生以来かもです。」

霊斗「そういや、Leo／needのみんなは、幼馴染：：なんだよな？確か、今はバンドをやってるって。」

穂波「はい。一歌ちゃんがギターボーカルで、私がドラム、咲希ちゃんがキーボードで、志歩ちゃんが、ベースです。」

霊斗「ほお：：幼馴染ガールズバンドってところか。全員が一つのことに取り組めるのはいい事だと思っぞ？」

「そんな話に夢中になっていいると。」

「うわああああん!!」

霊斗「：：ん？」

どこからか泣く声が聞こえてくる。声の方へ顔を向けると、ひとりの女の子が泣いていた。俺はすぐさま駆け寄り、声を掛ける。

霊斗「つと、どうしたんだ？」

「ぐすつ：：：：ままあつ：：：」

「迷子か。珍しいな：：つと、とりあえずは泣き止ませなきゃな。こういう時は：：：」

霊斗「くくく♪」

「落ち着かせるなら歌かな。取り敢えず、綺麗な歌声をイメージして：：：つと。」

一歌 side

その人と会ったのは今日が初めてだった。今日、フェニックスワンダーランドの招待券をもらって、みんなと遊びにきた。司さんのショーキャストの人達を紹介してもらった時があったんだ。鬼灯霊斗さん。

最初はその類って人と、司さんのお友達って私の中ではそう思っ

た。何というか・・・雰囲気です。そう思ったんだ。優しい先輩・・・みたいな感じで。

けど、泣いている迷子の子を見つけてから、彼はその子を落ち着かせる為に、歌を歌い出した。その歌を聴いて、私の心は惹かれた。すごく心に響いて、綺麗な歌声で・・・何より、自分よりも凄い歌を歌っている事がわかったから。悔しくて・・・けど、それ以上に・・・

・・・この人みたいに歌いたってそう思ったんだ。

霊斗 side

霊斗「~~~~♪・・・落ち着いたか？」

俺は歌い終え、泣いていた女の子に声をかける。少し、涙目だが、首を縦に振る女の子。

霊斗「よし。いい子だな。」

俺はゆつくりの子供の頭を撫でてあげる。こういうのが確か良いとか、聞いたことがある。それから数分して、子供の母親が現れて、無事。合流した。めっちゃくちゃ頭を下げられたけど。

霊斗「ほっ・・・良かった。」

類「相変わらずの歌声だね。霊斗くん。」

霊斗「・・・見てたんなら手伝ってくれても良かったんじゃないやねえの？類？」

類「いや、あそこで僕が入ってもね。霊斗くんだけでも充分だったさ。」

霊斗「・・・まあ、良いけどな。」

類も類なりに、気を使ってくれたんだろ・・・さりげなく泣き止ませるように、用意もこつそりしてたみたいだな・・・

霊斗「んで？類がきたって事は、そろそろ時間になるのか？」

類「そうだね。開演の時間までもうすぐだよ。咲希さん達を案内したら、すぐに開演しよう」

霊斗「OK。なら、こっちで咲希ちゃん達を案内しとく。類達は、準備しといてくれ。」

そう言っつて、俺はもう一度、Leo/needのメンバーの元へと戻る。

霊斗「さて、みんなそろそろ『霊斗さん！さっきの凄かったよ!!』：what?」

咲希ちゃんは何故か興奮したような感じになってる。何かあった？

咲希「さっきの歌！すつごかった！なんていうか・・・！凄かった！」

霊斗「いや、語彙力崩壊してない？取り敢えず、凄かったってのはわかったけど。」

志歩「私も凄いと思った。さっきの歌、歌うのが難しい曲だから。音程も全然外れてなかったし。」

霊斗「あ？そうなの？シヨアの休憩中とかに聞いて、覚えたから歌っただけなんだけど・・・」

穂波「そ、それだけで覚えられるものなんですか？」

霊斗「うん。歌だけなら余裕。後は、自分らしく歌えるかどうかじゃない？」

・・・つて、普通にただ歌ってるだけのやつのセリフだけだな。気持ちを決めるとか、自分らしくとか全然わかんないし。

一歌「自分らしく・・・歌えるかどうか・・・」

霊斗「つて、それよりも、そろそろシヨアの時間になるから。俺達のステージへ案内させてもらいますよ。お嬢様方。」

そうして、俺達は自身のステージへと案内する。今日行われる、俺達だけのシヨアを見てもらう為に。

一瞬の闇

霊斗「さあ、ここが俺達の夢のステージ、笑顔溢れるワンダーステージへの入り口です。お嬢様方。」

俺はLeo／needメンバーをワンダーステージの入り口に案内する。すると、なぜか全員の表情が何とも言えない感じになっている。

霊斗「えーと・・・どうした？」

志歩「・・・何で、手作りの看板なの？」

霊斗「あー・・・」

・・・やばい。なんて言えばいいんだ？

穂波「け、けど、こういうのもわたしはいいと思うよ？アットホームみたいな感じで。」

望月さん、フォローしてくれるのは嬉しいけど、苦笑いしてる時点で、少しはおんなじ風に思ってたわけですね。

霊斗「まあ、色々あつてな。あんまし気にしないでくれ。後はこの道をまっすぐ行けば着くから。んじゃ、俺は先、行くわ。準備あるから。」

俺は駆け足で先にワンダーステージへと向かい、到着。ステージ裏ではもう司達は準備を終えているようだった。

司「お！霊斗！咲希達を案内してくれて、ありがとうな！」

霊斗「気にすんなよ。まあ、迷う事はねえと思うけど、なんかあつたら困るからな。んじゃあ、準備してくるよ」

俺は衣装に着替えるための場所へと向かう。すると、その途中に。

類「霊斗くん、少しいいかな？」

類から声を掛けられた。

霊斗「ん？どうした？類？なんか問題でもあったか？」

類「いや、機材については何も問題はなかったよ。ネネロボも問題はないさ。けど・・・少し、相談したい事があってね。」

霊斗「相談したい事？」

類「実は、えむくんの様子が少し変なんだよ。」

霊斗「えむの様子が？」

類「そうなんだ。たまに、えむくんが・・・笑顔じゃない時があつてね。もしかしたら、何かを隠しているんじゃないかと思うんだ。」

えむが・・・ね。隠し事は・・・下手そうだと思うけどなあ。

霊斗「・・・それで、類はえむに聞いてみたのか？」

類「いや。今は今日のショーに集中しようと思つてね。聞いてはいないさ。」

霊斗「それが、いいと思う。そのうち、話してくれるんじゃないか？」

類「・・・そうだね。いつか、話してくれる・・・そう思う事にするよ。ありがとう。霊斗くん。話を聞いてくれて」

霊斗「気にすんなよ。さあ、今日もとびきりのショーを全員に見せてやろうぜ。類」

類「ああ！霊斗くん！」

さあ、今日も、俺たちのショーの幕は上がる。

一歌 side

霊斗さんの案内で、私達はワンダーステージに到着した。そこには大人から子供まで、様々なお客さんがいっぱいいた。

咲希「うわー！こんなにお客さんがいるー！」

一歌「本当にすごいね・・・それだけ、人気なんだ。」

志歩「さつき、遊んでたイメージだと、そんな風には見えなかったけどね。」

穂波「ふふっ。そうだね。みんな楽しそうに遊んでたから。」

すると、ブザーがなり、幕が開いていく。始まったみたい。ショーの内容は、笑顔が失われた国に一人の歌姫が来て、彼女の歌で国に笑顔を取り戻す・・・というお話らしい。

司「さあ！歌姫よ！この国に笑顔を取り戻す為に！あなたの歌を！」

寧々『ええ！~~~~♪』

司さん達の演技が続ぎ、草薙さんの歌声がステージに響く。その

時、わたしは、驚愕していたと思う。とても綺麗な歌声だった。

一歌『繊細だけど、伸びやかで、歌に気持ちが乗っていて・・・楽しいって気持ちがあざとん伝わってくる。私も・・・こんな風に歌えたら・・・』

この歌を聴いて・・・周りの人も笑顔になってる。目を輝かせて・・・司『おお！流石は歌姫！ご覧ください！あなたの歌で、この国に笑顔が溢れています！』

『こうして、歌姫の歌によって、多くの笑顔を取り戻し、笑顔が失われた国と呼ばれた場所は、笑顔溢れる幸せの国と呼ばれる様になりました。』

めでたし、めでたし。その声と同時にステージの幕が閉まっていた。お客さん達と私達は精一杯の拍手を送る。そして、わたしは決心した。

一歌『よし・・・！決めた・・・！』

そしてもう一人、一歌と共に、決意を決めた人がいる。

霊斗 side

今日のショーが終了し、お客さんがいなくなってから、俺達はLe o/needメンバーと合流した。

咲希「お兄ちゃん！すごいショーだったよ！」

司「はーっはっはっは！そうだろうそうだろう！俺たちのショーはいつだって最高だからな！」

えむ「いーっぱい、練習してよかった！ね！霊斗くん！」

霊斗「おう。そうだな。」

寧々「みんなが、笑顔になってくれてよかった。」

今日も成功だな。望月さん達も笑ってくれてたし。

司「それじゃあ、俺達はステージの片付けをするから、咲希達は、

フェニックスワンダーランドを満喫して来てくれ！ただし、あまり遅くならない様にな！」

咲希「はい！」

霊斗「そんじやま、始めますか。類、重たいもんから片付けしちまおうぜ。」

類「ああ。そうだね。」

早速、類と片付けに取り掛かろうとしたその時だった。

「あの・・・」

霊斗「ん？」

声を掛けられた。その声の方に振り返ると、・・・一歌がそこにいた。

霊斗「なんだ？一歌？忘れ物でもしたか？」

一歌「えつと、その・・・霊斗さんに聞きたい事があつて・・・」

霊斗「聞きたい事？」

・・・何だ？俺に聞きたい事つて。

一歌「えつと・・・霊斗さんは歌ってる時・・・何か意識してる事つてありますか？」

霊斗「・・・意識してる事？歌ってる時に？」

一歌「はい。その、草薙さんも凄かったんですけど、霊斗さんの歌が・・・印象に残つてて、私もこんな風に歌いたいわって・・・」

霊斗「あー・・・そう思ってくれたのは嬉しい。嬉しいけどな・・・
どういう風に歌ってるのか・・・何を意識してるのか・・・か。そう
言われると、難しいな・・・俺の場合は。」

一歌「やつぱり、色々考えているんですか？」

霊斗「ああ、いや、そうじゃなくて・・・」

・・・ここで、何も感じる事ができない。全て失ってるんだから・・・
そう言えたら。どれだけいいのかな。けど。一番、何かを思っている
なら・・・

霊斗「そうだな・・・結局、その歌の自分なりでいいから、理解する事。これに限るんじやねえかな。」

一歌「自分なりに・・・理解する？」

霊斗「ああ。歌つて言つても色々あるだろ？元気を出す為の曲。悲

しさを表現してる曲とか。それをなんで悲しんでいるのか？何が楽しいのか？そういうのを自分に当てはめて理解する・・・これをしておくと変わるんじゃないかな。」

・・・実際、この歌はこんな感じの曲・・・そんな風に歌えって言われたら・・・

気持ちを感じれなくても、歌えるには歌えるし。

一歌「自分に当てはめて歌う・・・か。」

霊斗「まあ、俺が考えてるのは、そんな感じだな。あとは、基礎練習を欠かせない事。実際、誰かの歌を聞いて、自分の歌と比べることも、いい練習にはなるし。第三者に聞いてもらって事も練習にはなるからな。」

一歌「わかりました。ありがとうございます！」

霊斗「気にするなよ。んじや、俺は作業に戻るな。」

一歌「あ、待ってください！もう一つ、お願いがあるんですけど・・・」

霊斗「ん？どした？」

一歌「えつと・・・もしよかったら、霊斗さん、私達の練習を見てくれませんか？」

霊斗「・・・はい？」

Leo／needの練習に俺が？誘う相手、まちがえてないか？

霊斗「えつと・・・俺が行っても意味あるのか？楽器が弾けるわけじゃねえし・・・他の人の方がいいと思うぞ？」

一歌「れ、霊斗さんがいいんです！ダメ・・・でしょうか？」

・・・これ、天然なのか？言葉の受け取り方によっては・・・よし、気にしない方向でいこう。そうしよう。

霊斗「んく・・・見てやるのは構わないけどな・・・バイトがあるからな・・・休みの日・・・くらいならいいぞ。」

一歌「ほ、本当ですか!?ありがとうございます!!」

・・・まあ、嬉しそうだしいいか。

霊斗「それなら、連絡先、交換しとくか。後、他のメンバーにも一

応教えとけよ。」

そう言い、俺はスマホを取り出す。それに続き、一歌もスマホを取り出し、お互いの連絡先を交換する。それを見た咲希ちゃん達も、次々と連絡先を交換する。あ、ちなみに、ニーゴのメンバーとも連絡先を交換してるぞ。

霊斗「おし、んじや、俺は片付けに戻る。そっちはちゃんと満喫しろよ。」

一歌「は、はい!」

俺は軽く手を振りながら、片付けに戻る。待たせてしまっていた類に軽く謝るが、『気にしなくていいよ』と言ってくれた。感謝だ。

そして、片付けを終え、解散して、家に戻った後、俺は眠りにつく時、俺のスマホが輝く……もう、驚かない。3回目となればな。そして、目が覚める……そして目に広がるのは。

何処かの学校の教室……の様な空間だった。

霊斗「……3つ目のセカイ……か。となると……ここは一歌達のセカイ……か。」

そう言いつつ俺は周囲を確認する。あるのは楽器。ギター、ベース、ドラム、キーボード……なるほど。バンド用の楽器か。それと……なんだ? いろんな写真が飾られている……小さい女の子が4人……

霊斗「……?」

霊斗(……この女の子達……一歌達に似てる……昔の写真か。)……全員が笑顔を浮かべている。本当に仲良しの幼馴染同士なんだな。そんな時だった。

「あれ?」歌達じゃないんだ?」「初めましての男の子ね」

聞きなれた声が聞こえる。振り返ると、そこには初音ミクの姿。多少違うのは別なセカイだからなのだろう。そしてもう一人……巡音

ルカの姿。

霊斗「・・・このセカイのミクとルカ・・・でいいんだよな？」

ミク「そうだよ。君は一体誰？」

霊斗「鬼灯霊斗」

ルカ「鬼灯霊斗くん・・・それじゃあ、霊斗くんって呼ばせてもらってもいい？」

霊斗「好きに呼べばいい。」

ミク「それじゃあ霊斗。このセカイに来れたって事は、あなたも一歌達と関係があるの？」

霊斗「は？いや、関係も何も・・・今日初めて会ったぞ？」

ミク「そっか。それじゃあ、偶然入れたの？それに・・・どうやら

初めてじゃないんだよね？何回目なのかな？セカイに来るのは。」

霊斗「3回目。」

ミク「そっか。(鬼灯霊斗・・・彼が入れたって事は、一歌達と少なからず関係性があるって事・・・今日会えたってだけで、このセカイに入れるわけじゃない・・・彼は一体何者なの？)」

ルカ「それじゃあ、霊斗くんは、私達以外の私達に会ったことがあるの？」

霊斗「いや、ルカと会ったのは初めてだ。ミクとは・・・3人目か。嘘偽りなく答える。ここで答えを濁したり、嘘をついても何も意味がないからな。」

ミク「ふーん・・・なら、別に説明をしなくてもいいってことだね。セカイについては。ってそうだ。折角来たんだから、楽器とか弾いてみる？」

霊斗「・・・は？いや、俺は楽器弾けないし、やらねえぞ？」

ミク「なら、歌でもいいからさ。歌ってみてくれない？」

霊斗「・・・」

俺は、ため息をつきつと、マイクの前に立つ。そして、首にかけ

ているヘッドフォンを耳に当て、音楽を流す。自分の好きな歌を。ただ一人で歌う。周りを気にしない。普通に歌うだけだ。

ミク「・・・っ」

ルカ「・・・。」

二人の表情が変わった様な気がするが気にしない。ただ歌う。それだけでいい。そして曲が終わるまで歌い続け、音楽が止まり、ヘッドフォンを外す。

霊斗「・・・これでいいか？満足したのか？」

ミク「・・・っ、うん。ありがとう。」

ルカ「とてもいい声だったわ。凄くいい歌だったわよ。霊斗くん」

霊斗「あつそ。そんじゃあ、俺帰るわ。」

俺はスマホを手に取り、音楽アプリを開く。すると予想通りというべきか、untitledの名前の曲が新しく追加されている。俺は止める為に、操作しようとしたその時だった。

ミク「・・・ねえ、霊斗。帰る前に聞いてもいい？」

ミクに声をかけられた。

霊斗「何？」

ミク「霊斗はさ・・・その歌声で・・・いいと思ってるの？歌を歌ってる時・・・何を思ってるの？」

霊斗「・・・何言ってるの？」

ミク「誤魔化さないで。質問に答えて。」

真剣な表情のミク。そして、ルカも同じ様な表情で俺を見つめる。質問の意図がわからない。だから、俺が今、思ってる素直な感想を話す。

・・・もう、面倒くさい。隠す事も。

霊斗「別に何も。」

ミク s i d e

私とルカは霊斗くんが立ち去った後、呆然と立ち尽くしている。

ミク「・・・ねえ、ルカ。さっきの霊斗くんの言葉・・・本心だと思おう？」

ルカ「・・・どうなのかしら。けど、たった一言だけど・・・それに全て詰まっているわ。あれは本心じゃないのかしら。」

ルカは冷や汗を垂らしながら、そう答えた。・・・やっぱり、ルカもあの言葉が霊斗くんの本心だと思ってるんだ。

さつき、霊斗くんが歌声を聞いた時、私が感じた事はただ一つだった。

それは・・・無だ。何も感じなかった。たしかに綺麗な声だし、心には響くのかもしれない・・・けど、その奥に感じるのは・・・何もない。ただ、音程そのまま歌ってるだけ。機械が歌ってるんじゃないかなって思ったもん。

ミク「霊斗くんは確かに凄い歌を歌ってる・・・けど、一歌達の歌を聴き慣れてるからこそ、彼と一歌達の歌に圧倒的な違いがある・・・」

霊斗くん、あなたはどんな時を過ごしたら・・・

そんな、何も感じる事ができない歌を歌えるの?」

t o b e c o n t i n u e

迷う少女への助言

3つ目のセカイに偶然行き、ミクとルカに会った日の次の日。俺は朝食を食べている最中、スマホの通知が鳴る。俺は食べながら、片手に操作する。連絡が来ていた。相手は・・・一歌だ。

一歌「霊斗さん、おはようございます。今日、私達の練習を見てもうえませんか？あ！もし、何か予定が入っていたら、断ってもらっても構いません！」

・・・めちやめちや丁寧語だな。まあ、いいんだけど。今日は・・・シヨ一の練習もないし・・・まあ、暇ではあるか。

霊斗「了解。今日は暇だから全然OKだ。待ち合わせでいいか？練習場所わからないから」つと。

俺は一歌に返信して、軽く服装を整える。今日は・・・そうだな。ジーパーンに、赤のTシャツ、黒のパーカーで。それと、忘れずに首にヘッドフォンで。そんな準備をしていると、もう一度スマホに通知が入る。

霊斗「えーつと・・・？『ショツピングモールに集合でお願いします。時間は10時から』か。『はいよ。了解。』つと・・・」ポチポチ10時・・・今は大体9時・・・1時間くらいあるな。なら、少し歩きますか。1時間、家の中にいるのもな。そして、俺は財布と携帯を手に取り、家から出る。もちろん目指す先はショツピングモールだ。え？明らかに早すぎるだろうって？

寄り道でもしながら行こうと思ってるよ。それなら、いい時間になるとも思ってるし。

霊斗「さーて、時間までどうすっかな・・・？この時間ならゲームも開いてるからわかんねえからな・・・。なら、CDショツプ、行くか。あそこ、割と早く開くからな」

目的地も決まり、俺は歩きで進んでいく。以前も行った事はあるが、前より早く着き、目ぼしいものがあるか、確認していく。

霊斗「ほうほう・・・あの名作アニメのBGM集・・・買いだな。ん？俺の好きなゲームのOSTもあるじゃねえか。こっちも買い・・・つ

と。こんなもんかな。お？ミクの新アルバム……か。買い……つと。こんなもんか」

俺は複数のCDを手に取り、会計を済ませて店を出る。まさか、俺の欲しかったCDがあるとは……。まあ、そこそこの値段はしたが、俺、金の使い道ねえし……。いいだろ。別に。

霊斗「さてつと。こつから、ショッピングモールまでは、少し距離あるし、着く頃には、10時頃にはなるだろ。」

俺はショッピングモールへ向かい歩き出す。少し時間がかかるが、無事到着し、時間を確認すると、10時少し前に到着した。周囲を確認して、一歌がいらないか確認すると。

「あー霊斗さんー！」

後ろから声をかけられて、振り向くと、ギターケースを背負った一歌が走ってくる。俺も一歌の方へ向かう。

霊斗「おう。一歌。待たせちゃったか？」

一歌「い、いいえ！全然待ってないです。それより、折角の休日に、練習に来てもらっちゃって……」

霊斗「別にいいぞ？家に居ても暇だったしな。それに、他のやつの練習を見るってのも、初めてだし……」

何か、俺に無いものが、あるのかもしれないしな。」

一歌「……？」

霊斗「……さて、早速行くのか？」

一歌「え？あ、はい。みんな待っててくれますから。」

霊斗「そうか。んじゃ、行くか。案内頼むわ」

一歌は頷き、俺は一歌の後を追い、Leo/needメンバーの待つ、スタジオへと案内される。スタジオは意外と近くにあり、中に入ると既に、一歌以外のメンバーが全員集まっていた。

咲希「あつ！いつちゃん！……つてあれ!?霊斗さんもいる!?!」

霊斗「よつ。咲希ちゃん。もち……ああ。違った。穂波と志歩も。」

穂波「れ、霊斗さんがどうしてここに？」

志歩「・・・一歌がつれてきたって事？」

あれ？一歌、他のメンバーには伝えなかつた感じ？あ、ちなみに補足しとくけど、俺がLeo？needメンバーは昨日、別れる前に、咲希ちゃんが。

「霊斗さん！折角だから、みんなの事も名前で呼んであげてよ！」

というので、試しに、全員の名前呼びにした。けど、咲希ちゃん、俺、会った時から、下の名前で呼んでたよ？

霊斗「おう。一歌に誘われてな。練習を見て欲しいってよ。それに、こつちにも用事があつてな。」

志歩「・・・？用事？なにそれ？」

霊斗「まあ、それは後だ。それより、早速聞かせてくれよ。一歌達の歌つてやつ。」

一歌「あ、はい！皆、早速準備するから待ってて！」

一歌はパタパタと慌てたように、準備を始める。他のメンバーは苦笑しながらも、準備を始める。アンプを繋ぎ、チューニングをして、音出しをする。マイクチェックして、準備を終えたらしいそれぞれのメンバーが、自分達の楽器を構える。

霊斗「お？準備は完了したのか？」

一歌「はい！私達の歌、聞いてくれますか？」

霊斗「おう。お前達が、作った歌を。お前達の歌を。聞かせてくれよ」

一歌「はい。それじゃあ・・・」

聞いてください。『needle』

『needle』・・・それが、一歌達が・・・untitledから生み出された曲・・・か。多分。彼女達の音が。歌が。この部屋に響く。

けど、やっぱりだ。やっぱり……駄目だ。こんないい曲でも……それに……。彼女達の音……。その中で、唯一たった一つだけ、音が……。乱れてるものがある。それは……………

そんな事を考えてると、音が止まりる。どうやら演奏が終わったらしい。一歌達は真っ直ぐ、俺を見つめる。

霊斗「……いい曲だった。相当練習してんだろうなっなのはわかる。」

俺が簡潔に感想を言うと、一歌はホツとした表情になり、穂波と咲希は少し喜んでる。

霊斗「……けど、一つだけ、気になった事があるんだ。」

咲希「？気になった事？」

霊斗「おう。気になったのは……ベースの音。」

そう。俺が先程、乱れてる音と言った楽器はベース……つまり、志歩のベースの音。

志歩「……っ。私の音？」

霊斗「ああ。」

咲希「あれ？でも、しーちゃんの音、外れてもなかったし、間違ってもなかったよ？」

霊斗「それは確かにそうだ。多分だけど、志歩が一番上手いんだと思う。けどな……

何かな。音がな。乱れてるんだよ。」

志歩「……？音が乱れてる？チューニングは合ってるけど？」

霊斗「ああいや、そう言う訳じゃねえ。音自体には違和感はないけど、

なんかというか・・・何か・・・演奏の事、以外のこと。考えてるだろ？志歩。お前、何か迷ってないか？」

志歩「・・・」

・・・ビンゴだな。少し暗い表情になった。

霊斗「・・・多分、お前から自身の問題だよな。だから、部外者の俺が何言っても聞かないんだろうが・・・一つだけ言っというてやる。

お前一人で抱え込むな。周りに話をしろ。自分一人じゃ、多分解決しないことなんだろう？だったら、話してスッキリしてみろ。別に今すぐ話せて訳じゃねえんだ。話せるタイミングで話せ。」

志歩「・・・わかった。みんなも・・・それでいい？」

咲希「うん！いくらでも待つよ!!志歩ちゃん！」

穂波「わ、私も待つからね！志歩ちゃん！」

一歌「私も。待ってるよ？志歩。」

・・・本当、こいつらの仲の良さ・・・いや、この場合は・・・絆・・・か。繋がりが強いな。

霊斗「よし。それなら大丈夫だな。」ナデナデ

志歩「ちよ・・・！ちよつと・・・！／＼／＼」

俺は志歩の頭を撫でる。志歩は、頬を赤く染め、俺の手を払い退ける。

霊斗「つと。悪いな。」

咲希「・・・じーっ・・・」

・・・何か、咲希ちゃんがじーつと俺を見つめているのですが。何？

霊斗「えーつと、咲希ちゃん？何だ？」

咲希「何か・・・霊斗さん！お兄ちゃんみたい!!」

霊斗「・・・はい？それは・・・俺が、司に似てるって事か？」

・・・俺、司に似てるのか？全然違うと思うんだけど。

咲希「あ！そうじゃなくて！えーつと・・・さっきの言った事とか、志歩ちゃんの頭をナデナデした時とか・・・お兄ちゃんみたいだなあつて！」

霊斗「・・・お兄ちゃん・・・か。そんな風に見えるのか？」

咲希「うん！」

志歩「だったら、一番兄妹みたいに見えるなら、一歌なんじゃない？」

一歌「え？わ、私？」

穂波「あ、そうかも。霊斗さんと一歌ちゃん、髪の色とか一番似てるのは一歌ちゃんだね？」

俺と一歌が兄妹……。まあ、確かに、Leo/needのメンバー内なら確かに一番似てるのは一歌だが・・・。

咲希「あ！それなら、みんなで霊斗さんをお兄ちゃん呼びしてみようよ！」

一歌 志歩 穂波「「え!?!」」

霊斗「・・・は？」

とんでもない爆弾落としていかなかったか？咲希？

霊斗「ちよ、ちよい待て。咲希。そんな風にしないでいいから。それに、咲希には司がいるだろ？正真正銘のお兄ちゃんが。」

咲希「えー？でも、霊斗さんもお兄ちゃんみたいなんだもん！霊斗お兄ちゃん！」

早速お兄ちゃん呼びしてるし。この場面を司が見たら・・・

司『なっ!?さ、咲希が霊斗を・・・??う、うああああ!?お、俺が本当のお兄ちゃんだぞ!?咲希いいい~~~~!!』

・・・こんな風になるんじゃないか？

霊斗「いや、それはわかったから。それに、一歌達だって、そういうのは嫌だろ？あんまり、そういうのは・・・」

一歌「・・・あ、あの・・・」

霊斗「ん？」

一歌「わ、私は別にいい・・・ですよ？れ、霊斗・・・お兄ちゃん・・・」

・・・あれ？一歌？

穂波「霊斗・・・お兄ちゃん・・・／うう／お、お兄さんじゃ・・・駄目かな・・・？／」

志歩「・・・霊斗・・・お兄・・・む、無理・・・！！／」

あ、志歩は無理だったな。穂波は・・・うん。まさか、呼ばれるとは思わなかった。ていうか、恥ずかしいなら無理に言う必要なんてないだろ・・・。

そんな事があつたが、その後は練習終わりに、全員でファミレスに行き、晩ご飯を食べる。勿論、談笑しながら。その後は、全員と別れて、自分の家へと帰宅する。

霊斗「新しいセカイ：そして、一歌達のセカイのミクとルカ：・・・今まで、3つのセカイに行つたが、やっぱりそれぞれのセカイにミク達はあるって思った方が良さそうだな・・・」

まだまだ、大変な事がありそうだな・・・この世界の重要人物が何人いるかもわからないし・・・それに、転生者の事も・・・。そう思いつつ、家に帰宅する。

風呂に入り、布団に入ると、疲れが溜まっていたのか、俺が意識を手放すまで、時間は掛からなかった。

???
side

同時刻、ある一軒家。

「なんだ・・・？あの男は・・・!?俺の一歌達の側にいやがつて・・・!!」

何なんだよ!?!あの眼帯の男は!?!俺の一歌達に近づいただけじゃない、その上、お兄ちゃんだとおおお?!?!盗聴器から聞こえてきた言葉に俺は怒りで震えた。ふざけてんじやねえぞ!!

「おし、決めたぞ!!あの男は確実に○す!!俺の女達に近づいた奴は…ただじやおかねえぞおおお!!」

理不尽な怒りの声を上げる男。その男の手には、

タカ、トラ、バツタが描かれた、赤、黄色、緑の3枚のメダル。そして、一つのベルト。

この男が巻き起こす、一つの事件。その事件に、自分達が関わっていく事を…彼や彼女達はまだ、この時は知るはずもなかった。

狂乱の転生者

Leo／needメンバーの練習を見た翌日。俺と司は、今、何をしているかと言うと。

司「霊斗、ここはどうやればいいんだ？」

霊斗「ん？ああ、ここは・・・こうやって、公式を使えば・・・どうだ？」

司「っ!?!おお！簡単に解けるぞ！」

霊斗「・・・司。嬉しいのはわかるけど、ここ図書館な？」

図書館で勉強してる。実は、近々、小テストがあり、そのテストで赤点を取ってしまうと補習を受けてしまうからだ。俺は問題ないんだが、実は司が少し危ないとの事。まあ、シヨールのことを考えすぎて、勉強をするのを忘れたから危ないらしい。それで、仕方なく、俺が範囲内の難しい所を教える状況だ。ちなみに学校の放課後に、図書館を利用して感じるだ。

司「つとと。そうだった。つい、嬉しくてな・・・」

霊斗「いや、嬉しいからってあんな大きい声出るのか？」

本当、どこからそんな声出てるんだって思うんだよな。普段の学校生活では普通の声なんだけど・・・。

霊斗「つと、そういえば・・・今日、先生が言ってた事・・・あれどう思う？」

司「？今日先生が言ってた・・・？ああ。不審者の話か？」

霊斗「おう。なんでも女学院の生徒の跡をつけてるんだろ？今時、そんなやついるんだなあと思ってよ・・・」

実は今日、先生からの注意勧告で、不審者が最近現れたとの事。なんでも、女学院の生徒の跡をつけ、どこかへ連れて行くとうとしているのだとか。それだけなら・・・俺はそこまで気にしてないのかもしれない。警察に任せるのが一番いいんだろう。だが・・・

霊斗「狙われているのが、宮女の生徒・・・咲希ちゃんも通ってるだろ？心配じゃねえのか？」

そう。その不審者が狙ったのが、咲希ちゃんや、えむが通ってる宮

女の生徒だと言う事だ。

司「心配ではある・・・正直な。だが、咲希に話したら、『大丈夫！心配しすぎたよ?』と言うからな・・・。」

咲希ちゃん・・・。樂觀的すぎないか?

霊斗「何もなかったらいいけどな・・・。」

そう思っていた・・・だが。現実はその甘くはなかった。

一歌 Side

咲希「はあく・・・今日もいくつぱい、練習したよ〜!」

穂波「ふふっ、そうだね。私も練習したくって、感じがするよ。」

志歩「みんな、上達してるからね。前より、合わせやすくなってるし、練習がうまくいってる実感があるからじゃない?」

一歌「あ、それはそうかも。やっぱり、繰り返して練習するのはやっぱり大事だつてわかった。霊斗さんに言われた通り、基礎練習も大事だつてわかったし・・・。」

私達は練習を終えて、全員で帰路についてます。今日の練習は確かな感触があったから、みんなで、充実した練習ができたと思う。

志歩「霊斗さんに言われたの?基礎練習が大事だつて?」

一歌「うん。霊斗さんにどういう風に歌を歌ってるんですか?つて聞いた時に、アドバイスをもらって・・・その時に基礎練習が大事だからつて言われたから、念入りにしたんだ。ボイストレーニングとか。」

穂波「そうなんだ。確かに、一歌ちゃんの歌声、いつもより違う感じはしたよ?」

咲希「うんうん!うまく言えないけど、凄かったよ!いっちゃん!」

一歌「え?そ、そうなの?」

自分じゃ、あんまり分からなかったんだけどな・・・。けど、みんなの言う通り、私の歌が少しでも上達しているのなら、それは霊斗さんの助言のおかげだと思う。これからも、いっぱい練習して、霊斗さんみたいな歌を歌いたいな。

霊斗 side

俺と司は、夕方まで図書館で勉強、その後時間もいいところなので図書館から出てきたんだが。司がせっかくだから、夕飯を一緒に食わないかとの事。まあ、どっちでもよかつたんだが、司が誘ってくれたから、一緒に行くことに。

霊斗「けど、よかつたのか？夕飯の事。」

司「別に気にするな！いづれ、霊斗を家に招待したかったからな！それに、母さんも霊斗に会ってみたいと言っていたからちようどいいだろう！」

霊斗「まあ、それならいいけど……」

まあ、司がそういうんだから問題ないんだろうな。そんなこんなで、帰っている途中だった。

「あ！お兄ちゃん！霊斗さん！」

突然、名前を呼ばれた。声が聞こえたのは正面。前を見ると、Leo/needメンバーが前から歩いてきていた。

司「おお！咲希！一歌達も一緒か！」

霊斗「よつ。咲希ちゃん。一歌達も。」

一歌「こんにちは、霊斗おん……霊斗さん。」

穂波「霊斗さん、司さん、こんにちは。」

志歩「どうも……霊斗さん、司さん。」

みんながそれぞれの挨拶をしているが……一歌、今お兄ちゃんって言おうとしたら？

霊斗「一歌達も今帰りか？」

一歌「はい。みんな帰ってる最中なんです。」

司「そうなのか。俺達は勉強会の帰りだな。今は霊斗を夕食に連れて行くこうとしていたところなんだ。そうだ。折角なら一歌達もどうだ？連絡を入れれば、母さんが全員分、作ってくれると思うが……」

咲希「え!?! いっちゃん達と晩御飯食べれるの!?! やったー!」

無邪気にはしゃいでるな、咲希ちゃん。周りのみんなも苦笑しながらも、どこか楽しそうだ……って。

霊斗（……ん？）

・・・なんだ？前から来てるやつ・・・一歌達を見てる・・・？手に何か持つてるな・・・。っ。あれ、ナイフだな。

「・・・っ!!」ダッ!

突っ込んできたな。狙いは・・・俺だな。すごい目で俺を見てたし。けど、あいつ、俺の前に一歌がいるの、見えてないのか？

まあいい。とにかくあいつをどうにかするか。俺は目の前の一歌を司のいる方へ、軽く押す。バランスを崩した一歌を、司が支えているのを確認して、俺は目の前の男に集中。

奴のナイフを回避し、腕を掴み、奴の顔面を殴り付ける。奴に受け止める術はなく、そのまま俺の拳は奴の顔面に突き刺さる。

「ぎいいい!!」

奴は、苦悶の表情を浮かべているが、目は俺を見据えている。殺意がダダ漏れた。どうやっても、俺を殺したいらしいな。

司「な、なんだこいつは!」

霊斗「例の不審者だろ？狙いはおそらく一歌達。それに、俺と司か？」

「お前みたいな奴が、一歌達の名前を呼んでるんじゃないぞ!!」

霊斗「・・・一応、聞いておくけど、一歌達、こいつの事は？」

一歌「し、知りません・・・」

一歌の言葉に首を縦に振る咲希ちゃん達。なるほど。こいつは一歌達の知り合いではないと。って事は・・・

霊斗「不審者でストーカー・・・ね。」

司「お、お前！咲希や一歌達に近づくな！それ以上近づいたら、俺が黙ってはいないぞ！」

・・・本当に妹想いだよな。司。

「くそがつ!!てめえ!この間、一歌達にお兄ちゃんって呼ばれてた奴だよな!?!ふざけんな!!一歌達に色目を使いやがって!!どんな手を使って、一歌達を洗脳しやがった!!?!」

霊斗「・・・洗脳？俺が？」

志歩「何言ってるの？こいつ？」

「テメエが一歌達を洗脳してるんだろ!?!そうじゃなかったら、一歌達

がお前みたいなのやつと仲良くしてるわけがねえんだからな！」

司「お前は何を言っているんだ!? 霊斗が咲希達を洗脳だ!? ふざけたことを言うな! 霊斗はそんな事をする奴じゃない!」

「ああ!? そんな事をする奴じゃねえって!? いや、こいつはする奴だ!!」

何せ、俺と同類なんだからなあ!!!」

奴は、どこから取り出したのか、右手にベルトを持っている。それを腰に巻き付けて・・・左手に何か持つてるな・・・? なんだあれ? コインか?

それをベルトに入れて、腰についていた丸い機械を取り出す。

「変身っ!!」

奴は、取り出した丸い機械で、赤色、黄色、緑色の順番に、メダルを慣らしていく。

『タカ! トラー! バッター! タ・ト・バ! タトバ! タトバ!』

騒々しい声が鳴り響き、奴の姿は変わっていく。

霊斗(ベルトを取り出した時、俺の持つてるやつと似てるし、予想はしてたけど。

こいつも転生者で、仮面ライダーの力を手にしたやつって事か。)

男が返信したのは、頭が赤、上半身が黄色、下半身が緑色の一人のライダー。恐らくだが、こいつも俺や襲ってきたやつと同じで、仮面ライダーなのだろう。しようがねえ。

霊斗「司、一歌達を頼む。」

司「あ、ああ! 霊斗! 思いつきりやれ! 俺が許そう!」

霊斗「頼んだ」

俺も奴と同じように、ベルトを装着。そして、カードを手に取り。

霊斗「変身」

『KAMEN RIDER DECEDER!!』

俺も、仮面ライダーデイクイドへと、変身する。

一歌「え!? 仮面・・・ライダー・・・!?」

咲希「わくっ! 仮面ライダーだよ! デイクイドとオーズ!」

オーズ？確か、俺の変身したライダーが、デイクライドだったよな？
って事は・・・向こうの奴が、オーズって名前か。

志歩「いや、それ以前に、なんであいつと霊斗さんが、仮面ライダー
になれるかの疑問はないの？」

穂波「そ、そうだよね？志歩ちゃんも、そう思うよね？」

・・・一般的な反応をするな、穂波達は。咲希ちゃんは、えむみた
いな反応だな。楽しんでるな。

霊斗「さて、んじやあ・・・こいよ？」

「っ！上等だあ！！ぶっころしてやるよ！！」

駆け出して向かってくる・・・オーズ。拳や蹴りを駆使し、奴は俺
を殺そうとしてくるが、やっぱり、他の奴らと同じ、戦い慣れていな
いような感じがする。他の奴らよりかはマシだったが。

霊斗「ほい。よつと。」ドコッ！

奴の攻撃をいなし、拳を叩き込む。思いつきり、吹っ飛んだ奴は地
面を転がり、数メートル先まで転がった後、止まる。

オーズ「ぐっ・・・ごっ・・・!!」

奴は、ふらふらと立ち上がる。タフな奴だが、ダメージは確実に蓄
積しているようだ。

霊斗「おい、そろそろやめとけ。お前、多分、一歌達のが好き
なんだろう？もう手遅れかもしれねえが、もうこんな事・・・」

オーズ『っ!?!ぎげん！俺は、どんな手を使っても！一歌達を手
入れなきやならねえんだよ!!』

霊斗「・・・一歌達はてめえの物じゃねえんだよ。身の程を知れ。」
こいつもトチ狂ってるな。まるで、欲望のまま動いてるみたい
だ・・・。まあ、こんな奴なら、遠慮する必要はないよな。

霊斗「テメエみたいな奴には、お灸が必要だな？」

俺はライドブツカーから、一枚のカードを手に取り、目の前に出す。

そこに描かれていたのは、ある魔法使いのライダー。その名は。

霊斗「変身」

『KAMEN RIDE WIZARD!!ヒー!ヒー!ヒーヒーヒー!』

仮面ライダーウィザード。恐らく、戦い方は名前の通り、魔法を駆使して戦うのだろう。まあ、だとしても、俺の戦い方は変わらない。

霊斗「さあ、ショータイムといこうか？」

俺はライドブツカーを剣のモードへと切り替え、俺は奴に向かって駆け出す。すると、奴も剣を取り出し、ぶつかり合う。俺は奴の剣を押し返し、奴の体を2回切りつける。火花が散り、奴に更なるダメージを与える。

オーズ「がつ!?くつ・・・!?はあつ・・・!はあつ・・・!」

・・・もう、あいつも限界だな。剣で支えないと、ろくに立つこともできない状態だな・・・なら。

霊斗「次で終わりにするぞ?」

俺はライドブツカーから、黄色のカード、ウィザードのマークが描かれているカードをベルトに入れる。

『FINAL ATTACK RIDE WII WII WII WII WIZARD!!』

ベルトから流れる音声。すると、俺の足が炎を包まれていく。いや、炎を纏うと言う感じだろうか?そして、俺は奴にとどめを刺すために、駆け出す。その勢いのまま、側転、そして、バク転して跳躍、奴に狙いを定めて、飛び蹴り・・・いや、ここは仮面ライダーの必殺のキックということだ。

『ライダーキック』と言う名前にしよう。俺は必殺の『ライダーキック』を繰り出した。奴は限界の状態だった為、回避できる余裕すらなく、そのまま、直撃し、吹き飛び、そして、爆発した。

俺は、ベルトを外し変身を解除。すると、司達が駆け寄ってきた。

司「やったな!霊斗!!さすがだ!」

霊斗「まあ、運が良かったってとこだな。けどこれで、一歌達・・・いや、宮女の生徒を狙う不審者はいなくなったわけだな。」

これで・・・4人目?か?寧々を狙った奴、奏を狙った奴、シヨールを襲撃した奴、そして今回のやつ・・・うん。4人目だな。一体、何人いるんだか・・・

咲希「霊斗さん!すごかったよ!かつこよかったよ!」

霊斗「あいよ。」

志歩「うん。たしかに、少し、カツコよかったよ・・・／＼」

穂波「霊斗さん、ありがとうございます。」

霊斗「別に気にすんな。」

一歌「確かに、霊斗お兄ちゃん。凄い動きしてたし、かつこよかったです・・・あっ!」

霊斗「そうk・・・って。」

司「・・・ん?お、お兄ちゃん・・・だと?」

一歌「・・・完全に口を滑らせたな。顔真っ赤になってるし。」

「~~~~つ~~~~／!」ダッ!

穂波「あっ!?!い、一歌ちゃん!」

咲希「い、いっちゃん!待ってよ〜!」

志歩「ちよ・・・!?!みんな・・・!」

顔を真っ赤にしながら、突然走り出す一歌・・・多分、羞恥心に耐えきれなかったんだな。すごい勢いで走り去っていったし。咲希達は、一歌を追うように、走り出す。

司「・・・・・・・・・・なんだったんだ?霊斗?」

霊斗「・・・・・・・・・・さあな。」

??? Side

「ふくん。やっぱり強いなあ。彼は。」

オーズ、デイケイドの戦闘場所から離れた所に、一人の女が、その戦闘を見ていた。彼女は、顎に手を当てて、彼らの戦闘を思い出す。「オーズの方が戦い慣れていない感じはあったけど、それでも圧倒し

て勝利した。この世界の重要人物『鬼灯霊斗』。彼を監視するのが僕の仕事なんだけど・・・けど。」

彼女は微笑み、そして楽しそうに。

「彼の事、もっと、知りたいなあ・・・♪

よーっし！接触しーちやおっと??」

彼女はそんな言葉を呟きながら、その場を立ち去る。

彼女は一体何者なのか・・・それはまだ、誰にも分からない。

敵か？味方か？

転生者襲撃から数日後、いつもの通りの日常を過ごす俺。

少し違うところがあるとすれば、今回集まった場所はセカイであるということぐらいだ。後はえむがいない事。

霊斗「えむのやつ、家の用事とかって言ってたけど、なんだろうな？」

司「兄弟と何かあったんじゃないか？確か、ここ最近早く家に帰ってきてると言っていたからな。」

寧々「まあ、そういうこともあるんじゃない？えむだって、用事のひとつくらいできるでしょ？」

類「議論が行き詰まっているから、枠に囚われないで意見を言ってくれるえむ君が居てくれればよかったんだけどね・・・」

まあ、確かに、えむの意見には、いいと思う案ばかりだ。むしろ、こんな行き詰まった時こそえむのような考えが欲しいところだった。

霊斗「まあ、休みだからしようがないだろ。それに、えむも驚くような演目を決めればいいだけだし。」

司「ああ！そうだな！」

カイト「やあ、みんな今日も来てくれたんだね？」

俺達が話していると、こちらへと向かってくるカイトの姿。それにミクやメイコの姿も確認できた。

霊斗「よつ。カイト。ミクにメイコも。」

ミク「みんな、いらっしやくい♪あれ？えむちゃんは？」

寧々「今日は用事が入ってるから休みだって。」

ミク「そつかく、残念」

見たらわかるぐらいに落ち込んでるな、ミク。(・ω・) こんな顔になってるぞ？

メイコ「私も、えむちゃんに会いたかったけど・・・今度来た時に話せばいいだけね！」

霊斗「そうそう。んじゃあ、早速始めるのか？」

司「ああ！早速ディスプレイスタートだ！」

そうして、再び始まった俺達の演目決めの話し合い。だが、お互いに良い意見を出してはいるのだが。自分の意見がいいと思ってる同士で、言い合いが発生し。結局はどちらも譲らず平行線に。

司「はあ・・・はあ・・・！お前ら！頑固すぎだろ！」

寧々「それは、あんたもでしょ・・・！最後まで『これだ！これしかない！』しか言っていないし・・・！」

類「いやあ、見事なまでに平行線だね。」

霊斗「これじゃあ、いつまで経つても決まらないな。前とおんなじ感じで終わるんじゃないか？」

・・・と、そんな話をしている時だった。

「あつ！おーい！みんなー！」

聴き慣れた声が聞こえてくる。声のした方へ向くと、その方向から、レンとリンが走ってきていた。

リン「みんな、セカイに来てたんだね！あれ？えむちゃんは？」

霊斗「えむなら休みだぞ？」

レン「ええ!?えむちゃんが休み!?何かあったのかな？」

司「家の用事で休みだと言っていたぞ？」

リン「そうなの？何かあったわけじゃないの？」

霊斗「・・・何かあったって？」

レン「えつとね？この前、みんながセカイに来た時なんだけど、えむちゃん、すごく悲しい顔をしてたんだよね。だから何かあったのかって思ってたさ。」

寧々「・・・えむが、悲しい顔？」

・・・類の言ってたやつだな。

司「あいつがそんな表情をするとは・・・お菓子でも落としたりとか？」

寧々「それなら、『えーん寧々ちゃん！』って、飛び込んできそうだけど・・・何かあったのかな？」

霊斗「・・・類」

類「うん。僕達には、何か隠しているという事は確定していいと思

う。それも、えむくんがそんな表情をするような出来事が・・・ね。」

霊斗「・・・ここで悩んでもしょうがない。それなら、明日の練習の時、えむに話を聞いてみよう。何かできるかもしれないし、できなくても、相談ぐらいには乗れるだろ？」

司「そうだな。場合によっては、座長として、力を貸してやろう！」

その後も、ディスカッションは続いたが、結果は変わらず。今日はここでお開きになり、セカイから帰還。ずいぶん話し込んでいたのか、周りはずでに暗くなり始めている。

寧々「結構話し込んでたから、結構暗くなっちゃった。」

ネネロボ「足元ヲ、ライトアップシマス。」

ネネロボの目が輝き、俺達の足元を照らす。便利だよ。マジで。

寧々「ありがとう。ネネロボ。」

霊斗「暖かくなってきたとはいえ、まだまだ日が沈むのは早いな。」

類「こういう時期は、体調を崩しやすいと言われてるからね。僕達も気をつけないといけないよ。」

司「類の言う通りだな！体調管理に気をつけないければな！それじゃあ、みんなそれぞれ帰ったら・・・」

その時だった。

「ふざけるな!!」

何処から、怒声が聞こえてきたのは。

寧々「・・・何？今の声？」

類「中々、迫力のある怒声だったね。」

司「園内で喧嘩・・・か？こう言うトラブルは珍しいな・・・」

霊斗「聞こえてきた感じだと・・・あれか？咲希ちゃん達と遊んだ場所か？トランポリンとかあった場所。」

司「とにかく行ってみるぞ！」

司の言葉に頷き、俺達は怒声の聞こえてきた方へ向かう。到着し、見たものは、えむの姿と、もう二人、黒いスーツをきた男性達だった。司「あそこにいるのは・・・えむか？」

寧々「一緒にいるスーツの人達、誰・・・？」

靈斗「わかるないことだらけだな。とにかく、えむに聞かなきや話もなんもわからねえぞ？」

類「靈斗君の言う通りだよ。まずは行動を起こさなくてはね。」

司「そうだな。おい！えむ！」

えむ「あ、みんな・・・!？」

司が声をかけると、驚愕の表情のえむ。まさか、見られてるとは思ってたなかったんだろうな。

司「どうした？何か、トラブルか？」

えむ「えつと、えつと・・・!」

寧々「あ、あんた達、誰・・・？なんでえむに怒鳴ってるの？」

「誰も何も、家族だ！そっちこそ、他人が俺達の会話に口を挟むな！」
家族・・・となると、この人達が、えむのお兄さん達・・・か。

寧々「家族・・・？」

靈斗「それじゃあ、貴方達は、えむのお兄さん達・・・というわけですか？えむのショーの仲間として、詳しく説明してほしいんですけど」

「ショー？そうか。君たちは、ワンダーステージのキャストか。」

「・・・ああ。あのボロステージの。」

靈斗「・・・あ？」

「・・・こいつ、今なんて言った？」

「まったく、お前らがいなければ、あのボロステージも潰せたってのに。そうすりゃ、えむだって納得させられたのに。」

司「その言葉、撤回してもらおうか！」

「・・・何？」

司「確かに、あのステージは脆い！非常に脆い！だが、あのステージは我ら、ワンダーランズ??シヨウタイムの礎となるメインステージ

!

侮辱されたとあつては、座長として黙つてはおけん！」

えむ「司くん……」

「なんだと？雇われキャストの分際で……」

霊斗「……司、そこまですておけ。」

司「……っ！霊斗！だがしかし……！」

霊斗「……司、俺達は雇われてる身だつてわかつてるはずだ。口論したところで……」

「ほう、そつちのやつは賢いみたいだな。話が通じそうだから、一応忠告しておいてやる。」

霊斗「へえ、忠告ですか？一体どんな？」

俺は、えむのお兄さんに受け答えしながら、予め、打つておいたメツセージを司たちに見せる。もちろん相手には見えないように。

「これ以上、馬鹿なうちの妹に付き合つても、碌なことにならないぞ。」
「昔からそうだ。空を飛ばうとか、虹を捕まえに夢みたいなことばかり言い出して周りを振り回して、結局酷い目にあうのはこつちだ。」
えむ、まだ、夢物語を見たいなら、一人で見てろ。これ以上、俺達を巻き込むな。」

えむ「……っ！」

……ああ。類の言つてたえむが、最近、悲しい表情をしてたのはこれが原因な訳か。つまり、こいつも

あの、クソ転生者達と、似たような存在なわけだ。

霊斗「……そうですか。忠告、ありがとうございます。それと、こつちからも、言いたいことがあるのですが、言つても、いいでしょうか？」

「なんだ？」

なら、遠慮する必要性なんてない。

霊斗「えむは、あんたよりも何倍も優秀ですので、安心してください。」

「何?」

霊斗「誰もが叶わない・・・手放した夢を、ただ真っ直ぐに見続け
て行動する。そんな事、あんまりできる人なんていません。それをえ
むはできています。その時点で、彼女はあなたの言う、馬鹿な妹では
ありません。」

これ以上、俺達の仲間を侮辱するのは・・・止める。」

少しだけ、殺気を込めて、男を見る。相手は冷や汗を流しているの
が、わかる。

えむ「れ、霊斗くん！私は大丈夫！大丈夫だから・・・！」

「もういいだろう。晶介。」

すると、もう一人の、眼鏡をかけた男性が、晶介と呼ばれたもう一
人の男に声をかける。

「っ!あ、兄貴・・・！」

「もうすぐ、先方がくる。これ以上、ここにおいても、無駄な時間を過ご
す。さっさと行くぞ」

「・・・わかった。」

えむのお兄さん達は、立ち去っていく。どうやら、なんとかなった
ようだな。

えむ「ごめんね。お兄ちゃん達が・・・」

寧々「別に、えむが謝る事じゃないでしょ?」

霊斗「それに、こつちこそ、えむのお兄さん達に不躰な態度を取っ
ちまったからな。」

類「いや、霊斗くんの態度は正しいものだったと思うよ?僕が受け
答えをしていたら、同じ態度を取ったはずだからね」

寧々「うん。私もそう思う。」

司「・・・一体、何があった。どうして、えむの兄達は、あんな事
を・・・」

えむ「それは……」

霊斗「言いづらいのか？けど、俺たちだって、何か出来ることもあるかも知れない。よければ、話してほしい。」

類「そうだね。話してほしいな」

寧々「うん。」

えむ「……えへへ。全然、大変じゃないよ」

……えむはどうしても、はぐらかしたいらしいな。

えむ「ちよつと、お兄ちゃん達と喧嘩しちやっただけだから。でも！すぐ仲直りするから！」

司「どう見たってそんな簡単な話ではなかっただろ!!!」

司に怒声に……いや、怒ってるわけじゃないんだろが、大きな声で、押し黙ってしまったえむ。そして、彼女は。

えむ「……ほんとに、大丈夫だよ！それより、明日も練習があるから、私、もう帰るね！」

逃げるように、走って行ってしまったのだった。

司「おい！えむ！」

寧々「あ……」

霊斗「……」

類「……行ってしまったね」

霊斗「……追いかけるか？」

司「……いや、今はやめておこう。追いついたとしても……話してくれるはずが……ないからな。今日はここで解散しよう。」

司の言葉に俺達は頷き、そこで解散となった。家への帰り道を歩いている最中でも、俺はえむの事を考えている。

霊斗「どう見ても、えむとお兄さん達に何があつたって事は確かだな。それが、フェニックスワンダーランドの何かに関する事なのかもわかった。けど、詳しい話を聞かないとわかるもんもわからないからな……」

そんな独り言を呟いている時だった。

「そんなに鳳えむちゃん心配なのかな？鬼灯霊斗くん？」

霊斗「……ん？」

……誰か俺の名前を呼んだよな？俺は声のした方へ視線を向ける。正面に、壁に背中を預けながら、俺の方を向き、笑っている女がいた。霊斗「……誰だ？なんで俺の名前を知ってる？」

「んー？あ、そっか。私はあなたの事を知ってるけど、あなたは私の事を知らないもんね？」

私はね？柳瀬真優（やなせまゆ）っていうの。真優って呼んでね？ちなみに、君のことを知っているのは……秘密……かな♪」

霊斗「……一応、聞いておく。お前、転生者か？」

真優「えー？私って、あんな人達みたいに見えるの？嫌だなー。

まあ、霊斗くんの質問だし答えてあげよっかな♪

転生者ではあるよ？けど、この世界をどうしようとかは考えてないもーん♪」

……こいつの言葉を信用していいのか。正直わからねえ。こう言う奴に会ったのは初めてだ。

霊斗「それじゃあ、お前も何かしらの能力……いや、特典を持ってるのか？」

真優「うん！持ってるよ？」

霊斗「……教えてくれるとは思ってないが、どんな特典だ？」

真優「え？クリエイターだよ？」

霊斗「……クリエイター？」

真優「そう！クリエイター！私は全てのものを作れちゃうんだよね♪」

……自分の力の事を、ベラベラ話していいのか？こいつ？

真優「例えば、私の知ってるアニメの武器！キャラクターの召喚を可能にする装置！魔法！そんなものまでね？」

そう話しながらも、彼女は様々なものを作り始めている……おい。俺の知ってるものばかりだな？アニメのものばかりじゃねえか？

霊斗「……質問を続ける。お前のこの世界での目的は？」

真優「え？えーつと・・・この世界のキャラ達と仲良くする事！」
霊斗「・・・その言葉、嘘じゃないな？」

真優「信じていいよ♪私は、君が今まで戦ってきた人達とは違うからさ。」

・・・正直な話、こいつはどことなく今までの奴らとは違うのはわかる。だけど、信用していいのか・・・はわからないが。

霊斗「・・・わかった。」

真優「よーっし！ひとまず君からの信用は得たのかな？」

霊斗「・・・まあな。」

真優「それじゃあ、話を戻すけど、霊斗くんは、鳳えむちゃんが心配？」

霊斗「心配・・・いや、正直わからん。感情ない奴にきくなよ。けど、寧々達は気にしてるからな。早めに解決はしたい。」

真優「・・・そっか。それなら、やり方を変えたらどうかな？」

霊斗「・・・やり方？」

真優「そうそう！やり方をだよ！けど、ここから先は自分で考えてね？」

霊斗「手伝ってはくれないのか？」

真優「うーん、手伝ってあげたいのは山々なんだけど。私、本来は君にあまり関わったらいけないんだ。」

・・・関わってはいけない？と言う意味なんだ？

真優「だから、今回は見守るだけだよ。大丈夫。鬼灯霊斗君なら、こんな問題、解決できるはずだよ・・・」

。ああ、それと、君の所属してるショーユニットに集中するのはいいけどさ？他のユニット達の女の子達とも会ってあげなよ？君は、選ばれた破壊者なんだから。」

そう言っつて、彼女は立ち去っていった。

霊斗「選ばれた破壊者・・・？俺が・・・？？」

・・・なんだか、訳のわからない事だらけだ。新たに現れた転生者。

そして、えむの問題……考えることは山積みだ。一つずつ……
無くしていかないとな、

彼女の悩みを晴らすために

謎の女、柳瀬真優に会った次の日、俺、司、類は、放課後、寧々に呼び出されていた。なんでも話したいことがあるから校門に来いとの事。

司「待たせたな、寧々」

寧々「ほんと、待たせすぎ。校門に来るまでにどれだけかかってんの？股下10センチ？」

霊斗「ほんとに、悪いな。俺と司で、担任に用事を頼まれちまったんだよ。ほっとくわけにもいかなかったし。許してくれ。寧々」

寧々「・・・まあ、それならしょうがないか。霊斗に感謝すれば？」

司「むむむ・・・！前からそうだったが、俺と霊斗の扱いの差はなんなんだ・・・!!」

霊斗「まあまあ、それはいいだろ？んで？呼び出したのは、えむの事なんだろ？」

俺の問いに、頷く寧々。どうやら、当たっていたらしい。

司「そうだったのか・・・ここ最近、イライラしていたのはそういう事か。なら、尚更待たせて悪かったな。」

寧々「・・・急に謙虚にならないで。霊斗と一緒に用事をしてたのはわかったから・・・」

司「それで、何か名案でも出たのか？それなら、話して欲しいんだが・・・」

霊斗「いや、その逆だろ、多分。何をしたらいいかわからないから、全員で話し合えば何か出る・・・そう思ったんじゃないか？」

寧々「うん。いつものえむなら、ペラペラ色々話しそうだから・・・」

司「いや、えむは案外ああ見えて、色々抱え込んでしまうタイプだ」

霊斗「は？なんで司がそんなこと知ってるんだ？」

司「実は・・・」

司の話を聞くと、一番初めのショーの失敗の時、えむと司が観覧車に乗った後、色々と話したらしい。本当は、ワンダーステージがなくなってしまうことを知っていた。だが、その時は俺達はショーに向け

ての練習をしていた為、話すことができなかつたらしい。

司「えむは、おおごとを抱えている時ほど、話そうとしない。だから、きつと今回もそうなんだろうが・・・」

司「あの調子なら簡単には話してはくれないだろうな。もう少し、方法を考えてみる必要があるそうだ。」

霊斗「別の方法・・・か。」

『なら、やり方を変えてみたらどうかかな?』

あの女・・・柳瀬真優も同じ事を言っていた。もしかして、このような事を・・・知っていた?だとしたら、あの女は・・・

霊斗（いや、今はそんな事を考える場合じゃない。今はえむの方をどうにかするか・・・）

その後も話し合いをしたが、名案は浮かばず、そのままセカイでの練習時間となる。ワンダーステージ上では、既に衣装を着たえむがその場に立っていた。

えむ「あつ、みんなー!遅かったねー!あたしはもう準備バツチリだよー♪早くセカイで練習しようよー!」

類「ふふ、そうだね。」

寧々「私、着替えてくる。」

寧々は衣装に着替えるために更衣室へと向かう。だが、俺と司はその場で立ち止まり、えむの様子を見ていた。

霊斗「から元気だな。えむのやつ。」

司「・・・ああ。心配をかけないように必死なんだろうな。」

霊斗「つつても、前の出来事で、なんとなく何かあったのはわかるんだけどな・・・どうやって話してくれんのかね?」

司「難しいだろうな・・・何かいい案があれば・・・」
すると、その時だった。

ビューーーンツ!!と何かが迫ってくるような轟音が響き渡る。

霊斗「・・・ん？なんだ？この音？」

司「ワンダーステージへの入り口の方からか・・・？ん!?れ、霊斗!!」

霊斗「んお？どうした？つか・・・さ？」

司が指をさした方へ視線を向けると、轟音の正体がわかった。爆速でステージへと向かってくるネネロボの姿があったからだ。」

司「ね、ネネロボ!?な、なんだあのスピードは!？」

霊斗「はええな。また、類が何か改造でもしてやがんのか？」

司「つて、そんな冷静に言ってる場合ではないだろう!!どうにか止めるぞ!!」

霊斗「だな。」

俺達はネネロボを止めるために駆け出そうとする。が。

寧々「ネネロボ!ストローリップ!!!」

寧々の珍しい大声で、急ブレーキをかけ、ネネロボは停止した。えむの目の前で。

えむ「?そんなに急いでどうしたの?ネネロボちゃん?」

寧々「あつ!?!え、えむの目の前で・・・!」

司「と、止まった・・・のか?」

霊斗「みたい・・・だな。」

ネネロボ「メッセージを再生シマス」

霊斗「・・・メッセージ?」

なんだ急に?そんな機能あったのか?

『・・・私だつて、えむの力になりたい。えむが困ってるなら、相談に乗りたい』

えむ「ほえ?」

寧々の声で、メッセージが流れる。えむの力に・・・か。だが、突然の事に、素っ頓狂な声を上げるえむ。向かい合ってるのは、恥ずかしそうに頬を赤く染めて、えむを見つめる寧々。すると。

寧々「・・・そういう事・・・だから。何か、事情があつて、話せ

ないのかもしれないけど・・・話したくなったら・・・ちゃんと話してよね？」

えむ「寧々ちゃん・・・」

寧々「・・・じゃ！」

羞恥心のあまり、立ち去つてしまふ寧々。それを苦しそうな顔をしているえむ。それを見ていた俺たちは。

司「・・・寧々の気持ちは伝わったのだろうか？」

霊斗「ああ。伝わっただろうさ・・・これで、何かしら変わるだろ？それより、俺たちもセカイに行くぞ？どうせだ。ミク達にも協力してもらおうぜ。」

司「そうだな。よし！行くぞ！」

そうして、俺達は、セカイへと向かい、カイト達に事情を話した。

司「と、いうわけなんだ。」

カイト「なるほど。みんなにも言えないなんて、よっぽどの事なんだね。」

類「以前、言い合いをしていたから、家族絡みで何かあったのは間違いないはずなんだけどね。」

ミク「それで、そのえむちゃんはどうしたの？」

霊斗「演目が決まらないから、実際に演じてみようって事で、小道具を集めてるよ。」

セカイにそんなに小道具があるのか、不思議で仕方がないが・・・司の想いのセカイな訳だし、色々あるのは間違い無いか。

寧々「私も行くって言ったんだけど、一人で大丈夫って言われて・・・避けられてるのかな・・・」

霊斗「多分だが、これ以上、心配かけたくないんだろうよ。無意識なのかは知らないが、誰にも、声をかけないあたり、徹底して避けるんだらうな。」

ミク「けど、やっぱり誰かいた方がいいと思うけどなあ・・・」

メイコ「・・・よし！それなら、霊斗くん！えむちゃんの所へ行つてきてくれる？」

霊斗「は？俺が？」

メイコ「そう！霊斗くんって、頼りになるし！寧々ちゃんをもう一度、ステージに立たせてくれたのも霊斗くんなんですよ？それなら、適任じゃない！」

司「確かにそうだな。霊斗は聞き上手だからな。俺も色々、相談に乗ってもらってもいい。適任であるのは間違いない！」

霊斗「おいおい、司もか？けど、俺達には話そうともしないんだぞ？俺一人行つたくらいで……」

メイコ「ああもう！とにかく行つてきなさい！」

と、メイコに背中を押されて、ステージから出てしまう。……まあ、とにかく行つてみるか。その辺にいるはずだろうからな。そして俺は、近くをぶらぶらと歩くと。

えむ「うーん、戦うシーンの時は、この剣があればいいよね？後は……」

割と近くに、小道具を集めているえむの姿を発見。

えむ「……」

そして、時折、悲しそうな表情をとる。やっぱし、一人で抱え込んでいるのは明確だな。

霊斗「なんで、そんな顔してんだ？」

えむ「わっ!？」

俺が声をかけると、驚いたのか体をビクツ！と反応させて、慌ててえむは振り返る。

えむ「あ、あれ？霊斗くん？どうしたの？」

霊斗「……えむが心配だから来ただけだ。」

えむ「え、ええ？大丈夫だよー？一人でこれぐらい持つていけるよー」

……作り笑いをしながら、なんでもないうように振る舞うえむの姿。

見ている、とても、気分が悪くなる。

霊斗「小道具運びは、どうでもいい」

えむ「……え？」

霊斗「そんな苦しそうな笑顔をしてて、司達が心配するなっていう方が無理な話だろ？」

えむ「……っ」

霊斗「みんなに笑顔になって欲しいなら、お前が心の底から笑顔になれ。今のお前には絶対にできない。お前の目標である事を、お前ができなくてどうする？」

えむ「わ、笑ってるよー？ワンダボーイ！」

霊斗「……いい加減、やめろって言ってんだよ。その笑顔。泣きたいなら泣けばいい。苦しいなら苦しいでいい。なんでお前も、寧々も、類も。なんで一人で抱え込む？なんで、頼るって事をお前らは知らない？」

えむ「……れ、霊斗……くん？」

霊斗「……話したくないならそれでいい。話したくなったら、話せばいいって寧々も言ってたからな。俺も、今はそう思ってる……けど、あんまりみんなを待たせるな。」

そうして、俺はその場を去っていく。チラツと横目で見ると、えむの近くには、レンとリンの姿が。すると、レンとリンは、俺を見た後、軽くウインクをする。俺は後の事を、二人に任せて、司の元へと戻っていった。

司達の元に戻ると、メイコやミクに詰め寄られていた。そして、どうだったのかを事細かに説明を要求された……正直、司の相手よりも、少しきつかった。そして、その日は終了して、俺と司は帰路にしている。

司「ふう、結局、何も進展がないまま、終わってしまったな。」

霊斗「しょうがないだろ。えむ自身が話してくれなければ、何もわかんねえからな。えむと少し話はしたが、無理にでも隠したいんだろうよ。」

司「それはそうだが・・・困っているなら大人しく話せばいいじゃないか！というか、未来のスターたる俺や、その相棒である霊斗を頼らずして、誰に頼るといふのか!!」

霊斗「え？いつのまに相棒になった？」

司「第一、あの時だって、ぎりぎりになるまで何・・・も？」

すると、突然足を止めて、立ち止まる司。俺も立ち止まって、司に視線を向ける。

霊斗「どした？司？」

司「・・・あの時・・・？そうか・・・！その手があったか！」

霊斗「その手？」

司「霊斗！名案があるぞ！明日、すぐに実行をしたい！頼めるか？」

霊斗「あ？お、おう・・・なんだかよくわからねえけど。」

・・・なんなんだ？司のやつ、名案があるって言ってたが・・・その後俺達は普通に帰路につき、翌日、俺達はワンダーステージにはいなく、何故かは知らないが、観覧車の前にいた。

霊斗「んで、なんで俺達は観覧車の前にいるんだ？まさか、このまま乗って、話してもらおうわけじゃないんだろ？」

司「いや、その通りだ！ここにえむを連れてきて、観覧車に全員乗るんだ！」

寧々「・・・あんだ、頭おかしいの？前からおかしかったけど・・・」

類「まあまあ、司くんにも何か考えがあるから、ここに僕達を呼んだんだよ。それで、司くん、えむ君はどうやって連れてくるんだい？」

司「それは、類！お前のドローンで頼む!!」

ドローンでえむを呼ぶ？という事だ？

類「僕のドローンで？」

司「ああ！えむは俺達と会ってしまったら、逃げてしまうだろう？」

なら、何かを通して話したほうがいいと思ったんだ。ネネロボでもよかったが、今回はドローンを、使おうと思ったんだ。」

寧々「・・・あんたがこれ、考えたの？ 霊斗の入れ知恵とかじゃないか？」

司「失礼だな！ 俺が考えたこの完璧な計画に文句でもあるのか!!」
寧々「普段のあんたの行動からの発言なんだけど・・・？」

霊斗「いや、俺も何も聞かされずに、ここに来いって言われたからな。俺は何も知らなかった。」

司「とにかく！ 俺に任せてくれ！ 類、頼めるか？」

類「もちろんだよ。早速、えむ君を呼ぼうか？」

類はドローンを操作して、園内を飛行させる。すると、数分後、ドローンが全て戻ってきた。そして、その一台の後ろから、えむがゆっくりと向かってくるのが視認できる。

司「やつときたか！ 待ち侘びてたぞ！」

類「さあ、主役の登場だよ。早速行こうか？ 司君？」

えむ「えつと・・・どうしてみんなここにいるの？」

司「それはもちろん、この観覧車に乗る為だ！」

えむ「ほえ？」

寧々「前、星野さん達と一緒に遊んだ時は、霊斗と一緒に乗らなかったし。一緒に・・・乗らない？」

ネネロボ「乗りますヨウ！」

えむ「あ・・・うん。」

霊斗「そんじゃま、主役様一名、ごあんなーい。」

えむ「わわわ!! ね、霊斗くん！ 背中押さないでー！」

俺はえむの背中を押しながら、観覧車に乗せて、司達も、乗り込む。ゆっくりと、上昇していく観覧車。外の景色がどんどん高くなっている。

寧々「へえ、結構高く昇るんだ。」

類「そうだね。まだ半分くらいだけど、園内が見渡せるね。」

えむ「・・・園内・・・」

類の言う通り、外を見れば、園内を見渡せる高さだな。けど、気に

なる点もいくつかある。複数のアトラクションには、ブルーシートがかけられているのだ。そのアトラクションを見ているえむの表情はどこか、悲しそうな表情をしている。

司「えむ、あそこを見てみる。」

えむ「あそこって……ワンダーステージ？」

司「全然違って見えるだろう？ 潰れそうだったステージが、今では連日満員の大盛況！ 園内ショーコンテスト1位の座も目前！ そして何より、俺達はあのステージで多くの笑顔を生み出している！ これぞ正に、俺たちの真の力だと言える！ そして、そこから導き出せる事実がある。」

えむ「事実？」

司「それは、俺たちにできない事はないと言う事だ!!!」

霊斗「いや、急に話飛びすぎじゃねえか？」

類「いや、これこそ司くんらしいと、言えるんじゃないかな？」

寧々「まあ、いつものことだけど。」

司「……いいか？ えむ？ 何を悩んでいるかは知らんが、前、ここで話したことを忘れるな。お前がみんなを笑顔にしたいように、俺たちだって、お前を笑顔にしたい。」

それに、ここにいるのは前の時のように、俺とお前だけじゃない。頼りになる、類、寧々、ネネロボ、そして何より、俺達をもう一度、繋いでくれた霊斗がいる。だから、お前から笑顔を奪っている何かを教えてください。そして、そいつを、俺達全員で、一緒になんとかしようじゃないか」

えむ「……っ！」

霊斗「まあ、当たり前だよな。えむが笑顔じゃないなんて、らしくねえし。」

類「司君や、霊斗くんの言う通りだよ？ 僕達は、えむくんから、色々なものをもらっているからね？ たまには、僕達にもお返しをさせてほ

しいな。」

寧々「うん、私達にも、何かさせてよ。えむ。」

えむ「みんな……」

司達の気持ちに心打たれたのか、えむは瞳を潤ませながら、言葉を詰まらせている。後一押しか。なら……

靈斗「えむ。俺がセカイで言ったこと、覚えてるか？」

えむ「え……？」

靈斗「泣きたいなら泣けばいい。苦しいなら苦しいって言えば……無理に笑う必要なんかねえんだよ。ここにいる全員の事、頼っていいんだぞ？」

その言葉がきっかけとなったのか、えむは、嗚咽をこぼしながら、涙を流す。ありがとうと感謝の言葉を紡ぎながら。それは、彼女が泣き止むまで続いたんだ。

そして、俺達は、観覧車を降りた後、ワンダーステージへと移動して、えむの話を聞き始めた。

えむ「それで、あんなことになったの。」

靈斗「企業連携で、映画のキャラクターを使ったテーマパークにする……今時、よくある話ではあるよな。」

寧々「けど、いらないアトラクションを、全部、壊すなんて……」

類「しかも、契約日はまもなく……まさか、そこまで差し迫っているなんてね。」

えむ「……みんなが、ショーコンテストで1位を取ろうって張り切ってるから、こんな話をして……それで、みんなが笑顔じゃなくなったら……って。」

寧々「……バカだな、えむ。そんな事で、私たちがそんな風になるわけないじゃん。それに、私達は、えむの力になりたいんだから。」
類「そうだね。えむ君には、沢山の物をもらっているんだ。ここは一つ、恩返しをしようじゃないか。」

司「その通りだぞ！よし！早速、この状況を打破する作戦会議だ！」

と、司は意気揚々と、作戦会議の開始をするのであったが。

司「とは言ったものの、実際、どうすればいいんだ？」

寧々「あんた、さっきまで意気揚々としてたのに……けど、実際、私達にできることって……方針を変えさせないように、今のフエニランが好きな人達から、署名を集める……とか？」

霊斗「それで、変わるもんなのか？えむの兄貴達や、契約企業のやつが、受けなかったら、意味ないんじゃないか？」

類「その通りだよ、霊斗くん。それに何より、えむくんのお兄さん達のアイデアはとても現実的だからね。契約に、相当の金額がかかって、知名度の高いキャラクターを据えれば、その分の金額以上の売り上げが出るからね。他のパークとも、差別化がしやすいからね。それだけに、覆すならそれなりの方法を考えないとね。」

えむ「やつぱり、難しいよね……」

……企業提携をなくす……か。それはつまり、今のこの状況の中で、お客さんを集め続ける方法を見つけないといけないわけだ。けど、そんな方法……ん？待てよ……？

『今の……この状況？』今は、ショーコンテストの最中……これ、利用できるかも……？と、なると……

霊斗「……いや、そうでもないんじゃないか？」

俺の言葉に、全員の視線が集まる。

司「どういう意味だ？霊斗？」

霊斗「その前に、だ。」

俺は携帯を操作し、セカイへと移動する。すると、ミク達もすぐ近くにいたのか、駆けつけてくれた。

カイト「霊斗くん、話は大体聞いていたよ。」

メイコ「さすが、霊斗くん！えむちゃんの悩みをなんとかしようとしているのね！」

霊斗「俺だけじゃなくて、全員でな？とまあ、話を聞いてたなら話が早い。要するに、えむのお兄さん達は、経営の問題をどうにかしようとする為に、企業提携をしようとしてるわけだろ？」

えむ「うん、お兄ちゃん達もいろんな方法を考えてたけど、全部ダメだったって。」

霊斗「つまり、今のフェニランの経営方針である『老若男女全ての人が笑顔になれる場所』っていうコンセプトをまず、経営陣に思い出ししてもらった後、そのコンセプトに沿った集客方法を見せつけてやればいいのさ。」

リン「えーっ!? 霊斗くん! それってすごく難しいことじゃないのー?」

霊斗「まあ、確かにその通りだな。けど、俺たちには出来ることが一つだけある。」

レン「ほんとに!? それってどんなの?」

霊斗「もちろん、ショーをやる。」

リン「ショーを?」

司「だが、霊斗、それでは何も変わらないんじゃないのか?」

霊斗「司の言う通りだ。いつものショーをやっていたら、それこそ時間過ぎて、今のフェニランは変わる。」

司「それじゃあ、間に合わないじゃないか!! どうするんだ!」

この状況を打破する方法・・・それは。

霊斗「今のフェニランにある、ショーステージ、アトラクション。

全部を巻き込んだ、フェニランだからこそそのショーを作り上げる。」

・・・今ここから、フェニックスワンダーランドの大規模、ショーの計画が始まろうとしていた。

フェニランだからこそそのショーに向けて

司「す、全てのショーステージとアトラクションを巻き込むショー、だど!?!」

霊斗「ああ。それしかないと思う。ぶっ壊される予定のアトラクション、ステージ、その全部を使った、フェニランだからこそそのショーをやる……これしかないと思う。」

類「……ふふっ！それは、素晴らしいアイディアだね！霊斗くん！」

霊斗「だろ？それに、類。お前の事だ、もう演目も決まってるんじゃないのか？」

類「もちろんだよ。さつき、書き終えてね？司くん達、これを見てくださいませんか？」

類は俺達に、次の演目の台本を渡す。ゆっくりと、そしてじっくり演目を確認した後、司達の表情はとても晴れ晴れとしていた。

えむ「わく……♪これ、とっても、わんわんワンダホーイ！なショーだね！」

司「ああ、王道だからこそ、盛り上がるだろう！これなら、コンセプトに沿った演目だ！全員が笑顔になる事、間違いないだろう!!」

寧々「本当に、全部のアトラクションを巻き込むショーをやるなんて……けど、これが出来たら、お客さんも笑顔になるよね……！うん……！面白そう……！やってみたい……！」

類「ふふ、喜んでもらえて光栄だよ。」

カイト「けど、これを上演するには、かなりの人数が必要なんじゃないかな？」

司「そうだな。一人で、複数の役をやったり、類のロボットを使ったりしても、限界がある。足りない人数はどうするつもりなんだ？」

霊斗「そんなの簡単な問題だろ？」

えむ「ほえ？」

霊斗「フェニックスワンダーランドのキャストや、スタッフ、それに、俺達の知り合い全員に、手伝って貰えばいいんだよ。」

司「なっ、なんだと!？」

類「霊斗くんの言う通り、このショーは、フェニックスワンダーランドがどんな場所なのかというコンセプトを思い出してもらう必要があるんだ。それに、全てのスタッフを巻き込んだショーをととして、話題性も作れるからね。」

寧々「そうは言うけど・・・みんな、手伝ってくれるかな?他のステージでもショーをやってるし、みんな仕事があるし・・・」

霊斗「そこは・・・正直、可能性は低い。それこそ、突拍子もない話だ。」

類「だからこそ、参加してもらえるように、一つ一つのステージを回ってお願いしていこう。」

司「・・・そうだな!よし!手分けして、全員に呼びかけにいくぞ!」

寧々「後は、このショーをやる日付だけど・・・」

えむ「あ!それなら、ショーコンテストの最終日に、お兄ちゃん達が、企業の人達と来るって言ってた!」

類「それなら、その日で決まりだね。コンテストの日に、僕達のショーをお兄さん達に見せつける。で、どうかな?」

司(ん?コンテストの最終日・・・か。)

霊斗「・・・優勝の事、考えてるだろ?司?」

司「・・・霊斗には、わかってしまう・・・か。だが、気にする必要はないぞ!まあ、せっかく頑張ってきたからな、残念でないと云えば嘘になるな・・・」

少し悲しげな表情になる司。

霊斗「・・・お客さんと、ショーをしている役者達も、全員が笑顔になるスターになる。」

司「ん?」

霊斗「それが、お前の夢・・・だったら、簡単な話だ。

『この前代未聞の最高のショーの先頭に立ち、キャストやスタッフ、そして、来てくれたお客さん、その全てを笑顔にした奇跡のスター』：それこそが、お前・・・だろ？『天馬司』？」

司「・・・っ、れ、霊斗・・・！」

霊斗「ほら、だったらそんな表情すんな。いつも通り、お前は大きな声で、俺達をしつかり、引っ張ればいいんだよ。」

司「ああ!!もちろんだ!!えむ！寧々！類！霊斗！このショーを絶対に成功させるぞ!!そして、フェニックスワンダーランドの全員を最高の笑顔にするんだ!!」

えむ「おー!!」寧々「うん・・・!!」類「ああ」霊斗「おう。」

そして、俺達は意気揚々と、他のステージへの協力を求めに行ったのだが・・・案の定と言うべきか、全てのステージで断られてしまった。まあ、これに関しては想定内の範囲だ。

寧々「・・・みんな、引き受けてくれなかったね。」

霊斗「まあ、想定内だな。コンテストの最中に、それを無視して、全員強力のショーをやるなんて、引き受けてくれるわけがないか。」

司「確かに、難しいことではあるが・・・いや！諦めるわけにはいかん！次はどこに行く!!」

司はこう言ってるが・・・次の場所は・・・

霊斗「・・・残ってるのは、フェニックスステージだけだな。他の所は着ぐるみの先輩達にも頼んだし、俺達が行くのは、そこだけだ。」

司「あ、あの女のステージか・・・もう少し協力者を増やしてから行きたい所なんだが・・・仕方ない！行くぞ！」

そうして、俺達は全員で、フェニックスステージへと向かい、中へと入っていく。

司「たのもー！」

霊斗「いや、道場破りでもするのか？俺達は協力を頼みにきてるんだぞ？」

えむ「あ、そうだった！私も、司くんとおんなじことするつもりだったよー！」

類「元気なのは、いいことだけどねえ。」

えむ「こんにはー！フェニックスステージの皆さーん！」

えむが声をかけると、困惑した表情をする、フェニックスステージの役者達。まあ、何か打ち合わせをするわけでもなく、突然訪れたのだから、当たり前のことではあるが。

「あら？ようやく来たのね？待ってたわよ？ワンダーランズ??シヨウタイムの皆さん」

と、そんな中、俺達に声をかけてきた人物がいた。その人物は、俺をワンダーランズ??シヨウタイムから引き抜こうとしてきた青龍院櫻子さんだった。

司「ふん！クリスマスショー以来だな！青龍院櫻子！」

霊斗「どうも、櫻子さん。」

櫻子「ええ。お久しぶりね？鬼灯霊斗くん。それに、あなた達も。」

寧々「・・・？待ってたって・・・どういう事？」

櫻子「あなた達、フェニックスワンダーランド全てを巻き込んだ大がかりなショーをやるうとしてるんですって？」

・・・？なんでそのことを櫻子さんが知ってるんだ？

寧々「なんで、知ってるの？」

櫻子「つい先程まで、別のショーステージを見に行ってる最中に、そこに鬼灯霊斗くんが来て、その時に話を聞いたのよ。盗み聞きしたのは悪いとは思っているわ。」

霊斗「あ、そうだったんですか？」

櫻子「・・・けど、それを聞いた上で言わせてもらおうわ。あなた達がやっていることは、集客率を上げるためとはいえ、経営陣に逆らい、せつかくの集客を見込めるショーコンテストを台無しにする……………一体何を考えているのかしら？」

司「うつ・・・そ、それは……………」

えむ「無茶なことをしてるのはわかっています。今まで以上にお客さんを呼ぶなら、海外の会社と提携した方がいいかもしれない」

けど、それじゃあ・・・今までの、フェニックスワンダーランドを好きで、大切に思ってた人たちを悲しませちゃう……………！」

それじゃあ、『みんなを笑顔にする』フェニックスワンダーランドじゃなくなっちゃう……！だから、お客さんもたくさん来てくれて、みんなを笑顔にする……その両方を叶えたいんです!!

だから、その為に……みんなの協力が必要なんです！だからお願いします！私達と一緒に、ショーをやってください！」

櫻子「……その感情論で、私がイエスと答えるだけでも？それに、それを行うことは、あなた達は、コンテストの優勝を手放すと言っているということ？」

司「それは……確かに諦めるのは悔しいことだ!!だが、チャンスなど、また掴めばいい！今はそれよりも大切なことがある！みんなの笑顔と！そのたくさんの笑顔を生み出し続けてきたフェニックスワンダーランドの存続だ！フェニックスワンダーランドのキャストとして、この二つは守り抜かなければならない！その為に、コンテストの優勝を逃すことなど、惜しくはない！今は、大切なもののために！動くべきだろう！」

……これは、司の本心だ。コンテストの優勝を手放すしても、守るもの……『笑顔』を守るという司の意志……

司「青龍院櫻子！お前ならわかるはずだ！この想いを！フェニックスステージのスターであるお前なら！」

櫻子「……確かに、その気持ち、わからなくはないわ……」
寧々「え？」

櫻子「……はあ、本当に協力してほしいというなら、まずはプランの詳細を提示してちょうだい。やるかやらないか、考えるのはそこからよ。」

類「……それは、僕達のプランを詳しく聞いてくれるということだね？」

類の言葉に、首を縦に振る櫻子さん。ようやく、聞いてくれる人が現れてくれたな。これで一步前進だな。えむも嬉しそうだし。

霊斗「それなら、まずはこれを読んでください。詳しいことはその後」

櫻子「ええ。わかったわ。」

櫻子さんに、類の提案した演目を見せる。すると、読み進めていくうちに、櫻子さん達は、驚いた表情をして行く。

櫻子「こんなショーは見たことがない。成功すれば確実に話題になる。集客率も上がる。けど、そう簡単にできるものじゃない……けど、

やってみたい……その感情が溢れ出てくる。」

類「どうだい？青龍院くん？」

櫻子「……返答がわかっているような表情ね？」

類「これは、僕達みんなの自信作だからね？」

満面の笑みの類。ため息をつき、呆れた表情をする櫻子。

櫻子「……そうね。私は賭けてみてもいいわ。今の経営方針には納得がいかないし。」

司「っ!?っ、つまり、協力してくれるのか!？」

櫻子「私は、ね？他の役者達は別よ？それこそ、彼ら個人で決めてもらうわ。」

「……実は、ここ最近、馴染みのお客さんが減ってるの、寂しかったんだよな」

「うん、経営方針には逆らえないって思ってたし、仕方ないって思ってたけど、今ならまだ……変えられるんだよね？」

「ま、櫻子ちゃんが乗るなら、俺たちも乗らないわけにはいかないよな？」

「……フェニックスステージの皆さんも、同意してくれるみたいだな。これで、フェニックスステージは協力してくれるみたいだ。」

えむ「うくっ……スパーわんだほーい！ありがとう！櫻子ちゃん！」

櫻子「ぎ、櫻子ちゃん？ま、まあ……別に、いいけど……」

司「よーし！なら、どんどん仲間を増やしていかないとな！」

霊斗「それなら、もう一回、断られたステージ行くか。フェニックスステージが協力してくれるって知ったら、協力してくれるかもよ？」

櫻子「それなら、私も行くわ。他のステージの事情にもそれなりに詳しいから。説得の仕方を変えれば、参加してもらえる可能性は充分にあるわ。」

司「そうか！ありがたい！頼もしい限りだ！協力感謝する！そして改めて……宜しく頼む！青龍院！」

櫻子「ええ。このショーを、最高のものにしましょう！天馬さん！」

初めはライバル同士であった、司と櫻子さんが、手を取り合い、一つのショーの完成へと進んでいく。

その後、俺達は、もう一度、全てのステージを回り協力を要請した。櫻子さんがいたからなのか、最初は相手にされなかったステージの人達とも、話ができて、その日は解散となった。

そして、翌日。俺達はワンダーステージにいたのだが……そこには大きな変化があった。それは……

フェニックスワンダーランドにある、全てステージのキャストやスタッフがワンダーステージに集合していたのだ。

司「なんと……！全てのステージのキャスト達だけで、これほどまでいるのか……!?!」

寧々「ありがとう青龍院さん。あなたの力がなかったから、ここまでうまくいかなかったと思う。」

櫻子「どういたしました……！……だけど、ここからはあなた達の問題よ？」

類「そうだね。さて、ここからは司くんの出番だよ？」

司「なに？」

類「ワンダーランズ?? ショウタイムの座長として、君がやるべき

事・・・わかるだろう？」

司「・・・うむ！確かにそうだな・・・だが、俺だけではダメだ。」
類「え？」

司「俺だけでは、駄目なんだ。だから・・・霊斗！」

霊斗「ん？」

なんで呼ばれたんだ？俺？司が説得するって話じゃないのか？

司「一緒に、来てくれないか？霊斗？」

霊斗「・・・ったく、しょうがねえな。わかったよ。」

えむ「なにになに？司くんと、霊斗くん！何するの？」

司「ふっふっふ！まあ、見ていろ！この俺！未来のスターである天馬司と！その相棒である鬼灯霊斗の真骨頂を!!」

霊斗「どこからその自信が湧き出てくるんだか・・・まあ、やるだけはやってみる。」

そうして、俺と司は、ステージキャスト達、全員の前に出る。

さて、こっからは・・・ただの・・・演じる時間だ。

笑顔のショー閉幕　そして・・・

俺と司は、ワンダーステージに立つ。集まってくれたキャストの人は、俺達へと視線を向けて、ただ黙っている。どうやら、俺達が話すのを待っていてくれてるらしい。

霊斗「さて、皆さん、集まってくれてありがとうございます。俺はワンダーステージの役者の一人、鬼灯霊斗です。そして、こっちが俺達、ワンダーランズ?? ショウタイムの座長の・・・」

司「天翔けるペガサス! 天馬司だ!」

「・・・・・・は?」

おい、司。その自己紹介の仕方は困惑を招くぞ。見ろ。何言ってるだこいつ? みたいな顔になってるぞ・・・

まあ、こいつらしいからいいか。

霊斗「まず最初に、俺達の突拍子もない、お願いを聞いてくれることに、感謝を。本当にありがとうございます。」

寧々(霊斗、このまま続けるの・・・!?)

霊斗「ここに集まってくれた人達は、知ってると思いますけど、今、このフェニックスワンダーランドは、大きな転換点に立っています。『集客率を上げる為に、若者をターゲットとしたテーマパーク』にするか

『年齢性別を問わず、全ての人が笑顔なれるテーマパーク』であり続けるか。この二つに。」

霊斗「まあ、経営側の方は、前者の方を選んで進んでいます。けど、俺達の座長は、それを納得いかないと言ってます。」

司「ああ! その通りだ! 存続の為に、戦略が必要な事は理解している! だが、俺達や、皆さんがやってきたショーは! 万人を笑顔にするものだ!

そこには、年齢も! 性別も関係ない! たとえ、宇宙人が俺達のショーを見に来ていたとしても、少なくとも俺は俺の・・・

いや! 『俺達のショー』を見る人達全員を、笑顔にしたい!

そしてここは、そういう想いで作られた場所なのだと思う。」

全員を笑顔にしたい思い・・・それは確かなのだろう。実際、今まで、いろんなアトラクションやステージを見に行ってみたが、そこに来ていたお客さん達は、全員が笑顔だった。そんな笑顔を作りたいたい・・・その思いがなければ、笑顔は生まれなはずだ。

司「全ての人を笑顔にしたいという想いを持っていたからこそ、このフェニックスワンダーランドは愛されてきたし、今までの人々が訪れてきていたのだと！」

司「ゆえに！俺は・・・いや、俺達、『ワンダーランズ?? ショウタイム』は！このショーをやる！そして証明するのだ！」

『全ての人を笑顔になれる場所』と「集客率を上げる事」はどちらかしか選べないわけではないと！『全ての人が笑顔になれる』ショーをすれば！たくさんの人々が、きつとこの場所を訪れてくれる！それさえ忘れなければ・・・

フェニックスワンダーランドは！何度でも！不死鳥の如く蘇る！」

司の声に、集まってくれた人達は騒つく。全ての人を笑顔に・・・その想いは確かにこここの全員に届いたはずだ。

霊斗「さて皆さん！改めて、言わせてもらいます！うちの座長は皆さんの力を信じてます！日々、フェニックスワンダーランドで働いて、全員の笑顔のために働いている皆さんの力があれば、俺達の提案した、このショーを、最高の形で成功させられると。だから皆さん、本番まで、全力で駆け抜けていきましょう。そして・・・全ての人を笑顔にさせましょう！」

俺と司の声を聞いて、静寂が包み込む。そして、数秒後、パチパチという音が鳴った直後、集まってきたくれた人たちから拍手が。ほぼ全ての人たちが賛同してくれた証拠だ。

司「よーし！みんなありがとう！ここからはショーについて説明をしていく！霊斗！」

霊斗「あ、俺なの？まあいいけど。じゃあまずは、それぞれの担当

から言っていきます。まず、総合演出は、ワンダーステージより、神代類が。

歌唱とダンスの指導はフェニックスステージから、青龍院櫻子さんに担当してもらいます。もし詳しい事が聞きたかったら、それぞれの担当や、俺か、司を通して聞いてください。それじゃあ、早速、ここから練習を始めていきましょうか。司、掛け声よろしく。」

司「まかせろ！それでは・・・練習、スタートだ!!」

司の掛け声を合図に、全員がそれぞれの持ち場へと移動し、練習を開始する。まず、それぞれの人達に、演出の詳しい説明を類が。あいつの奇抜な演出に、驚きながらも興味津々に見ているあたり、大丈夫だろう。

歌唱やダンスを見てくれている櫻子さん。フェニックスステージの歌姫なだけにはあり、厳しく、より完璧に仕上げてくれている。寧々も、櫻子さんのサポートをしてくれている。人見知りで少し心配してはいたが、彼女なりに、いろいろ教えており、頑張っているようだ。えむも、自分なりに動きを他の人たちに、教えているようだ。けど、『右、左、ぶんぶん、ぐるーん！ぱっ！』ってなんだ？それで伝わるのも凄いなだけ？

「あの！鬼灯さん！ここでのポジション教えてもらえませんか？」

霊斗「あ、はい。少し待っててください。司、こっち頼む。」

司「ああ！まかせろ！」

ちなみに、俺は臨機応変にと言われた。司曰く

司『霊斗は、大変だとは思いますが、色々なチームを見て回ってくれ！俺もなるべく回るようにするが、手が足りなくなる時があるからな・・・それに、霊斗は基本的な演出や動きは全て頭に入ってると思うからな！』

らしい。俺にどんだけ過大な信頼してるの？俺だつて体一つだから、限界があるんだけど？まあけど、このショーを成功させる為だし別にいいか・・・それに。

『こういう動きや、扱い』には、慣れてるし。

それから、数週間はこのような練習が続いた。以前の練習とは勝手が違い、一苦労はあったが、順調に練習は進んでいき、そして、その日はついに訪れる。

ショー当日。ワンダーステージ。

類「霊斗くん、フェニックスワンダーランドの入り口に、えむくんのお兄さん達を発見したよ。契約先の人も一緒だ。そろそろ始めよう。」

霊斗「おう。司達からも、準備OKって、連絡来てるしな・・・ほんじゃま・・・始めますか。」

さて、こつからが、司の目指す、夢のステージの始まりだ。

俺は、調整室にある、マイクの音量を上げ、放送を流す。

霊斗『あーあー、フェニックスワンダーランドにお集まりしている、皆様に、ご連絡があります。』

「な、なんだ？この声・・・この間、えむと一緒にいた・・・？」

おお、驚いてる驚いてる。まあ、なんの予定も聞かされてないだろうし、当たり前だろうな。あ、ちなみに、お客さん達の声は、類のドローンを経由して聞いているぞ？

霊斗『まず最初に、本日、当フェニックスワンダーランドにお越しいただき、まことにありがとうございます。そんな皆様のため、俺達、『ワンダーランズ??ショウタイム』の本日限りの、スペシャルショーを上演いたします』

「何が始まるのかな？」「スペシャルショーだって」「けど、どこでやるんだろ？場所がわからないなら・・・」

お客さんも困惑してるよな。今まで、こんな事なかったろうし。まあ、これで、いいんだけどな。

霊斗『では、このフェニックスワンダーランド、全てを利用した、今日限りのスペシャルショーを楽しんでもらう為に・・・皆様！ネオフェニックス城までお越しください！』

俺はマイクのスイッチを切り、放送を終了する。

霊斗「ふう、これで集まってくれるかね？」

類「えむくんのお兄さん達は確実に来るだろうね。予定にないショーをやっているなら、尚更だ。」

霊斗「だといいいけどな。そんじやま、ここからはネネロボと俺の仕事だな。行ってくる。類は司達と合流な。」

類「ふつつ、任せたよ？霊斗くん。」

類は微笑みながら、立ち去っていく。さて俺も早く行くか。ネオフェニックス城。俺はネネロボとの合流のため、走り出す。それと、ベルトを装着するのでも忘れずにだ。

霊斗「司からこれを聞かされた時は、どうかと思っただけど・・・まあ、使えるもんは使っておかきやな。」

俺はデイケイドのカードを取り出し、ベルトに装入、変身する。

『KAMEN RIDE DECADE!!』

俺は、仮面ライダーデイケイドに変身して、ネオフェニックス城にいるネネロボと合流する。すでにネオフェニックス城前には、多くのお客さん達が集まっている。えむのお兄さん達も一緒だ。

ネネロボ『レイト、準備はイイですか？』

霊斗「あいよ。んじやま、仕事するか。」

俺とネネロボはお客さん達の前に立つ。すると、何故か歓声が上がリ、もうすでに子供達はキャッ！キャッ！と騒いでいる。・・・なんぞ？

晶介（あれは・・・仮面ライダー・・・デイケイド？）

霊斗「今日も集まってくれて、ありがとう。ここにいる人達は、全員、俺達のスペシャルショーを見に来てくれたお客さん達って事だよな？」

俺の言葉に、歓声で返すお客さん達。どうやら、相当、楽しみにしているらしい。

霊斗「よし、それなら、俺とネネロボから、楽しんでもらう為の準備を進める。まず、このショーを楽しんでもらう為に、このブレスレットをつけてくれ。」

俺とネネロボは、類が作ってくれたプラスチック製のブレスレット

を手渡しで渡していく。もちろんえむのお兄さん達にもだ。

霊斗「どうぞ。」

晶介「あ、ああ……」

慶介「……」

「おお？これがあの有名な仮面ライダーなんですね！」

なんか、すげえ、楽しんでるおっさんだな。この人が企業のひとなのか？

霊斗「えっと、お兄さんは、はじめてのお客様ですか？」

「おお！これはすいません！私はライリーと言います。」

霊斗「では、ライリーさん。今日はとっもお楽しみになれると思いますよ？」

ライリー「そうですか！とっもお楽しみです！」

すると、開演のブザーが鳴り響く。よっし、それじゃあ、本編の始まりだな。

霊斗「それじゃあ……楽しんでいってくれ。」

俺とネネロボは渡すものを渡した後、それぞれの持ち場へと向かう。さて、こっから忙しくなるぞ。

今回も軽く説明するか。今回のショーの内容は、笑顔を届ける魔法使いとその弟子の話だ。戦争で笑顔を失った、ある場所で遊園地を作る……簡単に言えばそんな話だ。

ちなみに、俺の担当は今、裏方だけど、色々な仕掛けを起動させる為に、類と一緒に行動中だ。

霊斗「類、順調に進んでるか？」

類「ああ、そろそろ……合図だ。霊斗くん、今だよ。」

霊斗「ほいほい。」

俺はスイッチをカチツと押す。すると、司の動きに合わせて、観覧車にたくさん光が灯る。にしても、よくこんな仕掛け思いつくよな。類のやつ。

類「よし、お客さんの反応も上々……いいタイミングだったよ。霊斗くん。」

霊斗「よし、ならどどん行くか。次は確か……」

類「メリーゴーランドだよ。寧々と司くんの話の途中で、魔法を司くんがメリーゴーランドにかける。そのタイミングで霊斗くんが、メリーゴーランドを起動させるんだよ。」

霊斗「OK」

類「さて、僕もそろそろ出番になってしまおう。少しの間、頼むよ。霊斗くん。」

霊斗「おう。」

類が離れていき、俺だけが、裏方の役回りだ。ちなみにタイミングは他の人に頼んでる。その後は、メリーゴーランドを起動させたり、園内のパークトレインを動かしたり：そんな裏方作業を進めていった。そして、話は終盤、爺さんになった魔法使いの想いを継ぎ、弟子の魔法使いが、お客さん達と力を合わせて、魔法を発動させる。フェニックスワンダーランドがライトアップされ、そこでショーは終了。

霊斗「と思ったけどねえ・・・これだけじゃあ、足りないよな。」

・・・あ、そうだ。せっかくだし、これ使ってみるか。ショーが終了した後、キャスト全員がステージ上に上がり、最後の挨拶をしようとしている。よし、今だな。俺はもう一度、仮面ライダーディケイドへと変身をする。

霊斗「よう、今回のショーは、どうだった？最高だっただろう？」

ディケイドとして現れた俺の言葉に、全員が歓声をあげる。どうやら、相当好評だったみたいだな。

霊斗「本来なら、このまま挨拶をしてこのショーは終了・・・なんだけどな。ここからは、俺、仮面ライダーディケイドからの、今日、このスペシャルショーに来てくれた全員に、サプライズをしたいと思います。」

『ええー？なにになー？』

霊斗「実は、このスペシャルショーをより一層楽しいものにしたって人達を連れてきたんだ。ここからは、この人達とも楽しんでいってくれ」

俺はライドブツカーの中から、ある一枚のカードを手に取り、ベルトの中へと入れる。

「ATTACK RIDE ワンダーランズ?? ショウタイム!!」

カードを使用すると、ステージ上にカーテンの様な物が現れる。周りは何事だとはかり、騒いでいるが、ここから、大きく騒ぐ事になる。何せ、そこから現れたのは。

『はい♪彼に呼ばれたからきつたよー♪』

そこから現れたのは、司のセカイにいるはずの、ミクの姿だった。

「は!?は、初音ミク!?!」

「わあ、ミクちゃんだー♪」

おお? 反応は上々... 驚いている人、キャツキャツと騒ぐ子供達... 様々だな。けど、それだけじゃないぜ?

霊斗「そう。今回のゲスト達は、初音ミク達だ! さあ、どんどん来てくれ!」

ミク『はい♪みんなー、こっちこっちー♪』

『やっほー♪こんばんわー♪リンだよ♪』

『レンもいるよー☆』

『みんなー!! メイコお姉さんと楽しみましょう!!』

『私もいるわよ♪ここからは、私達とも楽しんで、笑顔になりましょう〜』

『そうだね。僕達も、みんなも全員で楽しむ時間の始まりだよ!』

「えくっ?! リンちゃんだ!?!」 「レンくんもいるよー!」

「メイコもいるのか!?!」 「ルカもいるぞ!?! どうなってんだ!?!」

「カイトもいる!?! え!?! 何これ!?! プロジェクションマッピング!?!」

うわあ、全員来たことで驚きが頂点になってる。すげえ騒ぎになってるな。これ。

霊斗「どうだ? 最高だろ? ここからは、俺達、ワンダーランズ?? ショウタイムと初音ミク達と一緒に、この最高の夜の時間を... スマイルナイトタイムを存分に楽しんでくれ! それじゃあ、行くぞ! カイト!」

カイト「そうだね! 霊斗くん! それじゃあみんな!」

カイト 霊斗「it's SHOWTIME!!」

俺とカイトの掛け声を切つ掛けに、お客さん達は散り散りになり、さまざまなアトラクションへと、向かっていく。ジェットコースターや、観覧車、メリーゴーランドなど、多くの観客達が一齐にアトラクションへと向かっていったのだ。

最初はどうなることか、わからなかった前代未聞のショー。それは、司達の努力と、全てのステージ、アトラクションのキャストさん達の協力の元、最高のショーへと仕上がった。そしてこの日は、フェニックスワンダーランドの閉園時間まで、お客さん達の歓声と笑顔は消えなかつたらしい。

そして、閉園し残っているのはワンダーランズ?? ショウタイムとえむのお兄さん達、そして、ライリーさん、そして、協力してくれたキャストさん達だけとなった。

慶介「えむ……」

晶介「えむ……お前……!!」

えむ「お兄ちゃん達……えつと……あの……」

えむのお兄さん達の圧に、言葉が出なくなるえむ。すると、なぜか俺の横にいる司が俺の方を向き、頷いた。……なんとなくわかったわ。俺はため息をつきながらも、えむの方へと向かう。

霊斗「えむ、落ち着け。ゆっくりで良い。えむの言いたいこと、お兄さん達に言いたいこと、全部、落ち着いて話したら良いんだ。」

えむ「霊斗くん……うん! すうく……はあく……よし! お父さん! お兄ちゃん! 急にこんなショーをやってごめんなさい! でも、わたし、諦めたくない!」みんなを笑顔にする『フェニックスワンダーランドをこのままずっと残していきたい!』

どんどんアトラクションが変わっても、ステージがなくなっても、『みんなを笑顔にする』。この想いだけは残しておきたいの! その想いが無くならなければ、お客さんも来てくれると思うの……! だから……!」

「……」

えむのおやじさん、なんか納得いってない感じだよな。こりゃ、駄目か……?

ライリー「少々、よろしいですか？」

慶介「・・・ミスターライリー？」

ライリー「今日、わたしは初めて彼女達のショーを見ました。そして、こう感じました。この場所から生まれるショーを・・・もつともつと見たい・・・とね。」

テーマパークを全て使ったショーは世界中を見渡せば今までなかったわけではないですが、それでも、わたしがこんなにも心打たれたのは・・・

『この場所にいる人達の想いがそうさせたんでしょう』

全てのキャストの目に、意思があり、全員が、お客さんを笑顔にしたいと純粹に願っている。そんな素晴らしいテーマパークは作ろうとしても簡単には作れない物です。」

「・・・」

ライリー「ですので、我が社のキャラクターでテーマパークを塗り替えてしまうよりも、

我々もこの仲間に加えてもらいましょうか？」

慶介「それはどういう・・・？」

ライリー「ただ、純粹に、この場所から生まれるショーに、我が社のキャラクターが混ざっている未来を想像したんですよ。ここに混ざっていれば・・・どうにも見たことがない、幸せな笑顔をしている気がしてならないんです。もちろん、ライセンス料も、最低限で構いません。どうですか？」

慶介「は、はい。ぜひ、よろしくお願いします。」

「・・・慶介、晶介」

慶介「父さん・・・？」

「・・・すまなかったな。」

突然の謝罪に、お兄さん達は困惑しているみたいだ。正直な話、俺達はもうついていけないのだが。

えむの親父さんは、鳳グループを預かる身として、個人的な思いよ

りも、経営的に厳しい部分を改革していくことをやむを得ないと思っ
ていたが、今この景色を見て、えむのおじさんが、望んでいたフェニッ
クスワンダーランドのままでもいられる事を喜んでいるとのことだっ
たわ、

そして、流れるように、鳳グループとライリーさんの会社の契約が
叶ったみたいだ。

晶介「おい！えむ！お前が勝手にショーをしたこと、俺は許してな
いからな！」

えむ「ひえ!？」

晶介「けどまあ・・・お前の夢のおかげで、兄貴も父さんも喜んで
る・・・だから、今回だけは許してやる」

えむ「・・・!!」

寧々「それじゃあ・・・!」

類「ショーは成功・・・ということだね。」

「本当に!？」「やったー!」

櫻子「まあ、わたしが手伝ったのだから当然よね？」

司「・・・そうか。」

霊斗「何固まってるんだよ？司？いつものお前ならうおー!って喜ん
でるところじゃないのか？」

類「もしかして、ショーをやりきって、お疲れかい？」

司「ああ、いや、これだけの人が・・・俺の目に映る全ての人が笑っ
ていて

なんて、素晴らしい景色なのかと思ってな。」

えむ「うんっ！これってやっぱり、とっってもとっっても・・・」

寧々 司 えむ 類

『わんだほ〜いっ!』

えむ「だねっ!!」

フェニックスワンダーランドに残った全ての人たちが笑って過ごしているこの時間・・・これが、もしかしたら、司が望んだ

『お客さんも一緒にショーをした人達全員が笑顔になるショー』だったのかもしれない。

霊斗「これが司の望んだ景色・・・か。」

俺は全員が笑って話をしている途中、俺は少し離れた場所に腰をかけていた。すると。

「今回のショー、大成功だったみたいだね？霊斗くん？」

突然、隣から声をかけられ、声のした方へ顔を向けると・・・

霊斗「・・・柳瀬真優・・・」

そう。ついこの間、出会った謎の多い女、柳瀬真優がそこにいた。

真優「鳳えむちゃんも救って、フェニックスワンダーランドの危機も救った・・・いやあ、霊斗くん、君はとつてもすごいんだね？」

霊斗「俺じゃねえよ。司達全員の力だ。俺の力じゃねえし。」

真優「自己評価が低いね？まあ、そこが君の美点でもあるけど。」

霊斗「んで、何しに来た？ただ、ショーを見に来たわけじゃねえんだろ？つか、関わったらいけないんじゃないか？」

真優「へえ。僕のこと気がなったりするのかな？まあ、確かに君とはあんまり関わるなって言われてるんだけどね。まあ、単なる好奇心と助言かな？」

霊斗「助言？」

真優「そうそう。助言。」

『ワンダーランズ??ショウタイム』での時間だけを過ごささない方がいいよ。」

霊斗「・・・あ？」

真優「助言はそれだよ。それじゃあね。」

霊斗「あ、おい!？」

それだけを言い残して、柳瀬真優は闇の中へと消えていった。

意味深な、言葉だけを残して。

星空を消す曇天

前代未聞のショーから数日後。俺達はいつものごとく、ワンダーステージで集まっていたのだが、今日はいつにも増して賑やかになっていた。

司「はーっはっはっは！いや、昨日はまさに絵に描いたような大成功だったな！」

霊斗「とうか、想定以上だぞ？SNSじゃ拡散が続いてるし、動画サイトじゃ、えむのシーンとか、映像で上がってる。『前代未聞のショーだ』ってよ。」

類「まさか、ここまで人気になるとは思ってたけどね。これもまた、えむくんの『笑顔の魔法』のお陰かな。」

えむ「ううん！みんなのおかげだもん！私ありがとうだよ！あ！そういうえば、今日はお兄ちゃん達がここに来るかもしれないの。」

寧々「え？えむのお兄さん達が？」

何でここに？というか、あの二人忙しくないのか？そう思っている、ワンダーステージの入り口から、二人の男性が歩いてくる。

霊斗「噂をすればなんとやらってな。」

慶介「すまない。急に来てしまった。」

類「おや、まさかこんな早くに再会することになろうとは。」

寧々「な、何の用・・・？」

・・・寧々、俺の後ろから顔を出して話さないでくれ。せめて姿を出してくれ。

慶介「まず、感謝させてほしい。あの素晴らしいショーをしてくれて。」

えむ「・・・え？」

慶介「君達のお陰で思い出せたんだ。理想があるからこそ、素晴らしいものは出来る事を。」

えむのお兄さん・・・慶介さんの言葉に、笑顔になる司達。まあ、これだけの物をしたんだ、納得してくれなきゃ困るぐらいだな。

慶介「そんな君達に、ぜひやってもらいたい事があるんだ。」

霊斗「・・・やってもらいたい事?」

寧々「それって・・・?」

慶介「フェニックスワンダーランドの宣伝大使をやってほしい。」

司「宣伝大使・・・?」

慶介「今回のショーが話題になった事で、君達ワンダーランズ?? ショウタイムの知名度が上がっている。それを生かした新しい施策だ。昨日のショーや、ワンダーステージでのショーも定期的に開催しつつ、君達には外部公演をしてもらい、フェニックスワンダーランドの名前を広めてもらいたいんだ。」

なるほど。つまり、俺達はショーコンテストの優勝した時の景品・・・というより、特典みたいな物をもたらったわけか。

慶介「それに、君達のショーには、『仮面ライダーデイクイド』がいる。人気のライダーがいる事も、君達の人気のひとつみたいだ。」

・・・まさかの仮面ライダーデイクイド人気だったわけかい。いや、そうじゃなきゃ、あんな歓声湧かないとは思っていたけど。

晶介「本来なら、ショーコンテストの優勝したキャストを中心に、新CMを打つはずだったんだが・・・それも、提携方針の見直しで流されたからな。その代わりにあちこちに飛び回って、ショーで新しい宣伝をしてほしいってとこだ。」

司「ぬ!と言うことは・・・俺達の素晴らしいショーを全国に披露するチャンス!と言うわけだな!その話、引き受けた!!」

霊斗「・・・座長が決めたならいいんじゃないか?細かい話は俺が聞いとくし。」

寧々「まあ、司はともかく、霊斗が細かい所をやってくれるなら安心・・・かな。」

慶介「無論、こちらも君達のサポートを最大化していくつもりだ。フェニックスワンダーランドの可能性を思い出させてくれた君達とさらにそこを盛り上げていきたい。どうか、よろしく頼む。」

晶介「そういうことだ。まあ・・・よろしくな。」

類「では、第一幕の閉幕、第二幕の開幕・・・ということかな?」
霊斗「まあ、丸く収まったし、やる事も増えたしそれでいいんじゃないや

ないか?」

司「よーし!それでは、我々ワンダーランズ??ショウタイムは、このワンダーステージを、起点として宣伝大使の活動をスタートする!これから大きな苦難とぶつかる事もあるだろうが・・・俺達ならば、どんな困難も乗り越え!突き進めるはずだ!!というわけでえむ!気合いを入れるのも兼ねて、いつものやるぞ!」

晶介「いつもの?」

霊斗「あ、なんだったら、慶介さん達もやります?」

慶介「何をするんだい?」

俺は、これからやる事を簡単に説明する。まあ、俺たちにしたら、恒例行事みたいなもんだしな。

晶介「はあ?俺はやらないぞ?」

慶介「なるほど。面白そうだな。」

晶介「兄貴!」

えむ「それじゃあ!これからも頑張ろうー!」

司 えむ 寧々 類 霊斗 慶介

『わんだほーいー!』

えむ「ええ!?!なんで晶介お兄ちゃんはやってくれないの!」

晶介「誰がやるか!なんだこのアホみたいな掛け声は!」

慶介「ははは。まるで子供の頃みたいだな、晶介。」

司「では、ワンダーランズ??ショウタイム、第二幕のスタートだ!!」
これで、俺達の新たな活動・・・いや、新たなスタートが切られたのだった。

その後、俺達はいつもより早く解散して俺は、一人で帰路についていた。

霊斗「ふう、今日も疲れたな・・・にしても、宣伝大使・・・ね。これから、どんどん忙しくなるな・・・。」

色んな場所に行く訳だから、それぞれステージも違くなるし、毎回、演目も考えなきやだしな・・・もつと大変になるな。

霊斗「……それとあいつ……『柳瀬真優』が言ってたことも気になるな……」

『ワンダーランズ?? ショウタイムだけの時間を過ごさないほうがいいよ』

……だったな。どういう意味なんだ……？ 司達と時間を過ごすな……ってことか？ だとすると……

霊斗「奏達や一歌達とも過ごさないとダメ……ってことか？」

……結局、あいつが何をしたいのかわからない。あいつは他の転生者とは違い、欲望で行動している訳じゃない……。だが、何か明確な目的があるのは確かなはずだ。

霊斗「……考えてもわかんねえな……」

「……あれ？ 霊斗……さん？」

「あー!? 霊斗さんだー!!」

霊斗「ん？」

考え事してたら、誰かに声をかけられたな。後ろから。俺は後ろに振り向くと。

霊斗「あれ？ 一歌達じゃねえか。」

まさかのLeo/needメンバー勢揃いだった。よく見ると、彼女達は私服の姿。あ、バンドの練習帰りか。

霊斗「練習終わりか？」

咲希「うん！ 今日も、いっちゃん達といっばい練習したんだよ！」

一歌「まだまだ、できていないところもありますけど。」

志歩「全員、上手くなつては来てるからできると思うよ。このまま練習してればね。」

穂波「そうだといいなあ。あ、霊斗さんも司さん達との練習終わりですか？」

霊斗「ん？ おお。いつもよりかは早く終わったからな。せつかくだし、このまま送ってくか？ 女の子達だけじゃ、色々危ねえだろうし。」

咲希「本当ですか!? やったー！ 霊斗さんと一緒に帰れるー♪」

おいおい、咲希ちゃん。むやみにびよんびよん跳ねるんじゃない。

君、スカートだつてこと忘れてませんか？

一歌「さ、咲希！スカート！」

咲希「え？」

慌てて、咲希ちゃんを止める一歌。あ、気づいてないのね？

穂波「さ、咲希ちゃん、霊斗さんの前で、ぴよんぴよん跳ねちゃうのは……」

志歩「スカート捲れて、霊斗さんに見られるところだったね。」

咲希「え、ええく!? / れ、霊斗さん！見えました!? / 」

霊斗「いや、なんで俺に聞くの？一歌達に聞けばいいじゃん。」

頬を赤くしながら聞く咲希。答えられるか。周りを周りを。

「お、おい！お前!!」

霊斗「ん？」

なんだ？一歌達と話してたら、なんか……なんだ？変なやつ来たぞ？息荒いし……なんだ？

霊斗「誰？お前？」

「そ、それは、こ、こつちのセリフ、だ！お、お前、一歌ちゃん達と何、仲良く話なんて、し、してるんだ!!」

霊斗「……は？なんでつて……というか、お前誰なんだよ？一

歌達の知り合い？」

志歩「……また来たの？いい加減にしてくれない？」

穂波「さ、最近、私達の跡を付けてる人……です。」

霊斗「……え？ストーカー？」

ええ……転生者……か？ただのストーカー……か？いや、どうせなら後者の方がいいんだけど。まあ、一歌達は世間から見たら、可愛い部類に入るんだろう。こういうのがいるのも当たり前……ではないな。変質者だからな。

一歌「霊斗さんとは……お、お友達です!!」

咲希「そうだよ！霊斗さんは、お兄ちゃんの親友さんなんだよ！だから、私達ともお友達なの！」

咲希ちゃん、その理論はどうなの？まあ、友達だ……よな。

「お、おお、おおお友達!?!?!、ここの世界に男の……しゅ、主要メンバーなんて、き、聞いてないぞ!?!」

霊斗「・・・？この世界・・・？主要メンバー・・・？」
はい確定。前者確定。転生者だな。となると・・・なんかの特典待ち・・・だな。

霊斗「・・・んで？俺が一歌達と仲良くしてて何か不都合でもあんの？」

「そ、そそ、それはそうだ！お、お前みたいな、穢らわしい存在が、か、彼女達の間には挟まってはいけないんだ!!」

霊斗「・・・は？」

志歩「・・・何言ってるの？」

穢らわしい存在・・・まあ、間違っていない・・・か。

「お、お前は、彼女達の頑張りをまるでわかっていない！一歌達の努力や物語を何も知らない男が、近くにいてはいけないんだ！その場所は、ぼ、ぼぼ、僕にこそふさわしい！」

霊斗「・・・ふーん、じゃあお前さ、ここにいる一歌達が、お前のこと嫌悪してる事、理解してんの？」

「・・・は？」

霊斗「だからさ。お前がやってる事で、一歌達が迷惑してるって事、理解してる？そんな出過ぎた行動で、自分が一歌達に嫌われてんだよ。」

「こういう奴にはとりあえず、きつちり言っておかないとな。理解してもらえるかは別として。」

「そ、そんな事、あるはずがない！俺は、Leo/needを一番理解してるんだ！だから、一歌達は、俺に惚れるはずなんだ!!お前の言う事を信じるはずあるか!!」

志歩「・・・は？」

霊斗「あ、いや、信じるとか信じないとか・・・そうじゃないんだけど・・・」

「・・・事実を突きつけてるだけなんです、何？認めるつもりはないと？」

「・・・っ！そうか！わかったぞ！お前が一歌達を洗脳してるんだな！そ、それに、ワンダシヨのメンバーと一緒にいたのはお前だな!!SN

Sに出ているから覚えてるぞ!!どうせ、ワンダシヨのメンバーも洗脳してるんだろ!!」

「…なるほど。こいつの中では、俺が一歌達と、司達を洗脳して、操っていると思われてるわけですか…全然違うけど、態々否定するつもりもないし、どうでもいいし、まあいいか。」

一歌「っ!霊斗さんはそんな人じゃありません!!勝手な事、言わないでください!!」

霊斗「…一歌?」

咲希「そうだよ!霊斗さんはそんな人じゃないよ!!」

穂波「咲希ちゃんの言う通りです!霊斗さんは、私達を洗脳なんてしてません!!」

志歩「霊斗さんの事、勝手に悪く言ってるけど、あんたの方が、私達は嫌いだから。それに、ストーカーの言う事なんて、誰が信じるの?」

「…ズタボロに言われてるな。あいつ。まあ、同情なんてしないで、そんな風に思う気持ちもねえけどな。」

「…っ!そ、そんな…!お、俺は、一歌達のことを本気で…!」

霊斗「…まあ、自業自得だからよ。自分の行動を反省して、見直してみろよ。それで…」

「…なら、し、仕方ないな!!こ、こうなったら、力づくでも一歌達をもらってやる!!」

霊斗「…あ?」

そう言いつつ、男はナイフを取り出し、こちらへと向ける…あら?もしかして、こいつ…?」

霊斗「…何、そんなもん出してんだ?」

「な、なんでかは知らないが、俺は元々持ってた特典が発動しないんだ!!けど、俺が発動しないってことは、お前も使えないんだよな!!なら、凶器を持つてる、お、俺が有利なんだ!!」

「…ああ、神様が、クソ転生者の特典の力は、無くなってるか、弱くなってるって言ってたけど、こいつは無くなってるパターンなの

か。

「・・・だ、だが、万一があるからな！お、俺が狙うのはお前じゃない！！」

そう言い、男がナイフを構えて、こちらへ向けて、走り出す。だが、男が走り出した方向には、俺ではなく。

一歌「っ!!志歩!!」

志歩「・・・っ!!」

志歩を狙ったのだ。ああ、好きなやつを殺して近くに置いておこうってやつ・・・？俺がそんな事、させるとでも？

霊斗「・・・」

「っ!!ど、どけええええ!!」

志歩「っ!!?れ、霊斗さん!」

男が叫びながら俺に向かってくる。全速力で、走ってくる男は、俺が志歩の前に出た事に驚き、止まろうとしたのかもしれないが、急に止まれるわけもなく。

ザクッ!!

俺の腹に、奴の持っていたナイフが突き刺さった。ナイフの刺さった場所から血がどんどん流れていく・・・

まあ、痛くもねえし、別にいいけどな。

「っ!!???」

男はナイフを刺した直後、咄嗟に、ナイフから手を離してゆっくり一歩ずつ後ずさる。

・・・ビビるくらいなら、刺すんじゃねえよ。

志歩「っ!!!」

穂波「れ、霊斗さん!!!」

一歌「霊斗さん!!」

咲希「な、ナイフ、刺さってるよ!?だ、大丈夫!?霊斗さん!」
・・・心配してんだ。

たかが、ナイフが腹に刺さっただけじゃん。

俺は、刺さったナイフを手に取り、一気に引き抜く。血が更に溢れてきたが、別に気にする必要もないだろう。

穂波「ひ、引き抜いた・・・!?!」

一歌「ち、血がどんどん流れてる・・・!!」

咲希「と、とりあえず救急車呼ばないと!!」

志歩「それに警察もでしょ・・・!」

後ろで一歌達が騒いでるのがわかる・・・そんな血が流れてんのか？そこまで感覚もないんだけど・・・

「な、なんでお前は立ってられるんだ!!は、腹を刺したんだぞ!」

男は怯えながら、俺に問う・・・。まあ・・・。別に気にすることでもないからな。血塗れになってる事なんて・・・

霊斗「・・・なあ、今、志歩を狙ったよな・・・?」

・・・俺は男に向けて、極めて冷たい声を掛ける・・・。俺って、こんな声、出せたんだな。

「・・・ひっ・・・!」

霊斗「俺を狙わなかったって事だよな? 志保を・・・いや、一歌達を殺そうとしてたわけだよな?」

だったら、テメエ自身が、殺される覚悟もしてたわけだよな?」

俺は、地面を蹴り、相手の顎に向けて膝蹴りをする。ゴキッ!と音が鳴ったような気がするが、こいつ相手に手加減もする必要がない。別に気にする必要もないだろう。俺はそのまま相手を押し倒し、先程、引き抜いたナイフを奴の喉に当てる。

「はっ……!はっ……!」

恐怖からなのか、奴の息は更に荒くなっており、目の焦点があつていない。まあ、こうなってしまうてはもうどうしようもないだろう。

……さあて……こいつ……

殺すか。

霊斗「……」

俺は腕を上げ、ナイフを奴の喉元に突き刺す為に、振り下ろそうとするが。

『駄目エエー!!!』

振り下ろされるはずの俺の腕が止まり、俺は抑え込まれる。周りを見てみると、一歌達が俺を止めているのだ。

霊斗「……どけ。邪魔。」

咲希「嫌です!!絶対に離れません!」

一歌「れ、霊斗お兄ちゃんから離れたら、また、あの男の人に何かするから!絶対にどきません!!」

穂波「私達は、霊斗お兄さんにそんな事してほしくありません!!」
志歩「助けてくれた事には感謝してるけど、霊斗兄さんにはそこままで、してほしくないから……!」

……ああ。こいつらは……そう言うよな。どんな理由であろうと、俺が今、やろうとしていたことは……絶対に止めるべき事だよな。

俺は力を緩めて、一歌達に怪我を負わせないように、抵抗を止める。ナイフ持ってるし、暴れたら、下手すりゃあ、俺が一歌達を傷つけちゃうからな。

霊斗「……はあ。わかった。別に暴れたりしねえから、さっさと退いてくれないか?止血したいから。」

俺がそういうと、一歌達はハッ！とした表情になり、一斉に俺を抑えるのをやめる。

・・・改めて見ると、なかなか、血が流れてるのな。周囲に人いなくてよかつたな。これ、見られてたらやばかつたろ。

一歌「あつ、早く霊斗さんの止血しないと・・・！」

咲希「わ、私！周りのお家から、包帯貰ってくるー!!」

志歩「それなら、咲希が来るまで、応急でも止血しておこう・・・！」

穂波「は、ハンカチとかあるから、それで止血できるかな・・・！」
霊斗「・・・慌てすぎじゃねえか？そこまで深い傷じゃないから・・・」

つて、聞いてないし。なんなら、横になって、穂波と志歩に止血されてるし・・・って、なんか視界ぼやけて・・・血、流しすぎたな・・・

・・・大丈夫って言いながら・・・この様かよ・・・

そこで、俺の意識は、眠りについたのであった。

裏で動く者

俺達が、ワンダーステージを離れて、俺は家に戻った。次の演目を決める為、自室で考えてるのだ。

司「・・・うーむ、ここでは・・・よし！ここは、霊斗が適任だな！それなら、この役は霊斗に任せるとしよう!!」

はーっはっは!!スターであるこの俺が作る演目はやはり最高だな！そして、演じてくれているえむ達はもつと最高だ!!」

よし！演目を決めた事だし、そろそろ夕食を作るとするか！今日は咲希が好きなカレーだったな!!この俺が、最高のカレーを・・・!!

『~~~~~♪』

司「うん？スマホが鳴っている・・・？電話だな。誰からだ？」

俺はスマホを手に取り、画面を見てみると。

司「・・・咲希？」

咲希からだった。確か、今の時間だと、一歌達とバンドの練習を終えた時間だな。となると、夕食に遅れるとかならう。そう思いつつ、俺はスマホを操作して、電話に出る。

司「もしもし？咲希か？」

咲希『あっ!?!お、お兄ちゃん!!た、大変なの!』

司「ど、どうしたんだ!?!咲希!?!何かあったのか!?!」

咲希が慌てている・・・だと!?!な、何かあったに違いない!!

咲希『い、今！バンド練習の帰り道んだけど、霊斗さんと会って話したら、ま、前に話してたストーカーの人と会って・・・!!』

司「な、なんだとお!?!咲希達は大丈夫なのか!?!怪我はしていないのかあ!?!」

咲希『う、うん!!私達は大丈夫なんだけど・・・!ストーカーの人がナイフで・・・志歩ちゃんを刺そうとして・・・!霊斗さんが志歩ちゃんを庇って・・・!』

れ、霊斗さんが、ストーカーにナイフで刺されて・・・!!!今、病院に・・・!!』

司「っ!?な、なんだとおおお!!?」

れ、霊斗が!?しかも、病院に運ばれた・・・!?そこまで深い傷なのか!?いや、それどころじゃないだろう!天馬司!!俺は霊斗の親友だぞ!!
こういう時、親友の俺が駆けつけなくてどうする!?

司「わ、わかった!咲希達に怪我がなくてよかった!とりあえず、俺は、霊斗が運ばれた病院に向かう!咲希達は・・・」

咲希『わ、私達は警察とお話してから向かうね!霊斗さんが運ばれた病院の場所、送っておくから!ほなちゃんが付き添いで救急車と一緒に乗ってるよ!』

司「わかった!それならひとまず、ワンダーランズ??ショウタイムのメンバーで霊斗のいる病院に向かう!安心してくれ!!」

咲希『う、うん!よろしくね!お兄ちゃん!』

咲希との通話を切り、俺はすぐさま別の人物に連絡を入れる。その人物は・・・

『もしもし?君から連絡をくれるなんて、珍しいね?司くん?』

司「もしもし!?類!!今、悠長に話している場合じゃないぞ!!緊急事態なんだ!!」

類『おや、司くんがそこまで慌てているなんて、本当に、緊急事態のようだね。何があったんだい?』

司「今!最愛の妹である咲希から連絡があった!!霊斗が、ストーカーにナイフで刺されたらしい!!病院に運ばれたと言っていた!!」

類「・・・っ、なんだって?霊斗くんが?」

司「ああ!そこで、類!お前にはえむと寧々に連絡をとってほしい!俺は今すぐ、霊斗が運ばれた病院に向かう!類達も、合流したら来てくれ!場所は送っておく!」

類「わかったよ。僕達もすぐに向かう。」

俺は類との連絡を切った後、俺はすぐさま家を飛び出す。

司(・・・霊斗待っていてくれ!今このスターである俺・・・いや!!

『お前の親友』である天馬司が今向かうぞおお!!) 司「うおおおお!!急げ俺ええええ!」

類 Side

まさか、突然司くんから珍しく連絡があったことにも驚いたけど、霊斗くんが病院に運ばれたなんて・・・

類「・・・とにかく、えむくと寧々に連絡を入れなくてはね。」

僕は、えむくと寧々に、SNSでメッセージを送る。霊斗くんが病院に運ばれた事を連絡して、僕の家にも一度集合というメッセージを送る。

二人からすぐに返信が来て、すぐに来ることが書かれていた。僕も準備をすませ、玄関を出て、待機していると、えむくと寧々が来てくれた。

寧々「類!!霊斗が病院に運ばれたって・・・本当!」

類「ああ。司くんからさつき連絡があつてね?彼の慌て具合を見るに、本当の事のはずだ。それに、彼が嘘をつく様な人には僕は思っていないからね。」

えむ「けど、なんで霊斗くんは、病院に運ばれたの!」

類「司くんから聞いたんだけど、ストーリーカーに刺されたという話らしい。といつても、司くんの妹さんである咲希さんから、彼も聞いたみたいけどね。」

えむ「咲希ちゃんから?あれ?そういえば、咲希ちゃん、変な男の人に会ったって前、言ってた!!『いっちゃん達と一緒にいた時、変な人に会ったって!』」

寧々「じゃあ、霊斗を刺したのは、星野さん達に付き纏ってたストーリーカーって事?」

類「その可能性が高いね。霊斗くんは、星野さん達と仲が良いからね。周りから見れば、一人の男の子が、複数の女の子と仲良くしてる

風に見えなくも無いんじゃないかな？」

寧々「・・・じゃあ、そいつは、勝手な嫉妬で、霊斗をナイフで刺したってわけ・・・？」

・・・おや、寧々が本当に怒っているね。ここまで怒っている寧々を見るのは珍しいかな。

えむ「ね、寧々ちゃん落ち着いてー！」

類「詳しい事は僕もわからない。とにかく司くんから病院の場所は教えてもらったんだ。僕達もすぐに向かおう。」

一方その頃、病院では・・・

「ふう・・・今日も、お父さんのお見舞い来れてよかった。前会った時よりも、元気になってるって・・・看護師さんも言ってたし・・・」

父親のお見舞いに来ていた奏が病院を出る所だった。

奏 side

奏「・・・あれ？」

私はお父さんのお見舞いを終えて、家でまた曲作りをするために、病院を出ようとすると、一台の救急車が病院に到着していた。

奏「サイレンが鳴ってる・・・何か・・・あつたのかな・・・？」

いつもなら、そんなに気にならないはずなのに・・・なんでだろう、今日はやけに気になるな・・・。すると、救急車の扉が開き、いろんな人が降りてくる。

奏「・・・？あんなに人って降りてくるの・・・？」

病院の人と・・・女の子・・・？付き添いの子・・・かな？ってあれ？・・・あの人・・・

奏「望月さん・・・？」

いつも、家事サービスで来てくれる望月さんだった・・・。知り合いだったことに驚いた。

病院の中も慌ただしくなってきたし、緊急事態なのが私でもわかった。だから、私も早く立ち去ろうとしたけど・・・

穂波「霊斗さん．．．!!しつかりして．．．!!」
望月さんが、発したその言葉で、私の足が止まった。

奏「．．．．．え．．．？」

望月さんは、今．．．なんて言ったの？

奏「霊斗．．．さん？」

まさか．．．今運ばれたベットにいるのは．．．霊斗？望月さんは、
霊斗と知り合い．．．？いや、そんな事よりも

奏（今、あのベットが運ばれたのは手術室．．．？霊斗が．．．手術
術．．．？）

そんなに重体なの．．．？私は今まで感じた事の無い不安に駆られて
いる。もしかしたら、お父さんの事を聞いた時と同じ．．．ううん、
それ以上に不安に駆られている。

奏「．．．っ!!」

そして、咄嗟に、私は今、霊斗が運ばれたはずの手術室へと足を運
んでいた。手術室の前には、望月さんだけがいた。恐らく、病院の人
達は、手術室の中で、霊斗に手当てをしているのだろう。

望月さんは、手を合わせて、瞳を閉じ、まるで．．．いや、多分だ
けど、霊斗の無事を祈ってるんだと思う。

穂波「．．．霊斗さん．．．無事でいてください．．．!!」

奏「も、望月さん．．．!!」

穂波「え．．．？よ、宵崎さん．．．!?!ど、どうしてここに？」

奏「わ、私はお父さんのお見舞い．．．って、そうじゃなかった．．
!い、今運ばれてきたのって．．．れ、霊斗．．．なの？」

穂波「よ、宵崎さんも、霊斗さんとお知り合いなんですか!?!」

奏「う、うん．．．。」

穂波「そ、そうなんです．．．!れ、霊斗さんが私達のストーカー
してた人にナイフで刺されて．．．!」

．．．ナイフで刺された？霊斗が？

穂波「その後、ストーカーは霊斗さんが追い返してくれたんですけど、凄いい血が流れてて……！霊斗さんが意識を失って……！」

奏「……それで、救急車で運ばれてきたの？」

穂波「は、はい……！」

……そうなんだ。ストーカーに刺された……それで、霊斗は意識を失う程の傷を負った……。望月さん達を、守る為に……。

そういえば、私達が霊斗が誘ってくれたシヨールを見ていた時もそうだった。あの時、『仮面ライダービルド』に変身したあの男を、霊斗は倒して、お客さん達を守っていた。『仮面ライダーディケイド』に変身して。

奏（どうして、霊斗は自分の事を顧みずに、全員を守るんだろう……？私が男の人に困っていた時も助けてくれた。あのシヨールの時も。

まふゆがいなくなろうとしていた時も。必ず、霊斗が何かしていてくれた。）

奏「どうして……？？」

穂波「宵崎さん……？？」

何も言わない私を、心配してしてくれたのか望月さんが私の表情を伺う様に聞いてくる。あ、私ずっと考えてたから何も話してなかった。ちゃんと返事をしないと。そう思った時だった。

「穂波いいいいいい！！霊斗は無事なのかあああああ！！??？」

ものすごい大きな声が、私の耳に鳴り響いた。

司Side

穂波「う、うるさ……つ、司さん!!ここ、病院ですよ……！」

司「はっ!!す、すまない……！そ、それより霊斗は無事なのか!？」

穂波を見つけた事と、霊斗の事が心配でいつも以上に大声を出してしまつた……!

穂波「れ、霊斗さんは、今手術中です……。けど、ここに来るまでに止血はしましたから……。後はお医者さんにお任せするしか……」

司「そ、そうか……」

ひとまず、安心だな……。だが、あれだけ強い霊斗が病院に運ばれるなど……。つと、それよりも……

司「そういえば、穂波の隣にいる女性は誰なんだ？」

穂波「あ、えつと、宵崎奏さんです。霊斗さんとお知り合いみたいで……」

奏「ど、どうも……。宵崎奏です。」

……。ん？よく見たら、あの時、シヨーに乱入してきた男が人質にしていた女性じゃないか。そうか。彼女も霊斗と知り合いだったのか。

司「奏だな。俺は天馬司だ。霊斗の親友の一人だな。よろしく頼むぞ！」

奏「は、はあ……」

『司くー……ん!!』

奏と穂波と話していると、俺を呼ぶ聴き慣れた声が響く。病院の入り口から聞こえてきたな。俺は視線をそちらに向けると、類達の姿があった。

司「えむ！寧々！類！お前達も来たみたいだな！」

類「今さつき着いたばかりだけどね？それよりも、霊斗くんは？」

司「今、手術室に……」

そう言った時だった。手術室のランプが消え、扉が開く。俺達はすぐさまそちらに視線を向けると、ベットを運びながら、出てくる医者達。ベットの上には霊斗が眠っていた。

司「っ！霊斗……！」

「……？君たちは彼のお友達かな？」

俺達がすぐさま駆け寄ると、近くにいた医者が俺達に話しかけてくる。

類「はい、友達です。あの、霊斗くんは大丈夫なんでしょうか？」
「そうかい。彼の事は心配しなくていいよ。出血は酷かったが、致命傷にはならなかったからね。手術は無事に完了したから、少し経ったら目が覚めるはずだよ。それと・・・実は君達に少しお話をしたいんだけど、いいかな？」

寧々「私達に・・・？」

「ああ。なに。あまり時間は取らせないさ。少し気になることがあつてね。ここじゃあなんだから、少し移動しようか。」

医者はずぐに移動を始め、俺達も彼の跡を追う。そして、俺達はあ
る休憩室にて医者との会話を始めた。

「よし、ここにいいかな。」

類「あの、僕達に話つてなんでしようか？」

「ああ。それは、今さつき運ばれてきた彼についてだ。」

えむ「霊斗くんに？」

「そうだよ。さて、君達は彼のお友達だと聞いたから、この事を話すけど・・・」

单刀直入に言うと、彼の腕と左目の事だよ。」

奏「・・・っ！」

司「霊斗の・・・腕と左目・・・ですか？」

「うん。君達は、彼のあの包帯を取った姿を、見た事があるかい？」

・・・あいつは・・・霊斗がああの包帯を取っている場面は見た事がない。何処か怪我をしているからと思つていたのだが・・・

穂波「私は・・・ないです。司さん達はどうですか？」

司「いや・・・俺は、見た事がない。類達はどうか？」

類「いや、僕達もないよ。」

「・・・そうかい。友達の君達からもしかしたら聞ける事があるかもしれないと思つたけど・・・」

司「あの・・・先生。霊斗に何か、気になることでもあつたんです

か？」

「そうだね。気になる事があったんだ。僕達はさつき彼の治療をする為に邪魔になるものは脱がしたんだ。それで、彼に巻いてある包帯を取ったら……」

彼の腕、左目の部分にナイフか包丁で刺した様な傷跡があったんだ。」

司「……は？」

「しかも、一つや二つじゃない。何回も何回も、腕には無数の刺し傷があった。しかも、ただ刺したわけじゃない。一回一回が深く突き刺さる様になっており、一部は手首に突き刺さるようになっていたよ。」

穂波「そ、それって……本当……なん……ですか？」

「医者である僕がそんな事で冗談を言うとも思ukai？本当の事だよ。それに、一番大事なのは怪我をしてる事じゃないんだよ。」

「……？ど、どう言う事だ？今、怪我をしてる事は大事ではないだど？」

寧々「ど、どう言う事……ですか？」

「彼の腕、そして左目。明らかに誰かにつけられた傷だとしたら不自然すぎる。しかも、ナイフか包丁で刺されるなんて事、普通は起きないんだ。」

腕に刺される可能性はあるかもだけど、左目に刺すなんて事はね。」

司「それは……確かに。」

「それじゃあ、考えられる可能性は、なんだと思う……？」

「……？誰かにつけられた傷ではないとしたら、考えられる可能性は……？」

類「……っ、そうか……いや、でも……彼に限ってそんな事は……」

司「……類？」

「君は気づいたみたいだね？そう。誰かが彼を傷つけたわけじゃないなら

彼自身が、その傷をつけたんだよ。左目、腕につけられた刺し傷全て、つまり……彼が行っている事は明らかかな自傷行為なんだよ。それに傷跡の場所、状態を見るに……彼は自殺を何度も試みるよ。」

司「……っ！な、なんだと!？」

えむ「霊斗くんが……自分で刺したの？」

寧々「……!」

穂波「そ、そんな……!」

奏「……」

類「……霊斗くん……」

霊斗が：：自殺を試みてると!?では、俺達の前での霊斗の姿は：：一体何なんだ……?

「君たちの前での、彼の振る舞いは僕にはわからないよ。けど、何かしらの原因はあるはずだよ。彼自身が自殺をしようとする原因が。それで、君達から話を聞こうと思ってたんだ。けど、その反応を見るに。君達は、何も知らなかったみたいだね。彼自身がそんな事をしていくことに。」

司「……」

「……つと、そろそろ時間だね。僕はそろそろ他の患者さんのほうに行くよ。さっきも言ったけど、彼の事は心配しなくていいよ。命に何かあるわけじゃないからね。けど、少しは彼のことを気にかけて方がいいよ。」

何せ、彼のご両親は………亡くなっているんだからね。彼を支えてくれる人達は………誰もいないんだから。」

司「なっ!?!」

えむ「ええっ!?!」

そう言いつつ、医者とは病院へと戻っていく。

類「……まさか、霊斗くんが……ね。しかも、彼のご両親も亡くなっているなんて……」

司「霊斗が一人暮らしをしているのは知っていた。だが、両親が亡くなっているだと……?」

寧々「そういえば、みんなで昔の話をした時、霊斗、少しだけ様子が変わった時があったけど……」

えむ「もしかして、霊斗くん、お母さん達のこと、思い出してたのかな……?」

俺達は何も知らなかった……普段の霊斗だけを見て……俺達は、霊斗の事を……何も知らなかったんだ。

真優 Side

私は司くん達から見えない位置から、彼らの会話を盗み聞きしていた。彼らの雰囲気は明らかに重くなっている。

真優「彼らは霊斗くんの事、少しは知ったみたいだね。」

彼の腕、そして左目。彼自身の傷を彼らは知った。これで、私の目的に少し近づいた事になる。

真優「けど、私の目的を達成するには彼らだけじゃ、足りないんだよねえ。もっと、彼の事を想ってくれる人がいないとね……。よし!それならっつと。」

私は、スマホを操作して、ある人物にメッセージを送る。こんな感

じかな。よし、送信・・・っと。

真優「これでよしっと。あの子達と仲良くなつててよかつたあ。さて、ここからのあの子達の動きはどうなるのかな・・・？司くん達、一歌ちゃん達、奏ちゃん達・・・」。

それに、まだ彼と接触していない残りの2ユニット・・・。全員が揃わないと、意味がないからね♪さて、次に彼が会うのは・・・。

ああ。あの子かな？君は、彼の事を一番知っているはずだよ。何せ、君は年下だけど、幼馴染なんだから。他の人達より、君が一番、彼を一番深いところまで知ってるんだからね？」

♪
そうして、私はルンルン気分で、病院を立ち去る。ああ楽しいなあ

私の知っている予測を超えてみせてよ？
『プロジェクトセカイ』の人間達？

そうじゃないと・・・彼は、取り返しがつかなくなるくらいに、ぶっ壊れちゃうよ？

常闇の記憶

霊斗「……んっ……」

……意識が戻ってきた。くそっ、血を流しすぎて気絶するなんてな……。油断してた……。ぼやけていた視界も戻っていく。すると、俺が目にしたのは……。

霊斗「は？なんだ？ここ……？」

俺が目にしたのは、真っ黒な空間。光を通さず、闇に囲まれた様な空間だった。

霊斗「……死んだのか？俺……？」

「……ううん。死んでないよ。君はあくまで気絶しているだけさ。」

霊斗「……？」

誰だ？今の声……？後ろから聞こえてきたよな……。俺は覚悟を決めて、後ろに振り向く。すると、そこにいたのは……小さな一人の少年だった。

霊斗「……誰だ？お前……？」

「誰だって？そんな事、君の方がわかってるじゃないか。鬼灯霊斗。」

霊斗「……っ、なんで俺の名前を……？」

「鬼灯霊斗。君はどうして『プロジェクトセカイ』の世界に転生してきたんだい？」

霊斗「……は？そんなの、両親が生きろって言ってくれたから……」

「そんな嘘をつかなくていいよ？僕は全部わかってるから」

霊斗「全部……わかってる……？それってどう言う……？」

「言葉通りさ。君が『転生者』である事、何が原因で君は死んでしまったのか、その全てを知ってるよ。それを知った上で聞くよ。君はどうして君は、現在進行形でのうのうと、生きているんだい？」

霊斗「……何が……言いたい？」

「そもそも、君は両親が亡くなったから君も後を追う様に死んだんじゃないか。けど、君はこうして、この世界に転生してのうのうと生きてるじゃないか。それはどうしてかな？君がこの世界に転生する

メリットがないじゃないか。もし、死にたいと思っっているなら、さつさと死ねばよかったじゃないか。」

霊斗「それは……。」

「それに、君が自分でつけたその傷跡や、君が感情がない事。それは君が自身で失ったのは間違いないさ。けど、それを知られないようにするなら、学校にも行かず、あの世界の人物達とも関わらないで過ごしておけばよかったじゃないか。けど、それをしない。どうしてだい？」

霊斗「それ……は……。」

どうして……こいつの言葉に反論できない……？俺は……確かに両親に……生きろって……。そして……。

「いい加減、思い出せよ。『鬼灯霊斗』。君は

『あの世界で、自分を救ってくれてる人を探しているんじゃないのかい？』

奴の声が一際冷たくなった。小さな少年のはずなのに。その声はまるで……。俺を見透かしてる様な雰囲気をしている。どうして、俺は……こんな子供を……。

「……おかしいな？君はもう、思い出してるはずなのに……まだ、全員と関わってないから、ロックが掛かってるのかな。嚴重な事だなあ。それとも、無意識に？これは結構、難解だね。」

子供の雰囲気が変わった。先程の冷たさは霧散し、子供らしい雰囲気が漂っている。

霊斗「お前……何なんだ……？俺の……何を知ってる……？」

「さあね？教えると思うかい？けど、ひとつだけいい事を教えてやるよ。」

奴は不気味に笑っている。口元が歪み、ハイライトを失った目で俺を見ている。

「君が救われるのか、それとも壊れたままなのか、それを決めるのは君

であり、彼らと関わることは确实だよ。だって、君の……」
そこまで奴が言った瞬間、この空間がゆっくりと明かりに包まれていく。

霊斗「……なんだ？」

「ありや？もう時間かあ。用意周到だねえ。まあ？君はこれからの展開的に？必要な存在なのかもね。君がいなくなったらそれこそ、あの子達が壊れかねないからなあ。」

霊斗「……っ、ごちやごちやと……何言ってるやがる……！」

「……っ。いや、違うか。この感じ……へえ。あいつの干渉じゃないのか。意外だよ。まさか、君達全員が、彼の事をここまで案じているなんてね。それだけ、君はあの世界の子達に慕われているんだね。」

霊斗「……あ？」

「はあ。まあいいか。ここに君を呼んだのは、これだけが理由じゃないし。さて、鬼灯霊斗。君にこれをあげよう。」

そう言い、奴は俺に向かって何かを投げる。俺は咄嗟にそれをキャッチする。俺は手に取った物を見ると、それは……なんだこれ？なんかの……機械？

霊斗「なんだよ、これ？」

「あんな事を言っちゃったから信じられないかもだけど、あくまで僕も君の味方だからね。まあ、次に来た時に、色々教えてあげられるかもね。それじゃあね。それは君への選別だよ。」

霊斗「なっ……おい！待て！まだ話は終わってな……！」

「目が覚めた時、君はここであつた事を覚えてないと思うけど……また、会える事を楽しみにしてるよ。霊斗くん。」

俺は光に包まれて、俺の意識は再び失われる事となった。

霊斗「……んっ……」

……なんだ？知らない天井だな……。目を覚ますと、白い天井が目に入る。ゆっくりと体を動かし、周囲を確認すると。

霊斗「もしかして……ここ、病院なのか？」

……ああ。そうか。一歌達が救急車を呼んだのか。まあ、ナイフ

刺されて気絶したら、そりゃあ呼ぶよな。救急車。

霊斗「・・・一歌達は大丈夫・・・だったよな。いや、倒れたのを司達に連絡した可能性が高い・・・。いやそれよりも・・・」

病院で治療を受けた・・・って、ことは・・・医者に、この傷を見られた・・・よな。そうなる・・・もし、司達に連絡がいつてたとしたら・・・。

霊斗「・・・バレたか？この傷の事・・・？」

俺は傷跡の残る腕を撫でる。俺が前世に付けたこの傷・・・これを見れば、俺が異常な事はすぐにわかってしまう。そして、俺のこの傷の事を知った時・・・司達は・・・どんな反応をしたのだろうか？

霊斗「・・・ははっ、何考えてんだろうな、俺。知られても・・・関係ないだろ・・・？」

・・・正直、いつ話そうかとは考えてたし、理想的とは思ってないが、いつかは知られる事だと思っただけはいたんだ。何も、問題はないだろう。すると、病室の扉が開く。視線をそちらへと向けると、そこにいたのは司達だった。それに、奏と一歌達もいるな？想定外の数、バれてるんじゃないか？これ？

司「・・・霊斗、目が覚めたのか。」

霊斗「おう。お陰様でな。まあ、大した怪我じゃねえし問題ねえよ。早いうちに復帰できそうだな。」

司「そうか・・・それは良かった。」

・・・？何だ、司のやつやけにテンション低いな。

霊斗「・・・？お前、元気ないけど、どうした？それに、類達も表情が暗いぞ？」

司「い、いや！何でもないぞ！俺はいつでも、元気だからな！」

・・・隠すの下手か。わかりやすいな。司のやつ。まあ、指摘する必要もねえか。

志歩「あの・・・霊斗・・・さん。」

霊斗「ん？どした？志歩」

志歩「その……助けてくれて、ありがと……。怪我……。して
まで……」

霊斗「ん？おほ。別に気にする必要ねえぞ？前にも、似たようなこ
とあったしな！」

志歩「……っ……。それ、普通に喋ってるけど変だからね？」

……あれ？言葉選び、間違えたか？一層、曇った表情になったぞ
？志歩のやつ。まあいいか。

一歌「ほ、本当に大丈夫なんですか？霊斗さん？」

霊斗「ん？本当に大丈夫だって。心配すんなよ、一歌。それより、あ
いつどうなったんだ？気絶させたまでは覚えてんだけど……」

咲希「あ、あの後、お巡りさんが来てくれて、ストーカーさんは捕
まりました……。」

霊斗「おほ、よかつたじゃねえか。これで、練習に集中できるって
もんだろ？」

穂波「そ、それは……。そうなんですけど……」

志歩「けど……あたしたちを助ける為に、霊斗さんが傷つく必要
はないんじゃない？」

霊斗「……そうか？女に傷つく方がやばいだよ。常識的に。」
それが常識なのかは置いておいて……。だけどな。まあ、普通に考

えれば、俺が取った行動は、常軌を逸していると思う。刺さったナイ
フを引き抜くとか、正気の沙汰じゃできない事だろうからな。って、
それよりも……

霊斗「……気になってたけどよ。何で奏はここにいるんだ？」

奏「えっ……。わ、私は、お父さんのお見舞いで……。それで、帰
ろうとしたら、霊斗が運ばれてきたから……。し、心配で……」

なるほど。つまり、奏の親父さんは、ここに入院していると。偶
然って怖いもんだな。

霊斗「そうだったのか。悪かったな。心配させて。」

奏「ううん。霊斗が無事なら……」

霊斗「サンキューな。」

……。やっぱり、司達だけじゃない。一歌達も、奏も俺を見る目が少し変わってる。こいつら、『全員知った上でこう接してくれてるんだ』。

霊斗「まあ、すぐに復帰して、練習にも顔出すようにするよ。そんな心配すんじゃないぞ？ここにいる全員な。」

司「……。あ、ああ。わかった。」

その後は、少し話をして、あいつらは帰っていった。みんながいなくなつた後、俺は外の景色を見ながら、俺はあの夢の中での出来事を思い出していた。

霊斗（：：どうして、俺は：：この世界で生きていられるのか：：。あいつの言う通りだ。なんで俺は：：死なない：：？）

親が死んだ事で、俺は死んだんだ……。どうして、俺は死ぬのをやめた……？

いや、そもそも『俺は自殺をしようとして……考えなかった……？』

霊斗（……なんで……だ？俺は何で……？）

俺は、その後もあいつの言った言葉の真意がわからず、1日を過ごすのであった。

司Side

霊斗の見舞いに行き、奏とは別れた後、咲希達と一緒に俺達は、家へと帰っている。一歌達には、霊斗の事を予め話した後に見舞いに行つた。

司「……。霊斗の親が……。亡くなっているとは……。それに、自殺願望……。など……。」

類「あまり気を落とさない方がいいよ。司くん。僕達だって気づかなかつたんだ。」

司「それは、わかってるんだが・・・俺は、神高で霊斗と同じクラスで、あいつの親友なんだ・・・。ワンダーランズ?? ショウタイムの座長としての責任もある・・・。それなのに、親友一人の事を、何も知らないなど・・・」

咲希「お兄ちゃん・・・」

寧々「けど、それなら今までの霊斗の行動にも納得いくかも・・・」
えむ「え? どう言う事? 寧々ちゃん?」

寧々「だって、ワンダーステージに鉄砲持った男の人が来た時、霊斗は撃たれたでしょ? ほっぺに掠ったぐらいだったけど・・・。でも、全然気にしてない感じだったし・・・。痛いとも思っていないんじゃない・・・?」

類「ありえるね。あれだけ自分を傷つけてるんだ。もう、痛覚すらも失ったんじゃないかな。」

一歌「そ、そういうえば・・・霊斗さん、ストーカーに刺された時・・・」

穂波「ナイフ・・・引き抜いてたよね?」

志歩「普通なら絶対あり得ない行動だけど・・・もしかして、死にたいって思ってるから?」

咲希「血がいつぱい、流れてたけど・・・それを気にする感じもしなかつたもんね?」

・・・っ。そこまでなのか・・・? 霊斗・・・。お前は本当に・・・っ。
司（俺は・・・どうすればいい・・・? 霊斗の為に・・・俺に何が
できるんだ・・・っ! いまも、自身を傷つけて・・・。命を絶とうと
しているあいつに・・・っ!!）

俺は自身の無力さを痛感しながら、帰路につく。普段であるならば、わいわいと話しながら、いつもの楽しい時間だったはず・・・。だが、それは、一人の少年の闇によってかき消されたのであった。

奏Side

奏「・・・」

天馬さん達から別れて、自分の家に帰り、ご飯を食べたり、お風呂に入った後、いつもの時間になり、私はナイトコードに入って

る。けど、まだみんなは来ていない。

それなら、私は作業を進めようとしていたんだが……。手が進まない。やっぱり、今日改めて知った彼の闇の事を気にしすぎているからだ。

奏「……霊斗。」

お父さんのお見舞いの帰りに、運ばれてきた霊斗。望月さん達も知り合いだったことは驚いたけど……。

奏「……自傷行為……って言ってたけど……。」

先生が言っていた事が気になって仕方がなかった。私は、霊斗が自分を傷つけてることは知っていた。けど、詳しいことはあんまり教えてもらえてなかったけど。

『自殺をしようとしていて、親がいない』。それだけでも、壮絶なものなのはわかる。それに……。私が聞いたのは、味覚もないと言うこと。

けど、絶対に『まふゆと同じか、それ以上』に壊れているのはわかった。

まだ、隠している事もあるのかもしれないけど……。今は気にしてる場合じゃない。

奏「あの時……ミクが言っていた……。『今の私達は……霊斗を救えない』……。まふゆは、なんとか……。想いが伝わったから……。けど、霊斗は……。」

多分、霊斗にどれだけの言葉を伝えても、多分何も伝わらないと思う。まふゆと同じなら。だから、私は……。ううん。

奏「『私達』は……。霊斗が、言ったみたい……。私達にしかできない事で、霊斗を絶対救うよ。』もし、救えなくても、何回でも霊斗を、救う為の曲を……。私達、でつくるから……。」

だから、どうか……。もし。神様がいるなら、霊斗が長く生きていられるように……。見守っててください。

???

少年少女がそれぞれの悩み、想いを知った、同時刻。
ある場所では一人の少女が空を見る。

そこは廃墟となった家。窓は全て割れ、家の中には、壁や床に血が飛び散り、血のついたナイフが落ちている。最初にこれを見た時は、血糊などと思うだろうが。

そして、その場に佇む一人の初音ミク。髪はニーゴのセカイのような白い髪なのだが。彼女の顔や、彼女の着ている純白の服には……血のような物が、ついており、変色し、服の方は落ちなくなっている。

そして、彼女の見上げる空には、3つの眩い光。

『蒼』

『紫』

『黄色』

3色の眩い光に、彼女は目を向ける。だが、彼女はどこか不満げな表情だ、

「……たりない。」

誰もいないそのセカイで、彼女は呟く。

「これだけじゃ、足りない。まだ、足りない。」

「はやく、彼を救って……?早く光を集めて……?みんな。来てくれないと……。壊レちゃうか。」

立ち尽くす彼女は、空に浮かぶ光を見て、誰に言うわけでもない、そんな事を呟いたのであった。

幼馴染との再会

ストーカーにナイフで刺され、病院に運ばれた俺はその後、傷が完治するまで入院していた。そして今日、傷が完治したと言う事で、退院する予定の日だ。俺は今、病院のエントランスにいる。

霊斗「・・・まあ、案の定、奏からまふゆ達にも広まったわけですが・・・」

ついこの間、奏と共にまふゆ達も来てくれた。まふゆは無表情だったが心配され、絵名には怒鳴られながらも心配され、瑞希はいつもと変わらないような感じだったが、心配してくれていたようだ。

霊斗「・・・改めて考えると、随分な数の人達と関わってるよな？」
今で・・・メインキャラだと思われる一歌達全員で・・・12人くらいか？まだ増えるのか？

霊斗「まだ増えてくって事なら、そいつらの所に転生者がいるわけだして・・・後2〜3人くらいはいるって思っとくか・・・。具体的に、何人転生者がいるのか、聞いたときや良かったかね？」

それなら、クズの奴らと、柳瀬みたいなやつがいるかとも思ったのにな・・・。そもそも、柳瀬が信用できるかどうかはわからねえけどな。

霊斗「・・・。。。」カチャ

・・・。あの時の子供がよこしたこの機械・・・。一体なんなんだ・・・？今まで使った仮面ライダーのマークが色々写ってるんだよな・・・。強化アイテム的な・・・？

霊斗「司達に聞けばわかるかね？あいつら、仮面ライダーに詳しくなかったしな・・・。」

すると、後ろから誰かが来る気配を感じる。視線を向けると、俺の担当の医者さんが後ろに立っていたのだ。

「鬼灯くん、今日で退院だよ。傷も完治してるしね。」

霊斗「はい。お世話になりました。先生」

「いやいや。僕はお仕事だからね。当然な事をしたただけだよ。それ

に、君が感謝して、謝罪しなきゃいけないのは僕じゃないだろう？」
霊斗「……はい。見舞いに来てくれたあいつらには、ちゃんと話
はしますよ。」

「よろしい。あ、それと、僕から一つ言っておく事があるけど、いいか
い？」

霊斗「……？」

「これは医者としての言葉じゃなく、僕自身の言葉だ。」

『鬼灯霊斗くん。君が本当にそう思っているよ、君の子達があ
うはさせないよ。君の抱えている闇以上の、君を救ってくれる光をあ
の子達は持っているよ。だから、諦めずに生きてみるといいよ。』

なんだ……？こいつ、ただの医者じゃない……。それに、今の
声は先生の声じゃない。別の男……。いや、それだけじゃない。女
の声も混ざってた。

霊斗「あんたは……。一体……。？」

「霊斗おぉー!!!」

……。はあ。病院の中でも、外から聞こえるあいつの声。外を見て
みると、いつもの様に、あいつらが走ってくるのが見えた。言ってた
時間よりも早くきたんだな。

「ははは。君のお友達は、いつも元気だね？君の治療をしていた時も、
彼の大きな声が聞こえてきたよ。」

霊斗「まあ、あの元気などが、あいつの……。司の良いところで
すから。」

俺は、先生に頭を下げて、病院を出る。その直後、司達を見つけて、
手を振った。

霊斗「おーう。みんな。」

司「ついに退院だな！待っていたぞ！」

類「ふふつ、無事に復帰だね？霊斗くん。」

寧々「良かった……。ストーカーに刺されたって聞いた時、すご
く心配したんだから……。ね？」

えむ「うん！霊斗くんが無事で良かったよ〜」

霊斗「心配かけて悪かったな。今日・・・は無理だから、次の日からちゃんと練習に復帰するから、そこんとこよろしく頼むわ。」

司「いやー！今日は練習は無しだぞ!!」

霊斗「ん？なら、お前ら何するんだ？今日はなんもしないのか？」

司「今日はな・・・霊斗の復帰祝いをしたいと思う!!」

・・・復帰祝い？俺の？

霊斗「・・・何故に？」

司「なんだ!!その『なんでそんなことを？』みたいな目は!!お前が入院してから、どのくらい経ってると思ってるんだ!!」

霊斗「ん・・・？1〜2週間くらいか？」

司「そうだ!!その間、俺達はお前を心配していたんだぞ!!それでも、練習を続けてたんだ!」

類「それで、ようやく今日、霊斗くんが退院するんだ。それなら、復帰というより、退院祝いをしようという事になってね？」

寧々「ちなみに、提案したのは、えむだからね？」

霊斗「えむが？」

えむ「うん!!霊斗くんが戻ってきてくれるって聞いたから、私、わんだほ〜い!!って気持ちになったから!!」

・・・相変わらず、『わんだほ〜い』の意味がわからん。とりあえず、上機嫌な事はわかった。いつもの事だとは思うが。

霊斗「まあ、復帰祝いをするのはいいとしてだ。どこでやんだよ？セカイでやるのか？」

司「そこは安心してくれ！実は、後輩からここの店がお勧めだと教えてくれたんだ!!ここでみんなでするぞ！もちろん割り勘だ!」

司はスマホを操作して、俺に画面を見せる。そこに映し出されているのは・・・喫茶店か・・・？雰囲気的には悪くない。名前は・・・？

霊斗『weekend garage』か。まあ、祝ってくれるのはいいんだが・・・」

寧々「ていうか、霊斗の復帰祝いなのに、割り勘で霊斗にも払わせ

るの?」

司「むっ!! た、確かにそうだな……。よし!! 霊斗の分も俺が払うから安心してくれ!!」

霊斗「お、おう……。」

類「それなら、早速向かうとしようか? もう直ぐお昼だからね。お店も混んでしまうだろうから。」

類の言葉に、俺達は了承して早速、司の見せた店に向かう……。あ、そういや忘れてたけど、俺、味覚ねえから味わかんねえ。美味いかどうかわからん……。まあ、適当に言っとけばいいか。

それから店に着くまで、類とのミーティング、全員と雑談をしつつ店に向かった。時間からしたら数分くらいだと思う。司の言っていた店に着いたのだ。

霊斗「へえ、司に見せてもらった時から思ってたけど、雰囲気いいな、この店。」

寧々「うん、悪くないんじゃない? 司と仲がいい後輩が勧めたお店って聞いたから変なお店だと思ってたけど……」

司「おい!! その言い方はなんだ!? 俺はともかく、冬弥はいい後輩だぞ!!」

いや、俺はともかくって言ってる時点で、自分が変だって認めてるぞ? 司?

類「まあまあ。それより、お店の前にずっといたらお邪魔になってしまうから、入ってしまおうか?」

えむ「うんうん!! レッツゴー!!」

えむが、扉を開けて中に入り、俺たちも後に続く。中に入ると、お客さんがたくさんいる。人気なんだろう。すると、一人の女性が近づいてくる。おそらく、この店の店員さんなのだろう。

彼女の接客を受けながら、俺達は席に着く。そして、各自好きなものを頼み、今は料理待ちという感じだ。うん? 俺? 適当に決まってるろ。

司「それじゃあ、霊斗の退院祝いを始めるぞ!!」

霊斗「店の迷惑にならないようにな。他にもいろんなお客さん達が

いるんだし。」

寧々「まあ、そう言っても、えむと司の声は響くから、意味ないと思うけど。」

類「ふふ。確かにそうだね。えむくと司君の声は、ステージ上でもよく響いているからね。」

司「どういう意味だ!?俺が騒がしいと言いたいのか!?!」

寧々「ネネロボに調べてもらったなら、掃除機と同じくらいって言うてたし、うるさいんじゃない?」

司「そんなこともできるのか!?というか、勝手に測るな!!」

霊斗「ネネロボってそんなこともできるのか?別の意味で高性能になっけてきてないか?」

「・・・なんか懐かしいな。この感じ。騒がしい感じが・・・こいつらって感じなんだよな。」

大声で騒ぐ司、冷静にツッコむ寧々、笑いながら楽しそうにしているえむ、薄く微笑み二人を見ている類、この感じが、こいつらの感じなんだよな。

司「と、それよりもだ。霊斗、お前に渡したいものがあるんだ。」

霊斗「ん?」

渡したいもの?一体何だ?すると、司は持っていたカバンから何か袋を取り出し、俺に渡してくる。俺はそれを受け取った。

霊斗「・・・なんだ?これ?」

司「ふっふっふ・・・!!俺達からの退院祝いのプレゼントだ!!受け取ってくれ!!」

えむ「みくんなどで、選んで買ったんだよ♪」

類「最初は意見がバラバラだったけど、寧々のお陰で、これにすることができたんだ。」

寧々「そ、そんな事、ないけど・・・／＼と、とにかくみんなからのプレゼントだから、受け取って・・・?」

霊斗「・・・おう。ありがとな・・・。開けてもいいか?」

俺が聞くと、全員が頷いたので、俺は袋の中の物を取り出す。それは。

霊斗「・・・おお、いいな、これ。」

中に入ってたのは、新品のワイヤレスヘッドホンだった。色のベアスは黒、細部は・・・何だこの色？紫・・・なのか？多分。そんなカラーリングのヘッドホンだった。

司「どうだ!? 寧々が選んだヘッドホンは!? なかなかいいと思わないか?」

類「ふふ、本当は黒に赤もいいと思ったんだけどね?」

えむ「霊斗くんは、デイケイドになれるから、せっかくならデイケイドカラーにしようってなったんだよ!!」

寧々「偶然だけど、色々お店を回ってたらそれを見つけたから、霊斗に似合いそうだなって思ってた。」

霊斗「・・・おう。ありがとうな。これ、1番の愛用にするぜ。」

・・・、こいつら、本当にいい奴らだよな。俺に昔、何があったのか知った上でいつも通りに接してくれてるんだ。

すると、さっきの店員さんが、頼んだ料理を運んでくれた・・・。なんだか、その店員さんが、チラチラと見てきたような気もするが気のせいだろう。

司「おお!! 美味そうだな!!」

類「メニユーを見て思ってたはいたけど、確かに美味しそうだねえ。

寧々達の方も、美味しそうだね。」

寧々「うん。みんなのもの、美味しそうだね。」

えむ「じゃあ! 早速食べよう!! 私、お腹ぺこぺこだよ」

霊斗「そうするか。冷めちまうし。」

そして、俺達は各々自分の頼んだ料理を食す。相変わらず、味がしないので、無言で食べることにしたのだが、その様子を見て司が『霊斗がそんなに夢中に食うなんて、それはすぐくうまいんだな!! やはり、冬弥が選んだ店に間違いはなかったな!! はーっはっはっは!!』と、勘違いしてくれた。まさか、そう捉えられるとはな。食事中も、これからのショーの事や、プライベートの事を談笑したりもしたぞ?」

そんなこんなで、食事を終えたんだ。

司「ふう〜! 美味しかったな!!」

霊斗「だな。コーヒーも悪くない。カフェって感じだな。」

えむ「みんなでお話するのは、とーっても楽しかった♪」

類「そうだね。ここで、ショーのミーティングをするのも、悪くないんじゃないかな？」

寧々「それ、いいかもね？たまにはこういうのも、悪くないかも。」
確かに、セカイや、ワンダーステージ以外でもミーティングできる場所を探せたのは悪くない。ここならゆっくりできるし、司達の英気を養えるな。

司「よし、まだ時間があるな。霊斗、どこか行きたいところはあるか？」

霊斗「あ、それならCDショップ行きたい。最近聴いてる人達のアルバムが出るんだよ。」

司「なら、CDショップに向かうぞ!!」

そう言いつつ、会計を済ませ、俺達は店を出る。その時、俺が一番前にいたのだが、店に入ってきたお客さんとぶつかってしまった。

霊斗「つと、すみません。」

「い、いえ。私の方こそ……そ……?」

俺はぶつかった相手に謝る。すると、相手も謝ってきたのだが……何故か俺の顔をじーっと見ているのだ。何やら、驚いたような顔をしながら。

ぶつかった相手は、茶髪のツイントール、青い瞳の少女だった。服装は……なんと言えばいいのだろう。ストリート系の服……だろうか？

霊斗「えつと、俺の顔に何かついてますか？」

「え、えつと……あの……」

霊斗「……?」

「もしかして……レイ君?」

霊斗「……はっ」

司「うん？ 霊斗、どうしたんだ？」

類「入り口で固まっていたら、他のお客さんの迷惑になってしまうよ？ 霊斗くん？」

えむ「ん？ 霊斗くん、このお姉さんとお知り合いなのー？」

寧々「……… 霊斗？」

レイ君「……だと？ なんでその呼び方を知ってる？ その呼び方は……」

『俺がこの世界に来る前に呼ばれてた名前だ』。しかも、俺が親しかったやつにしか呼ばせたことのない名前だ。それか……

霊斗「お前……… なんでその呼び方を知ってる？ お前……… 誰だ？」

少なくとも、俺の記憶にこいつの顔はない。忘れただけなのかもしれないがな。名前を聞けば、思い出すのかもしれない。

「わ、私だよ？ 上川那月だよ？ 幼馴染の……覚えてない？ レイ君？」

霊斗「…… 上川那月……」

…… ああ、思い出した。そうだ、こいつは、確かに俺の幼馴染だ。俺がこの世界に来る前の、幼馴染の一人。そして。

霊斗「…… ああ、久しぶりだな。『俺は会いたくなかったけどな？』」

俺が、2度と会いたくないと思っている人物の一人でもあった。

彼の崩壊の兆し、そして波乱

『ん？おお、那月、おっすー！』
いつからだっただろう。

『だーっ！疲れたあ。体育しんどすぎだろー！』
あんなに元気に、楽しそうに話していた彼の声が。

『~~~~♪ん？あ、悪い。全然気づかなかったわ。』
歌っている時の、あの時の彼の声が、楽しそうな表情が。

『・・・ああ、那月か。』

『~~~~♪、全然ダメだ……。これじゃ、何にもならねえ。もつと……
もつと上手くやらないと……。じゃないと……。』

全てがなくなつて、彼の全てが変わつていつて……

『……なあ、那月……。俺つてき、
????????????????????
なんだつて。親父と、お袋に
言われた。俺つて……。生きてる資格、あんのかな？』

黒く濁った瞳、全てを諦めた様に笑っていた。それを見て、私は彼が怖くなり、連絡も取らなくなり、彼を避けていた。彼と向き合わず、逃げ続けていた。だけど、ある事がきっかけとなり、私は彼と向き合つて、支えようと誓った。

そう決意したその日に、彼が家で自殺していたことを知ったんだ。

私がつと早く、彼の事を支えていたら？

私から逃げなかつたら？

私……。私……。私……。見捨てたから？だから……。彼は死んだ？私が、彼を自殺に追いやった？

周りの友達やお母さんは、私のせいじゃない。そう言ってくれたけど、私は耐えられなかった。私の罪から。だから私も、彼の後を追う

様に死んだ。

死んだら、地獄に行くものだと思っていた。だけど、私は地獄に行くことはなかった。目が覚めたら、私は高校生で、同じ名前で、宮女と呼ばれている学校に通っている。新しい友達もできて、楽しい生活だった。

小豆沢こはねちゃん。私の友達。ビビバスって呼ばれているストリート系の・・・アーティスト？ダンサー？なのかな。多分。たまに、チケツトをくれて、何回か見に行つた事があつた。

それをきっかけに、杏ちゃん。東雲くん。青柳くんの3人も友達になった。杏ちゃんのお父さんが経営しているカフェで、いろいろお話ししたり、どんな事をしているのかを話したりした。こんな風に、楽しく話したのは久しぶりで、楽しかつた。

けど、ある日の出来事。また、みんなで話した時、杏ちゃんがある映像を見せてくれた。

フェニックスワンダーランドのショーの映像。なんでも、今一番人気の動画らしい。みんなで見てもみたけど、確かに凄かつた。こんなショーは見た事がなかつた。すごくキラキラしていて、みんなが笑顔。

本当にすごいショーだと思つた……。見に行きたい。だけど、私のその考えはある人物を見て、一転することになる。

目を疑つた。杏ちゃんにもう一度、動画を見せてもらつても、目を擦つても、そこにいた。この世界にいるはずのない『仮面ライダーディケイド』の姿。ありえない。この世界に絶対にはいけない存在。

なんでディケイドが映っている？そもそも、何故ワンダシヨのメンバーにやつががいる？そもそも、これに变身している奴は誰？

けど、私の頭の中にある事が浮かび上がる。それは、この世界に来る前。変わる前の彼が言つていた。

『俺さ、仮面ライダーディケイド、好きなんだよな。あいつつてさ、敵みたいな動きするし、よくわかんない奴なんだけどさ。やる時はやる

し、仲間とか大切にするじゃん？ああいうのがいてもいいと思うんだよな。』

「……まさかと思った。彼なのか……？いや、そんなはずない。彼のはずがない。絶対。だから、私は確かめたりはしなかった。」

だから、なんだろう。今日、みんなでお話しするって聞いて、ウキウキしながら、集合場所に向かったら、出てきたお客さんとぶつかってしまった。ぶつかった相手が、謝罪をしたので、私も悪かったので、謝罪をしようと相手の顔を見た時、私の思考はフリーズした。

赤い髪、毛先は少し黒く、眼帯をしていたけど、彼だった。鬼灯霊斗。彼が、今、目の前にいる。どうすればいいのか、私はわからず、自分を覚えてくれてるのか聞くと。帰ってきた言葉は。

『……ああ、久しぶりだな。俺は会いたくなかったけどな』

とてつもなく冷たい声色で、目で、私を見ていた。あの時以上の、暗く濁った目で私を。

霊斗 side

那月「え……あ……」

俺は目の前の女、上川那月を見据える。俺の発した言葉に動揺しているのか、わたわたしてるな。

霊斗「……どけ。店から出るから邪魔なんだよ。」

俺がそう言うと、ハツとした表情になった那月はスツと横によける。俺達はそのまま店を出て、CDショップに向かおうとしたのだが。

那月「ま、待って!!レイ君!」

那月が俺を呼び止める……。振り返りたくもなかったのだが、俺は振り返り。

霊斗「……なに?」

那月「レイくん……なんだよね?」

霊斗「だから、何？俺が鬼灯霊斗で、昔レイって呼ばれてたなら何？」

司「霊斗、この女性と知り合い・・・なのか？」

霊斗「ん、おう。正直知り合いなのも嫌なんだけどな・・・。」

上川那月。俺が神高にくる前の学校で・・・、友達『だった』やつだ。」

寧々「だったって・・・今はそうじゃないの？」

霊斗「少なからず俺はそう思ってる。そっちがどうかは知らねえけどな。んで何？」

那月「わ、私、レイくんに謝りたくて・・・」

霊斗「・・・謝る？何を？」

・・・今更何を謝るってんだ？本当に今更・・・

那月「わ、私・・・レイくんをずっと独りにして・・・辛かったはずなのに、寄り添ったりしない・・・本当にごめん・・・!!」

霊斗「・・・」

那月「みんな、レイくんの事を避けてて・・・私が1人だけレイくと仲良くしてたら・・・みんなから嫌われると思ったから・・・!! 私も便乗してやったの・・・!!そのせいで・・・!」

霊斗「自分にヘイトが向くのが怖かったから？だから、便乗して、俺にヘイトを集中させたって？」

俺の言葉に、那月はコクンと頷く。・・・んだろなあ。前までの俺なら・・・怒り狂ってたのかもな。けど、今は・・・

霊斗「・・・で？」

そんな事なんて・・・もうどうでもいい。

那月「え・・・？」

霊斗「自分が嫌われるのを避ける為に、俺を生贄・・・って、考えは間違えてんのか？まあ、身代わりにしたとして、それが何？謝って・・・それで何？」

那月「だ、だから・・・レイくんは償いをしないと」「いらないし、うざいだけ。」「・・・っ！」

司「れ、霊斗、その言い方は・・・司、悪いけど、黙ってる？」「・・・っ」口を挟もうとした、司を黙らせて、俺は那月の目の前へと立つ。こいつの目には、恐怖しているのか、目が潤んでるのがわかる。けど、

霊斗「お前がどう思ってるのかしらねえし。興味もない。俺は今、ワンダーランズ??シヨウタイムの一員として、過ごしてんだよ。司達とシヨウしてな。テメエらがどう思ってるのかとか、何したいとか、どうでもいい。シヨウの邪魔だけすんな。それに、俺への償い？」

ただ、テメエが、俺に対して償いをしたって、テメエが思いたいだけだろうか？」

那月「ち、ちが・・・！」

俺が那月を問い詰める形で話していると。

「すみません。お店前での言い合いはやめてもらえますか？」

店の中から、先程の女性の店員が俺達の話し合いに入り込んできた。

少し、話しすぎたか。迷惑になっちゃったか。

那月「あ、杏ちゃん!!ご、ごめんね・・・？」

霊斗「すみません、知り合いがいたので少し話をしてただけなので。すぐに、帰りますんで・・・。行こうぜ、みんな。」

司「え・・・？れ、霊斗、いいのか？」

霊斗「何が？」

寧々「那月さんとまだ、話し合い終わってないんじゃないの？」

霊斗「さつき言ったじゃん？興味ないって。俺はこいつが何したいとか本当にどうでもいい。俺達の邪魔さえしなければどうでもいい。」

えむ「で、でも、霊斗くんのお友達なんですよ？仲良くしなきゃ駄目だよー？」

・・・お友達？こいつが？

霊斗「・・・友達なら・・・こうなる前に・・・」

えむ「ほえ？」

霊斗「・・・悪い。みんな、CDショップは、なしにしよう。プレゼントはサンキュー。俺、帰る。」

司「何？れ、霊斗!？」

俺は、その場から逃げる様に家へと足を歩を進める。何故かはわからない。知りたくもない。だが・・・俺は無性に、あの場から離れたかったのだ。

何か、みんなが何かを言っていたが、俺はヘッドフォンを耳にかけ、音楽を鳴らし雑音を遮断する。そして、店から離れた公園のベンチに腰をかける。

霊斗「・・・なんであいつがいんだよ・・・」

他にも転生者がいるのは、神様から聞いてたから知ってた。だが、俺が前世で死ぬまで、あいつや、あいつ以外の友達だったやつは生きていた。それは間違いない。なら、なんであいつがいる？

霊斗「あいつも、死んだから・・・なのか？なら・・・もしかして、他のやつも・・・」

(レイ・・・こち来てサッカーやろうぜ？1人でいても、つままないだろ？)

そんな時、昔の・・・前世で友と呼べる人達の、記憶を思い出してしまう。

霊斗「・・・違う。あいつらはもう、そんなんじゃない・・・」

(レイくん、クッキー焼いたんだ。みんなと一緒に食べよう・・・?)
2度と聞きたくもないと思った声が、耳に響く。

霊斗「ぎげんな・・・。優しくすんな・・・」

(レイ：歌の本だけじゃなくて、漫画とかアニメみようぜえ？おすす
め教えるからさ?)

霊斗「そう言つて・・・結局離れんだろうが・・・」

先ほどよりも、音楽の音を上げてても、ヘッドフォンを外し、耳を塞
いでも、聞こえてくる。

(レイくん・・・レイくんの好きな、お菓子あるよ・・・?食べる?)

霊斗「・・・っ!!」ブンッ!

その声が聞こえた時、俺は寧々達からもらった物とは違う、昔から
つけてたヘッドフォンを地面に向けて投げつける。何度か跳ねた後、
ヘッドフォンは地面を転がり、遠くで止まってしまった。

霊斗「雑音が・・・響いてんな・・・。雑音風情が・・・。」

どうすれば、この声・・・雑音は聞こえなくなる・・・?どうすれ
ば・・・あつ。

霊斗「アハハッ。そうだよ。耳を壊せば・・・音も声も・・・聞こ
えなくなるよなあ・・・?聞こえなくても・・・いいよなあ?」

耳がなくなつたつて・・・声さえ出せれば歌えるんだからなあ・・・
俺には歌さえあればそれで・・・?」

『歌さえあればそれで?それって・・・司達や、一歌達・・・奏達の
事は・・・』

霊斗「・・・いや、そんなんじゃない・・・。あれは俺の作ったあいつらに対しての顔なんだよ・・・。本心じゃねえんだよ・・・。そう思うはずなんかねえんだよ・・・。俺は・・・。」

と、その時だった・・・。

「あ、あの・・・大丈夫・・・ですか？」

誰かに声をかけられた。顔を上げると、そこにいたのは、少し心配そうな顔をした少女・・・。なんか、那月に似てる感じの服着てるな・・・。つと、さっさといつもの感じで・・・。

霊斗「・・・ああ、平気だ。」

「ほ、本当ですか？体調が悪いとかは、ありませんか？」

霊斗「大丈夫だ。そんなに心配しないでくれ。」

「それなら、いいですけど・・・あ、これよかったらどうぞ。それと、これ。」

そう言つて、彼女は俺に水のペットボトルと、先程、投げたヘッドフォンを渡してくれる。優しい子なんだろうな。

霊斗「ああ、ありがとう。えつと・・・？」

「あ、私、小豆沢こはねって言います。」

霊斗「俺は鬼灯霊斗、小豆沢さん、水、ありがとうね？」

こはね「い、いえ、心配でしたから・・・。つて、鬼灯霊斗・・・さん？」

霊斗（・・・なんだろうな。どつか・・・この子も、司達と似た様な感じがする。主要人物・・・なのかね？）

小豆沢こはねさん・・・か。なんか・・・小動物みたいな感じだな。なんでなんだろうか？

すると、なんかキラキラした目で、小豆沢さんがこつちを見てる・・・。なんだ？

霊斗「え、えつと・・・小豆沢・・・さん？どうかしたの？」

こはね「も、もしかして・・・フェニランのショーの動画に出てた・・・お兄さんですか？」

霊斗「・・・はい？」

こはね「え、えつと・・・『仮面ライダーディケイド』に変身してた、あのお兄さんですか・・・？」

霊斗「えつと・・・確かに俺はその『ディケイド』に変身できるけど・・・？」

こはね「・・・っ！や、やっぱり!!」

なんかすごい嬉しそうだな・・・？なんぞ？

こはね「あ、あの!!もし、よかつたらサインもらえませんか!？」
すると、小豆沢さんはそんな事を言いながら、俺に色紙とペンを渡してくる。

霊斗「・・・は？」

サイン？司のじゃなくて、俺の？なんで？

霊斗「えつと・・・俺のがいいの？もつと他の人の方がいいんじゃないk『お願いします・・・!』あ、はい。」

俺はサラサラと色紙にそんな風に見える様に描き、小豆沢さんに渡すと、更にキラキラした様な目になった。

こはね「あ、ありがとうございます！」

霊斗「まあ、俺のでもいいなら、まあ・・・」

・・・つと、そろそろだな。帰って自主練しないと・・・日課だし。
霊斗「えつと、俺、そろそろ帰って自主練するから・・・また会えたらいいね？」

俺はそう言い、家へと帰路に着こうとしたのだが。

こはね「あ、ま、待ってください！鬼灯さん！」

また、小豆沢さんに、呼び止められ、俺は足を止める。

霊斗「つと、な、何？まだ何かあった？」

・・・正直、これ以上誰かと関わりたくないんだけど・・・？あまりの小豆沢さんの変化に気にしてなかったけど、最初心配されたって事は、さっきの言葉を聞く限り、さっきの聞かれたみたいだし・・・。変な事聞かれないよな？

先に、みんなに話しておくが、俺は結果、変な事は聞かれはしなかった。聞かれはしなかったのだが。

こはね「あ、あの!!わ、私と・・・・・・・・!!お・・・・・・・・!」

霊斗「・・・お？」

誰もが予想しなかっただろう。だって・・・

こはね「お、おお・・・!!お付き合いして・・・くれませんか……………!」

霊斗「……………は？」

初対面の女の子に『告白』されるなんて、誰が予想できるんだよ？

小動物少女との○○○○

霊斗の復帰祝いをしていたはずなのだが、突如として、あいつは帰ってしまった。どこか、不機嫌な様な、俺はそんな風を感じたんだ。それはきつと、彼女に会ってからなんだと思う。あいつがいなくなり、俺達も解散しようと思ったのだが、彼女に呼び止められ、先ほどまでいた、喫茶店でコーヒを頼んで、席に座っている。

司「えーと、確か、上川那月さん・・・だったよな？」

那月「え？う、うん。確か、天馬司くん・・・であってる？」

司「ああ、こっちは、鳳えむ、それと、草薙寧々と、神代類だ。」

えむ「よろしくね♪」寧々「よ、よろしく・・・」類「どうも」

司「それで、俺達に何か用があつた様だが・・・」

那月「うん、えつと・・・君達と一緒にいる時のレイくん・・・つて、どんな感じなのかなつて・・・」

・・・俺達と一緒にいる時の霊斗？それは・・・

司「そうだな・・・。あんまり、表情は変わらないが・・・普通に話したりはするな。ショーの話もするし、学校でも割とクラスメイトと話しているぞ？」

類「そうだね、僕も学校で何回か霊斗くんを見かけたり、一緒にご飯を食べたりするけど・・・うん。普段とあまり変わらないかな？」

寧々「私も、似た様な感じかな・・・。みんなでゲームセンターに行つた時も、無表情で、ダンスゲームとかしてたし・・・。しかも、最高スコアを出して」

えむ「うん!!みんなで遊んだりすると、とってもわんだほいな気持ちになるんだ☆」

司「えむ、それはお前の感想だろう・・・」

那月「・・・そっか、レイくん。君達の前でも・・・」

・・・？上川さんの表情が暗くなった気がするが・・・まあいい。俺も聞きたい事を聞くとしよう。

司「俺からも質問があるんだが・・・いいか？」
那月「え？う、うん。何かな？」

・・・。すまない霊斗。お前の事を・・・調べさせてもらう。座長としてではなく、『親友』として、お前の事をもっと知りたいんだ。

司「上川さん、『俺達は、霊斗の自傷の事、そして、親が亡くなってる事』を知っている」

那月「・・・・・・・・ツ!!!」

・・・。驚いた表情だな。俺達が知っている事は、想定外だという事か。

司「勘違いしないでほしいが、俺達は無理やり聞いたわけじゃない。俺は・・・・・・・・いや、俺達はいつが嫌いな事はしない。」

那月「・・・・・・・・」

司「あいつは俺の親友だ。そして、俺達の大切な仲間だ。それに、咲希達や、奏・・・・・・・・。多くの人達があいつを想ってくれるだろう」

司「だからこそ、知りたいんだ。あいつが何を抱えているのか。俺達に何かできる事はないのか。それに・・・・・・・・」

那月「・・・・・・・・それに？」

司「あいつが・・・霊斗が、『心の底から笑顔』になってほしいんだ。」
寧々「司・・・・・・・・」
えむ「司くん・・・・・・・・」
類「・・・・・・・・」

最近になって気づいたんだ。今までのショーの映像を見直したり、普段の霊斗の様子を思い出して気づいた。

霊斗はきつと『心の底からの笑顔を一度も見せたことがない』。あ

くまで、俺達に見せていたあの霊斗は、作られたもの……いや、あいつが演じていたものだ。前までの俺なら、あれが普段の霊斗なんだろうと決めつけていただろう。

司「だから、教えてくれ……！あいつが……親友が何を抱えているのかを……！！頼む……！！」

俺は上川さんに頭を下げて懇願する。彼女なら、俺は霊斗の事を何か知ってるのかもしれない。俺には何もできないなら、誰かに頼る。

それを俺は『霊斗』に教わったんだからな！

那月「……あ、頭をあげてよ。天馬くん」

そんな言葉が返ってきて、俺は頭を上げ、上川さんを見る。

那月「……そっか、レイくん。こんなに君を想ってくれるお友達が出来たんだ。それに、君はレイくんの仮面に気付いて歩み寄ろうとしてる……。私にはできなかった事を……。しようとしてる。」

司「上川さん……」

那月「うん、それなら……」

那月さんが、何かを言おうとした時だった。

「なーにを楽しそうな事を話してるのかなあ？お姉さんも混ぜてほしいなあ？」

そんな声が聞こえてきたのは。俺達は、声のした方へ顔を向けると、そこには、黄色の瞳をした、ショートヘアの女が立っていた。

司「うん？誰だ？」

那月「ま、真優ちゃん……」

えむ「うーん？那月ちゃんのお知り合い？」

那月「う、うん。一応……な、何しにきたの？」

真優「別に大した事じゃないよ？ たまたま、ここに立ち寄ったら、霊斗くんが一緒にいる、天馬くん達がいたからね？ 親睦を兼ねて、挨拶を・・・ね。あ、私は柳瀬真優。霊斗くんとは知り合いなんだ。」

柳瀬真優「・・・。うん？ 彼女、どこかでみた様な・・・、いや、気のせいだろう。」

類「あなたも、霊斗くんとは友達だった人ですか？」

真優「友達だったって・・・酷い言い方をするねえ？ 神代類くん？ そんな過去形にしなくてもいいんじゃない？ でも、うーん、そうだねえ。」

友達ではないかな？ けど、関わりはあるよ？ 彼は、私の事、覚えてないみたいだけど。私は彼を覚えてる。ううん。覚えてなきやいけないの。忘れたらダメなんだよ。」

その時の彼女の様子は、どこか決意に満ちた・・・だが、どこか悲しい瞳をしていたんだ。

同時刻、初対面の少女、小豆沢こはねさんから、突然の告白を受けた俺は。

霊斗「・・・・・・・・」

こはね「・・・うう・・・／／／」

カフェに立ち寄り、お話するという事になった。しかし、先程から、顔を赤くし、もじもじしている小豆沢さん。・・・色々、ケーキとか食べると思ったから頼んだけど、一向に食べないし。うん、そろそろ話をしようか。

霊斗「えーつと・・・小豆沢さん？」

こはね「は、ははははいっ!？」

霊斗「俺とお付き合い・・・っていうのは、あれでいいの？彼氏になつてくれて事？」

こはね「は、はい!そ、それで大丈夫・・・です・・・／＼」

霊斗「そ、そう・・・。うーん、こういうのもなんだけど、なんで俺？それこそ、ショーで目立ってる司とか、類の方がかっこいいと思うんだけど・・・」

・・・そうだよな？司とか類の方が目立ってるよな？いくら、仮面ライダーっていうのになれるからって、目立ったりは・・・してるか？わからん

こはね「そ、それは、鬼灯さんなら、守ってくれるからと思つて・・・」

霊斗「・・・守る？なんか困ってるのか？小豆沢さん？」

こはね「は、はい。実は・・・」

それから、小豆沢さんからいろいろ話を聞いた。

どうやら、小豆沢さんは、ストーカー被害にあってるらしい。放課後の帰り道に、誰かにストーカーされているらしい。そして最近、ある男に迫られたらしい。その時は、友達が近くについて助かったらしいが。

そして、友達からの相談で、誰かを彼氏役にやって貰えばいいと相談されたらしい。

霊斗「・・・それなら、男の子の友達とかになつてもらえたらいいんじゃない・・・」

こはね「え、えっと、その人は、杏ちゃん達・・・あ、お友達なんですけど・・・その人達との関係性も知ってるみたいで・・・それに、その人・・・」

霊斗「・・・ん？」

こはね「あの・・・『仮面ライダー電王』になれるんです・・・『これ、こはね、お前を守るんだよ・・・？あのディケイドのやつなんかよりもね』って、迫ってきて・・・」

・・・あー、俺の事、知ってるやつなのね？しかも、転生者・・・か。どんだけいるんだよ？転生者？

霊斗「なるほどね？それで、仮面ライダーディケイドになれる、俺を頼ったってわけだ？動画で見た時からそう決めてたって事？」

こはね「そ、そうです・・・それだけじゃないですけど・・・」

霊斗「・・・ふーん。」

それだけじゃないって理由は気になるけど、まああんまし気にすることもないな・・・まあ、放っておくわけにはいかないよなあ。

霊斗（この子も重要キャラだろうし・・・なんかあつたらやばそうだ。セカイ持つてる可能性もある。それに、それが壊れる可能性も。クソ転生者なのは確定してるわけだし、容赦せず黙らせればそれでいいよな。）

霊斗「まあ・・・いいよ？」

こはね「え？」

霊斗「彼氏役、いいよ？」

こはね「ほ、本当ですか？」

霊斗「うん。俺にデメリットそんなになさそうだし、小豆沢さんみたいな、可愛い女の子の彼氏になるっていうメリットあるし？」

こはね「か、かわっ・・・!!?／＼」

・・・顔赤くしてるな、小豆沢さん。俺、そんなに変な風に言ったかな？まあ、いいか。

こはね「あ、ありがとうございます／＼よ、よろしくお願いします!!／＼」

霊斗「うん。あ、なら、呼び方から変えた方がいいかな？苗字呼びだと、少し変だろうしき、いいかな？下の名前呼びとか、あだ名とか」

こはね「あ、は、はい。」

霊斗「なら、これからよろしくね？こはねちゃん。俺のことも好きに呼んでいいよ？霊斗とかき。年上だからって気にしないでいいよ？タメ口でいいし。」

こはね「え、えっと・・・それなら・・・霊斗さん？」

霊斗「少し他人行儀な感じがしない？せめて、君とか、あだ名とか

がいいと思うよ?」

こはね「じゃ、じゃあ……」

『レイ君?』

霊斗「……ッ!!」

……クソが。まただ。小豆沢さんの声に重なって、あの『雑音』が響いてやがる。少し、右耳を押さえる。すると、正面にある小豆沢さんの表情が、心配そうな表情になる。

こはね「れ、レイ君?大丈夫?」

霊斗「……ああ、うん。平気だよ?。大丈夫、大丈夫。じゃあ、その呼び方でいいよ?ほんじゃあ……ん?」

店の外を見てみると、こちらを睨んでいる男が1人……。見た感じ俺を睨んでるな?あれ。つーと、あいつがこはねちゃんを狙ってるやつ……。ね。

霊斗「こはねちゃん、ちよつといい?こつちにきてくれる?」

こはね「え?う、うん!」

こはねちゃんは、俺のいう通り俺の隣に座ってくれる。俺は一度、あいつに視線を向ける。……よし、こつちに釘付けになってるな?俺はこはねちゃんの肩に手を回し、こちらに引き寄せる。

こはね「え……?」

霊斗「えつとき、嫌な思いすると思うけど、少しだけ俺に合わせしてくれる?多分だけど、外で、見てると思うからさ?」

こはね「……ッ!!」コクコク

こはねちゃんは首を縦に振ってくれる。俺はショートケーキを近くに寄せて、一口サイズをフォークで取り。演じるのは、彼氏役、彼氏役……。

テレビに出てるやつみたいな感じかな?なら……。

霊斗「はい、アーン」ニコッ

こはね「え、ええ!?!」

霊斗「アーン。」

こはね「・・・うう・・・／＼あ、アーン・・・／＼」パクツ

こはねちゃんは頬を赤くしながらも、シヨートケーキをパクツと食べる。

うーん、なんだろう。こうやって、こはねちゃんがなんか食べてるところみると、ハムスターみたいだなんて思う。小動物みたいな感じだな。

霊斗「どう？美味しい？」

こはね「う、うん。とつても・・・美味しいよ・・・／＼」

(恥ずかしすぎて、味なんてわからないよお・・・／＼)

霊斗「じゃあ、俺にその、チーズケーキ、頂戴？」

こはね「う、うん!!あ、アーン／＼」

こはねちゃん、すごく恥ずかしいはずなのに、頑張ってるなあ。

霊斗「アーン。」モグモグ

・・・相変わらず、味しないなあ・・・。まあ、味しなくても、栄養・・・あるのかな？ケーキって？

つと、いけないいけない。外のやつは・・・。おお、やば。泣いてるじゃん、ハンカチ噛んでるし。どこの漫画の世界？けど、まだ信じてないかな？怒りの目してるし。なら。

霊斗「ねえ、こはねちゃん。この後って用事とかある？」

こはね「え？う、うん。杏ちゃん達と、ミーティング・・・があるけど・・・」

霊斗「それってさ、キャンセルってできる？」

こはね「え？えつと・・・多分、できると思う・・・けど。」

霊斗「そっか。なら、ちようど良かったかも。」

こはね「・・・??」

さあてと。

霊斗「ならば、あいつを完全に引き剥がすためにさ？」

この後、彼氏と彼女ならば？してみない？デート。」

こはね「え、ええええええ!?!」

やった事ないけど、しっかりやらないとな。さっさと衆り出して。

○してやらないとね？

加速する凶行

喫茶店『weekend garage』。俺達は、那月さんと話をしている最中、突然と現れた柳瀬真優という女性も加えて話をしている。

司「柳瀬真優・・・だったか？お前は？」

真優「んー？そうだよ？て・ん・ま・くん？」

司「お前はこう言ったな？霊斗は覚えてないが、お前は覚えている。忘れたら駄目だと。」

真優「確かに、そう言ったねー♪だったらどうしたの？」

司「・・・お前は一体、霊斗のなんなんだ？」

寧々「それ、私も気になる・・・。柳瀬さん。たまにだけど霊斗の近くにいる時、あるよね？」

司「何!？そ、そうだったのか!？」

類「僕も気づいたのは最近だけど、確かに貴方は霊斗くんの近くに
いる時がありますよね。それはなぜですか？」

類も気づいてたのか・・・。俺は全然気づかなかったな・・・。

真優「そうだなあ。話してあげてもいいけどお・・・今、話すわけにはいかないんだよなあ。」

えむ「それって、どうしてえ？」

真優「どうしてかあ。んく・・・まあ、霊斗くんの為かなあ？」

寧々「霊斗の・・・為？」

真優「うん。それと・・・なつちゃん達・・・。ああ、那月ちゃんのことね？この子達の為ってのもあるかなあ。」

類「那月さん達の為ですか？」

霊斗の為であり、那月さん達の為・・・？一体どういう意味なんだ？

真優「だってさあ。霊斗くんは・・・つと。これ以上、言ったら駄目だね。これは、全員が揃ってからじゃないとねえ。」

司「全員・・・？ここにいるメンバーだけじゃ駄目だと言うことか？」

真優「そうだね。君達と、一歌ちゃん達、奏ちゃん達。それと…多分今、霊斗くんが会ってるはずの子達と、もう一つのグループのメンバー…」

そ・し・て♪那月ちゃん達も揃つとかないと駄目なんだよねえ。」

類「…貴方の言う通りに、僕達や、星野さん達が揃ったとして…仮に、それでどうなるんですか？霊斗くんが自傷行為がやめるとでも言うんですか？」

…なんだか、類のやつイライラしてるのか？少しきつい言い方になってなかったか？

真優「やめるか…ね。まあ、単刀直入に言った方がいいか。」

『やめるわけないじゃん。馬鹿なの？少なからず、霊斗くんと過ごしてきたのにわからないんだ？』そんなんで、霊斗くんの親友とか名乗ってるの？くだらないね？』

類「…ツ」

真優「…ああ、ごめんねえ？少し言い方に問題があつたかなあ？けど、事実だしね。彼がそんな事で、辞めるわけないんだよね。だからこそ、君達には期待してるんだけどなあ。今の調子だとどうなるか…」

司「…俺達では、霊斗を救えない…そう言うことか？」

真優「ん？別にそんなことはないよ？『少なからず、今までの人達』よりは期待してるよ？まあ、多少ぐらいはね？」

多少ぐらいは…か。だが、『今までの人達』とは…。

司（いや、それよりもだ。今は霊斗に自傷行為を辞めさせるのが先決だ。一体どうすればいいんだ…？）

真優「…まさかとは思うけど『霊斗くんの自傷行為を知ったか

ら、それをどうにかしたい』そう思ってる?」

司「え・・・?」

真優「何勘違いしてるの? 『まだ霊斗くんの事、なーんにも知らないのに』何で救えるとか思ってるの? 彼が何で自傷行為してるのか知らないの? 何で彼に両親がいないのか知らないの? そんな君達が彼を救おうとか思ってるの?」

那月「ま、真優ちゃん・・・」

『まだ霊斗の事を何も知らない・・・か。』彼女の言っている事は至極正しい事だ。俺は・・・いや、俺達はまだ霊斗の事を何も知らないだろう。

司「確かにお前の言うとおりだ。」

真優「ん?」

司「俺は霊斗の事は何も知らないだろう。親が亡くなった理由や、自傷行為をしてる訳や、何故『あいつが仮面ライダーディケイド』になれるのかも、今思えば、何故なのか不思議に思う事だろう。」

俺は、霊斗・・・いや、ここにいるえむ達と全員でショーをやれる事に夢中になって・・・何も、気にしていなかったんだ。」

最初のショーの時もそうだ。俺はスターになる事に夢中で、お客さんやえむ達の事を何も考えずに、ショーをやって・・・大失敗したんだ。

司（思えば・・・あの時、霊斗だけは俺を信じて、最初から残ってくれてたんだな）

えむ達が全員離れた時も、あいつは俺を信じてくれてただ一人、残ってくれていたんだ。親友だからと。俺がお前を信じないでどうするんだと。変わらない表情で、待っていてくれた。

司「俺は・・・霊斗に甘えていたのかもしれない。いつもこんな俺と一緒にショーをやってくれた・・・いつも支えてくれた霊斗に。

だから・・・決めたんだ。今度は俺が支える番だ! 『自傷行為も止めてみせる!』『あいつの笑顔も作る!!』そう思ってた俺が悪いんだ!! 救おうとして俺が悪い!! 俺は・・・俺は!! 霊斗の『親友』で!!

全員を笑顔にする『スター』!! 『天馬 司』だ!!!

類「司くん……」

寧々「司……」

えむ「司くん……」

真優「……ふふふ。やっぱりいいねえ。天馬司くん。それでこそ、
霊斗くんが認めた『スター』だね。」

霊斗が認めたスター……か。俺は霊斗の期待に応えているのだ
ろうか？

空回りばかりしていないだろうか。

真優「それなら、君達には頑張ってもらわないといけないね？私も
今のままの霊斗くんは良しとは思わないし。」

先程のような、笑顔を浮かべている真優さん。……不思議な女の
人だ。先ほどまでの笑顔、そして、さっきの俺達を問い詰めていた時
の圧が凄い彼女……。どちらが彼女の本質なのだろうか。

真優「……さてと。それなら……」ピポッ
すると、真優さんのスマホが鳴った。

真優「つと、ごめんね？えっと……おお？♪」

スマホの画面を確認した後、彼女の笑顔が更に深くなった……。何
を見たのだろうか？

真優「へえ……。面白いなあ。『今、霊斗くんデート中なんだねえ』
寧々「……は？」

……うお!? 寧々、何か凄いオーラが出てるぞ!? って、それより、デー
トだと!?

えむ「デートお？」

真優「うん! 私のお友達と、今デート中みたいだねえ。けど、あの
子が自分から告白したとは思えないし。最近あの子、ストーリー被害
に遭ってたし、助けるための手段としてしてるのかな？」

寧々「ストーリー……被害……？」

司「と言う事は、霊斗は人助けにデートをしているのか？」

真優「そうだね。それにそのストーリーカーさん、話を聞いた限りだと、
『仮面ライダー電王』になれるって話だし、これは霊斗くんを頼るしか

なかったんじゃないかなあ？」

「……ここ最近思うんだが、何故こうも『仮面ライダー』なれるやつが多いんだ？それに、霊斗以外はくだらない事でその力を使っているじゃないか。」

真優「でも、気になっちゃうなあ。霊斗くん達のデート」覗き見しに行っちゃおうかなあ？他のメンバーも気になってるみたいだし。司くん達も行く？」

司「……もし、その話が本当なら、霊斗はまた戦うと言う事だろう？親友として、心配だ。俺は行くぞ！」

類「僕も行くよ。霊斗くんのが心配だ。この間の様になるのはもう懲り懲りだからね。」

寧々「うん。私も行く。(どこの女とデートしてるのか、気になるし。霊斗が怪我したら大変だもん)」

えむ「私も行くよ〜♪」

そして、俺達は、霊斗のある場所へと向かうため、支払いを済ませて、店を出る。一応、咲希達にも連絡を入れておこう。一応な。

「……ふと気になったが、写真だけで、どこにいるのか真優さんは、わかったのだろうか？」

霊斗 side

こはねちゃんとお店を出て、少し遠くにある水族館にまで来た。チケットを買った時に、カップル割をされた。どうやら、カップルだとは思われてる様だ。

霊斗「へえ〜、この水族館初めて来たけど、色々な魚がいるんだね。」

こはね「そ、そうですね！いっぱいいますね！」

「……テンション高くない？こはねちゃん？目がキラキラしてるけど？本当に小動物みたいだね。」

霊斗「魚だけじゃなくて、イルカとかもいるみたいだよ？後で見に行ってみようか？」

こはね「は、はい!!」

霊斗「それじゃあ、行こうか？」ギョツ

こはね「っ!?／＼は、ははははい!!／＼」

こはねちゃんの手を握って、歩き出し、様々な魚達を見ていく……やっぱり、ついてきている。見られてる感じもするし。ストーカーもついてきているみたいだな。今訪れている場所は、この水族館の中でも一番大きな水槽がある場所だった。あ、ちなみに今は手を離してるぞ？

霊斗「うわっ。こんなに大きな水槽とかあるんだ？」

こはね「こんなにおおきな水槽にいっぱい魚が入ってるね？レイ君。」

霊斗「そうだね。サメとか、あんなに大きなものもあるんだ？」

……見られてる感じは変わらないな？けど……見られてる感じが増える？それに、なんか殺気も感じるな？にしても……

霊斗「初めてきたなあ……水族館。」

こはね「え？は、初めてきたの？レイ君？」

霊斗「そうだね。こう言うところには来たことなかったんだ。」

こはね「へ、へえ……(レイ君って、多分私より年上だけど……高校生まで水族館に来たことがないってこと、あるのかな?)」

しかし、本当に大きな水槽だな。こんだけの魚が入ってるけど、大きなやつが小さいやつを食ったりしないのかな？弱肉強食的なもんが発動したりしないのかな？……ん？

霊斗(さっき見てたやつが少しずつ近づいてきている……。仕掛けてくる気か？こんな場所で……。はあ、しょうがないか。)

霊斗「……こはねちゃん。少し俺の後ろにいろよ？」

こはね「……え？」

霊斗「……で、今の今まで、遠巻きに俺を見ていたストーカーさん。ここまで近づいてきたってことは、実力行使に動いてきた感じがいい？」

俺は気配の方へ言葉を投げかける。すると、ズンズンズンと、近づいてくる少しぽっちゃりとした男。怒りの表情を浮かべながら、俺を睨みつけている。こはねちゃんは怯えたように俺の背後に隠れているのだ。

「お、お前！こ、こはねちゃんから離れろ！怯えてるじゃないか！彰人や冬弥ならまだしも！お前みたいな値の知れない奴に！！こはねちゃんを近づかせてなるものか！」

霊斗「いや、怯えてるのはお前のせいだかな？ストーカーに付き纏われて、怖い奴いないだろ？」

・・・何っ？か、一歌達、奏達、そして寧々にも似たような奴がいたせいで、話しても無駄のような気がする。

霊斗「って、近づくも何も、俺、こはねちゃんと恋人同士なんだから、近くにいても何も問題ないだろ？な？こはねちゃん？」

俺はこはねちゃんに問い掛ける。すると、こはねちゃんは意図に氣付いたのか、首を縦に振る。今は俺達は恋人同士だしな。仮とは言え。

霊斗「それを部外者のお前がとやかく言う筋合いはねえし、そもそもストーカーのお前がそんな事言える立場か？犯罪者が。」

「ぐっ・・・!!」

苦虫を噛み潰したような顔をしてる男。正論ぶつけられて、反論できず、だが納得してない感じ。今までの奴らと大差ないな。多分、クズやろう・・・なんだろう。

「う、うるさあああ!!僕は、こはねちゃんを幸せにできるんだ!!お前みたいな、奴が!!こはねちゃんの彼氏でたまるかああ!!」

すると、男は憤怒し、腰にベルトを巻きつけ、赤いボタンを押す。すると、騒々しい音が鳴り、手に持つ・・・なんだあれ？なんか黒いものを構える。

「変身！」ピピッ！『s w o r d f o r m』

すると、独特な音が鳴り、奴は仮面ライダーへと変身する。

『俺、参上!!』

霊斗（・・・こいつが仮面ライダー電王・・・こはねちゃんが言っ

てた仮面ライダーか。)

霊斗「・・・取り敢えず、こはねちゃん、知り合いに連絡入れて避難しろ。取り敢えず、こいつ黙らせるから。」

こはね「・・・っ！は、はい！(レイ君、雰囲気・・・怖い・・・)」

こはねちゃんを避難させて、俺は男に向き、自分の持つベルトを腰に巻き付け、ライドブツカーから、デイケイドのカードを手に取り。

霊斗「変身」

『KAMENRIDE DECADE!』

俺も仮面ライダーデイケイドに変身する。

『っ！お、お前がデイケイドだったのか!!お前が・・・!!』

霊斗「何だ？俺がデイケイドだから怯えたのか？弱い奴だな？」

『な、何だと?!俺がお前に怯えてる?!そんなわけないだろう!!』

霊斗「だったら、さっさと来いよ。少し遊んでやるから。」

俺は指をくいくいつと、招くようにして挑発する。

『っ!!うがああああ!!僕を舐めるなあああ!!』

奴は声を上げ、剣を振り上げながら、俺に向かって突っ込んでくる。上から、横から剣を振り回す男。俺は全てを回避しつつ。

霊斗「周りの奴ら！危ないから下がれ!!」

周りを避難させるように声を上げる。周囲の人も、演技ではない事に気づいたのか、悲鳴を上げながら逃げる。うし。これで問題なし。

霊斗「シッ！」ドコッ！

奴の攻撃を回避した後、奴の懐に一撃入れる。だが。

『ぐっ!!まだまだだあ!!』ガキーン！

霊斗「な・・・、がつ！」

耐えた挙句に、斬り返してきやがった。耐久性は他の奴らより、上か。痛くはないが、衝撃はあるんだな。剣使ってるからか？

『はははっ!!どうだ?!お前に一撃を入れたぞ!!俺を見下すのをやめるか!?!』

・・・一撃入ただけで調子に乗りやがって。痛覚ないせいかな、大した事ないし。まあ、油断させるにはちようどいいか。だが、その時だった。

『霊斗さん!!』『霊斗!!』

突然、俺の名前を呼ぶ声が聞こえる。その声の方向には。

霊斗（・・・?こはねちゃん?何で戻ってきた?それに、知らない奴もいる。あれがこはねちゃんの友達か?つーか、何でここに、司達がいる?それに、柳瀬真優?一歌達までか?）

司達が全員そこにいた。みんな心配そうな表情をしている。一撃入れられた所を見られたか。無駄な心配だったのに。

『つ!?こはねちゃん!!それに、天馬司達に、Leo/need!!はははっ!運は僕に味方しているようだね!!』

霊斗「・・・ああ?」

『お前に勝てば!こはねちゃんだけじゃない!!一歌達も手に入る!!この世界で僕のハーレムが始まるんだ!!』

霊斗「・・・てめえ、『こはね達』を道具かなんかだとも思ってたのか?」

『僕の『所有物』にするんだよ!!僕にしか目がいかないようにするんだ!!僕ならあの子達をずっと笑顔にすることができると!!君にはできないのさ!!』

霊斗「何言ってる?お前?」

こいつはさつきから何が言いたいんだ?

『何故なら君は!』全てのショーで笑顔になつていない!!』いや!!』笑顔になれないんだろう!』それは何故か!!簡単な事だ!』そもそも君には心がない!!』『他者の心を理解できない!!』

『人間の欠陥品であり!!『失敗作』だからだ!!!』

・・・欠陥品。失敗作。一歌達が、司達が所有物・・・か。

霊斗「……おい。」

『ンンツ?どうしたんだい?醜く、言い訳でもして『ゴキイ!!』……は?』

……嫌な音がした。コイツの腕が変な方向に曲がっている。ただ普通に膝蹴りをしただけ……どうでもいいか。

『あ、あがあああああ!!?ぼ、僕の腕がアアアア!!?』

霊斗「黙れ。」ドゴオツ!!

俺は男を黙らせる為に、やつの土手っ腹に拳を打ち込む。その時もゴキツと音が鳴ったので、奴の骨が何本か言っているだろう。だが、力を入れすぎたのか、俺の指もゴキツと音が鳴り、握り拳が上手く作れない。おそらく俺の方も骨が折れたのだろう。だがそれもどうでもいい。

『おっ……!!おえっ……!!』

えむ「ひっ……!」

司「れ、れい……と?」

寧々「霊斗……い、一体どうしちゃったの?」

類「……霊斗くん……」

霊斗「……バキツ!!ドゴツ!

そのまま俺は、反対の手で握り拳を作り、奴の顔面を殴りつけ、体を回し、奴の横顔を蹴り付ける。奴は仰向けに倒れた。

『……!!?』

そのまま俺は奴に馬乗りになり、左腕を振り上げる。もちろん、握り拳を作ってる。

『ひっ……!や、やめ……っ!!』

霊斗「……」

俺は奴の言葉に耳を傾ける事はなく、その左腕を振り下ろし、奴の顔面を殴りつける。何度も。何度も。

